
二人きりの座席 <ばしょ>

につくん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

二人きりの座席くばしよ>

【Nコード】

N1293E

【作者名】

につくん

【あらすじ】

朝倉夏樹、11歳。初めて、恋をしました。甘く、酸っぱい、けど、出会えて最高の恋でした。君との恋を今一度、感謝したいと思っしょ。

プロローグ（前書き）

奏（Kanade）に登場する朝倉陽乃の弟・夏樹の初恋物語。奏（Kanade）にも少し触れられている夏樹の初恋にして初恋を、少しでも描ければと思います。

プロローグ

机から、そっと、一枚の手紙を出す。

岡本 明日香様 2004年4月22日

こんにちは

すっかり東京は春めいてきました。桜前線はまだ上がってきてないけど、このあいだ、蟻が庭を歩いているのを見ました。

秋田は……どうですか？

今日の天気予報ではまだ雪ダルママークが東北地方には並んでいないよ。

もうすぐ、中学校の入学式です。明日香も入学式、9日だって言うってたね。俺と一緒に それだけで、なんだか嬉しいです（笑）

本当言うと、明日香と一緒にの中学に入りたかった。でも、俺の病気も一段落したしね。一段落したら、戻るって父さんと約束してた。

明日香も早く、病気治してこの街に……七海に戻ってきてください。

明日香と一緒にの学校に通える日を、楽しみに待っています。

朝倉 夏樹

この手紙を……。

君は、最後に抱いてくれたんだって聞いた。

俺は……何度もこの手紙を読み返す。

君が、しっかりと握ったが故にクシャクシャになった、この手紙を。

あれから5年。

俺の周りは、変わったよ。

でも、大事なものを見つけることができた。

一歩、踏み出そうと思う。

そのために、整理するべきことを、整理してこいという思想。

なあ。

歩むべき時が、来たんだ。

共に、行こう。

主な登場人物（七海 ・ 小学校編）

第37話現在

朝倉 夏樹

七海市立 富樫小学校5年5組。サッカー大好き少年。学校の成績は中くらいなので、スポーツだけというわけでもない様子。明朗快活な性格で、男女共に友人が多い。明日香とは同じ小学校だったにも関わらず、彼女のことを知らなかった。

岡本明日香

七海市立富樫小学校5年5組。あまり目立たないタイプで、昼休みや午前中の20分休みも読書をして過ごすような子。4年生の頃から夏樹のことを気にしていたというが、言い出せないままにいる。秋田県に母方祖父母が住んでおり、家族旅行に来た夏樹とはその秋田県で知り合う。

<朝倉家>

朝倉 陽乃

夏樹の姉。七海市立 葉島中学校1年3組。おっちょこちょいな面があるのでクラスでも結構人気がある。

朝倉 由利

夏樹の母。勉強も運動もできる夏樹のことは安心して育てられると思っている。

朝倉 祥夫

夏樹の父。仕事人間なので、休日に夏樹たちと出かけるといったこ

とも少ない。

朝倉 知恵子

今は一人暮らしをしている夏樹の母方祖母。

<岡本家>

岡本 登

明日香の父。自営業で八百屋を営む「親父」という言葉がピッタリの男性。

岡本 玲子

明日香の母。登を支え、時に叱る肝っ玉母ちゃん。娘も息子も大好きで、愛情表現が率直過ぎるくらいである。

岡本 圭太

明日香の弟。小学校2年生。やんちゃ盛りでよく明日香や花那にもいたずらをして玲子に叱られている。

岡本 花那

明日香の姉。中学3年生で、しっかり者の受験生。

<富樫小学校>

大迫美智子

5年5組担任。何かと大雑把な性格のよう。

和田ちひろ

夏樹の幼なじみ。夏樹のことが好き。

坂上 優翔

夏樹の幼なじみ。5年3組。ちひろのことが好き。

嘉村 かむら 恭輔 きょうすけ
半田 はんだ 敬吾 けいご
中塚 なかつか 麻里 まり
新庄 しんじょう 萌 めぐみ
飯沼 いぬま 水穂 みずほ

5人とも夏樹のクラスメイト。

<陽乃の友人>
志田 した 未咲 みさき
多部 たべ 未華乃 みかの

明るく友達思い。陽乃の大親友である。

現代パート
佐野 さの 綾音 あやね

高校3年生。夏樹と現在付き合っている。

主な登場人物（七海 ・ 小学校編）（後書き）

夏樹の初恋を描く作品です。奏（Kanade）でも少し触れられている彼の傷ともなっているこの恋物語を少しでも上手く伝えられればと思います。よろしくお願いします

第1話 向かいの席

2002年4月1日(月)。

朝倉夏樹あさくら なつきは家族と一緒に秋田県に旅行に来ていた。父親方の叔父の朝倉純あさくら じゅんの家に2泊3日で遊びに来たのだ。

ここは秋田県 稲賀沢町いながさわまち。人口1万人弱の小さな町だが、自然豊かでのんびりした町である。春休み、夏休み、冬休みには毎回夏樹たちは純の家へと遊びに来ている。

稲賀沢町のほぼ中央を走り抜ける秋田いなほ鉄道。夏樹たちは純の家から最寄り駅となる本釜駅から乗車し、帰路についていた。午後1時半。1時間に3本という列車の数は夏樹にとってはとても新鮮なものであった。

「涼し〜」

夏樹は1両編成の列車の窓を開け、入ってくる春風の心地よさを味わっていた。サッカー大好きな夏樹だが、同じくらい電車が大好き。

「夏樹、寒いわ。窓閉めてよ」

姉の陽乃ひなのが居眠りしていたのに目を覚まして窓を閉めるように言ってきた。

「なんだよ。姉ちゃんの渋ちゃん。せつかくいい景色で気持ちいい風なんだから、楽しく味わえばいいのに」

「ジジ臭いこと言って。いいわ、私、あっちの席座ってくる」

陽乃は夏樹の向かい側の席から離れて運転席寄りの場所へと移動した。夏樹はそのまま窓を開けて過ぎ行く景色と心地よい風を楽しみ続ける。

「まもなく、稲賀沢、稲賀沢です」

車内アナウンス(ワンマンカーなので車掌はいない)が響いた。次の駅にもうすぐ到着するようだ。

夏樹は少し身乗り出して、駅のほうを見つめた。乗客らしい、5人の姿が見える。それに、何やら挨拶をしている人が3人。彼らは乗客ではないようだ。

列車が減速し、ゆっくりとホームに滑り込んだ。

5人の乗客の乗車位置ピツタリに停車し、ドアが開く。

「それじゃお義姉さん、どうも3日間お世話になりました」

5人家族の父親らしい男性が挨拶をする。

「やだわあ、変にかしこまっちゃって！ 家だと思っていつでも来てくれたらいいんだから、またすぐに電話してよ」

女性が続いて出てきた。

「それじゃ姉ちゃん。また連絡するわね」

「了解だよ。いつでも連絡しな！ それじゃ、ハルちゃん、アスちゃん、ケイちゃん。またね！」

オバサンの明るい声に2人の女の子と1人の男の子が同時にペコリと挨拶をした。

「それじゃ、また来るね！」

ケイちゃんというらしい小さい男の子がかわいらしくお辞儀をした。続いて、ハルちゃんらしき大人びた少女が「お世話になりました」とお礼を言う。

「お世話になりました。伯母さんのお料理、やっぱり大好きです」
アスちゃんというらしい、夏樹と同じ年くらいの女の子。

夏樹は3人の子供たちをジッと窓越しに見つめた。

「それじゃ、そろそろ電車発車するから乗るよ！」

お母さんらしい女性が子供たちに促し、夏樹たちの乗っている列車にドヤドヤと乗り込んできた。

「夏樹。他の方も乗ってきたから座りなさい」

夏樹の母・由利ゆりに促されて、夏樹はおとなしく普通の座り方で座った。

夏樹から見て向かいの席。端からケイちゃん、ハルちゃん、お母さん、お父さん、そしてアスちゃんが座った。

「ドアが閉まります。ご注意ください」
扉が閉まり、列車が動き出したときだった。

夏樹はアスちゃんが彼に向かって手を振ったように錯覚した。

夏樹は思わず振り返そうとして、その向こう側にいる伯母さん、伯父さんに振っていたことを理解して上げかけた手を下ろした。

（何やってんだろ、俺……）

顔が熱くなる。恥ずかしい。でも、相手にもその家族にも、自分の家族にも気づかれていなかった。

稲賀沢駅を出て10分近く経った。

夏樹はニンテンドーDSを取り出して、ゲームを始めた。夏樹が初めて買ってもらった機種だったから、今でも大切にしている。

由利や父・祥夫ゆかり、陽乃ひなはうたた寝をしている。相手の家族もうたた寝をしていて、起きているのはどうやら夏樹と運転手だけらしい。「あつ、クソ……いつもここで進まないんだよなあ」

夏樹は苦手なRPGをあえてやっている。周りの友達が行っているから、話を合わせるためだけにやっているようなものだ。

「リプレイ……」

不意に、DSの画面が暗くなった。

「ん？」

見上げると、目の前にアスちゃんが立っていた。

「へ？」

「困ってる？」

アスちゃんはニッコリ笑いながら聞いてきた。

「まあ……恥ずかしいことに俺、RPG苦手なんだ」

「苦手なの？」

「うん……」

なんで女の子に、それも初対面の子にこんなことを話しているの

か。夏樹は恥ずかしくなってきた。

「なのによってるんだ」

クスツと笑われて恥ずかしくなった。

「しょうがないじゃん。やってないと、クラスの子の話題についていけない……」

「話題に追いつくためにやってるの？」

「……。」

墓穴。

さらに恥ずかしくなってしまった。

「じゃあ、とっておきの話題教えてあげる」

急に隣にアスちゃんが座ってきたので夏樹はかなり驚いた。

「そ、そんなにビックリしなくても」

「ご、ごめん！ なんかホント驚いて……」

妙な間ができてしまった。

「いい？ 今から私が言うこと覚えてね」

「あ、うん」

スウーと息を吸ってから、言い始めた。

「キーを順番に、上右下左上下右左上下右左上下右左の順に押し
て」

あまりの速さに聞き取れなかった。

「ふえっ！？ 早っ！ ちょ、ゆっくりゆっくり！」

「もー、こんなのも聞き取れないの？ ダメじゃん」

アスちゃんはクスクス笑いながら夏樹を見つめた。

「そんなの、聞き取れるほうが人間じゃない」

「人間じゃないだって。おもしろいね、君」

「……。」

アスちゃんというこの子は、笑うとえくぼができる。

「ねえ、君、名前なんて言うの？」

「俺？」

アスちゃんはコクリとうなずき「そう、君」と言った。

「夏樹。朝倉夏樹」

「ナツキ？」

字が思い浮かばないのか、アスちゃんは首をかしげた。

「うん。女の子みたいだろ……だから、俺はなんとなくこの名前嫌い」

「どんな字、書くの？」

夏樹は持っていたカバンからメモ帳とシャーペンを取り出してサラサラと書き出して、それをアスちゃんに手渡した。

「春夏秋冬の『夏』に樹木の『樹』で、夏樹」

「ふうん……」

アスちゃんはしばらく黙ってその紙を見つめていた。

「そんな見るようなコトかな？」

「ううん。そうでもないけど」

ハッキリ言われてちよつとショックだった。

「……ハッキリしてるね、君」

「でも」

アスちゃんが急に笑って返した。

「夏樹って、いい名前だと私は思うな」

「……。」

開いた窓から、爽やかな風が吹き込んできた。その風が夏樹の頬を撫でて、アスちゃんの肩まで伸びた髪をフワリとかき上げた。

「私は」

夏樹はハツと気づいてアスちゃんの顔を見つめなおした。やっぱり、えくぼがステキだ。

「岡本明日香っていいいます。明日が香るで、明日香。よろしくね」

「よ、よろしく……お願いします」

明日香の背に太陽があつたからか、夏樹は明日香の顔をまともに見れなかった。

今思えば、恥ずかしくて、意識して見れなかったんだと思う。

夏樹は、今になってそう思った。

第1話 向かいの席（後書き）

夏樹と明日香の出会い、秋田県を走る素朴な電車の車内。ここが始まりでもあり、終わりでもあるのです。

第2話 指定席

「まもなく、角館、角館です」

車内アナウンスの機械的な声が聞こえると、由利や明日香の父・登のぼが目を覚まし始めた。

「あ、そろそろ終点かあ」

夏樹が残念そうな声を上げた。明日香も少し残念そうにしている。でも、楽しかったよ。とっておきの情報ありがとう

夏樹がニコツと人懐っこく笑った。明日香は少し顔を赤くしながら返した。

「私もとっても楽しかった。いつも電車の中では退屈してたんだ。今日はありがとう」

明日香はサツと夏樹の隣の席から離れた。リンスかシャンプーか、いい香りが夏樹の鼻に届いた。

「ねえ、なっちゃん」

「なっ、なっちゃん!？」

思わずあだ名みたいな形で呼ばれて、夏樹は顔が赤くなった。

「さっきの隠し技コマンド、言える?」

「あ、当たり前じゃん!」

「じゃあ、言ってみて?」

夏樹はスウィーツと息を吸い込んで、一気に言った。

「上右下上下右左上上下右左上下右左!」

そのあまりに大きな声に、由利や登、明日香の母である玲子たちが笑い出した。

「恥ずかし……」

明日香がニコツと笑う。えくぼが見えた。

「完璧だね! 頑張ってクリアしてね」

「おう! サンキューな」

それからバタバタして、ろくに挨拶もできないうちに夏樹は明日

香と別れてしまった。

ホームに降りてからは、明日香ともう一度目を合わせたりすることはできなかった。夏樹はしばらく明日香たち岡本一家の姿を眼で追っていた。

「ねっ、夏樹！ あの子のこと、好きなの？」

陽乃が話しかけてきた内容を聞いて、夏樹は思わず真っ赤になっ
てしまった。

「んなんじゃねーよ！ デリカシーとかねえの？ 姉ちゃん」

「デリカシーだって。難しい言葉使って、意味わかってんのかな？」

由利と祥夫もクスクス笑う。さらに顔を赤くして夏樹はプイツと顔を背けた。

秋田新幹線角館駅。JR田沢湖線と併用しているミニ新幹線だと調べて知っている。夏樹にとって、この新幹線に乗れるのが毎回の旅での大きな醍醐味のひとつとなっていた。

「何分発のに乗るんだっけ？」

由利が祥夫に聞く。祥夫は切符を確認し「16時48分だな」と返した。今は午後4時40分。まあそれほど待ち時間は多くない。

「ねえ、それって指定席？」

夏樹がワクワクした様子で由利に聞いた。

「当然。疲れてるのに座れなかったりしたら大変じゃない。東京まで立ちっぱなしなんて恐ろしくてできやしないわよ」

それを聞いてますますワクワクしてきた。早く電車が来ないか待ち遠しくて仕方がない。

「ねえ！ ジュース買ってきていい？ やっぱり、電車でジュース飲むのも旅の楽しみかな」とか思うの

陽乃が嬉しそうに由利にねだった。

「あ、俺も俺も！」

「まーったく、仕方がないわね。その代わり、1200円のよ。1500円のペットボトルはダメ。OK？」

「チエーツ、ケチ」

陽乃がブウツと頬を膨らませた。

「なに？ 飲みたくないの？」

「冗談です！ お願いします、奥様」

由利はフーツと息を吐いてからそれぞれに120円を手渡した。

「ありがとっ！ 夏樹、行くよ！」

「待ってよ姉ちゃん！ 早いつて！」

夏樹が慌てて陽乃を追いかけようとして、思わず足を止めた。

「……？」

誰かに見られた気がした。夏樹は振り返って辺りを確認するが、誰もいない。気のせいかもしれない。

「夏樹、早く！ 電車来ちゃう！」

「あ、待ってつてば！」

夏樹は自販機の前で息を荒げながらどのジュースにするかを選ぶ。

「わーたーしーはー……やっぱり『なっちゃん』だな！」

夏樹は「なっちゃん」という言葉に思わずドキツとして小銭を全部落としてしまった。

「やだっ、ちよつと 안타なにしてんの！？」

「姉ちゃんが悪いんだ！ なっちゃんなんて言うから！」

「はあ！？ 意味わかんないから。それより、ほら電車来たから急ぐよー！」

夏樹が振り向くと、こまちがホームに滑り込んできていた。

「わわわっ！ ヤバイヤバイ！」

二人は慌ててジュースを買い、そのまま電車に滑り込んだ。

「ギリギリセーフだね！」

夏樹が一息ついて、ジュースの栓を開けた。

「ホントあんたたちはいつつもギリギリなんだから。ヒヤヒヤさせないでちょうだいよ」

由利が呆れながら乗車席への扉を開けた。

「俺たちどこ？」

「B - 56からよ」

「サンキュー」

そして、B - 56の座席に座って向かいを見てから、夏樹は思わずジュースを吐き出してしまった。

「やだあ、なっちゃん汚い！」

目の前の席にいたのは、他でもない、明日香だった。

第2話 指定席（後書き）

まるで図ったかのように夏樹の行くところ、行くところへ現れる明日香。これは偶然か、必然か……。

第3話 相席

ブスツとした様子で、夏樹は目の前にいる明日香を睨んでいた。

「な、なによ、そんな怖い顔しちゃって」

「……。」

明日香が聞いても夏樹は顔を変えようとはしない。

「なんでそんなに怒ってるの？」

「岡本が」

やっぱり表情は変わらず、機嫌が悪そうなおままだ。

「さつき電車で別れるとき、新幹線でも一緒かもねとか言ってくれなかったから」

「そんなの……言うかなあ」

「……言わない？」

夏樹の質問に明日香はしばらく考えてから「言わないでしょ、ふつう」と返した。

「そうかなあ」

夏樹はまだ納得がいかない。そもそも、偶然にしては出来すぎではないだろうか。

「ちよつと聞いていい？」

「何でもどうぞ？」

「お前さ、まさか狙ってココの座席取ったわけじゃないだろうな？」

「は？」

妙な夏樹の質問に明日香は啞然としてしまった。

「だって、周り見ろよ」

二人はこまちの車内を見渡す。ここは6号車。この「こまち123号」は8両編成。3〜6号車が指定席となっている。その最後尾がここ、6号車。しかし、夏樹たちの密集している席、つまり岡本家と朝倉家が密集している席以外はほとんど空席なのだ。

「こんだけ空席があるのに、なんで俺と岡本の家族が向き合うよう

な形で座ることになるんだよ」

「そんなの……うちのお父さんが切符買ってきたんだから、お父さんに聞いてよ」

夏樹はチラッと明日香の父、登を見た。大柄で日焼けしたオジサン。なんだか夏樹には慣れ親しんだことのないタイプの大人だから、話しかけるのとはばかられた。

「いいよ、別に」

夏樹は必死になっている自分に少し恥ずかしさを覚えて、背もたれにもたれた。

「偶然だよ。それに、他の駅で乗るお客さんでうちが取る前に取られてる席かもしれないし」

明日香がクスクス笑いながら同じように背もたれにもたれる。

「これが必然だったらキモいよな」

クスツと夏樹が笑うと、明日香は一瞬間を空けてから「ホント、冗談じゃないよね」と返した。

1時間ほど経った。

気づけば、外は真っ暗。時間は6時前。北海道、東北の順で日が暮れるのだから暗くなっても不思議ではないのだろうけれど、普段まだ薄明るい七海市のことを考えるとやっぱり違和感がある。

そういえば、明日香はどこに住んでいるのだろうか。

夏樹はふと気になって明日香に聞いてみようと思い、顔を見上げてちよつとドキツとしてしまった。

明日香が居眠りをしている。

(ふつうにしてもカワイイけど、けっこう寝るとカワイイんだな……)

そんなことを考えている自分が恥ずかしくなって、真っ赤になっ

てしまった。

(バツカじゃないの、俺……)

スウ……スウ……と寝息が聞こえてくる。この間まで一緒に寝ていた姉の寝息と大して差はないのに、なんでこんなにドキドキするのか夏樹にはさっぱりわからない。

凝視しても変だと思い、夏樹は明日香から目を逸らしてそのまま、明日香の横に置いてあったカバンに目が行った。

カバンについているネームホルダーらしきものに『神奈』という字が見えた。

(神奈川県……住まいなのかな?)

だとしたら、住んでいる場所まで同じ県内ということになる。さすがに、ここまで来ると偶然とは思えなくなってくる。

夏樹は『神奈』の先の字を調べたくなって明日香を起こさないようにそっとカバンに近づく。おかしいくらい、心臓がドキドキ鳴る。(いやいやいや! 落ち着け、落ち着け。カバンをちょっと見せてもらっただけ……)

ヤバい、ヤバい、ヤバい、ヤバい !

「熱っ……」

結局、カバンに近づくこともできず真っ赤になって汗をかいて終わってしまった。

「だいたい、知ったところでどうするんだって話だよ……」

2時間経過。

「ねえ、なつちゃん……」

周りがみんな寝ていることに気を遣ってか、明日香が小声で夏樹を呼んだ。

「なに？」

「あの……その……」

何かをためらっている様子の明日香。もしかして、時間的におながやすく時間だから何か食べたいのだろうか。

「あのさ、いい？」

明日香が言い終わらないうちに夏樹から切り出した。

「な、なに？」

「ご飯、なんか食べない？」

「こまち」には今年の1月から昔、東海道新幹線にあったという食堂車ができた。案外これがヒットし、秋田新幹線では人気があるという。

「俺、ちょうど1000円くらい持ってんの。うちは今日、新幹線内でテキストにご飯食べるって話にしてたし」

「え……あ、うちも！うちもそうなの！」

明日香も財布を取り出し、1500円入っていることを確認した。

「じゃ、行ってみる？」

夏樹が立ち上がり、食堂車のほうを指差した。

「うん！」

明日香も嬉しそうに立ち上がり、夏樹の後に付いて行った。

それを見ていた陽乃と、明日香の姉・花那はるなが顔を見合わせる。

「ご飯、ここで済ませるんですか？」

陽乃が聞いた。

「初耳です」

花那が笑って返す。

「うちもですよ」

陽乃も同じように笑い、二人は夏樹たちの背中を見送っていた。

「すっごーい！ キレイし、広ーい！」

食堂車に入るなり、明日香と夏樹はその広さとキレイさに驚いてしばらくキョロキョロと目をうるつかせた。

「いらっしやいませ。何名様ですか？」

突然スタッフの人に声をかけられて夏樹は「お、お二人様です！」と返してしまった。

「こちらへどうぞ」

クスクスとスタッフの若い女性が笑いながら二人を窓際の席へと案内してくれた。

「また、後ほどご注文にうかがいますので」

「ありがとうございます」

明日香が女性に微笑みながら礼を言う。キツチリとした子だ。

「ねえ、なっちゃん」

明日香はメニューをバツと広げて夏樹に手渡した。

「なに食べる？」

夏樹はメニューを受け取るうとして手を止めた。陽乃のいつかの言葉が蘇る。

(女の子と一緒に出かけたりしたら、基本的に女の子から優先してさせてあげたりしないと男としてダメよ！)

「なっちゃん？」

明日香に声をかけられ、ハッと我に帰ってから夏樹はメニューを彼女のほうへと向けた。

「岡本から先に選べよ」

「いいの？」

明日香が嬉しそうに笑う。

「もちろん」

「やったー！ ありがとうー！」

明日香はメニューをすぐに受け取り、何にするか考え始めた。

3分ほどたつて明日香は何にするか、決めたようだった。

「ねえ、なつちゃん」

明日香はメニューを持ったまま夏樹を見つめた。

「なに？」

「なつちゃんが何が好きか、当ててあげよっか」

「へえ？ 俺の好みわかるの？」

「わからないから当ててあげようって言ってるの」

ペロツと舌を出して悩みながら明日香はメニューとにらめっこを続けた。

こちらは5分くらい悩んでいたが、スタッフさんはジツとこっちを見たりせず、チラツとたまに夏樹たちを見て微笑ましそうにしていた。

「わかった！」

ようやく明日香がメニューを閉じた。夏樹は右手を差し出してマイクに見せ立て、明日香に聞いた。

「ズバリ、俺の好きな料理は？」

「カレーライス！」

ありきたりな答え。

でも はずれではなかった。

しかし、一発で当てられたのは悔しい。

「なんでそんなすくにわかるんだよ。俺としては納得行かないね」

夏樹はブイツと顔を背けた。

「そんな怒らなくなつていいじゃん。私と一緒にだもん」

さり気ない一言だったけど、なぜか夏樹はその一言が耳から離れなかった。

カレーライスがテーブルに並ぶ。さすが新幹線の車内のカレー。学校の給食とは比べ物にならないくらい的高级感が出ている。

「す、すごいね」

明日香もさすがにビックリしてしまったようだ。

「うん……」

夏樹も手をつけていいのかどうかわからず、しばらく湯気の上がるカレーを見つめていた。

「冷めないうちにどうぞ」

さっきのスタッフさんが優しく声をかけてくれた。

「じゃあ！」

夏樹が手を合わせる。それを追うように明日香も手を合わせた。

「いったただきまーす！」

二人は声を合わせてカレーを食べ始めた。

「見て！」

明日香が窓の外を指差す。

「キレイな夕焼け！」

「わああ、ホントだ」

二人はカレーに手をつけようとしていったん止めて、しばらく夕陽を見つめていた。

(ずっとこの時間が続けばいいのにとかマンガだったら思うんだろうな)

夏樹は思わずそんなことを考えてしまい、笑いがこみ上げてきた。

「なに笑ってるの？」

「なんでもなーい。早く食べようー！」

「変ななっちゃん」

二人はだんだんと暮れていく日を背に、カレーライスを食べ始め

た。

第3話 相席（後書き）

新幹線での座席は偶然か、必然か。夏樹は思わず「必然だったらキモい」と言ってしまう。その発言に一瞬、陰りを見せた明日香。本当に偶然か、必然か……。二人の物語は、ここから大きく動き始めます。

第4話 離席

「まもなく、東京、東京です。お忘れ物のないようにご注意ください。お乗り換えは……」

機械だが、車内アナウンスの女性の声が聞こえてくる。その声を聞いて居眠りしていた夏樹や明日香の両親も目を覚ました。

その頃にはキツチリ自分たちの席に戻った夏樹たちは、さもいま起きたかのような素振りを見せて父母たちと同じように伸びをして見せた。

それを見た陽乃と花那がクスクスと笑った。

「なっちゃん……ひよっとしてお姉ちゃんたちにバレたかな？」

「いや……バレないように行ったから問題はなかった……はず」

そう言っただけ恐る恐るもう一度陽乃たちのほうを見ると、なぜかブイサインをもらった。

「バレてたみたいだね」

明日香がクスツと笑う。

「さすが姉ちゃんたち」

夏樹もつられて笑った。

東京駅で下車すると、思ったよりホームに人がいたので歩きにくかった。

「岡本さんは、どちらにお住まいなの？」

由利の質問に夏樹は心の中でガツポーズを取っていた。

（母さん！ その質問、ナイス！）

「ああ、私たちは……」

（どこどこ？ 早く早くおばさん！）

「フェーックシヨイ！！」

肝心なところで、隣で陽乃がでかいクシャミをしたのでまったく聞こえなかった。

「姉ちゃん……」

夏樹が呆れた表情で陽乃を見つめると、陽乃はティッシュで鼻をかみながら「なに？」と振り向いた。

「……なんでもない。ただ、そんなクシャミじゃ男にモテないよ」
夏樹の的を射た一言に陽乃は「生意気！」と軽くデコピンを喰らわせた。

「だってホントのことじゃん！」

「レディに対して言っていていいことと悪いことがあるでしょ」

「ふん。レディなんて程遠いくせに」

ふと見ると、花那と明日香がクスクスと笑っている。途端に顔が真っ赤になった。

「おやあ？ 夏樹くん。お顔が真っ赤」

陽乃がグイグイと肩を押してきた。さっきの食堂車の件にしろ、今回にしろ、普段は全然鋭くない陽乃がこんなときに限って目ざとくいろいろ見てくる。

「そんなことないし」

夏樹はムスツとした顔を浮かべたが、明日香と目が合つと自然と頬が緩んだ。

新幹線の改札を出る。明日香と一緒に歩くことができるのはどのあたりまでなのだろうか。自然と由利と玲子の会話に耳が行ってしまう。さっきから恐らくは自分たちの住んでいる場所の話で盛り上がっているのだ。

「あら、それじゃあ……ですね」

玲子が嬉しそうに由利と話をしている。

「そうね、残念だわ。でも同じ……ですし、案外……ですからね」
自分の身長があまり高くないのが恨まれる。肝心な部分が本当に聞こえない。雑踏にまぎれてしまうというのも理由ではあるけれど、もう少し背が高ければそれなりに聞こえているのかもしれない。

「あら！ そうでしたの？ じゃあ夏樹と明日香ちゃんって同じ年

なのね。どおりで話も合うはずよな」

そんな百も承知なところだけハッキリ聞こえたってちつとも嬉しくない。夏樹はブウツと頬を膨らませた。

「なっちゃん？」

「わっ！」

急に明日香が顔を覗き込ませてきたので思わず声を上げてしまった。

「ご、ごめん。なんか機嫌悪そうだから、どうしたのかなって思ってた……」

君が住んでいるところが気になって仕方がないから、なんて言えるはずもなく。夏樹は不自然にならないように笑顔を作って答えた。「なんでもないよ。ちよつと人が多くてやだな〜って思ってるだけごまかした。」

なんで自分が「どこに住んでるの？」などという簡単な質問をぶつけることができないのか、そんな不甲斐なさにまた腹が立ってくる。さつきから夏樹はそんなことを考えてばかりの堂々巡りを続けていた。

「明日香！ いつまで夏樹くんにひつついて行くの？」

二人がハツと気づくと、岡本家は在来線の改札口のほうへ向かっていた。

夏樹たちは 小田急電鉄に乗って帰る。

(ここまでか……)

あからさまに夏樹がため息をついた。

「なっちゃん！」

明日香がポンツと肩を叩いた。

「私、今日なっちゃんと帰ることできてとっても楽しかったよ！」
「う……ん」

「なつちゃんは？」

明日香が不安そうに聞いた。夏樹はごくごく自然に笑顔がこぼれてきた。

「俺も」

一瞬、雑踏も何もかも消えたかのような静寂が二人を包み込んだような気がした。

夏樹の声だけが聞こえる。

「俺も、今日が終わるのがもったいないくらい、楽しかった」

すぐに雑踏が帰ってきた。

「また、秋田行けば会えるかもね」

「うん……。そうだな」

陽乃が「夏樹〜！ 多摩急行が出ちゃうから急いで！」と呼ぶ声が聞こえた。

「それじゃ」

夏樹が小さく手を振った。

「うん」

明日香もテクテクと家族のほうへ歩き出した。

同時に振り向いて、同時に言葉をぶつけた。

「またね！」

「またね！」

それを見た両方の家族が大きく笑い出した。さすがにこれには明日香も夏樹も恥ずかしくて顔を伏せてしまった。

明日香が改札を通ったとき。もう一度夏樹は振り向いた。しかし、あまり背の高くない夏樹に身長が大して変わらない明日香の姿は確認できなかった。

第4話 離席（後書き）

楽しい時間はあっという間に過ぎる。それまで当たり前だったことが、急に当たり前でなくなる。夏樹は少し、その寂しさを知った瞬間だったのかも。

第5話 寝台席

春休みが終わってから1ヶ月近く経った。今日は5月5日。ゴールデンウィークも最終日となった。

このゴールデンウィーク中の前半、1日から3日までは2泊3日で秋田のほうへ行ったけれども、結局明日香に会うことはなかった。外を出歩いたときにも、駅のホームでも、新幹線の車内でも気づけばどこかに明日香がいないかどうか確認している自分がいて、夏樹はこれほど明日香のことを意識しているとは夢にも思っていなかった。

4日は登戸のほうへ陽乃と出かけた。最終日だけはゆっくりしようということ、何も予定を入れていない。なので、グッスリ眠れるはずだった。

「まだ4時かぁ……」
しかし、眠れない。

眠気はあるのだが、さつきから体が変なのだ。

「痛い……なんでだろ。食べ過ぎたかな」

腹痛がする。もう30分くらいだ。30分前から続いている腹痛は、初めは鈍い痛みだったが、次第にズキンズキンと全身に響くような痛みへと変わってきている。

「つつ……！ 痛っ……や、やばいかな……」

由利を起こしてこの症状を訴えるべきか、夏樹はしばらく迷った。陽乃を起こしてもかまわないと思ったが、よく考えれば部屋を分けてしまったので隣にはいない。

「トイレ行っておこう」
起きた瞬間だった。

鼻から何かが垂れてきた。

「うお！ 鼻水！？」

夏樹は慌ててティッシュを探して鼻に当てた。

「風邪ひいたかなあ……」

秋田へ行ったときはけっこう気温差があつて陽乃と二人して「寒い！ 寒い！」と騒いだ。ひよつとしたら、薄着のせいで風邪を引いたのかもしれない。

どんどん鼻水が出てくる。ティッシュを箱ごと持っていく必要があるかもしれない。夏樹は電気を点けてティッシュを探そうと思い、電灯の紐を引っ張った。

「え……」

手が血まみれになっている。

「な、なんで？」

よく見れば、布団も真っ赤に染まっている。さっき取りに行ったティッシュケースも、パジャマも何もかも自分が触ったものが血まみれになっていた。

「あ……鼻血……」

鼻血が大量に出ていた。わけがわからない。

「うえっ……ウグツ！」

急に吐き気がしてきた。夏樹は自分の体に突然起きた変調に戸惑うばかりで、どうしていいかわからない。

一刻も早くトイレへ。

夏樹はただただ必死に2階の置くにあるトイレへと駆け込もうとして、足がもつれて転んでしまった。

転んだのが衝撃となってこらえ切れず、もどしてしまった。

「ゲホツ……ゲホツ、ゲホゲホゴホツ！」

苦しい。

おかしい。

なんで急にこんなことになったのかさっぱりわからない。

「ゼエ……ゼエ……ゼエ……」

動けない。

「だ……れか。お母さん……お父さん……」

陽乃の部屋がすぐそこだ。

夏樹は必死にはいずって陽乃の部屋へと向かった。鼻血が止まらない。もう、廊下もトイレの前も夏樹の鼻血で赤くなっているところばかりだった。

「ね、え、ちゃ……ん……」

意識が朦朧としてくる。

(死ぬの……？ 俺、死んじゃうの……)

「ね……ちゃ……」

陽乃はふと目が覚めた。

何かが倒れるような音がした。

「んん……。また夏樹が冷蔵庫まで何か取りに行ってきたなあ」

夏樹は最近、夜中にお腹が減ったと言っては冷蔵庫からチョコレートやら果物などを取り出して勝手に食べている。由利や祥夫から何度も叱られているのにやめようとしなない。なので、今まで見て見

ぬフリをしていた陽乃もそれを見たら止めるように言われていたのだ。

ドアを開けて夏樹がいるかどうかを確認する。

廊下の中央に、夏樹らしい人影が倒れている。陽乃が突然出てきたのに驚いて、寝たフリでもしているのだろう。

「夏樹、アンタまた勝手に食べ物……キャツ!？」

床に何かヌルヌルしたものがこぼれていて、陽乃は滑って転んでしまった。

「痛い……何よこれ。夏樹、アンタ何かこぼしたんじゃない?？」

夏樹のほうから荒い息の音が聞こえてくる。

「夏樹?」

ゼエ、ゼエ、ゼエ。

「ど、どうしたの? 電気、点けるよ」

陽乃は電気を点けて、目を疑った。

真っ赤に染まった夏樹の鼻周り。廊下。パジャマ。夏樹の手。トイレの少し手前には、嘔吐した後がある。

「な、なつきい! 夏樹いつ!」

陽乃は半狂乱になって悲鳴を上げた。夏樹はトロンとした目を開けて「ね……え……ちゃ」と言っただけ嘔吐した。

「いやあああ! 夏樹、夏樹、夏樹!」

その声に驚いた由利と祥夫も目を覚まし、2階へと上がってきて絶句した。

血まみれになった夏樹を抱く陽乃。至るところが血で染まってい

る。

「お母さん！ お父さん！ 夏樹が……夏樹があ！」

陽乃は二人の姿を確認すると、一気に泣き出した。

「由利！ 救急車だ、救急車を呼んできなさい！」

祥夫が由利に携帯電話を手渡した。さすが会社人間だけあって、寝るときにまで携帯電話を所持している。しかし、それが役立つことを陽乃はここに来て感動した。

「は、はい！」

由利が携帯電話を受け取って119番を押す。

「夏樹！ 夏樹！ 聞こえるか、お父さんだ。しっかりしなさい。

何があつたんだ？」

「わか……ない。きゅ……に、おなか痛くな……て……トイ……レ行く前……に」

「こつなつたんだな？ そうだな？」

夏樹は小さくうなずいた。

陽乃はどうしていいかわからず、とりあえず夏樹の部屋からティッシュを取り出して鼻血を止めようと思ひ、彼の部屋に入った。

部屋を出る前に、ゴミ箱にチョコレートの袋が捨ててあるのを見つけた。

「夏樹。ちょっと聞いていい？」

陽乃がゴミ箱から袋を取り出した。驚いた顔をする夏樹。

「アンタ、また勝手に食べたでしょう？」

「……。」

夏樹は答えようとしなひ。祥夫が続けた。

「怒らないから、答えなさい」

「た……べた」

祥夫の顔が強張る。けれども、それは怒っている顔ではなかつた。

「陽乃」

「はい」

「父さんの部屋にある本棚の上から二段目の右端に『アレルギー全辞典』っていう分厚い本がある。それを取ってきてくれ」

陽乃は慌てて階下に下りてすぐにその本を取り、戻ってきた。

「お父さん！ コレ！」

「そうだ。ありがとう。陽乃、夏樹の手を握ってやりなさい」

陽乃は言われたまま、手を握り締めた。小さく震えている。

「ね……ちゃん」

声も震えている。

「なに？」

「こ……」

「え？」

「こ……わ……いよ」

陽乃はギュッと夏樹を抱きしめた。

「大丈夫、大丈夫。みんなついてるから。心配しないで」

祥夫は本を読み終えたようで、すぐにそれを傍へ置いた。

「……アレルギーかもしれないな」

バタバタと由利が戻ってきた。

「あなた！ 救急車、5分後に来てくれるって！ 七海市救急医療センターまで行くそうだから、すぐに着替えましょう！」

「よし！ わかった！」

陽乃はずっと夏樹を抱いたまま、動かない。

「陽乃。しばらく、傍にいてやってくれるか？」

「うん。うん」

「お前は、その格好のままでもいいのか？」

パジャマが血だらけになっている。確かにこのまま病院へ行けばかなり奇妙だが、今は夏樹の傍に少しでも長くいてあげたい。

「かまわない」

「わかった。何か異変があったら、すぐに大声で父さんたちを呼びなさい。いいね？」

「わかった」

祥夫もすぐに部屋に戻り、保険証と免許証、夏樹の母子手帳を取り出した。

5分もしないうちに救急車が到着した。

それまで座席だった部分があつという間に寝台席に変わる。その間に担架に乗せられた夏樹が運ばれ、救急隊員が陽乃たちに乗るように促した。

すぐに救急車が動き出す。動くと同時に夏樹がまた激しくもどしはじめた。

「お父さん、お子さんは何か今までにアレルギーはお持ちでしたか？」

「いえ、今まではなかったんです。ただ、最近夜中に私たちの目を盗んで冷蔵庫の中のを食べたりする変なクセがついていたよう……。注意はしていたんですが、何分夜中で目が行き届かず……」

「夜中だと、仕方ない部分が大きいです。そう責めないで。それより、今日お子さんは……お名前はいいですか？」

「夏樹です」

「夏樹くんは今日なにを食べたんですか？」

「これです」

陽乃がパジャマのポケットからチョココレートの袋を取り出した。

「ありがとう。お姉ちゃんかな？」

「はい」

「弟さん、すぐに良くなるから。心配しないで傍にいて手を繋いであげて」

「はい」

陽乃は言われる前からずっと、夏樹と手を繋いでいた。

「チョココレートアレルギー……かもしれません」

救急車が七海市救急医療センターに到着した。担架からそのまま寝台車に夏樹が移送される。

「食物アレルギーの11歳のアサクラナツキくんです！ チョコレートを食した後、腹痛、嘔吐、鼻血、喘息などの症状が出ています！」

救急隊員の言葉を聞いてすぐに若い医師が寝台車の傍へ看護師数名と駆け寄った。

「夏樹くん！ 夏樹くん！ 聞こえるかな！？」

夏樹は小さくうなずいた。

「今から、診察室入るから、もう少しだよ！」

「……うん」

夏樹は意識が朦朧としながらも、由利や祥夫、陽乃の姿を確認して胸をなでおろした。みんながいてくれれば心強い。

吸い込まれるように夏樹は診察室へと入っていった。

「お父さん……」

血だらけになった手とパジャマを呆然と見つめたまま、陽乃が泣きながら言った。

「夏樹……平気だよね？ 大丈夫だよね？」

祥夫はギュッと陽乃を抱きしめた。

「大丈夫に決まってるだろう」

時刻は、午前5時半を過ぎたところだった。

第5話 寝台席（後書き）

突如、夏樹を襲った病魔。チョコレートとアレルギーに因果性は見られるのか。そして、夏樹の容態は……。

第6話 診察席

夜が明けてきた。時刻は午前7時。

由利はうたた寝をする陽乃を支えながら診察室の明かりが消えるのを待っていた。祥夫も落ち着かない様子で診察室の前をウロウロしている。

10分ほど経って、陽乃が目を覚ました。まだ夏樹が出てきた様子はない。

「まだ診察してるの？」

「そうね。ちょっと、時間がかかるみたい」

陽乃は立ち上がって診察室の前まで駆け寄った。ぼかしたガラスになっていて、中は見えないようになっていて。中から医師と看護師が慌しく歩く音が5時半頃は聞こえていたが、今は落ち着いた様子だ。

(もうちょっとで中の音聞こえそうなのに……!)

陽乃がグイグイと耳をドアにくっつけた瞬間、ドアが開いて陽乃は中へ倒れこんだ。

「きゃあっ！」

「おっと、危ない」

中年の医師が陽乃を受け止めた。ナイスタイミングと心の中で陽乃は呟く。

医師の細い目がさらに細くなった。

「夏樹くんのお姉さんかな？」

「あっ、はい！ そうです！ 朝倉陽乃です！」

「陽乃ちゃん。もう、弟さんは大丈夫だよ。傍へ行ってあげて？」

「はい！」

陽乃は笑顔を顔中に浮かべて診察室の中へ駆け込んだ。

「夏樹くんのお父さん、お母さん。ちょっとよろしいですか？」

医師に呼ばれて二人の顔が少し強張る。

「診察室の奥へどうぞ」

陽乃は血まみれになった夏樹のパジャマの右袖を軽く握った。だ
いぶ落ち着いたようだ。スウスウと寝息を立てている。

「夏樹くん、ちよつと自分の血を見てビックリしちゃったのもある
みたいな。意識を失ったのは病気のせいもあったけど、ビックリ
しすぎたのもあったのかもね」

「みうら えりこ」と書かれた名札を付けた看護師が陽乃に話し
かけた。

「そうなんですか……。夏樹の病気、治ります？」

「ええ、もちろん。すぐに治るわ。家へも帰れるし、学校にもいつ
もどおりすぐに通えるわよ」

「よかった。よかったね、夏樹」

夏樹の手がわずかに動いて陽乃の手を握り締めた。

「チョコレートアレルギー？」

聞いたことのない病名に由利は思わず聞き返してしまった。

「はい。ご存知ないかもしれませんが、よくいらつしやるんですよ。
発症時期はバレンタインデーに目立ちます。特に男性に集中するん
ですが。バレンタインデーで女性からチョコレートをもらって食べ
たら急に症状が出たと」

「なかじま よしお」と書かれた名札を付けた医師はしっかりと
祥夫と由利の二人と向き合いながら話をした。

「でも、今まで夏樹はチョコを食べても何ともなかったのに……」
由利が戸惑った様子で今までのことを思い返す。夏樹はチョコレ
ートケーキが大好きだ。今まで毎年誕生日にはチョコレートケーキ
を用意した。我が息子ながら女の子にも人気があるようで、今年の
バレンタインデーには10個もチョコをもらって嬉しそうにしてい
た。

「今まで症状のなかった人でも急に起こることがあるんです。だから、

過去に経験がなくて戸惑う人やチョコが原因と思う人もいないくらいですから」

「病気のこと、詳しく教えていただけますか？」

祥夫が心配そうに中島医師に聞いた。

「チョコレートアレルギー。お菓子の一つチョコレートを食べることによつて起こるアレルギー症状を言います。チョコレートの原料であるカカオからカカオアレルギー、カカオマスアレルギーとも呼ばれていますね。チョコレートおよびカカオ主原料食品には、チラミンと呼ばれる血管浮腫物質が含まれており、これに起因するとされています。また、カカオにはニツケルも含まれているため、これに対してアレルギー体質を持つ人は症状が出ます。症状は下痢、嘔吐、鼻血、腹痛、痙攣けいれんなど様々です。今回夏樹くんは一気にこれらの症状が出たため、相当重い症状で彼も大変だったと思います」

「何か重大なことに繋がることはあるんですか？」

由利が最も聞きたいのはここだった。

「アナフィラキシーショックを起こす場合もあり、死亡例もあるため、症状のある人へのふざけ半分での対応は注意が必要です。アナフィラキシーの症状としては全身性のじんましんと喉頭浮腫いんとくうしゅ、喘鳴ぜんめい、シヨック、下痢、腹痛のうちどれかがあります。このアナフィラキシーショックは大変危険なので、今後夏樹くんはチョコレートの摂取は禁止してもらわないといけなくなりますね」

「治る見込みは？」

祥夫が聞く。

「かなり難しいと思われれます」

それを聞いた途端、由利は持っていたカバンを落としてしまった。

「あの子……お菓子の中でもチョコレートが一番好きなのに」

診察席から、由利のすすり泣きの声が聞こえてくる。

「なんだろ……夏樹の病気、ひどいのかな」

陽乃は心配になって少し夏樹の傍を離れ、診察席の横にかかって

いるカーテン越しに両親と医師の話聞いた。

「とりあえず、チョコレートアレルギーですからチョコレートそのもの、あるいはチョコレートを用了た製品は夏樹くんが食さないように気をつけてください」

(チョコレートアレルギー?)

聞いたこともない病気だ。陽乃は学校の保健の授業で少し、アレルギーについて勉強はしたことがあるし、期末テストにも出たので暗記した。しかし、チョコレートの「チ」の字もそのときは出てこなかった。

「チョコレートケーキはダメですか?」

由利が望みを託すように中島に聞いた。

「とんでもない」

中島は強い口調で答える。

「チョコチップクッキーも?」

「もちろん」

「ショートケーキに散りばめる飾りのチョコは?」

「お母さん。量の問題ではありません。今回、お姉さんの陽乃さんが救急車で救急隊員にチョコレートの残っていた量を伝えてくれたそうなんですが、どれくらいだったかご存知ですか?」

由利は答えないが、首を横に振ったようだ。祥夫も「すみません、私は把握してないです」と返す。

「8等分できるチョコだったそうで、その8等分の1つだった。つまり、2センチ四方程度の小さな塊だったんです」

それを聞いて由利は固まってしまった。それだけで、たった2センチ四方のチョコレートで夏樹は鼻血を出し、嘔吐し、意識を失ったのだ。

「夏樹くんの場合、少量のチョコでもかなり危険な症状が出る可能性があるんです。だから、少しくらいと思わないで、絶対にチョコは食させないようにしてください」

「はい……わかりました」

明らかに由利の声が小さくなった。陽乃も、チヨコレートは大好きだがこれから家では食べることはできないだろう。

由利と祥夫、中島の声はまだ続いていたが、陽乃は夏樹の傍へ戻った。

「姉ちゃ……ん？」

夏樹が薄目を開けた。

「夏樹！ 気が付いた！？ お姉ちゃんだよ！」

その声の中島や両親は夏樹の寝ているベッドへ駆け寄った。さきほどの三浦看護師も駆け寄る。

「夏樹くん。声は聞こえるかな？」

中島の問いに夏樹は小さくうなずいた。

「君から見て私の右隣にいる人は誰かわかる？」

「お……とうさん」

「左は？」

「おかあさん」

「お父さんの隣は？」

「姉ちゃん」

まだ声は弱々しいが、意識は回復したようだ。

「今日一日は入院して、様子を見ましよう。それからまた追々、今後のことは話し合っていく形でよろしいですか？」

中島の提案に由利と祥夫はとりあえずうなずくしかなかった。陽乃はまだどんな状況か把握できていない部分もあったが、夏樹の容態が安心になったことだけはわかった。

「よかったね、夏樹」

「あ……」

何か言おうとしている。陽乃は耳をそばだてた。

「え？」

「ありがとう」

夏樹は確かにハツキリ、そう言った。

「照れるな」

陽乃は恥ずかしそうに頬をかいた。

夏樹も少し恥ずかしそうに笑った。

第6話 診察席（後書き）

夏樹の容態は安定したものの、症状は「チョコレートアレルギー」。夏樹の好物が、食べられなくなる。これを説明しなければならぬ。両親は少し、悩まなくてはいけなくなりました。

第7話 最初の席

4月。新学期が始まった。

「行ってきまーす！」

夏樹はすっかり体調も回復し、いつもどおり学校へ通えるまでに回復した。

「行ってらっしゃい。車に気をつけてね！」

由利は元気そうに手を振る我が子を見ながらほっと一安心した。でも、まだ夏樹にチヨコレートアレルギーのことは言えずにいた。言いにくいと祥夫に相談すると、普段から何でも由利任せにしている部分が大いに加えておそらく今回のことはさすがの夏樹も反発するだろうと予想して、祥夫のほうから夏樹へと説明してくれると言った。普段から何かと忙しい祥夫は家庭のことは由利に任せきりだが、いざとなると行動してくれる。

陽乃はというと、あれ以来まったくチヨコレートのお菓子やケーキを家では食べなくなっていた。陽乃にも気を使わせてしまっていることに由利は少し心苦しさを感じていた。

「お母さん、通れないってば！」

陽乃にドンドン背中を押されて由利は自分がボーッと玄関に突っ立っていたことにいま気づいた。

「ああ、ゴメンゴメン！ さっ、気をつけて行ってらっしゃい！」

「はい！ じゃあね！」

陽乃も元気そうだ。夏樹が入院しているときは何かと落ち着かないところもあったが、退院してきたときは本当に嬉しそうだった。

「お母さん」

門を出てから陽乃は振り返った。

「なに？」

「大丈夫？」

「何が？」

「お母さん。最近、夏樹のことばかり考えすぎてない？」

その一言に由利は衝撃を受けた。自分でもそう感じていたが、まさか娘に気を遣わせるほど顔に出ていたとは思わなかった。

「そんなことないわよ！ 陽乃ったら気にしすぎ！」

「本当？」

「本当よ」

陽乃はニコツと笑って「それならよかった！ じゃあ、行ってきます！」と手を振って走って行った。

「車に気をつけなさいよ！」

「わーかってるー！」

夏樹は大丈夫。

チヨコレートさえ食べなければ大丈夫。

学校の先生にも伝えておいた。

大丈夫。

由利は陽乃の背中を見送りながら、何度も心の中で繰り返した。

夏樹は富樫小学校の中校庭ちゆうこうていでクラス分けの発表を待ち構えていた。

夏樹たちの学年は5クラスもある。なんだかテストが返ってくるときよりもドキドキする。

「なっつきー！ おはよう！」

「あつ、ユウ！ おはよー」

4年生のときに一緒だった坂上優翔さかがみゆうとが声をかけてきた。

「今年はどうだろ？ 夏樹と同じクラスになれるかな？」

「なれるといいよなあ。5分の1の確率だから、微妙だよな」

「朝倉くん！ おはよお！」

バシーンと夏樹の背中を思いつきり平手打ちして現れたのは同じく4年生のときに同じクラスだった和田ちひろわただった。

「ちい、おまえ相変わらず元気なのな」

「あたしは元気だけが取り柄だもん！」

ちひろはニコニコしながら夏樹と優翔の間に割って入った。

「おい、ちい！ 俺と夏樹が一緒に話してんだぞ！ 間に割り込むなよ」

「うるさいわね、小さいことをグチャグチャ言ってるのもてないよ？」

ギヤアギヤアと言ひ合いを始める二人。いつもこうだ。去年も何十回とこの光景を目にしてきた。

「あ、おい！ 二人とも！ クラス発表だぜ！」

夏樹が制裁をするように玄関を指差した。先生たちがゾロゾロと模造紙を持って出てくる。

「やつべえ、緊張する」

夏樹は大きく深呼吸する優翔を見てクスツと笑った。
バラバラと模造紙独特の音がする。

5年1組。朝倉という字は見当たらない。

5年2組。ここにも朝倉という字はないし、坂上、和田の字もなかった。

5年3組。

「あーっ！ 俺だけ3組じゃあん！」

優翔が頭を抱えて大声を上げた。5年3組11番、坂上優翔の名前がある。

「あーあ。ユウ、空気読めよ」

夏樹がケラケラと笑った。

5年4組。和田という字も、朝倉という字もなかった。

「きゃーっ！ 朝倉くん！ あたしたち、2年連続同じクラスだよ！」

「よっしゃあ！ ちい、やったな！」

意気投合する二人を優翔は恨めしそうに見つめる。

「二人だけ盛り上がりやがって……うらめしい！」

「キヤーやだっ！ 朝倉くん、逃げよ逃げよ！ 暗いのが伝染^{うつ}っちゃっ！」

「待てよ！ 人をバイキンみたいに扱いやがって！」

3人は中校庭をグルグルと駆け回った。

8時40分。

クラス発表が終わって教室へと向かう夏樹。廊下は春休み前になつた油掃除のおかげでツルツルになつていて、その油の匂いがかすかに残っている。新学期という雰囲気がして、とても好きだ。

5年5組の教室は北校舎の一番東側。南校舎とも適度に距離があるので日当たり良好。窓際だと給食の後は眠くなるかもしれない。

「あたしは和田だから、一番廊下寄りの一番後ろ。朝倉くんは？」

「俺は一番窓際の後ろから二番目」

「なあんだ。じゃあ、今度席替えで近くなるうね！」

「なれたらいいな。じゃあ、また帰りに」

「うん。また後でね」

ちひろと別れてから、夏樹は自分の席へと着いた。やがて担任の先生が入ってきた。

「はあい、それじゃあホームルーム始めようか。まず、先生の紹介しておくね！」

「知ってるからいいって！」

何人かの生徒から同じ声が飛んだが、その女の先生はニコニコしながら続ける。

「うるさいわね、先生のこと知らない子だっているでしょ！ さ

つ、自己紹介するから静かにする！」

そういうと、先生は黒板にこれでもかと言わんばかりに大きな字を書いた。

「5年5組の担任になりました、大迫美智子おおだこみちこと申します！ 1年間、よろしく願います！」

「お願いしまーす！」

生徒たちから元気よく返事が来たのに満足そうな美智子はさらに続ける。

「はい！ それじゃ、出席番号1番の人からちよつとでいいから自己紹介してもらおうかな！？」

来た。

夏樹はこの自己紹介っていうのが一番苦手だ。どうやって自分を紹介すればいいか、未だに少し困る。

しかし、残酷にも夏樹の苗字は「あさくら」なので考える暇もないくらいにすぐに順番がやってきた。

(まあ、名前と好きなスポーツ、好きな教科と苦手な教科、好きな食べ物くらい言っておけばいいか)

「出席番号4番、朝倉夏樹で」

ガタン！と音がしたので夏樹やクラスメイトは思わずそちらを見つめた。

「なっちゃん？」

「へ……？ こ、ここので何やってんの？」

夏樹の斜め前の席。

そこにいたのは、紛れもなく岡本明日香だった。

第7話 最初の席（後書き）

まさかのまさか、明日香と夏樹は同じ学校で同じクラス！？
何やら一波乱起きそうな予感。

第8話 斜め前の席

給食の時間。

今日のメニューは「うずまきパン」、「ブルーベリージャム」、「ミネストローネ」、「牛乳」、「ポテトサラダ」。洋食だ。

「それでは、いただきます！」
「いただきます！」

給食係の号令とともに給食の時間が始まった。最近、土日しっかりと休みになったから小学校の高学年からは始業式初日からちゃんと授業があるようになってしまった。

夏樹はこのうずまきパンが大好きだ。なんとなく、ちぎる時が好き。ふつうの細長いパンよりちぎるのが楽しい。うずまき型にちぎれていくのが1年生のときから楽しくて仕方がない。

ただ、今日はふつうに食べる。

ふつうにという表現が正しいのかどうかはわからないが、ちぎって食べたりしない。ちゃんとそういうことをせず、かぶりついて食べる。それも正しいのかどうかかわからないが、ちぎって食べるとどうも遊んでるような印象を受けさせてしまうのではないかと思う。

(なんで俺……こんなに意識してんだろ)

左斜め前の席。そこにいるのは、明日香だった。

4人ごとに班になって食べるというやり方を取っている担任の大迫先生のやり方を恨むべきか、感謝すべきか。出席番号4番の夏樹と出席番号9番の明日香は必然的にこの組み合わせになってしまった。

(なるべくキレイに食べないと)

由利に普段から夏樹は食べ方があまりキレイでないと言われている。ここで食べかすをこぼしたりしたら最低だ。

「なあなあ、朝倉」

前に座っているのは嘉村恭輔（かきむら けいすけ）。小さい頃から野球をやっているとかでなんか粗野なイメージが夏樹にはあった。相変わらず、食べ方が汚い。夏樹ですら嫌悪感を抱くのだから、明日香や夏樹の隣にいる阿賀（あが）みのりにとつたらどれほど嫌なんだろう。

「なに？」

夏樹はなるべく食べかすが見えないように恭輔と話をする。見えたら食欲がなくなりそうだから。

夏樹は牛乳を飲みながら聞いた。恭輔は気にせず続ける。

「朝倉つて、岡本好きなの？」

ブーッ！と音がして恭輔の顔に思いつきり牛乳が吹きかかった。

それを見てみのりと明日香、クラスメイトも大迫先生も呆然としている。

「汚えな、朝倉！なんてことすんだよ」

恭輔はハンカチで顔を拭き始める。夏樹も慌ててティッシュを取り出し「ゴメン！マジごめん！」と謝りながら恭輔の顔を拭いた。

「で？好きなの？」

（まだ言うかよ、コイツ……）

教室中が静かになる。こんな空気で返事ができるはずなんてない。「私となっ……朝倉くんは、秋田県に親戚が住んでてお互いその親戚のところに行った帰りに偶然会ったんだよね」

明日香が淡々と言った。しかし、そこで恭輔は信じられない切り返しを入れてきた。

「それって運命の出会いなんじゃないの？」

静まり返る教室。

これが新年度1日目だっというんだから最悪だ。

「なんなんだよお、アイツは」

夏樹はほつきを持ちながらため息をついた。ちひろが同じように

ほづきを持ちながら、しかし夏樹と違って一所懸命掃除をしている。「なんだろねえ。なんていうか、嘉村くんはいつもあんな風に自分の思ったことハッキリ言っちゃうタイプだから」

「空気読めねえだけじゃん」

「あー、それもあるかも」

「それもあるかも、じゃなくって同じ意味だと思うよ」

夏樹はまた大きなため息をついた。

「そんなに女の子とくっつけられるような話題、嫌？」

ちひろが珍しく真剣な顔つきで聞いてきた。

「べつ、別に……嫌じゃないけど。ただ、恥ずかしいだけ……」

「じゃあふつうにしてればいいじゃん。あたしといる時みたいに力ルいノリで」

「カルい、ね」

夏樹は廊下を掃除している明日香をチラッと見た。すぐに顔が熱くなる。

（なんでだよ！　なんで熱くなってんの俺……いつもどおり、いつもどおり）

赤くなっている夏樹をちひろはクスクスと笑いながら見つめていた。

「それでー、この少数っていうのは……」

5時間目。算数。給食後。窓際の席。暖かい日差し。

（眠い……）

夏樹の目がトローンとしてくる。4月に入って急に暖かくなったからこの日差しが気持ちよくなって仕方がない。

（ダメダメ。今始まったばかりだから寝たらわかんなくなる……。なんか目、覚める方法ないかな）

ふと気づけば、斜め前にいる明日香の背中に目が行く。

（……）

顔が一気に熱くなった。目が覚めたのは覚めたが、これでは違う

徒たちを静めた。

「5年生からは、月曜日は6時間目にホームルームが入るの！ なにしても構わないってわけじゃないけど、みんなで決め事したりすることが多いからそういう時間を取るの」

「例えば？」

恭輔が眠そうな声で質問した。

「例えば……今日だったら委員会とか係を決めちゃうつもりでいたの」

「他には？」

ちひろが聞く。

「席替えをしたり、もうすぐある自然学校の班決めをしたり」

「なんか退屈な時間だね……」

教卓の前にいた女子生徒が呟いた。

パンパンパン！と大きな音を立てて大迫先生は手を叩いた。

「とにかく！ 今日には係と委員会全部決めちゃうよ！ 今日の給食係だって代わりで決めたようなものだったから」

「はあ〜い」

やる気のない返事がいくらか聞こえた。

大迫先生は黒板に委員長と副委員長の字を書いた。そしてそのまま委員長の下に「朝倉」と書き、続いて副委員長に「岡本」と書いた。

「なんで！？勝手に決めないでください！」

夏樹は慌てて抗議した。委員長だなんてとんでもない。

「なんでよ？だって朝倉くんと岡本さん、知り合いでしょ？」

「知り合いだけど、そんな委員長と副委員長一緒にやれるほど仲いいわけじゃないし！」

明日香は俯いたままでどんな顔をしているかわからない。抗議する素振りも見せない。

「とにかく、やめてください勝手にそういうこと決めるの！」

「そんなこと言って、実は嬉しいだけだったりして」

隣の女子生徒二人がクスクスと笑いながら呟くと、教室中から笑い声や茶化す声が聞こえた。

「最低だ……先生のせいだから」

夏樹はそれつきり、抗議もせず机に顔を伏せてしまった。

「朝倉くん。じゃあ、委員長やってくれるのね？」

「勝手にしろ！」

夏樹が怒った様子で返すと、大迫先生はさらに怒った様子で「なんて態度！ そんな子には委員長なんてけっこうよ」と朝倉の字を消してしまった。

「岡本さん。あなたはどうする？」

明日香はチラツと夏樹のほうを見た。

「ヒューツ！ 岡本、朝倉のほう見てるぞお！」

また恭輔だ。さすがに耐え切れなくなつた夏樹は机を蹴り飛ばした。すごい音がして夏樹の筆箱や教科書が飛び散った。

「朝倉くん！」

大迫先生が切れ気味で叱り飛ばす。

「うっさいな！ 岡本、岡本、岡本！ なんだよ！ 仲良くすんのがそんなに悪いかよ！ 先生もみんなもバカにしゃがって！ ム力つくー！」

教室は一気に静まり返った。

「はい、これ」

明日香が無言で倒れた机を起こし、筆箱の中身もしまつて返してくれた。

「……ありがとう」

「ヒューツ！ モツテるねえ、朝倉」

恭輔がまだ言ってきたが、夏樹はそのまま机に伏せて耳も塞いでしまった。

明日香は寂しそうな顔をして「先生。私は副委員長します」と返

した。

それを聞いて、やっぱり委員長すればよかったといつ気持ちがどこかにあるのを夏樹は感じ取っていた。

第8話 斜め前の席（後書き）

キライじゃない。でも、一緒にいると恥ずかしい。でも、一緒にいたい。矛盾した気持ちが渦巻く夏樹の心は少し不安定に。でも、明日香と一緒にやっぱりいたいという気持ちが強いのか……？

第9話 空席

あの騒ぎからだいぶ経った。

季節は新緑の季節　　5月だ。

夏樹と明日香は程よい距離を置きながら毎日と同じ教室で過ごしていた。最初は何かとおちよくってきたクラスメイトもあまりに素っ気ない二人の様子に飽き飽きしたのか、茶化すようなことはなくなっていた。

夏樹はゴールデンウィーク中に家族で静岡の熱海まで遊びに行った。春休みに体調を崩した（崩したレベルではなかった）けれども、ゴールデンウィーク中はそうだったこともなく楽しく過ごせた。ただ、あのとき何が原因だったか夏樹自身は聞かされていなかった。

日直はグルリと全員を一周して再び苗字が「あ」行の人たちに割り当てられていった。夏樹の前3人は全員「あ」で始まる苗字。夏樹も「あ」。このクラス、あ行は全員「あ」で終わってしまう苗字だ。珍しい。

ガラガラと教室の戸を開ける。夏樹は登校する時間が早いほうだ。鍵を一番に開けることも珍しくない。ところが、今日は職員室に鍵を取りに行ったら既に鍵はなくなっていた。

「……おはよ」

戸を開けた先にいたのは、明日香だった。途端に緊張する。

「おっ、おはよ」

夏樹はなるべく冷静を装って静かに自分の席に着いた。日直の仕事は朝一に学校へ来たたら日誌を取っておくこと、掃除当番表と給食当番表をその日の担当に変えておくこと、日付と日直の名前を書き換えることだ。日直は二人ずつ割り当てられるので、仕事が偏ったりすることはなかなかない。

ところが、どう見ても明日香の姿しか見当たらない。

「岡本」

「なに？」

夏樹が声をかけても明日香は顔をそちらに向けたりせず、静かに鉛筆で日誌に何かを書き込みながら答えた。

「阿賀は？」

「わかんない。まだ来てないもん」

「……そっか」

それだけで会話が途切れてしまった。気まずい時間が流れていく。時計の針の音だけが教室に響く。

「ねえ」

「なあ」

同時だった。思わず顔を見合わせてしまう。

「あ、どうぞ」

「ううん。なっ……朝倉くんからどうぞ」

夏樹は少し寂しそうな顔をする。

「なっちゃんていいんじゃない？」

「え……。でも、嫌かなって思っ」

「いいじゃん。二人きりのときくらい」

「えっ……」

教室にはまた時計の針の音だけが響く。しかし、夏樹と明日香は自分たちの心臓の鼓動が外まで聞こえているんじゃないかというくらい大きく鳴っていた。

「あーっ！ 見るよ、二人でなんかしてるぞ！」

驚いて二人が振り返ると、クラスメイトの男子二人がドア越しに大声を上げていた。

「ちっ、違っ……」

夏樹がカアツと顔を赤くする。

「うそー？ どれどれ！」

「うお、マジで！ 朝から熱いなあ」

他のクラスからも見物するように生徒たちがやってきた。

「違うし……違う……」

夏樹が下を向きながら首を振る。

「あのさあ」

明日香が立ち上がって野次馬のほうを向いた。

「朝から二人で教室にいたらアツアツってことになるの？」

一気に周囲は静まり返った。

「じゃあ男の子二人でいても熱いんだ。女の子二人でいても熱いんだ。そういうことなんだ」

「はあ？ それとこれとは別だろ。男と女二人で教室にいたら熱いだろ」

「じゃあ大迫先生と校長先生が二人でいたら熱いね」

それを聞いて夏樹は思わず吹き出した。気持ち悪い。

「んだよ、屁理屈ばっかこねて。それとこれとは関係ないし」

男子がスネた声で反論するが、明日香も負けていない。

「別に、私と朝倉くんが二人でいたってアンタたちには関係ないでしょ？」

「……それは」

「関係ある？」

誰も答えられなかった。そのうちに野次馬はバラバラと解散し、いつのまにか始業時間が近づいてきていた。

「くだらない。本当にくだらないね」

明日香は日誌をパタンとたたんで引き出しにしまった。

「ゴメン……なんか……ゴメン」

「いいよ。私も悪かったし」

それつきり、会話は途切れてしまった。

朝の会が始まった。大迫先生が少し遅れ気味で慌てて入ってくる。「はい、それじゃ今日の日直。号令かけて」

明日香が「起立」と声をかける。凜とした声。夏樹は思わず明日

香のほうへ自然と目が行ってしまった。

「礼」

淡々と号令をかける明日香。やっぱり前から思っただけで、明日香はきれいだ。なんていうか、日本人らしい長い黒味髪の毛とか、肌とかきれい。

(こんなこと考える俺って変かも……)

夏樹は「着席」と明日香の号令を聞き流しながら着席した。

「えーっと、それでね。もう一人の日直の阿賀さん。今日体調を崩してるから欠席なのよ。それから嘉村くんも欠席」

よく見れば、夏樹の隣も空席になっていた。今朝からいろんなことがあつて気づかなかつた。

「それでね、日直一人じゃ大変だから今日は阿賀さんの代わりに朝倉くん、お願いしていい？」

「え？ 俺？」

「ええ。阿賀さんの後ろでしょ。それに、今度阿賀さんと嘉村くんが一緒にすればちょうどいいのよ」

クラスメイトの視線が集まっているような気がする。でも、ここで変に断るのもマズいだろう。

「わかりました」

「それじゃ、今日一日お願いね」

大迫先生はそれだけ言い残すと忙しそうにまた教室を出て行った。

1時間目が終わった。

明日香がサツと立ち上がり、黒板を消しに行こうとしたので夏樹が「岡本。俺がする」と呼び止めた。

「一緒にすればいいじゃん？」

「汚れるっしょ。俺がする」

「別にちよつとくらい構わないよ」

「いいから。岡本は日誌書いててよ。書く欄けっごう多いしね」

「わかつた。ありがとう」

夏樹が黒板を消しに行ったのを見送ってから座席に戻ると、隣のみりの席にちひろが座っていた。

「えっと……和田さん？」

明日香が不安そうにちひろの名前を呼んだ。

「あ、覚えててくれたんだ。和田ちひろです」

ちひろは嬉しそうに、けれどどこか冷たい感じで答える。

「どうしたの？」

明日香は席に着いて次の国語の用意をしながら聞いた。

「たいしたことじゃないんだけど、ちょっとお願いがあるんだ」

「お願い？」

ちひろはズボンの右ポケットから小さな手紙を取り出した。小さな字で「夏樹へ」と書いてある。

チクン、と明日香の胸が痛む。

「これね、夏樹に渡してほしい」

「朝倉くんには？」

「うん」

沈黙が続く。

「和田さんが自分で渡せばいいじゃん。朝倉くんとずっと同じクラスなんでしょ？」

明日香は気にしない素振りを見せてその手紙を受け取らずに答えた。

「そうだけど……これはちょっと自分では渡せないっていうか」

だったら渡さなければいい。明日香はそう思っただけで舌打ちをしたくなった。

「だから、岡本さんに渡してほしいな」

「……。」

明日香は俯いて答えないようにしていたが、しつこくちひろが「お願い！」と言ってくるのでとうとう折れてしまった。

「ありがとう！」

「ううん。別にいいよ」

「それじゃ、そろそろ授業始まるから私、戻るね！」

ちひろは手を振りながら自分の席へと戻っていった。その後すぐに夏樹が戻ってきた。

「どした？ ちい、なんだって？」

「ううん。ちよっとお話してただけ」

明日香はそつとさつき渡された手紙を後ろに隠した。

「そ。それより、日誌ありがと」

「ううん。こちらこそ、黒板ありがと」

「いえいえ。じゃ、また次の時間もよろしく」

「うん」

チャイムが響く。

手紙は 渡さなかった。

第9話 空席（後書き）

欠席者が出たことで日直を一緒にすることになった二人。しかし、そこへちひろが明日香に手紙を渡しにやって来た。果たしてその手紙の内容とは……。

第10話 昔の席

2時間目。算数。

明日香はノートは開いていたものの、大迫先生の授業はほとんど聞こえていなかった。隣のみよりは欠席だし、右隣の男子もうつらうつらしている。大迫先生はいつもほぼ正面の子たちを見ながら授業をするので、明日香が視界に入るとはほとんどなかった。

明日香がみんなから見えない位置で見ているのは、さつきちひろに渡された夏樹への手紙だった。何が書かれているか、気になって仕方がなかった。

『朝倉くんへ（*。*）ノシ』

朝倉くん、今日の放課後時間ある？

あたし、朝倉くんに話したいことがあるんだ
わったらランチルームの前の廊下で待ってます。

日直の仕事、終

和田ちひろ

（、）『

ムカツク。

そう思う自分が怖かった。でも、ムカツク。

何が具体的にどうと言われるとわからない。字がムカツク気がする。顔文字がムカツク気もする。何より、こんな手紙を明日香伝いに渡させるちひろがムカツク。

でも、これを渡さなかったら夏樹がどう思うかを考えるともっと怖くて、渡さないわけにはいかなかった。

「朝倉くん」

明日香に突然呼ばれて夏樹は黒板を消す手を止めた。途端に教室

中が静まり返る。

「これ」

そう言って夏樹に手渡されたのは、小さい手紙。

「え……」

「和田さんから」

そう言うなり、ちひろが怒った口調で叫んだ。

「ちょっと！ そういうのは、ふつうわからないように渡すもんでしょ！ なんで……なんでこんな静かなときに言うのよ！」

「えっ……」

思いつきり静かになってしまった。その直後、ワァッと声が上が
る。

「和田って朝倉のこと好きだったの!？」

「やっだー！ どうりでやたらと仲良くするわけよね」

「朝倉、モツテモテ」

「っていうか、これっていわゆる……」

「三角関係!？」

ガタン！

音がしたときには、ちひろが外へ飛び出していった。

「待ってって！ ちい！」

「ちい、だって！ ヒュー！」

そんなクラスメイトの声を無視して、夏樹はちひろの後を追った。
慌てて明日香も後を追った。

黒板消しが床に落ちて、白い粉が舞い上がった。

「ちい！」

ハアハアと息切れがする。ちひろはもつと苦しそうにしていた。

「……ヒドいよ。なんであんなタイミングで……」

半泣きなのだろうか、声が震えている。

「しょうがないだろ。休憩時間中に渡すしかなかったんだよ、岡本だつて」

「だからって、あたしの名前出すことないじゃん！」

「じゃあ、なんでお前から渡さなかったんだよ！」

当然のことを聞かれて、ちひろは黙り込んだ。

「だつて、だつて……」

ちひろはグスグスしてばかりで、なかなか答えを出さない。

「なあ、なんなの？ はつきり言ってくんないとわかんないじゃ…

…」

突然、夏樹の声が遮られた。

喋れなくなった、のほうが適切だったかもしれない。

「どこ行つたんだろ……」

明日香は理科室の前でキョロキョロと辺りを見渡した。すると、そこへ優翔がやってきた。

「あれ？ 君、岡本さんだっけ？」

「え？ はい、そうですけど……」

不審そうにしている明日香に優翔は軽く自己紹介をした。

「あ、ごめん。俺、夏樹の友達で坂上優翔っていいいます。岡本さんのこと、ちょっと知ってて」

「今朝のこと？」

優翔はばつが悪そうに小さくうなずいた。

「別にいいよ。坂上くんは直接、関係ないもん。それより、ヨロシクね」

「うん。で、どうしたの？」

優翔に聞かれて小さく耳打ちした。

(朝倉くんと和田さん、見なかった？)

優翔も小さい声で返す。

(なんで?)

(私、ひどいことしちゃったの。謝りたくて)

(あ、そうなんだ。俺は男女が二人、すぐそのトイレ裏行くの、見たよ。一緒に行ってみる?)

(お願いしていい?)

(OK)

そういうと、優翔は二人が駆けて行ったほうへと明日香を連れて行った。

「あ、いたいた」

優翔が裏玄関のドアを出ると、ちひろと夏樹が立っている。なにやら大声でもめているようだ。

「なんかケンカしてるよ。ほら、謝りに行きなよ」

「ありがとう」

そう言っつて振り向いた優翔と駆け出そうとした明日香は言葉を失い、立ち止まってしまった。

「……………」

夏樹もわけがわからない。

(な……………に? これ、やわらか……………)

目を開けると、ちひろの唇が自分の唇に重なっている。

気づいたときには、思い切りちひろを突き飛ばしていた。

「キャッ!」

思わず派手に転ぶちひろ。

「痛いっ……………ひどいよ、急に」

「ひどいのはそっちだろ! なんだよ、急に! わけわかんねえ!」

ガシャンッ
！

驚いて夏樹とちひろが振り向くと、呆然とした様子で筆箱を落としたまま立ち尽くす優翔とその隣で同じく呆然とした様子の明日香がいた。

「み……見た？」

夏樹が不安げに聞く。

仕方なく、二人は小さくうなずいた。

次の瞬間ちひろはその場から逃げ出そうとしたが、辛うじて夏樹が止めた。

「待てよ！ 意味わかんねえだろ！ ちゃんと説明してけよ！」

ちひろは振り向きざまに大声で言い放った。

「男の子にキスするような理由なんて、好き以外の何でもないじゃん！」

「うわっと！」

優翔と明日香を突き飛ばしてちひろは教室へと駆け戻っていった。

「……なんだよ。前だっけしたクセに」

夏樹が呟く。

「は？」

優翔が聞き返そうとすると、夏樹は口をゴシゴシと袖で拭いてそのまま教室へと戻っていった。

「……岡本さんも、戻ったほうがいいよ」

優翔に促されて、明日香は力なく歩き出した。

「坂上くん」

「なに？」

「ゴメン。私のせいで……」

優翔は苦笑いして「いいよ。俺が案内したんだし。気にすんな」

と返した。

そのまま明日香の背中を見送ったが、優翔が一番複雑な気分だった。

「なんだよ、アイツ」

夏樹は階段を上がりながら昔のことを思い出していた。

ちひろと優翔とは、幼稚園からの付き合いだ。昔、幼稚園でちひろと同じクラスになったとき、隣の席になったことがある。

たわいもない、幼稚園児の会話だ。

「あたし、あちゃくらくんのことちゅき」

年少組。まだ3歳になったばかり(と由利から聞いた)だったちひろは舌足らずだったようで、「さしすせそ」が言えず、あさくらをあちゃくらと言っていた。こっちのほうが発音は難しいのに。

「僕はちひろちゃんのこと、ふつう」

かわいくない幼稚園児だった。夏樹は自分でもよく覚えている。

「ねえ、あちゃくらくん」

夏樹が呼ばれて振り向くと、突然キスをされた。

あのときはキスの意味もよくわかっていなかった。ただ、父親が仕事に行く前によくしていたのは知っているくらいだった。

だから、夏樹のファーストキスは幼稚園の頃になるのかもしれない。

「昔のことなのに……」

夏樹の頭をあのときの席に座ったちひろと自分の姿がまるでドラマのワンシーンのように蘇ってくる。

もう一度、唇を擦ってから夏樹は教室へと入っていった。

第10話 昔の席（後書き）

キスしたちひろ。キスをされた夏樹。見た優翔。すべてのキツカケを作った明日香。友達関係が、少しずつ変わっていく。ちひろの思わぬ告白に、夏樹は……。

第11話 放課後の席

「それじゃあ、これで終わりの会を終わります。日直、号令」
大迫先生が声をかけるが、明日香も夏樹もボーツとしていて彼女の声は耳に入っていないかった。

「日直！ 聞いているの!？」

「あつ、ハイ！ 起立！」

大迫先生に怒鳴られて初めて夏樹は我に返り、号令をかけた。

「礼！」

「さようならー」

挨拶が終わると、クラスメイトはバタバタと教室を出て行った。

「朝倉くん」

大迫先生に呼ばれて、夏樹は軽く返事をして教卓へ向かった。

「どうしたの、今日は。珍しくボツとしちゃって」

「いえ……」

フウツと先生のため息が漏れるのを夏樹は聞いた。

「多感な時期だもんね。何か、悩みとかはない？」

「悩み……」

ちひろの唇の柔らかさが急に蘇ってきた。

「朝倉くん？ どうしたの？」

気づけば、右手で口をこすっていた。無意識だった。

「いえ……なんでもありませんよ、先生。心配無用です！」

夏樹はガツポーズを取った。大迫先生は「それならいいけど、何かあったらすぐに先生に言ってね」と言ってくれた。最近、夏樹には彼女が本当にいい先生だと思ふことが多くなっている。ちよつと口うるさいのが欠点だけれども。

大迫先生が教室を出たのを見届けて、夏樹は椅子にもたれた。

涼しい風が教室へ入り込む。外から男子生徒の声が聞こえる。いつもなら夏樹も一緒になって騒いでいるのだが、今日はとてもそんな気分になれない。

あの一騒動があったのは3時間目の前のたった5分間の休憩時間のことだった。とても長く感じられたが、実はその程度だった。5分だけであまりにもいるんなことがありすぎて、夏樹自身だけではとても処理しきれない感じがする。

「夏樹」

ノックの音と同時に聞き覚えのある声が聞こえた。優翔だった。

「ユウ……どした？」

「それはコツチのセリフ。なんだよ、今日の」

ドアにもたれてジッと夏樹を見つめる優翔の目を見ることもできない。

「わかんね……」

「気づいてなかった？」

優翔も夏樹と目を合わせようともしない。

「何が」

「ちい」

それだけで十分何を意味するかがわかってしまう。

「わかんなかった」

「そうなんだ」

「ユウは気づいてたわけ？」

「もちろん」

「いつから？」

「去年からかな。ちいに直接聞いたわけじゃないけど」

「そんな前から……か」

それからしばらく、沈黙が続く。

優翔のすぐ後ろの柱で、明日香が座り込んで二人の話を聞いていた。日誌を出し終わって帰ってきたら、二人がこんな話をしていたので入りづらくなった。

「なあ、夏樹」

優翔が続ける。

「なに？」

「お前さ、好きな人、いるんじゃないの？」

夏樹は答えを返さなかった。その代わり、何か落ち着かないのか足をパタパタと揺らすような音、上靴が音を立てているのか、そういう音が室内に響いた。

「いる」

明日香も優翔もドキツとしたが、すぐに夏樹は「かも」と付け足した。

「は？ かも？」

「うん。いるかも。でも、いないかも」

優翔は意味がわからない。

「なに言ってるの？ いるの？ いないの？」

「わかんない。好きなのかどうか、わかんない」

「そんなの……」

「じゃあ聞くけど」

夏樹がやっとならと優翔と目を合わせた。

「好きってどんな気持ち？」

「え……っつと」

優翔も答えに困ったようでも黙り込んでしまった。

「好きになるって気持ちかわかんないから、これがそうなのかわかんない。なあ、好きってどんな気持ち？」

優翔はしばらく考え抜いて、ようやく答えを出した。

「キュツ、キュン！って感じ？」

しばらく沈黙が続いて、しばらくしてから夏樹が大笑いした。

「なんだよ！ お前がどんなつて聞くから答えたのに」

優翔がムキになっているのがわかる。明日香も笑いをこらえるのが大変だ。

「ゴメンゴメン。ねえ、それじゃあユウはキュンツしてしてるわけ？」

「え……」

また沈黙が降りた。

「へ？ ま、まさか？」

優翔は少し俯き加減で答えようとしない。夏樹は驚いて優翔に駆け寄った。

「なーんてな！」

ニツと優翔は笑って夏樹の頬を引っ張った。

「いててててて！ なんだよ！」

「俺はまだそんなキュンツしてたことないですー！」

「じゃあさっきのは？」

「マンガの受け売り」

「……くっそー、カツコよく思った俺がバカだった」

「カツコよかった？ センキュー」

優翔の屈託ない笑顔を見ると、夏樹も怒る気になれなかった。

「まあ……多分、ちいのことは断るかも」

「……そっか」

「気まづくなるかな？」

「気まづくなっても、嫌々付き合つとかよりいいんじゃない？」

「かな」

優翔は何も言わず、小さくうなずいた。

「そろそろ帰ろうか」

「あ、岡本が日誌出して帰ってくるはずだから、俺もうちよつと待ってるよ」

「そっか。じゃ、また明日な」

「うん。ばいばい」

夏樹は優翔に軽く手を振って、また教室へ戻った。優翔は明日香

のいるほうとは反対の方へと歩いていった。明日香はこっちへ優翔が来たりしないか心配だったが、杞憂だった。

明日香はすぐに出てくると不自然と思ったので、5分くらい柱の影で座って待った後、教室へと入った。

すると、さっきまであれだけ元気だった夏樹が机の上で居眠りをしている。

「朝倉くん？」

返事がない。

明日香はキョロキョロと周りを見渡してそっと呟いた。

「なっちゃん？」

すると突然、ガバツと夏樹が起き上がった。

「わっ！」

「おっ！」

同時に声を上げて見つめ合う。

「おかえり」

夏樹が夕陽に照らされながら笑顔で声をかけてくれる。思わず明日香は胸がキュンとなった。

(キュツ、キュン！って感じ?)

優翔の声が蘇る。

「岡本？」

「うっん！ ただいま」

チャイムの音が聞こえた。

「帰ろっか」

「うん。そうだね」

明日香はランドセルを背負い、鍵を片手に教室を出る。

「ほら、なっちゃんも早く」

「おっ！」

教室を出て、鍵をかけた。

「私、職員室に鍵、返してくるから先に靴箱へ行つてて」

「いいの？」

「いいよ」

「サンキュ！」

「まただ。胸が痛い。」

明日香はしばらく呆然としたまま、夏樹の背中を見送っていた。

第11話 放課後の席（後書き）

明日香自身、胸の痛みを感じている。夏樹は人が好きという感覚がまだわかっていない様子ですが、本当のところは……？

第12話 3年C組の席

「……樹。夏……」

「ん……」

自分の名前を呼ぶ声がある。

「夏樹！」

ハッと目を覚ますと、目の前に見慣れた顔がいた。

佐野綾音だ。

「綾音……」

「どうしたん？ さっきの古文、ずっと寝てたやん」

「え……」

気づけば腕時計の針は2時10分を指していた。ここ、神奈川県七海市立七海高等学校は50分授業だ。5時間目は1時20分からだ。だが、その前の昼休みくらいから記憶がない。

「俺……寝てた？」

「寝てたも何も、爆睡。いびきこそ聞こえてなかったけど、先生何回も声かけてたよ」

「そ、そっか……」

「……」

綾音は夏樹の様子がおかしい理由は聞かずにいた。というのも、綾音もその理由をハッキリと知っているからだ。

2009年11月24日。

あの日まであと1ヶ月だ。

夏樹はその日が近づくにつれてなんとなく落ち着かなくなってい

る。毎年のことだ。そして、気温が下がって寒くなってくると時たま、夢で彼女や彼らのことを思い出す。

「ねえ、夏樹」

綾音は夏樹の前の席に座って言った。

「私も、アスちゃんのところへ連れて行って」

「え……」

夏樹の顔が曇った。綾音自身、自分がどれだけ夏樹にとって重い言っているのかは重々、承知している。それでも、今年ばかりはこれを交わさずに過ごすことは不可能に近かった。

綾音と夏樹は今、付き合っている。

今年の4月からだ。

高校1年生のときに綾音は夏樹に告白したが、夏樹は気になる人がいるからと断ったのだ。綾音自身、それなら仕方がないかと一瞬諦めそうになった。ところが、それがアスちゃん 岡本明日香という女の子であることを知った日から、夏樹の気持ちをなんとか自分へ寄せようと、それこそ毎日努力を重ねた。

夏樹は見た目が明るく人懐っこい感じから同性、異性問わずに友人が多かった。しかし、異性に対して時折見せる不安感のようなものを綾音は感じ取っていた。それは姉・陽乃に対して特に露骨に出ることがあった。

一度、陽乃が野球部の応援で倒れたことがあった。熱中症。応援に夢中になりすぎて水分を取っていなかったのが原因だったようだ。幸い、影で休むことですぐに回復したが、夏樹のほうも動揺してそれから応援どころではなくなっていたのを綾音もハッキリ覚えてい

る。
「あたしは」

綾音はすっかり夏樹を見つめながら続けた。

「夏樹の全部、受け入れるつもりでおるんやけど」

「……簡単に言うなよ」

夏樹はプイツと顔を背けた。

「簡単じゃないことくらい、わかってる。でも、夏樹はあたしを受け入れてくれた。違う?」

「……。」

夏樹も十分、わかっていた。

綾音に告白されたのは何も2回だけではなかった。高校1年生で1回、2年生で3回、そして付き合うことになったときだ。ふつつ、フラれたら1回や2回で諦めるものを綾音は諦めるどころかほとんど自分磨きをして夏樹にふさわしい女になるとやたら張り切っていた。

そうして1年生の時には中学生とほとんど変わらない雰囲気だった綾音が今では私服を着れば大学生かと思間違うほど、きれいになっていた。外見でなく、中身もちろんだ。

シツカリ者だったが、それに優しさも加わりただ口うるさいだけではなかった。そこらの女子と比べれば、ずっと夏樹にとっても他の男子にとっても魅力的だった。

でも、彼女に夏樹自身が抱える過去を一緒に背負ってもらうつもりまでなかった。今まで夏樹も付き合ってきた女の子は何人かいたが、結局夏樹の不甲斐なさに憤慨したり明日香の存在の大きさに耐え切れず、全部向こうから別れを切り出された。

「でも……」

「あー!」

綾音が大声を出して夏樹のほうに顔を思い切り近づけてきた。

「とにかく! あたしは行く! なんか文句ある?」

「別に……俺は文句なんてないけど」

「じゃあ決定! 案内、お願いします!」

「了解。それじゃ、放課後な」

「オツケー」

綾音は機嫌良さそうに自分の席へと戻っていった。

「おばさんになんて挨拶しよう……」

あれ以来、夏樹は岡本家へ入ったことがなかったのでどう切り出して入るべきか、実はわからないでいた。

「おい、どっち行くんだよ」

夏樹に声をかけられて綾音は思わず振り向きざまに電柱にぶつかりそうになった。

「え？ あ、そっちなんや。まあ、早く言つてよ。ぶつかりそうになったやん」

夏樹がクスツと笑って「お前の方向音痴、中学のときから変わんないのな」と言った。

「いいやん。人には欠点だつて必要やし。あたしみたいなカンペキな女の子にはこういうカワイイところも必要やん」

夏樹が呆れた様子で綾音を見つめている。綾音は顔を赤らめて「そ、そんな顔せんでもええやん！ 冗談やねんから！」と半泣きになったような顔でそういった後、後ろを向いて俯いてしまった。

フウ、と夏樹はため息をついて綾音の後ろに回り、頭を優しく撫でた。

「それくらいわかってるよ。ほら、早く行こうぜ」
「うん……」

綾音は立ち上がり、夏樹の後ろをついていった。いつのまにか夏樹の身長も176センチとかになってしまい、164センチしかない綾音と10センチもの隔たりができた。二人が出会った頃、夏樹より綾音のほうが大きかった。やっぱり男の子だな、と思う。

ふと綾音が気づくと、七海市街の中でも特に下町っぽい雰囲気が出てる海岸沿いの「舞子原商店街」へやってきた。

午後4時半。夕食の買い物に来ているお母さんやおばあちゃんたちで商店街は大賑わい。そんな中、制服の綾音と夏樹はかなり浮い

て見える。

「ね、ねえ夏樹。ちょっと恥ずかしいんやけど……」

綾音は夏樹の服をそつと引っ張って訴えた。

「え？」

「商店街なんて通らなくてもいいやん」

「だって、岡本の家、商店街で八百屋やってんだからしょうがないじゃん」

「八百屋!？」

「言ってなかったっけ？ ほら、あそこ」

綾音と夏樹の目の前に映ったのは、威勢良い声で「大根今日は安いよー!」と商売をしているおばさんとおじさんだった。

「ほら、行くぞ」

「えっ!？ 本気!？」

「ウソついてどうすんだよ。ほら、早く」

「り、了解……」

綾音はサッサと行ってしまつ夏樹の後へ恐る恐るついていった。

第12話 3年C組の席（後書き）

ここは現代（2009年）パート。

夏樹と付き合っている少女・佐野綾音の登場。そして、彼女が今後知る「岡本明日香」という少女の実際とは？

第13話 仏壇前の席

「さー、いらっしやい、いらっしやい！ 今日には冬野菜が特に安いですよー！」

玲子が威勢良く呼び込みをしていると、その視界に見慣れた少年の姿が入った。

「あらあ！ 夏樹くんじゃないの！」

夏樹はペコツとお辞儀をした。後ろに隠れるようにしてついで来た綾音がその拍子に丸見えになって玲子と目が思い切りあった。

「あら！？」

玲子は呼び込みも早々に切り上げ、彩音のほうをジーツと見つめた。

「なんだ。どうした？」

玲子の声が聞こえなくなったのに気づいた登が顔を覗かせて「おっ？」と同じような反応をして夏樹と綾音のほうへ寄ってきた。

「あっ、あの。あたし、その……」

「夏樹くんの彼女さん！？」

玲子は顔をパアツと明るくして手を合わせた。

「ほほう！ 夏樹くん、以前からモテモテだったからねえ」

登もウンウンとうなずきながら微笑んだ。

「えへへ……ご無沙汰しました」

夏樹は少し照れながらもう一度お辞儀をする。

「やだねえ、水臭い！ 気にしなさんな、同じ街に住んでるんだからさあ」

さすが八百屋のオバサンというところだろうか。元気いっぱい、下町のオバチャンって感じがする。

「ところで……どうしたんだい、急に」

玲子が不思議そうに顔を見つめる。

「あの……この子、佐野綾音っていうんですけど……その……」

夏樹は言いづらそうにしている。それをなんとなく察知した玲子と登が同時に言った。

「入りなよ。明日香もきつと、夏樹くと綾音ちゃんに会いたがってるはずだから」

それを聞いてホツとした様子で夏樹と綾音は店の中へ入っていく登と玲子についていった。

「あつと、ゴメンね……あら？」

靴を脱いでそろえているとぶつかつたのは、花那だった。

「あつ、花那さん。お久しぶりです」

花那はもう大学4年生だ。ずいぶんと大人っぽくなって、夏樹もドキドキすることがある。

「ホントね。最近姿見せなかったから、明日香も寂しがってるんじゃないかしら」

クスクスと笑う花那。自分と比べると大人っぽすぎる花那に綾音は少し劣等感を覚えた。

「たっだいまあ。あー！ チョー疲れた！」

同時に店の中に入ってきたのは明日香の弟・圭太だった。

「あれ！？ 夏樹さん？」

「チツス。久しぶり」

「わあ、久しぶりです……ん？」

隣にチヨコンと座っている綾音を見て思わず圭太は赤くなった。

「な、夏樹さん……そのお隣のカワイイ方は？」

ボン！と音がしそうなくらい一気に綾音は赤くなった。

「えつと……いま、お付き合いしてる……佐野綾音さん」

さらに顔が赤くなる。綾音は恥ずかしくて恥ずかしくて仕方がない。

「そうなんですか……きつと姉ちゃん、嫉妬してますね」

圭太がクスツと笑った。

「バカ言っなよ」

クスツと夏樹も笑うが、綾音は複雑な気持ちがいっままでたっても

残っていた。

「こつちよ。あれから場所は変わってなくてねえ」

玲子の案内で夏樹と綾音は狭い廊下を歩いていく。少し古びていて、どこか懐かしい雰囲気のある明日香の家は、確か小学校6年生のときで築50年だと明日香本人から聞いた。

歩きたびにギシギシと床の軋む音がする。

不意に綾音と夏樹の鼻に線香の匂いが伝わってきた。

「はい、どうぞ」

玲子が障子を開けると、小さな仏壇に花と果物、少しばかりのご飯とお茶が供えてあった。

「さあさあ、早く入りなさい」

綾音が遠慮気味にその和室へ入る。夏樹が続いた。

「それにしても夏樹くん、背が伸びたわねえ。今は何センチあるの？」

「176センチです」

「176!? まあ……そう。月日が経つのは早いのねえ」

玲子の言葉に綾音は少し重みを感じた。

「ちよつと飲み物を用意してくるから、まあ話でもしてやって」

「はい。ありがとうございます」

玲子はニコツと笑うとすぐに部屋を出て台所のほうへと向かっていった。

「ゴメンな。なんか」

夏樹が急に謝ってきたので少し綾音は驚いた。

「うっん！ あたしが勝手に行きたいって言ったんだから………なんで夏樹が謝るの？」

「や………なんとなく」

「それより、久しぶりなんでしょ？ 明日香さん」

「うっん………」

「ほら、早くしなよ」

夏樹は促されるまま、そつと仏壇の前に座り込んだ。仏壇のところに壁には明日香の写真。そして、その横には夏樹、明日香、優翔、ちひろの4人が写った写真が飾られていた。

夏樹は懐かしそうにその写真を眺める。

しばらく見つめた後、鈴を鳴らした。線香の煙が風にたなびいて少し揺れた。

綾音は不謹慎だとは思ったが、夏樹のそのときの顔が少しキレイで、思わずドキツとした。

「綾音。次」

「え？」

「え？じゃないだろ。ほら、次」

綾音は夏樹に押されるようにして仏壇の前に座った。

それから、さっき夏樹が見つめていた写真を見上げた。

「ねえ、夏樹」

「うん？」

「この写真……向かって左端は夏樹だよね？」

「うん」

「その隣が、明日香さん」

「うん」

「その隣にいる男の子は？」

少し間が開いた。

「クラスメイト」

やっと答えてくれた声もトーンが低い。

「そんなに仲良くはなかったわけ？」

「……まあ」

「そっか」

仲が悪くはなかったのだろう。何か事情があつて、疎遠になったのだろうか。

綾音は鈴を鳴らしてしばらく手を合わせた。夏樹はその後姿を目を細めて見つめる。

直後、台所のほうからガラスの割れる音と「あー！ やっちゃったあー！」という玲子の声が聞こえた。

「コップ……割っちゃったのかな」

綾音が立ち上がって廊下のほうを覗き込んだ。

「あ、あたしちよっと手伝ってくるよ」

綾音は素早く駆け出して和室を後にした。

夏樹は一人になった部屋でもう一度、4人の写真を眺めた。

「ん……！」

夏樹の視界が急に眩むようにして揺らいだ。思い出したくない記憶だが、この4人を見るといつも嫌でも思い出される。

小学5年の夏休み。

夏樹にとって、大きな出来事が続いた夏休みだった。

第13話 仏壇前の席（後書き）

久しぶりに岡本家を訪ね、仏壇の前に座った夏樹が思い出す、小学5年の夏休み。夏樹を大きく変える夏のひとつがいま、始まります。

第14話 リビングの席

「夏祭り？」

夏樹は優翔の顔を見ずにカツサンドを頬張りながら答えた。

今日は市立図書館に夏休みの宿題をしにちひろ、明日香と仲良しの優翔の3人と一緒にやってきた。あんなトラブルがあった3人組でよくも宿題なんてできるな、と傍から見ていれば思うのだけれども、全ては大迫先生の仕業だった。もちろん、彼女が夏樹たちのトラブルを知っているか知らないのかまではわからなかったのだけれども。

自由研究だった。グループは今までのクラスでは自分たちの仲良し同士でやっていればOKだったが、なぜか大迫先生は自分の判断でそれを全部決めてしまった。その結果、こういうメンバーになっている。

優翔は梅オニギリを食べながら続けた。

「そう！ 明日と明後日の2日間あるんだけど、明後日のほうは打ち上げ花火するんだぜ！」

「ふうん……」

夏樹は素っ気なく答えた。どうせそんな夜遅い時間に父の祥夫おしゆが外へ出ることを許可してくれるはずがない。最近、姉の陽乃ひなのの門限がようやく7時になったのだ。陽乃も塾以外はすぐに家へ帰らないといけないと文句ばかり言っている。なので、陽乃は部活にも入っていない。入ることができないのだ。

当然ながら小学生の夏樹の門限はもっと厳しかった。冬は午後5時、夏は午後6時。これでは友達の家へ遊びに行くこともできない。なので、夏樹は友人の数は多いほうではなかった。

「なんだよ、その素っ気ない答え方。もっと喜べよ」

「なんで」

「だってな……」

優翔は夏樹の耳元で囁いた。

「岡本さん、誘ったから」

思わず顔が緩んでしまいそうになった。でも、そのすぐ後に祥夫が怒った顔で「許さん」と言いそうなのが容易に想像できた。

「うーん……」

夏樹は悩みに悩んでいる。

「なに？ まだ4月のこと気にしてんの？」

「うん……まあ」

気にしていないといえば嘘になる。あれからクラスメイトは事あるごとに夏樹と明日香、あるいは夏樹とちひろをくつつけようとしてくるのだ。それが夏樹には苦痛でならない。明日香ともちひろとも友達でいたい。好きだとか嫌いだとか、そういうので男女を区別したくなかったのだ。

「それもそうだけど、ウチさあ、お父さんが厳しいの」

「そんなに？ 祭りだぜ。せいぜい9時くらいには帰るさ」

「ダメダメ」

夏樹は残っていたカツサンドを食べてから言った。

「俺の門限は午後6時です」

「はあ？」

優翔がオニギリを口に入れたまま驚いた様子を見せた。

「汚いなあ。全部食べてから喋れよ」

ングツと音がして膨らんでいた優翔の頬が縮まった。それから手のひらについたご飯粒を取って口に入れる。

「だって、6時って。夏だったらまだ明るいじゃん」

「明るいとか暗いとか、そういう問題じゃないそうで」

「そっか……」

沈黙が続く。夏樹はイチゴオレを手にしてストローで上品に飲んだ。甘い。夏樹は小さい頃からイチゴオレが大好きだった。今はもうなくなつた銭湯でも上がったらよく飲んでいた。

「んじゃ、無理ってことかな」

優翔が残念そうに呟く。その表情があまりにも寂しそうだったので、夏樹は断りきれずに言ってしまった。

「お父さんに相談してみるよ」

途端に優翔の顔が嬉しそうになった。

「ありがと、夏樹」

「ただいま……」

夏樹がそつと玄関の戸を開けると、珍しく祥夫の靴がきれいに並んでいた。めつたにないことだ。

夏樹はいそいそとリビングへ向かった。すると、陽乃の声が聞こえてきた。

「ねえ、いいでしょお父さん。もうみんなと約束しちゃったの」

「ダメだ。女の子がそんな遅い時間に出かけるなんてとんでもない話だ」

祥夫は陽乃と目も合わせず、すぐにその話を却下してしまった。

「なんでよ！ 他の子はみんなOKだって言ってるよ？ せいぜい9時くらいまでだって」

「ダメだと言ってるだろう！ 他家は他家、うちはうちだ！」
すると陽乃はプウツと頬を膨らませて怒り出した。

「フーンだ！ お父さんのケチ！ いいもんいいもん、ウチはお父さんがケチで外に出してくれないから無理でーすって言っっちゃうからねー！」

「好きにしる」

それつきり陽乃は祥夫と話をせず、ブスツとした様子でリビングの床に寝転がっている。

夏樹はその様子を見た後で恐る恐るリビングに入った。

「ただいま……」

小さな声だったが母親の由利ゆりが気づいて料理の準備をしながら笑顔で迎えた。

「おかえり。自由研究は進んだ？」

「うん」

夏樹は持っていたカバンをテーブルの上に置いてリビングの椅子に腰掛けた。

「天気のことを調べるよ。ほら、最近急に雨が降ってきて、なんていうんだっけ、ほら、南国の大雨みたいなの」

「スコールでしょ」

陽乃がすぐに答えてくれた。でも声は不機嫌だ。

「そう、スコール。なんでそんな雨がいつぱい降るようになったのか調べようってことになって。だから見て！ こんなに本、借りて来たんだよ」

カバンから5冊も分厚い本が出てきた。思わず由利も手を止めて本を手にとった。陽乃も驚いてその本を見つめる。

「うひゃ〜！ なにこれ、環境白書？ 難しそう……環境省？」

陽乃が顔をしかめてウンザリと言わんばかりの表情になった。

「まあ、スゴいじゃないの。こんな難しい本、読めるの？」

由利は環境白書片手に夏樹に聞いた。すると夏樹はすこぶる笑顔で返した。

「わかんないところあったら、お母さんと姉ちゃんに聞くよ」

その直後、二人の顔が強ばって部屋が静かになった。

「どうしたの？」

夏樹が不思議そうに聞く。そして祥夫が咳払いをした後に自分の言ったことがまずかったことに気づいた。

「え……と。あ、あたしも英語の参考書欲しいなって思ってたことなの！ 夏樹に刺激されちゃった。なんかいいのないかなあ」

陽乃がフォローするように声を上げた。

「あら、そうなの。珍しい。いつも夏休みはお遊びに夢中のアンタが」

由利が笑って陽乃の頭を小突いた。

「失礼ね〜！ だって、勉強しないと外へ遊びに行くにも行きづらいでしょ。夕方までしか遊べないし、時間は有効に使わなくっちゃ」

それを言った後、それもまずかったことに陽乃は気づいた。

「母さん。風呂」

祥夫は何も言わず新聞を置いて立ち上がった。

「ああ、はいはい。沸いてるから、入ってちょうだい」

由利はバスタオルとバスマットを用意するために洗面所のほうへと向かった。

「……マズったわね」

陽乃が祥夫も洗面所へ行って声が聞こえなくなったのを確認してため息をついた。

「姉ちゃんも祭り行きたいの？」

「うん。志田したちゃんと多部たへちゃんに誘われてるの」

「そっかあ……。俺も行きたいんだ」

夏樹はゴロンと床に寝転んだ。

「アンタもあたしも、大変ねえ。あんなお父さん持つと」

陽乃が横に寝転がる。

「ホントだねえ」

このままだと、夏休みはお先真っ暗だ。

「いただきます」

夕食の時間。時刻は午後6時半。

朝倉家では夕食の時間はテレビを点けてはいけない。ましてや本を読みながら食べるなど絶対に祥夫に叱り飛ばされる。夏樹は一度その経験があったから夕食の時間があまり好きではなかった。確かに行儀は悪かったが、お気に入りのお茶碗を割られるほど叱り飛ばされたのでシヨックも大きかった。

「陽乃、夏樹」

突然祥夫が二人に話しかけてきた。

「はい」

陽乃だけ答える。夏樹はどうも祥夫が苦手で最近、話す機会が減った。

「明日と明後日、おばあちゃんが泊まりに来ないかって言ってるから、行つてきなさい」

「へ？」

「ちょうどお祭り会場もおばあちゃん家から近いだろう。ついでだから、あまり遅くならない程度に行つてきなさい」

「い、いいの？」

「ああ。気をつけて行つてきなさい」

「ありがとうー！」

陽乃がツンツンと夏樹のわき腹を小突いた。

「ありがとう、お父さん」

「ああ。気をつけてな」

夏樹と祥夫の会話はあつてもこの程度のものだった。

夕食後、夏樹は電話を手にした。

「045の、86……」

かけるのは優翔の家。コール音が3回鳴つてから、優翔のお母さんが出た。

「はい、坂上です」

「あの、朝倉です。こんばんは。あの、優翔くんいますか？」

「ああ、いるわよ。ちよつと待つてね。優翔、優翔！朝倉くんからお電話よー！」

すると電話の向こうからバタバタと走る音が聞こえてきた。

「もしもし!？」

「あ、ああ、俺」

「祭り、行けるのか!？」

「う、うん」

「よっしゃあああ！本当に大丈夫なんだな!？」

「うん。大丈夫」

「よっし！それじゃ明日も自由研究するだろ？そのときに全員で打ち合わせだ!」

優翔の声がとても明るい。本当に嬉しそうだ。

「わかった。明日な」

夏樹の声も自然と明るくなる。受話器をそっと置いた後、夏樹は玄関の戸を開けてみた。夕立が降って少し涼しくなっただけなの、この雰囲気は夏樹は大好きだ。

「楽しみだなー！」

気づけば夏樹は叫んでいた。

「ちょっと！ 恥ずかしいでしょ、早く入りなさい！」

由利がリビングから夏樹を叱る。

「はぁーい」

そっとドアを閉めて、夏樹は2階へ上がった。

第14話 リビングの席（後書き）

父の思わぬ機転でお祭りに参加できることになった夏樹。この夏祭り
りで果たして何が起きるのか……。

第15話 屋台の席

「それじゃあおばあちゃん、行ってきま〜す!」

陽乃と夏樹は浴衣を着て勢いよく祖母・知恵子の家の玄関から飛び出した。

「行ってらっしゃい。気をつけてね」

知恵子は二人の背中をしばらく見送り、ゆっくりと玄関の戸を閉めた。

「夏樹は明日香ちゃんたちと行くの?」

「うん! 優翔とちひろと、岡本の3人と」

「ふうん……」

陽乃はしばらく黙り込んだ。

「どうしたの?」

夏樹が不審に思い、聞いた。

「いや、ちょっと気になることがあってさ」

「何?」

「夏樹、いま、坂上さんと和田さんは名前で呼んだよね」

「うん」

「岡本さんはどうして苗字なの?」

「え……」

「みんな友達なら名前で呼べばいいのに」

そんなこと、夏樹は考えたこともなかった。ただ、明日香のことを名前で呼ぶのはどうしてもはばかられた。理由はよくわからないけれども。

「ん……そだね。なんでだろ。俺もよくわかんない」

「岡本さん、きつと違和感っていうか、寂しいっていうか、そんな風に思ってるかもよ?」

陽乃は小走りを止めて、ゆっくりと歩き出した。夏樹もその横を歩く。

「でも、どうやって呼べばいいのさ」

「明日香ちゃんでもアスちゃんでもいいんじゃない？」

「えー！？」

陽乃が夏樹の顔を見ると真っ赤になっている。

「な、なに赤くなってるの？」

「え！？ 俺赤くなってる！？」

「真っ赤だよ」

「……。」

夏樹は最近、明日香のことを考えるとなんだか顔が火照る気がしていた。時々、胸がドキドキ鳴っているのもわかる。

「ひよつとして夏樹、岡本さんのこと……」

「や、やだなー！ 秋田で偶然会って、クラスが一緒になっただけじゃ好きになるはずないじゃん！」

しどろもどろになって、自分でも何を言ったのかよく覚えていない。

陽乃は不思議そうな顔をした。

「そうかなあ……」

「な、なにが？」

「あたしだったら、運命感じて一人ときめいちゃうけどな！」

ドクン！と夏樹の胸が高鳴った。

「あ、ただしイケメンじゃないとダメだけどね。あと、マッチョも

NG

「そ、そうなんだ。姉ちゃんって割と単純なんだね」

「あ、知らなかった？ 何年、姉弟やってると思ってたの？ それ

ぐらい知っときなさい！」

バシン！と陽乃は夏樹の背中を思い切り叩いた。

「痛って〜」

夏樹が背中をさすっていると、後ろから陽乃を呼ぶ声がした。陽乃の友人、志田未咲と多部未華乃だった。二人とも名前がキレイでうらやましいと陽乃は何度も口にするところがある。

「あ！ 多部ちゃん！ 志田ちゃん！ 夏樹、ゴメン！ あたし、先に行くね」

「あ、うん。またばあちゃん家だね」

夏樹は友人たちのほうへ駆けて行く陽乃をしばらく見送っていたが、その目の前が急に真っ暗になった。

「わっ!？」

「だーれだ!？」

聞き覚えのある声。

「……岡本だろ？」

そう言つとパツと目の前が明るくなった。

「スッゴイ！ どうしてわかつちやったの？」

「当たり前じゃん。声でわかる。何ヶ月同じ教室にいると思つてんだよ」

「まだ3ヶ月ちよつとじゃん」

「まあ、そんなもんでしたね……」

夏樹は明日香のほうを見て思わず言葉を失った。

「ん？ どうかした？」

見慣れない服装。明日香も当然だが、浴衣を着ていた。淡いピンク色に黄色の帯。サイズもピッタリ。

「いや……キレイだなと思つて……」

「え？」

明日香も予想外の夏樹の言葉に顔を赤くする。

「岡本が」

自分でもビックリするくらい、すんなりと言葉が出てきた。

「やだ……なんか、なっちゃんらしくない」

明日香が困った顔をしている。沈黙が続いて、周りの雑踏や太鼓の音だけが二人を包んでいる。

「おーい！ 夏樹！ 岡本さん！」

後ろから優翔の声が聞こえてハツと二人は気づいた。優翔の後をちひろが追つ。

「ウツス！」

夏樹は平静を取り戻して優翔とちひろに手を振った。明日香の胸だけがまだドキドキしている。

「今年もさあ、塾ばっかでホントやんなっちゃうよ俺」

優翔がため息をついた。優翔の家は姉がいて、進学校で有名な中学へ進んだらしい。優翔も男の子だから期待されているのかなんとか難しいことを聞いたが、夏樹はよく覚えていない。

「俺ん家も父さんがうるさいから、そのうち言われるかもなあ」

夏樹もウンザリした様子で声を上げた。

男子二人がそんな会話をする中、ちひろと明日香は黙々と後ろについていった。ずっと前のこととはいえ、二人の頭からちひろが夏樹にキスをした日のことが離れない。

「ねえ、岡本さん」

ちひろが立ち止まって明日香の手を引きながら名前を呼んだ。

「なに？」

明日香は振り返らずに、返事だけする。

「聞いていい？」

「……………」

祭り太鼓の音や人々の声だけが聞こえる。

「岡本さんは……………夏樹のこと、好きなの？」

「……………」

明日香は答えずに前を向いたままだ。

「ねえ！ どうなの？」

「私は……………」

「あれ？」

夏樹が振り向くと、ちひろと明日香の姿が見当たらなかった。

「どした？」

優翔も振り返って、二人がいないことに気づいた。

「はぐれたな」

夏樹が参ったなという表情をする。こつこつ混雑した場所ではぐれるとややこしいことこのうえない。

「探しに行こうぜ」

いま来た方向へ夏樹が戻ろうとすると、優翔がグイッと手を引いた。

「へ？ 行かないわけ？」

「その前に……」

優翔の表情が真剣になった。

「夏樹に聞きたいことあるんだけど」

「ああ……どした？」

「あなさ……」

そこからなかなか先の言葉を優翔は出せずにいた。心臓が嫌でも高鳴る。

「夏樹は、ちひろのこと、どう思ってる!？」

「……どうって」

「好きか、そうでないか」

「……」

夏樹はしばらく考えた。

「好き」

途端に優翔の表情が固まる。そう言ってから夏樹は補った。

「Likeライクの意味としてね」

それを聞いた途端、今度は笑い出した。

「なんだよー！ 焦るじゃん!」

ケラケラと笑い合った後、夏樹は少し出た汗を服の袖で拭いながら小さく呟いた。

「俺は……優翔とちひろ、いいと思うよ」

優翔の顔が少し赤くなって、嬉しそうに見えた。

「行ってくる？」

夏樹はいま来た方向を指差した。

「うん……」

優翔が小さくうなずいた。それから勢いよく走り出した。明日香とちひろは恐らく一緒にいるだろう。けれども、明日香は鋭いと夏樹は思っている。空気を読んでその場を離れてくれることを祈るか夏樹にはできなかった。

「あーあ。結局一人かぁ……」

夏樹は苦笑いしながら優翔の背中を見送り、屋台が並んでいるほうへと歩き出した。

たこ焼き。

お好み焼き。

りんごあめ。

ベビーカステラ。

輪投げ。

金魚すくい。

くじ引き。

スーパースポールすくい。

いろんな屋台が出ている。夏樹は屋台で何かしたり何か食べるといふよりも、こついうお祭りの雰囲気を楽しむのが好きだ。

しかし、ふとある屋台の前で足が止まった。

「……。」

思わず睡が増えた。

「100円かぁ……安いね！ 買おう！」

夏樹は財布を左ポケットから取り出し、屋台のほうへと近寄った。

「おじちゃん！ ひとつください！」

「おっ、いらっしやい。ひとつでいいのかい？」

「え？」

「ほら、後ろのお嬢ちゃんの方は？」

後ろを振り向くと、明日香が立っていた。息が荒い。

「わ！ いつのまに……」

夏樹は驚いて転びそうになった。

「ごめん！ やつと見つけたよ。急にいなくなっちゃうんだもん」
明日香は笑いながら夏樹の肩をバンバン叩いた。

「参ったわ。 なつちゃんとか坂上くんとはぐれてすぐに和田さんと
もはぐれちゃうんだもん。 私って方向音痴だよ」

明日香はひたすら一人で喋っている。

「と、とりあえずさ、これ食べる？」

「あ、うん！ 私もお金出すよ」

「いいよ、これくらい。俺がおごる」

「いいの？」

「いいのいいの。 おっちゃん、二つに変更」

「あいよ！ ありがとうさん！」

おじさんからそれを受け取ると、夏樹と明日香は座る場所を探してしばらく歩き回った。

「あ、あそこはどう？」

屋台のすぐ横、お客さんが座るスペースが用意されている。

「いいね。涼しそうだし、だんじりが通るのも見えそう」

「じゃ、決定！ 行こうぜ！」

夏樹は明日香の手を握って走り出した。

「ちよつとちよつと！ 落ちちやうじやん」

明日香が慌ててよろけそうになった。

「平気平気。落ちたら俺が何本でも買ってやるよ」

「ホント？ じゃ、わざと落としちゃおうかな？」

明日香が意地悪く笑った。

「嫌味なヤツ！」

夏樹も思わず笑ってしまった。

「あ、あれ。夏樹くんじゃないの？」

未咲の声に反応して陽乃が指された方向を見ると、女の子と座っている夏樹を見つけた。

「あれー！ ホントだ。女の子といえるじゃない。陽乃よりモテるんじゃないの？ 夏樹くん」

未華乃がからかうように肩を突いてきた。

「バカ言わないですよ。きつとあれ、同級生よ」

陽乃はチラツと二人のほうを見た。わりとカワイイ女の子だ。これは帰ってから尋問決定だな、と思った。

「ほら、邪魔しちゃ悪いから行こうよ」

未咲がグイグイと未華乃と陽乃の背中を押しした。

「わーかったわかった。ほら、行くよ、陽乃」

「うん！」

未華乃に手を引かれながらもう一度、夏樹のほうを見て陽乃は背中が凍りつくような感覚に襲われた。

夏樹が右手に持っていて、いままさに口に入れようとしているものの。

「陽乃！？」

それに気づいた瞬間、陽乃は必死に走っていた。こんな時に浴衣だなんてタイミングが悪すぎる。それでも陽乃は必死だった。

「待ってよ陽乃！ どうしたの！？」

（やめて！ 食べないで！ 食べちゃダメ！ 今度はどうなるかわかんない……！ 間に合って！）

陽乃は必死に走った。死ぬかと思ったが、いま頑張らなければ夏樹が死んでしまうかもしれないと本気で思った。

もうすぐ口に入ってしまう。

あと2メートルで夏樹の手に届く。

陽乃の視界がスローモーションのように動き出した。音は聞こえなくなる。明日香が驚いた顔をして、それに気づいた夏樹がそれ以上に驚いた顔をしている。姉ちゃん、どうしたの？とでも言いたそうな顔。でも、答えている暇はない。

バシッ
！

陽乃は思い切り、夏樹の右手を叩いてそれを弾き飛ばした。

夏樹の持っていたチョコバナナが、地面に叩きつけられた。

「陽乃！ どうしたの！？」

思わず未華乃が陽乃を押さえ込んだ。

「なにすんだよー！ ヒドいよ、姉ちゃん！？ 何の嫌がらせ！？」

陽乃は半泣きになりながら思い切りまくし立てた。

「それはこっちのセリフよ！ どういうつもり！？ また死にたい

！？」

「え………？」

全員の表情が固まった。

「な、何言ってるんの、姉ちゃん」

「アンタは！ お父さんとお母さんから何も聞いてないの！？」

「き、聞いてないよ。なんなのさ、さつきから」

「きつとお母さんのことだから、アンタがかわいそうだからって思
つて言っていないんだ………」

陽乃はガクンと膝を突いて涙をこぼし始めた。

「な、夏樹くんのお姉さん。とりあえず、座りませんか？」

明日香が気を使って自分の座っていた場所を空けてくれた。優しい子だな、と思った。

「ありがとう………」

陽乃はそこでようやく、夏樹のことについて話し始めた。

「アンタ、春休みの終わりに倒れたの、覚えてるでしょ？」

「うん、うん……」

それを聞いて、未咲と未華乃、明日香の3人はかなり驚いた顔をした。それでも陽乃は続ける。

「あれ、原因が……チョコレートなの」

「え？」

「アンタの好きなチョコレートが原因で……倒れたの」

一気に静まり返った。誰も喋らない。祭りの広場から雑踏や太鼓の音だけが響く。

「チョコレートアレルギーっていうんだって」

「そ、そんなのあるの？」

未華乃が聞き返した。

「お医者さんが言ってた。間違いないよ」

また静かになる。夏樹が今度は口を開いた。

「……ホント？ それ」

陽乃は小さくうなずいた。

「俺、二度とチョコレート、食べらんないの？」

またうなずく。

「そんなあ……。バレンタインデー、楽しくなくなるなあ」

思わぬ夏樹のマヌケな返答に、全員が転びそうになった。

「ア、アンタ、それでいいの？」

「うん。だって、チョコレート食べなきゃそれでオールオッケーっしょ？」

「た、確かにそうだけど……例えばよ!？」

陽乃はグイッと明日香の手を引いた。

「岡本さんが夏樹にバレンタインデーで本命チョコをくれても、アンタは食べらんないの! いいの!？ そんなので？」

「いいじゃん」

また転びそうになった。朝倉夏樹という弟はとことん天然系だ。「だって、本命チョコもらえたってことは俺のこと、好きなんですよ？ それだけでおなかいっぱい」

夏樹はニコツと笑顔で陽乃の質問に答えた。すると途端に目の前にいた女性陣全員の顔が赤くなった。

「ど、どうしたの？」

未咲と未華乃はうちわを取り出して扇ぎだした。

「いや……それならいいんじゃない？」

陽乃も同じようにして扇ぎ始める。それからもう一度念を押した。

「とにかく、チョコレートはそういうわけで食べられないの。これから。わかった？」

「チョコボールは？」

「だめ」

「ポツキー」

「だめ」

「チョコケーキ」

「だめ」

「明治チョコレート」

「論外」

「ちえつ。全部ダメじゃん」

「死にたければ食べなさいよ」

陽乃は不機嫌そうに呟いた。

「死ぬとか簡単に言うなよ、姉ちゃん」

夏樹は少し機嫌悪そうに言い返した。

「ああ……ごめん。悪かった」

それから沈黙が続いて、未華乃が切り出した。

「じゃあ、あたしたち、行こうよ」

陽乃はなんとなく、夏樹と明日香の雰囲気を読み取ってすぐに未咲たちと歩き出した。

「じゃあ、気をつけて帰るのよ、夏樹」

「わかってる。姉ちゃんもね」

チヨイチヨイツと軽く手を振った。それから明日香のほうを振り向く。

「ゴメンな、変な姉ちゃんで」

「ううん。すっごい優しいお姉さんだよ」

クスツと明日香が笑ったので、夏樹もつられて笑った。

「これ……食べていい？」

明日香は手に持っていたチヨコバナナを口にくわえるフリをした。

「うん。俺は食べらんないけど、食べて」

明日香はうなずくと、チヨコバナナをおいしそうに頬張った。

「なっちゃん」

「ん？」

「はい、これ」

チヨコバナナの、チヨコレートのかかっているバナナを渡された。

「あげる」

「いいの？」

「中途半端だけど、食べて。チヨコの香り、なんとなくするから」

「ありがと……」

もらったバナナを手にしてから、これって間接キスだよな、とくだらないことを考えてしまうと赤くなった。

「おいし……」

二人はしばらく、屋台の隣に設けられた座席から動かなかった。

陽乃に弾き飛ばされたチヨコバナナに、ア리가群がっていた。

第15話 屋台の席（後書き）

思わぬ形で夏樹のアレルギーを伝えてしまった陽乃。夏樹は至って冷静に受け入れたけれども、実際のところはどうなのか……。わからぬまま、夏休みはどんどん進んでいくのでした。

第16話 俺の特別席

「食べ終わっちゃったね」

明日香は食べ終わったチョコバナナの棒を寂しそうに見つめている。夏樹はというと、さつきから間接キスのことばかり考えていてちっとも話に集中できない。

「ねえ、これからどうする？」
「えっ？」

夏樹は明日香に覗き込まれて初めて自分が話を聞いていなかったことに気づいた。

「もう。さつきからなっちゃん、ずっと話聞いてくれてないんだもん」

「じ、ごめん……」

「別にいいけど。もしかして、チョコレート食べられなくなったの、シヨックだった？」

「それはあんまり関係ないかな」

「そう。なら、いいんだけどね」

また沈黙。

せつかくのお祭りなのに、ギクシャクする理由が夏樹にはよくわからなかった。

（ひよっとして……楽しくないとか）

夏樹はそう思うと何か行動しないといけないのではないかと考えてしまった。今度はソワソワ落ち着かなくなってくる。

一方の明日香はただポーツと前を見つめているだけ。会話もなく、ただただ時間が過ぎていく。

（よく考えたら……バナナもらったのにお返ししないとまずいよな）
ふと夏樹はそう考えた。明日香へお返しをするには何がいいか。

食べ物はどういいたろう。夕食は多分、明日香のことだから食べている。だからおやつみたいなのがチョコバナナを買ったのだらうし、

太つたら嫌だろう。なのに食べ物をおごるのは嫌がらせみたいで、夏樹も嫌だった。

スーパーボールすくいや金魚すくい。小さい子どもたちでいっぱいだからなかなか男女二人きりだとやりにくいものがあった。それになにか、恥ずかしい気もしていた。

射的や輪投げもあつたけど、夏樹は超がつくぐらいの下手くそだった。明日香の前だとかっこ悪すぎてできやしない。

ふと夏樹がどうしようかと空を見上げると、綺麗な夜空が見えた。「これだ……」

「え？ 何？」

「岡本、高い所は平気？」

「うん。大丈夫だけど」

「さっきのチョコバナナのお返し、させて！」

「え？ お返し？」

「ついて来てくれる？」

夏樹はそつと明日香の前に手を差し伸べた。

「……わかった」

明日香がその手を握り返した。夏樹の手は、少し男の子らしい大きな手をしていた。

夏樹がギュツとその手を握り締め、ゆっくりと雑踏の中、明日香をしつかりと引いてくれた。

「着いた」

そこは神社から少し離れた森の中にある火の見櫓ひのみぐらだった。

「なに？ これ」

「おばあちゃんが言ってたんだけど、昔はこの神社にあるこの火の見櫓ひのみぐらっていうヤツで火事が起こつたら場所を調べたらいいんだ。今は使われてないけどね」

夏樹はガサガサと背の低い木や草を掻き分けて中へ入っていく。

「大丈夫なの？」

明日香は心配そうに後を追いながら聞いた。

「何が？」

「勝手に入って」

「心配いらぬよ。俺、神主さんと知り合いだし、いつも入ってる
ところも見られてる。暗黙の了解ってところかな」

「難しい言葉知ってるね」

明日香がクスクスと笑った。思わず赤くなる。

「バカにすんなよ」

恥ずかしさを押し隠すようにしてそう言うのがやっとだった。

夏樹はグイツと明日香の手を引いて火の見櫓の前に立った。さっきまで聞こえていた雑踏や祭り太鼓の音が遠くへ行ってしまった。

ようやく深い草を掻き分けて到着すると、もう明かりも届かない
くらいの場所まで来ていた。

「入るよ」

すると明日香が少し、ためらっているのがわかった。無理もない。
夏で、夜で、火の見櫓の中は真っ暗。しかも、古びている。いかに
も出そうだ。

「大丈夫だよ。何も出ないって」

夏樹が笑いながら明日香の手を引いた。

「誰もそんなこと言ってないじゃない」

「でも、手が言ってる」

「は？」

「見ろよ」

明日香の手をよく見れば、ブルブル震えている。

「……。」

「バレバレだよ。大丈夫だって。俺がいるし」

明日香のことだから、また何か反抗的な態度をとったりしてきそ
うだと夏樹は思いながらもそんな照れくさくなるセリフを言っ
てしまった。しかし、明日香は小さくうなずいてこう続けた。

「わかってる」

「え……。」

ザワザワとわざとらしく、周りの木が風で音を立てた。どこかの家にぶら下がっているらしい風鈴の音が聞こえてきた。

「なっちゃんがいれば、大丈夫って思ってる」

明日香はニコツと笑ってそう言った。

「……なんか照れる」

夏樹は素直にそう言った。

「行こう」

明日香が手を引いてくれた。夏樹は小さくうなずき、もう一度明日香の前に立って櫓の中に入っていった。

「足元気をつけて」

「うん」

暗い中、夏樹と明日香の足音だけが聞こえる。靴の音と、草履の音。風が通る少し不気味な音が聞こえる。夏樹も少し怖かったけど、明日香がいる手前だからそういう雰囲気を出さないように頑張った。

「あ……明るくなってきたね」

上へ上がると不思議と明るくなってきた。櫓には電気も何もなかったはずだ。夏樹は不審に思いながらも階段を上がり続ける。

「もうすぐだよ」

木製の扉を開けると、ギィイツと古めかしい音がした。ブワツと風が吹き抜けて少し怯んだ。明日香の浴衣の裾が舞い上がって夏樹は声を上げてしまった。

「うおっ！」

「ヤダツ！ 見ないでよ！」

ドン！と明日香は思い切り夏樹を突き飛ばした。

「うわわわっ！？」

階段側によろけた夏樹はもう少しで落ちそうになった。それを慌てて明日香が右手を引いてくれたので何とか落ちずに済んだ。

「……!？」

「!?!」

戻った拍子に夏樹が明日香を抱き締める形になってしまった。

「……。」

夏樹の目の前に、少し背の低い明日香の顔がある。やわらかそうな唇。思わず衝動に駆られそうになったが、壊してはいけない気もして夏樹はその衝動を何とか押さえ込んだ。

「ゴ、ゴメン……」

夏樹はそつと明日香の体を離した。明日香は少し乱れた浴衣をそつと直し「いいの。気にしないでよ。事故だし」とサラッと流してしまった。

「それより、お返して何？」

明日香はさつきまでの空気を気にしないかのように夏樹のお返しを求めてきた。

「そこを出て、目えつぶって待ってて」

「目？ つぶるの？」

「うん。つぶらないと、意味がないから」

「わかった」

明日香はそつと目を閉じて、それから一抹の不安を感じた。

(さつきの雰囲気って……それこそキスされそうな雰囲気だったな。でもまさかなつちゃん、そんなことしないよね……。うん、大丈夫。でも、なんでこんな暗いところに連れてきたんだろ。やっぱりキス……まさかそれ以上!? いや、でもまだ私たち小学生だし……でも……ああ〜わかんない!)

そんな不毛な考えをしているうちに、夏樹の手が明日香の右手を握り締めた。そしてゆっくりと手を引く。そのまま何十秒か歩かせられ、ようやく立ち止まった。

「座って」

夏樹の声がようやく聞こえて少し安心したが、まだドキドキと心臓は鳴りっぱなしだ。そつとコンクリートの床に座る。裾を少し気にしながらだったので非常にゆっくりとだったが、その間にも夏樹は特に何もしてこなかった。

「ゴメン。ちよつと草履脱いでくれる？」

「え？ 何で」

「危ないから」

明日香にしてみれば今のこの状況のほうが彼女にとっては危ない気がしたが、とりあえずそれには触れず夏樹の言つとおりにしておいた。

「そのまま、足を前に伸ばして」

明日香はますます嫌な予感がする。急に足元に何もなくなったような感覚すらしてきていた。

「よいしょつと」

夏樹の声。すぐ隣に座つたようだった。

「いいよ。目を開けて」

そつと明日香は目を開けた。

「うわぁ……」

明日香の目の前に広がるのは、一面の夜景だった。

「いま俺たちが座っているのは、東京の方向。あつちが新宿副都心あれが官庁街で、こつちが東京タワー。あそこに見えるのは……建設中だけど、六本木ヒルズだよ」

夏樹はすぐに立って南の方向を指した。

「あれが富樫小学校。それから、俺の姉ちゃんが通つてる葉島中学校がすぐ近くにある。俺の家はつくし野川沿いだから、富樫小の少し西側になるかな」

夏樹は嬉しそうに説明を続けた。明日香は輝いて見える夏樹の表情全てが初めてみるものばかりで、景色よりも彼の表情を見るのに

夢中になっていた。

「あ……ゴメン。俺ばっか喋って」

夏樹は慌てて明日香の横に戻ってチヨコンと座った。

「いいよ。それよりなっちゃん、よくどこに何があるか知ってるんだね」

「うん。ここ、俺の特別席だから」

「特別席？ なっちゃんの？」

「うん。2年生のときだけど、たまたま友達とこの神社の探検してたらここに迷い込んで。前から建ってた背の高いこの櫓が気になつてて、ついつい探検気分で入り込んでしまった。そしたらしこたま神主さんに怒られたけど……上へ景色を見に連れて行ってもらったんだ。それ以来、俺の特別席ってとこかな」

夏樹が自慢げにへへッと笑った。

「じゃあ、私も知っちゃったから、今日から私の特別席にもしてほしいな」なんてね」

明日香は冗談半分で言ったのだが、夏樹はすぐに「うん。いいよ」と返してきた。

「え？」

明日香は啞然としてしまう。

「だって、俺そのつもりで岡本をここへ連れて来たんだから」

「ほ、本当……？」

「うん。俺だけ独り占めにするのはもつたいない場所だしね」

「……ありがとう」

しばらく会話が途切れ、風の音とそれに乗ってやってくる街中の音や祭り太鼓の音が聞こえてきた。電車の走る音もする。

「もう、俺の特別席じゃないな」

急に夏樹が口を開いた。

「え？ じゃあ誰の特別席？」

明日香が不思議そうに聞くと、夏樹はニコッと笑って明日香の手を握り、こう続けた。

「今日からここは、俺と岡本の特別席　二人きりの座席だよ」

「二人きりの座席……」

「うん。嬉しいことがあったり、悲しいことがあったり。いろいろあるけど、そんなとき、俺も岡本もここへ来て、この景色を見て、お互いのことを思い出して、また頑張れるといいなって思うからさ。だから、二人きりの座席にするんだ」

明日香は少し夏樹の手を握る力を強くした。

「わかった。ありがとう。なっちゃん」

「いーえ。どういたしまして」

夏樹はニツと無邪気な笑顔を明日香に向けた。

「そろそろ、降りて帰ろうか」

夏樹がそう声をかけると、明日香は少し俯きながらも小さくうなずいた。

相変わらず暗い階段を慎重に二人で降りて行く。3分ほどかけてようやく森の中へ出た。すると、そこで待っていたのは優翔とちひろだった。

「ちい……優翔……」

しかし、二人とも顔が暗いように見える。というより、怖いというほうが正しいだろう。

「どこ行ってたの？」

ちひろがきつく明日香を睨んだ。

「こ、この火の見櫓の上」

「そんな上で二人きりで何してたの？」

「景色を見てただけ」

ちひろは急に明日香の近くへより、思い切り彼女を突き飛ばした。明日香は急なことで浴衣だったことが重なってそのまま思い切り尻餅をついた。淡いピンク色の浴衣に土が付いて汚れてしまった。

「何すんだよ！」

夏樹が今度は思い切りちひろを突き飛ばした。同じようにちひろも転び、土が付いてしまった。

「何やってんだよ！ お前、ちひろの気持ち考えてやれよ！」

優翔が思い切り夏樹の胸倉を掴んだ。

「知ってるよ！ ちいが俺のことを好きなくらい！ でも、俺の気持ちだって考えてくれよ！ 俺だって想う人くらいいるんだ！」

「お前……！ じゃあなんだよ、その人にその気持ちを伝える勇氣はあんのかよ!？」

「そ、それは……」

「そんな勇氣もないへタレなヤツにそんなこと言う資格ねえよ！」

夏樹の目が怒りに満ちていつもの優しい眼差しでなくなる瞬間を、初めて三人は目にした。

「んじゃーお前は好きなヤツいるのかよ!? そいつにすぐ、気持ちを伝えられるのかよ!」

「……。」

優翔は黙ったままだ。夏樹は負けじと続けた。

「どうなんだよ!」

すると優翔は胸倉を掴んでいた手を離し、それを今度はそのまま夏樹の左斜め前にいる人物へと差し向け、そのまま顔を覆いかぶさるような形で ちひろの顔へ、正確には唇を重ね合わせた。

夏樹も明日香も、何も音がしなくなる感覚がした。

ドン!と強い音がしてちひろが優翔を突き飛ばした。

「俺は、ちひろが、好きだ」

一言ずつ、ハッキリと優翔は言った。

「ウン……」

ちひろは小さく呟いた。夏樹も明日香も呆然としている。

「ウンだよ! だって、前に私が好きって言ったとき、ゴメンって……言っただじゃない」

ちひろは泣きながら答えた。

「恥ずかしかったから……ウソついた。ゴメン、ちい」

「私は信じない……だって、優翔のこと忘れるの……大変だったのに！」

そのままちひろは走り去り、すぐに人混みに埋もれてその姿が見えなくなった。

「伝える勇気もないヤツに、ちいを任せたりできないし」

そう言い残し、すぐに優翔も人混みの中へ姿を消した。

しばらく無言のまま夏樹と明日香は立ち尽くした。

「帰ろうか」

5分ほどしてようやく、夏樹が呟いた。

「うん……」

明日香も小さくうなずき、二人は人混みの中とは逆の方向へ歩いて神社の裏口からそっと家へと向かった。

第16話 俺の特別席（後書き）

突然訪れた夏樹、優翔、ちひろの友情の危機。せつかくの夏祭りは後味の悪い形で終え……。これからの夏休みはどうなるのか。

第17話 即席

チリンチリン……と風鈴が風流な音を立てる。といっても、その風鈴の音色は夏樹の寝ている部屋から聞こえているのではない。隣にいる姉・陽乃の寝ている部屋から聞こえている。昨日の晩のお祭り（といっても、5時間ほどしか経っていない）で友達とおそろいのを買ったと嬉しそうに言っていた。

あのケンカの後、夏樹はとりあえず土で汚れた明日香を知恵子の家へ連れて帰った。知恵子はかなり驚いて「いい浴衣なのに転んだね。人が多かったのかい？」と聞いたので夏樹は「多すぎて押されて転んじゃったんだ」と説明しておいた。ケンカしたただなんてとても言えなかった。

それから明日香が自宅へ電話し、彼女がお風呂に入っている間におばさんが服を持って迎えに来た。

「あら、あなたが朝倉くん？」

「え……はい」

突然話しかけられたので夏樹も戸惑ったが、明日香の母親であるおばさんが挨拶をしてくれた。

「あたし、明日香の母で岡本玲子おかもと れいこと申します。おばあさんにもお世話になっちゃって……何かお礼しないといけないね」

「あ……そんな。俺のせいで転んじゃったようなもんですし」

「またまた〜！ 君は紳士だね、朝倉くん」

夏樹は玲子の手でクシャクシャと頭を撫でられた。知恵子の撫で方とはまったく違う撫で方だったが、嫌ではなかった。

「あ、お母さん！」

「ほらー、明日香！ アンタはまた転んで。どれだけ転んだらおしとやかになるんだろうっねえ」

玲子は呆れた様子で明日香の頭をパンパンと叩いた。

「痛いよ〜、お母さん」

「それより、朝倉くんにお母さん、新幹線で会ったときにご挨拶できてなかったから、しておいたよ?」

「さっずがお母さん!」

明日香がニッコリ笑うと玲子もニッコリ笑った。やっぱり親子だ。笑った顔がそっくりだった。けれども、夏樹がドキツとしたのは当然ながら明日香の笑顔だった。

それからドキドキが収まらず、夏樹は寝付けずに今に至っていた。午前2時。いつもなら起きているはずのない時間だっただけに、余計に焦ってイライラする。そのうち蚊が入り込んできたらしく、耳元でプウウン、プウウンと言われるのでますます寝付けないようになっていた。

「お茶飲んでこよ……」

夏樹が寝ている部屋のドアを開けると、ギイイイと音がした。知恵子の家はかなり古いので、1回1回の動作でも大きな音が立ってしまう。

「夏樹?」

陽乃が起きてきた。

「姉ちゃん」

「どうしたの?」

心配そうに夏樹を見つめる。きっと陽乃の目には“あの時”のことがよぎっているのだろうと夏樹は感じていた。

「眠れなくて。お茶飲みに行くだけだよ。お菓子は食べない」

「そう……。それならいいけど」

「まだ2時だし、姉ちゃん寝てなよ」

「うん。それじゃ、おやすみ」

「おやすみ」

陽乃がドアを閉めたのを確認してから夏樹は下へ降りた。真っ暗の居間に街灯の青い灯あかりが差し込んでいるので、電気を点けるほどこでもない。

「汗かいちゃった……」

夏樹は汗を拭おうと洗面所へ向かう。足元に何か、ちょうどタオルらしいものが当たったのでそれを手にして額の汗や胸のあたりの汗を拭った。

「タオルにしてはなんか穴があつて変なの」

夏樹は凝視するが、それがタオルであるようにしか見えない。とにかく電気を点けて確認してみることにした。

「!?!」

電気を点けると目に映ったのは、花柄のパンツ。そして、内側に「岡本明日香」の名前。

「うひゃあああああああ〜!!」

「ちよ、何よ今の声!?!」

陽乃が驚いてバタバタと下へ降りてきた。知恵子も同じように1階の和室から驚いて出てきた。

「夏樹!?!」

陽乃の視線の先には洗面所で顔を真っ赤にしてひっくり返っている夏樹がいた。

「やだ! おばあちゃん! 夏樹ったら女の子のパンツ持ってひっくり返ってるよ」

「ええ!?! やだねえ、破廉恥はれんちな子だよ」

知恵子はパンツを夏樹の手から取って明日香の名前を確認してから、彼女の忘れ物であることに気づいた。

「ん……」

夏樹が気づくと、見たことのない場所に寝かされていた。

「あ、気づいた?」

陽乃が夏樹の額に当てていたタオルを取り除いた。

「姉ちゃん」

「アンタ、洗面所でひっくり返ってたよ」

「……。」

間違いない、夏樹の手には明日香のパンツの感触が残っていたのでまた赤くなってしまう。しかし、陽乃に説明できるはずもない。

「おばあちゃんが暑さでひっくり返ってるアンタを見つけたんだよ。もう、スゴい音がしたんだから」

「え？」

声を上げた覚えはあっても、物音を立てた覚えはなかっただけに夏樹は違和感が残った。

「まったく、心配かけすぎ」

陽乃は夏樹にデコピンを喰らわせた。

「姉ちゃん」

「なに？」

「それより、ここどこ？」

「おばあちゃん家のロフトを上がって出た屋根の上」

「ロフト？ おばあちゃん家にそんなシャレたものあったの？」

「おじいちゃんが作ったんだって。定年後……仕事辞めた後に業者に頼んで」

夏樹はそんなことはまったく知らなかった。サッカーに忙しく、知恵子たちを訪ねる機会も減っていたからだろうか。

「なんていうのかな、即席の展望台？とかっておじいちゃんは言うてたよ」

「即席の？」

「うん」

陽乃はゴロンと瓦屋根に寝転んだ。真っ暗な空が陽乃の視界に映る。

「ロフトを作りたいっていうよりは、屋上への出入り口が欲しかったんだって。それでこんなロフト作って、定年後はここで楽しむんだって言うってたんだってさ」

「ふうん……」

知恵子は夫である公俊を2年前に肺ガンで亡くしていた。それから、この家で一人で暮らしている。時々知恵子も屋上へ上がって空を見ていたそうだが、年を取ってきて危なくなつたために由利や祥夫から禁止されてしまつて以来、陽乃と夏樹を上がらせるようになっていた。

「夏樹さあ」

「なに？」

「神社の火の見櫓に明日香ちゃんと二人きりで上がつてたでしょ？」

「……なんで知ってるの」

「未華乃が見たつて言つてたわ。スゴくお似合いで悔しいくらいだつたつて」

「……そう」

「やっぱさ」

陽乃は夏樹と目を合わさずに続けた。

「夏樹、明日香ちゃんのこと好きなんでしょ？」

「……。」

夏樹はいきなり核心を突かれて黙り込んでしまった。

「言つちやいなよ。好きだつて」

「言つてどうするのさ」

「結果はわからないよね。フラれるかもしれないし、逆に明日香ちゃんだつて夏樹のことが好きかもしれない」

「……。」

「言わないと今のままだけだね。でも、明日香ちゃんと一緒にいれるつて保障もないし」

夏樹にはホシヨウウという言葉の意味がよくわからなかったが、確かにずっと一緒にいれるわけではないのは彼も十分理解していた。

「おじいちゃんだつて……そうだったじゃん？」

陽乃は公俊のことを思い出した。彼女は公俊が本当に口うるさかつたので大嫌いだと両親にも公言していた。しかし、公俊は陽乃以外の家族が揃つて祖父母宅を訪れるのが本当に寂しいのだと夏樹に

よく漏らしていた。

間もなくして、公俊が倒れた。突然のことだった。病院ではずいぶん前から指摘されていたそうだが、適切な治療もせずガンは末期症状にまで進行し、結局亡くなるまで時間はかからなかった。

それから陽乃が心変わりしたかのように毎日、公俊のいる病院へ通いだしたのだ。夏樹もよく覚えている。学校をサボってまで病院へ行っていったのだ。公俊が亡くなるまでの2ヶ月間。小学校側から何度も連絡を受けた両親は彼女を探すことはしても、叱りはしなかった。もちろん、初めはキツく叱ったが、小学生だったにも関わらず陽乃はこう言ったのだという。

今までの罪滅ぼしをするの。

あたし、おじいちゃんにヒドいことをした。

おじいちゃんはあたしを好きでいてくれたのに。

あたし、その気持ち無視した。

だから、あたしが今度はおじいちゃんに優しくする番。

そして、それから毎日陽乃は公俊の元に通った。学校へはきちんと通うと両親と約束して、放課後から面会可能な午後7時まで。日に日に痩せていく公俊を目にしても、逃げずに陽乃は毎日彼の元へ行き、学校であったこと、家であったこと、いろんなことを公俊に話した。

亡くなった日。

陽乃はずっと泣きっぱなしで目が真っ赤だった。夏樹は当時9歳。人の死という感覚がまだよくわからなかった。でも、公俊がいなくなったことくらいはわかっていて。だから、涙は出たが陽乃があん

なに泣いていた理由はよくわからなかった。

「あたしが気づいた頃にはもう手遅れ。どんなに気持ち伝えても…… おじいちゃんに伝わったかなあ、あのときの気持ち。説明しろって言われても無理だけど……でも、とりあえず、おじいちゃんが本当は好きだった。反抗期だったのかな。かわいくないな、あたし」
陽乃の声が震えだした。夏樹はあえて陽乃の顔を見ず、空を見上げたままだった。

「もう5年生も半分終わるよ。6年生に、明日香ちゃんと同じクラスになれるっていう保障はないよ？」

夏樹はなんとなく、ホシヨウの意味がわかった気がした。

「……ま、後は夏樹次第だけだね」

陽乃はスツと立ち上がってロフトのほうへ歩き出した。

「あたし、部屋に戻るね。夏樹も風邪引かないようにホドホドにして戻りなよ？」

「わかった」

「じゃ……おやすみ」

陽乃は静かにロフトへ降りていった。

「……。」

夏樹もしばらく空を見上げた後、すぐにロフトへ降りていった。

「後悔はしないよ。姉ちゃん」

夏樹はそう呟き、屋上への戸を閉めた。

第17話 即席（後書き）

陽乃の言葉をきっかけに何かを決意した夏樹。夏休みが過ぎ行く中、夏樹の周りが劇的に動き始める……。。

第18話 優先席

夏樹は図書館へ向かう市バスに乗っていた。まだ自由研究が終わっていないので、ちひろと明日香の3人で仕上げなければいけないからだ。夏祭り以来、彼らは一度も会っていない。今日は8月29日。今日で自由研究にもメドがつきそうだ。

市バスはかなり混みあっていた。乗っているのは小学生、中学生、高校生が中心だ。みんな宿題に追われているのだらうと夏樹は想像していた。

すると、大柄な高校生の中におばあさんが一人、乗っていることに夏樹は気づいた。どこか空いている席があれば座ればいいのだが、優先席には化粧が濃い女子高生が居座っていて、おばあさんは声が掛け辛そうだった。無理もないだろう。今時の高校生や中学生は声が掛けにくいと知恵子も言っていたことがある。

七海市役所・大海支所停留所おおみを過ぎたあたりでまた中学生が乗ってきた。

「ったたく、せつかくオレが神奈川に遊びに来たのに、なんでお前は全然宿題終わってへんねん」

聞きなれないイントネーションだった。

「しょうがないだろ。ブックサ言うなよカケル」

もう一人、これは同じ年だろうか、男の子が後で乗ってきた。

バスはすぐに発車。ここからしばらく行くと、図書館に向かって坂道が続く。七海市の中でもここだけ、標高があるのだ。

「なあ、良輔りょうすけ」

さっきの関西弁だった。夏樹の真後ろで話しているようだ。

「ん？」

良輔が答える。翔かけるが続けた。

「おばあちゃん、立ちっぱなしやんけ」

「ホントだ」

「あの化粧濃いのが、変わってやったらええのに」

「そうは言っても……アレは変わりそうにないだろ」

「……まあな」

翔は残念そうに呟いた。

そのときだった。バスが急カーブを曲がったのは。

「あつ……」

おばあさんがバランスを崩したのを夏樹は見ってしまった。そのときには夏樹は翔に「これ持ってください！」と右肩に掛けていたカバンを預けていた。

サッカーで鍛えた脚で素早く人混みの間をくぐって、危うく倒れそうになったおばあさんをギリギリの所で支えた。

「大丈夫ですか？」

「ああ……ありがとうございます。助かったよ」

夏樹はおばあさんを支え、安定したことを確認すると優先席に座っている女子高生のほうへ近寄った。

「あの」

「はあ？」

いきなり睨まれたので少し怯ひるんでしまったが、夏樹は続けた。

「おばあちゃんに席、譲ってあげてください」

「はああ？　なんでアタシが？」

女子高生はあからさまに嫌な声を上げた。

「だってここ、優先席です」

「そんなの知らないよ！　アタシが先に座ってたんだから。座りたきゃこんな混んでるバス、乗らなきゃいいのにねえ！」

するとそのケバい女子高生の友達らしいエクステの女子高生が「マジそれだよー！　笑えねえっつーのー！」と笑い出した。

「ガキが年上の女性にちょっかいかけてくんじゃねーよ。ホラ、あつち行きな」

「替わったら、それを見届けたら行きます」

「ちょーっとオイタが過ぎるんじゃない？」

夏樹の顎を女子高生がクイツと人差し指で上げた。

「替われって言ってるの！」

夏樹が目つきを変えて女子高生を睨みつけた。

「な、生意気な目してんじゃねえよ！」

エクステが思い切り夏樹を突き飛ばした。

「ウワツ！」

夏樹はその拍子に転んで肘掛で頭を打った。

「痛って……」

「アハハハハ！ えみりい、やり過ぎだつて！」

エクステが笑う。

「ゴメンゴメン！ アタシって怪力だからあ」

そう笑うケバい女子高生の腕を、さっきのカケルという中学生が掴んでいた。

「あん？」

「ケバい化粧して臭いっつの、オバハン」

「オバツ……！？」

周囲がクスクス笑う。ケバいほうが顔を真っ赤にした。

女子高生が怯んだ隙に、翔がおばあさんを優先席に座らせた。

「いいのかい？」

「どうぞどうぞ。ほらばあちゃん、あの子にも礼言つとかんと」

翔が夏樹の背中を叩いておばあちゃんの前へ立たせた。

「ありがとうねえ、僕」

「いえ……」

夏樹は少し照れくさくなったが、もう一度しっかりおばあさんの顔を見て笑った。

バス停を降りてすぐだった。

「なーっちゃん！」

後ろからやって来たのは、明日香だった。

「ひよっとして……」

「うん！ 一緒のバスだったんだよ」

「……。」

「どうしたの？」

「いや……恥ずかしいじゃん」

「なんで？」

「俺なんかほとんど役に立たなかったじゃん。あの、カケルってお兄さんが助けてくれたし」

「そんなことないよ！」

夏樹は思わず明日香のほうを見つめてしまった。明日香はニッコリ笑って続ける。

「なっちゃんが勇氣出して行かなかったら、きっと誰も何もしなかったよ」

「……そうかな」

「うん！ なっちゃん、カッコ良かった！」

「……サンキュ」

夏樹は真っ赤になってしまった。思いのほか、嬉しい。

「行こうか！」

夏樹は明日香の手を引いて図書館へ入っていった。

「おい、見ろよ恭輔。あれ……」

「何だよ……あつ！」

その瞬間を、クラスメイトの恭輔と半田敬吾はんただけいごに見られていたのを、夏樹と明日香は知らない。

沈黙が続く。

明日香、ちひろ、夏樹。あの時のメンバーが集まって自由研究だなんて、ありえないと夏樹は心の中で思っていた。

「私、お茶買ってくる」

ちひろは突然席を立って自動販売機のほうへ行ってしまった。

「……やりづらいね」

明日香が苦笑いする。

「まあな。でも、今日で仕上げられたら終わりだし」

「そうだね。頑張ろうか」

そう言って二人は続きを始める。しばらくして、明日香の様子が少し変なことに夏樹は気づいた。

「岡本？」

「……。」

「岡本」

「あ……ゴメン。ちょっと寝不足なのかな。頭痛くて……」

「頭痛かあ。無理せずに今日休んでも良かったのに」

明日香は少し辛そうな顔をしたが、すぐに笑顔でこう返した。

「ちひろちゃんにも……迷惑かけたくないしね」

「……つくづくいいヤツだな、岡本って」

「そう思うでしょ？」

「自分で言うなよ」

二人はクスクスと笑った。その様子をちひろが複雑な感覚で見つめていた時だった。

「わーだちゃん」

「……あっ」

恭輔と敬吾が取り囲んでいた。

「ちひろちゃん、遅いね」

明日香はキョロキョロと辺りを見渡す。

「飲み物を決めるのに迷ってるにしても長いしなあ」

夏樹も同じように辺りを見渡すが、ちひろの姿は見当たらない。

「まさか迷った？」

明日香が心配そうに呟いた。

「まさか。ちひろ、ここの図書館には何十回って来てるんだぜ」

「それにしても……あっ！」

明日香が見た方向を見ると、元気がない様子でちひろが帰ってきた。

「ちい！ 遅かったな」

夏樹がホツとした様子でちひろに声をかけるが、ちひろは「うん……」とだけうなずいてすぐに作業へ戻った。

6時過ぎにようやく完成した自由研究。模造紙いっぱいにスコールのことについて調べて、書いてある。

「やったあ！」

思わず夏樹は飛び跳ねて喜んだ。明日香とちひろも嬉しそうにその様子を見つめる。

「なあ、ちい、岡本！ 俺が持って帰っていい？」

「いいの？」

ちひろが聞き返す。

「うん！ 持って帰りたい！」

「私はいいよ」

明日香が答えた。ちひろも「朝倉くんがよければ」と返した。

「やった！ ありがと！」

夏樹はバス停の前で嬉しそうに模造紙を抱えてバスを待っている。

「ゴメンね」

ちひろが突然、呟いた。

「え？」

「ゴメン」

「何が？」

「……。」

「……まあ、私も悪いこといろいろしたし。私も、ゴメンね」

ちひろは俯いたままだ。

「ゴメン」

もう一度言った。

「いいよ、いいよ！ 私、もう気にしてないから」

「ゴメ」

明日香はちひろの口を左手で塞いだ。

「もう言いつこナシ！」

ちひろは今にも泣きそうな顔で小さくうなずいた。

「岡本！ ちい！ バス来たぜ！」

夏樹が手招きをしながら大声で呼んだ。

「うん！ 今行く！ ちひろちゃん、行こう！」

「うん……行こう、明日香ちゃん」

「明日香ちゃんって呼んでくれたね！」

「えへへ……」

ちひろは恥ずかしそうに笑いながら、明日香と一緒にバス停へ向かって走り出した。

第18話 優先席（後書き）

明日香の中での夏樹の印象がまたひとつ、良くなることとなったこの出来事。同時に、彼らの知らないところで渦巻く波乱。もうすぐ迎える新学期、夏樹たちは……。

第19話 消えた席

新学期。夏樹はご機嫌で家を出て学校へ向かった。今日からまた学校だと思つと、楽しみで仕方がない。

体育も頑張りたいし、ちよつと最近わかるようになってきた算数も頑張りたい。体育大会もある。張り切つてリレーにでも出ようか。夏樹はそんなことを考えながら教室へ勢い良く入つた。

「おつはよー！」

しかし、その夏樹を見つめるクラスメイトの視線はかなり冷たいものがあつた。女子がヒソヒソと話す声も聞こえる。

「え……。何？ みんなどうし……」

夏樹は黒板を見て愕然とした。

『衝撃！ 朝倉夏希と岡本明日香はデキてた！ 図書館前のバス停でイチャつく二人 チュー』

「……なんだよ。なんだよこれえ！」

夏樹が悲鳴に近い声を上げてクラスメイトのほうを見た。

夏樹は冷静になつて黒板の字を見つめる。よく見れば、夏樹の「樹」の字が「希」になっている。こんな間違いをするのは一人しかいなかった。

「嘉村あ！」

夏樹は思い切り恭輔の胸倉を掴んだ。

「んだよ！ 俺がやつたつて証拠でもあつて？」

「お前、オレの字いつつ間違えるだろ！」

「……チツ」

恭輔は開き直った様子で舌打ちをした。

「何でだよ！ 早く消せ！」

「うるせーなあ。そんな必死になって。バス停でお前らが仲良くしてるの見たから書いてみただけじゃん」

「……！」

夏樹は掴んでいた手を放し、黒板消しを握って書かれた落書きを必死に消し始めた。

「それにしても、そんな必死になって……やっぱお前らデキてんじやねーの！？」

それに反応して男子が笑い出した。女子もクスクス笑っている。すると、夏樹の目の前に何かが飛んだ。

「へ？」

黒板消しだ。それがフワリと夏樹の頭上へ浮いて、あっという間に夏樹の足元へ落ちてきたかと思うと夏樹はそれを蹴り飛ばし、見事なコントロールで恭輔の腹部に黒板消しを直撃させた。

「うっひゃあ！」

恭輔の赤いTシャツが真っ白になってしまった。まるで日本の国旗の色が逆転したみたいな色になってしまった。

「消せ」

「何すんだよ！ シャツ汚れたじゃんか！」

恭輔は半泣きになっている。すると、周りから夏樹を非難する声が聞こえてきた。

「ヒドいよな。何も黒板消し投げつけなくても」

「だいたい、ちいちゃんのことフツといてよくも付き合えるね」

「デキてるのを否定するのも、岡本がかわいそうだよなあ」

夏樹は泣きなくなってきた。しかし、泣くわけにはいかない。

蹴り飛ばした黒板消しを拾い、夏樹は残った落書きを無言で消し続けた。

その日から、夏樹を露骨にクラスメイトは避け始めた。男子は給

食の時間以外はまるで夏樹がいないかのような扱いをする。体育の時間でも仕方なくペアを組んでいるが、口は利いてくれない。授業中も一応先生にバレないようにするために皆それなりに夏樹に接するが、先生がいないところでは無視を続けた。

あろうことが、ちひろまで夏樹を避けるようになったのだ。もうクラスの中で夏樹と普通に接してくれるのは明日香だけになった。しかし、夏樹と接すれば明日香もいつかとばっちりを喰らうのではないかという不安が夏樹の中で悶々としていた。

「朝倉くん……」

初日の5時間目でもうすっかり体力も精神力も消耗した夏樹はゆっくりと顔を上げた。

「なんか……皆の様子が変だけど、ケンカでもしたの？」

「ううん！ そんなんじゃないよ……」

ヒソヒソと女子がこちらを見て話をしているのを感じた夏樹は慌てて立ち上がった。

「ちょっと、どこ行くの？」

「ゴメン……トイレ行ってくるよ」

「あ……うん」

夏樹は明日香の返事を聞く前に走り出していた。

次の日、夏樹が登校してくると机一面に赤いチョークで落書きがされていた。相合傘の左側に朝倉夏樹、右に朝倉明日香と書かれていた。その隣には女たらし。小悪ま（魔が難しくて書けないらしい）なんてのも書いてあった。

夏樹は恭輔や敬吾が既に登校していたので、きっと彼らの仕業だろうと思ったが特に反応もせず、雑巾を持ってきてゴシゴシとそれを落として席に着こうとして、背筋が凍る感じがした。

椅子にまでビッシリ落書きがされていたのだ。

学校へ来るな

女たらしが伝染る！笑

「アスちゃんチューしてー！」

「……………」

夏樹はもう一度雑巾を取りにランドセルを置いて廊下へ出た。出ている間に何かが落ちた音がして、教室へ帰ると筆箱がひっくり返されて中身が全部飛び出してしまった。

翌日。図書室へ本を借りに行くとき夏樹のクラスが図書担当だった。

「あの……………これ、借ります」

夏樹がそつと本を差し出すと、二人の女子は目配せし始めた。

「ねえ、マリちゃんが判子押してよ」

「やあよ。メグが押して」

「やだ。なんか伝染りそうじゃん」

「ちよつと、聞こえるってば」

「聞こえるように言ってるんじゃない」

信じたくなかった。その子たち

なかつかまり 中塚麻里としんじょめぐみ 新庄萌は去年のバ

レンタインデーにチョコレート^①を夏樹にくれたのだ。もちろん、夏樹だってホワイトデーにお返しをした。

「……………ありがとう。もういいよ」

夏樹は表情を変えず、その本を元へ戻しに本棚へ行った。

教室へ帰ると、給食の時にはあったはずの夏樹の机がなくなっていた。

「あれ？」

明らかにおかしい空席。机も椅子もない。

「あれ？」

キョロキョロと周囲を見渡す。すると廊下から声が聞こえてきた。ちひろたちの声だ。

「やったー！ 大きなゴミだね、ちひろちゃん！」

「アッハハハ！ ホント、チヨ一邪魔だよね！」

夏樹が廊下へ出ると、放り出されて引き出しの中身がグチャグチャになった夏樹の机があった。

「……………」

夏樹は無言で机に近寄り、グチャグチャになった引き出しを片付け始めた。そこへ、明日香が戻ってきた。

「ど、どうしたの……………」

「なんでもないよ」

夏樹は努めて笑顔で答える。

「なんでもないハズないじゃん。こんなになつて……………」

明日香が片づけを手伝おうとして手を差し伸べた瞬間、夏樹がそれを思い切り払い除けた。

パシッ！と乾いた音がして、明日香の持っていた自由帳と筆箱が宙を舞い、廊下へ落ちた。

「……………」

「……………」

「ねえ、どうしたの？ 変だよ、絶対変！」

「うるせえな！」

夏樹の大声に明日香もちひろもビクツと体を震わせた。

「俺に関わるな」

明日香は呆然と夏樹を見つめていた。

「なんで……………」

「……………」

「ねえ！」

「俺、お前なんか嫌いだもん」

「へ？」

夏樹は少し間を空けて、ハッキリと言った。

「岡本なんか、嫌いだから」

ちひろ、恭輔、敬吾、図書室から帰ってきた麻里、萌。誰も
が呆然と立ち尽くしていた。

「……………」

明日香は表情ひとつ変えず教室へ入り、夏樹も表情ひとつ変えず机を元へ戻しに教室へ入った。

5時間目は算数。眠たくなるはずなのに、今日は全然だ。誰とも目を合わせず、夏樹はなんとなくポーツとしながら算数の授業を受けていた。美智子の声が聞こえるけど、何を言っていたか繰り返せ、と聞かれたらきつと答えられない。

明日香のほうを見た。席替えて、夏樹は窓際一番後ろの席。明日香は廊下側一番前の席。端と端になってしまい、目が合うこともない。合わせることも無理だ。しかし、夏樹は明日香の背中をジツと見ることはできた。

やっぱり髪が綺麗だな。麻里や萌、ちひろとは比べ物にならないぐらい、綺麗な艶つやのある髪をしている明日香は、夏樹にとって胸をドキドキさせるものだった。それに、他の女子クラスメイトと比べると、陽乃と一緒にぐらい胸元がふっくらしているのも夏樹をドキドキさせた。

その時だった。

グラツと明日香の体が傾いたように見えた。

(え?)

頭を抱える明日香。明らかに様子がおかしい。

「先生」

夏樹は思わず手を挙げてしまった。

「はい、なあと、朝倉くん」

美智子が振り向いた瞬間だった。ドサツと音がして、明日香が横様に倒れた。

「キヤーツ!?!」

隣の席にいた飯沼水穂いぬまみずほが悲鳴をあげた。

「岡本さん! どうしたの!? 岡本さん!」

夏樹は鉛筆も放り出して明日香の元へ駆け寄っていた。

「岡本! 岡本!」

「頭……痛い」

「大変……！ 朝倉くん、保健室へ連れて行くわよ！」

「え？ 俺も？」

「あなた、保健委員でしょ！ しっかり、ホラ、岡本さん支えて！」

「あ、はい！」

夏樹は明日香の体を支えて歩き出した。

「飯沼さん！ あなたも手伝って！」

「は、はい！」

「他の子供たちは自習をしてて！ いいわね！」

クラスが急にざわめく中、夏樹たちは急いでそこを出て保健室へ向かった。

「……熱はないわね」

保健の高田^{たかだ}先生が体温計を見て不思議そうな顔をした。

「岡本さん、最近夜は何時くらいに寝てる？」

「9時半には……」

「5年生にしては早いほうね。ってことは、寝不足ではないみたいね」

高田先生は夏樹のほうを見て困惑したが、仕方がないといった様子で聞いた。

「岡本さん、アレはもうなった？」

「え……言わないとダメですか？」

「なってるか、そうでないかだけ教えてくれればいいの」

「な……なりました」

カアツと明日香は顔を赤らめた。隣で水穂も少し赤くなっている。

「そう。いいの。それは普通だからね」

「アレってなんですか？」

夏樹が大声で聞いてきたので、高田先生はこう返した。

「男の子は知らなくていいの」

「そうそう」

水穂が隣でうなずく。

「女の子同士の話なんだから」

明日香が笑った。

「わかったよ」

夏樹は少し不服そうに、けれども少し嬉しそうに笑った。

「……。」

水穂が複雑な顔をする。

「どした？ 飯沼」

夏樹がいつもの笑顔で水穂に問い掛けると、一気に水穂は泣き始めた。

「うわわわ、ど、どしたんだよ、飯沼！」

美智子も高田先生もただただ驚くばかりだ。

「ゴメンね、ゴメンね」

「どうしたの？ 飯沼さん」

美智子が優しく問い掛ける。

「先生……朝倉くんが……」

ドキッとした。それを言うと、間違いなく水穂もイジメられる。

明日香もその対象になりかねない。

「お、俺も頭痛がします！」

「へ？」

水穂が啞然とした。

「ウソおっしゃい！ そんな風には見えないわね！」

美智子がトントンと軽く夏樹の頭を叩いた。

（言つな）

夏樹は人差し指を水穂のほうへ向けた。

「ほら、飯沼さんもいつまでも泣いてないで。そろそろ教室へ帰ってなさい。先生もすぐに戻るから」

「だってさ、飯沼。先行こうぜ」

「で、でも……」

「ほーら！ 行くぞ！」

夏樹は強引に水穂の手を引いて保健室を出ようとして、最後に明

日香にこう言った。

「岡本。ゴメンな。さっきの、ウソ」

夏樹が手を合わせて謝った。

「……わかってるよ」

明日香は優しく微笑んで、手を軽く振った。

「朝倉くん……なんで言わないの？」

水穂が半泣きで夏樹に聞いた。

「何を？」

「イジメられてるって」

それつきり、夏樹は黙り込んだ。水穂も口を開かない。

「ねえ、なんで？」

「イジメられてるって、俺が思ってるないから」

「……そんな風には見えないよ」

「いいんだ。俺がそう思ってるんだから」

「でも私、見てるだけなんてできない」

「大丈夫だよ。俺は、負けない」

夏樹はグツと強く右手を握り締めた。

「飯沼は……普通に過ごしてればそれでいいよ」

「そんなのできない」

「できるさ」

夏樹は優しく水穂の頭を撫でた。

「耐えられなくなったら、俺のほうから先生に言っさ」

「……絶対だよ？」

「ああ」

夏樹は階段を上がりきったところで、水穂に先に行くよう指示した。

「なんで？」

「イジメられてんだろ？ 俺。一緒に帰ってきたら変だし」

「そんな……」

「いいから、行って」
水穂が寂しそうに、先に歩き出した。その後を、夏樹が追う。

「俺は、負けない」

夏樹はそう誓った。

第19話 消えた席（後書き）

突然始まった夏樹へのイジメ。明日香を巻き添えにしたくないがゆえに言い放った言葉。イジメを訴えようとする水穂。それぞれの気持ちは交錯していく中、ますます混乱を極めるようになり……。

第20話 最後の席

「夏樹」

あの日から1週間が経過した日の夕方、帰宅しておやつを陽乃と食べていたときだった。由利が怖い顔をして夏樹の肩を叩いたのだ。「やだ、お母さん。怖い顔してどうしたの？」

陽乃がまんじゅうで頬を膨らませながら聞き返すが、由利は怖い顔をしたままだ。

「これは何？」

由利が持っていたのは夏樹の算数のノートだった。

「算数のノートじゃん」

夏樹は冷静を装って答えた。しかし、由利は中を開いた。

「な……」

陽乃はそれを見て絶句してしまった。

女たらし。

クサイ。

学校来るな。

キス麻。麻の字が違つと陽乃はつつこみたくなつたが、そういう雰囲気でもない。

「なんなの」

由利は声を抑えつつ、夏樹にもう一度聞いた。

「なんでもないよ。友達が書いた落書き」

夏樹はすぐにそっぽを向いておやつのお菓子を食べ始めた。

「これがただの落書きで済ませられると思ってるの!？」

由利がノートをテーブルに叩きつけた。衝撃でコップが横倒しになり、入っていたリンゴジュースがこぼれ出した。

「……」

陽乃は突然起きた出来事にただただ呆然とするしかなかった。

「落書きだっつってんじゃん！」

今度は夏樹が逆上して由利に掴みかかった。

「きゃっ!?!」

5年生になつて腕力が強くなり始めていた夏樹に由利は勝てるはずもなく、壁に押し付けられた。

「ちよつと……ちよつと夏樹！ 何やってんの！ ストップ、お母さん危ないでしょ！ 夏樹！」

「うるせえ！ どいつもこいつも俺のことバカにしゃがって！ クソ！ クソオオオ！」

夏樹は腹いせに今度は陽乃の顔を思い切り叩いた。

「キヤツ！」

夏樹に突き飛ばされた拍子に、陽乃が椅子で腰を打った。

「い……痛い」

陽乃が泣きながら腰を押さえる。

「あ……」

夏樹がそこで初めて我に帰り、由利と陽乃のほうを恐る恐る見つめた。

「……どうしちゃったの、夏樹」

由利が乱れた衣服を整えながら聞き直す。

「……なんでもない。ホントに」

「ウン」

陽乃の冷静な一言に夏樹はビクツと身を震わせた。

「ねえ、夏樹。アンタこんなことする子じゃなかったじゃない」

「……。」

「アンタもつと優しい子だったじゃない！ 急にこんなになるなんて変だよ！」

「……!」

変、という単語を聞いた途端、夏樹の涙腺が急にゆるんで大粒の涙がこぼれ出した。

「変……やっぱり……俺、変なんだ」

ペタンと座り込んで今度は泣き始める夏樹に、由利と陽乃はただただオロオロするしかなかった。

「うう……ウワアアア……ああああ〜！」

大声で泣き出す夏樹を二人はどうしていいかわからず、とにかくなだめようと二人で夏樹を抱きしめるしかできなかった。

その時、帰宅してきた祥夫が散らばった椅子や転げ落ちたコップ、そして泣きわめく夏樹を見て呆然と立ち尽くしていた。

「夏樹。本当のことを言いなさい」

祥夫、陽乃、由利の3人が取り囲むように夏樹の周りに座った。これではまるで裁判所の被告人席のような気分だと夏樹は思った。もちろん、マンガの受け売りで全部知っていた知識だったけれど、こんなところで使うとは夢にも思わなかった。

そして、証拠品のように並んだ夏樹の持ち物。算数のノートには真っ赤なペンの落書き。割れた下敷き。折れた鉛筆。ちぎれた消しゴム。割れたものさし。破れた国語の教科書。しかも、表紙は綺麗なままだ。

「イジメられてるんじゃないの？」

由利の一言に夏樹の目つきがキツくなる。

「イジメられてねえって何度言ったらわかるんだよ！」

「夏樹！　なんだその言葉遣いは！」

さすがに祥夫にはかなわないと思っっているようで、夏樹はシユンとした様子で俯き、こう呟いた。

「……ゴメンなさい」

祥夫はネクタイを緩めて質問を続けた。

「いつからだ？」

「何が」

祥夫は遠まわしにせず、単刀直入に聞いた。

「イジメられてるのは」

夏樹は急に鼓動が早まる感覚に襲われた。同時にいろんな光景が蘇る。

恭輔の意地悪な顔。

ちひろの別人のように避けるときの顔。

萌が汚い物を見るかのように扱うときの顔。

「夏樹。正直に言いなさい」

「……や……だ」

「何？」

「やだ」

夏樹はブツブツと同じ言葉を繰り返す。

「なんだって？」

祥夫がもう一度聞き返した直後、夏樹は大声で叫んだ。

「いやだあああああああ！」

「あっ！」

陽乃を突き飛ばして夏樹はリビングを飛び出した。

「夏樹！ 待ちなさい、どこへ行くんだ！」

祥夫が後を追いかけたときには、夏樹は玄関を飛び出していた。

「由利！ 陽乃！ 急いで後を追うんだ！」

「はい！」

3人は慌てて家を飛び出し、各々別々の方向へ走り出した。

「あ……」

ちひろはコンビニからの帰り道、夏樹が前から走ってくるのを見た。

「あら、朝倉くんじゃない」

ちひろの母・枝里子えりこも夏樹に気づき、そしてすぐに二人は夏樹の異様さに気づく。

涙を流しながら、裸足で走ってくるのだ。

「朝倉くん！？ どうしたの！」

しかし夏樹はちひろを見ると、「ゴメンなさい、ゴメンなさい！」

と叫ぶだけですぐに通り過ぎてしまった。

「……………どうしたのかしら」

枝里子は呆然と走り去る夏樹を見送り、その後すぐに由利が走ってきたのを見つけた。

「あ、朝倉さん」

「和田さん！ いま……………いまウチの夏樹、通らなかった!？」

「ええ、神社の方向に」

「ありがとう!」

由利は礼を言い終わるとすぐに走り出した。

「どうしたのかしらね……………あつ、ちひろ!」

ちひろも後を追うように走り出した。

「待ちなさい、ちひろ!」

「おい、あれ」

恭輔と敬吾は塾の帰りだった。その彼らの前を、夏樹が走っていく。

「笑えるなあ、アイツ。裸足じゃん」

恭輔がそういうとゲラゲラと敬吾も笑い出した。その声に反応して、夏樹が二人のほうを見た。そしてその目を見て二人は絶句してしまう。

涙をこぼしながら、しかし虚ろな目をしながら二人を見つめるのだ。それからすぐに神社のほうへと歩いて行ってしまった。

「……………なんだ、今の」

「わけわかんねえ」

そのすぐ後だった。

「ねえ、いま夏樹くん通ったよ!」

二人が振り返ると、夏樹の姉・陽乃の姿があった。

「ホント!？」

未華乃の声に陽乃が急いで走りながらさっきまで夏樹がいた交差点のほうへ去っていった。後を未華乃と未咲が追う。

「……なんかヤバそう?」

敬吾が彼女たちの後を追い始めたので、恭輔もついていった。

「朝倉さん!」

玲子と登が明日香と一緒にやって来た。

「岡本さん! 夏樹が……夏樹が」

由利が神社の櫓を指差すと、夏樹が脚を投げ出してブラブラとさせている。

「なつき ! 降りてきて !」

陽乃がたまらず叫ぶ。しかし、夏樹は鼻歌を歌いながらひたすら脚をブラブラさせるだけだ。

「やめてえええ !」

陽乃が泣き叫んで夏樹を止めようとする。しかし、今にも落ちてしまいそうだ。

夏樹が不気味なくらいゆっくり笑って話し出した。

「俺なんていららないんだよ? 姉ちゃん。よく考えてよ」

不思議なくらい夏樹の声が透き通る。周りの騒音が何も聴こえない。

「あの落書き見たでしょ。急にみんな変わっちゃった。俺、何もしてないのにね。ちいも新庄も、恭輔も。まあ父さんは前から俺に興味なんかなかったみたいだし。母さんだって今日、いきなり叱るしね。岡本は俺が避け始めたからきつと嫌いになってるだろうし。先生だってそうさ。相談してね、とか言うけど本当は俺になんか興味なし。ううん きつと、みんな俺になんか興味ないんだよ」

「……。」

「……。」

あまりの夏樹の急変に、誰もが言葉を失った。

「でも、姉ちゃんだけは優しかったね」

その笑顔は、今まで見た中で一番、安らいでいるように見えた。

「また 姉ちゃんの弟になりたいな」

そういつた直後、夏樹の体が前のめりになり始めた。

「いや……いやああああ！」

未咲と未華乃が悲鳴を上げ、陽乃が櫓のほうへ走り出した瞬間だった。

「一人にしないでよ！」

その声に夏樹が思い留まり、体を櫓のほうへ戻した。

叫んだのは他でもない 明日香だった。

第21話 一人きりの席

「……………岡本」

夏樹が呟く声はもちろん、下にいる誰にも聞こえるはずがなかった。しかし、明日香は小さくうなずいた。

「そこ……………朝倉くん……………ううん！ なっちゃんと私の特別席 二人きりの座席はしにしようって……………なっちゃんが言ったんじゃない？」
明日香が大声で櫓の上の夏樹に問い掛ける。ピクツと夏樹の体が動いた。

「そうだったね……………」

夏樹がニツコリ笑うのが明日香たちからもハッキリ見えた。

「だったら、今すぐそこから降りて、私たちのところへ来てくれるよね？」

「……………」

「なっちゃん！」

夏樹の笑みが不自然になった。

「できるものならね」

夏樹の体がまた前のめりになった。未華乃、未咲、ちひろが悲鳴を上げる。

「あなた！」

祥夫と登が同時に走り出していた。目指す場所はひとつ、櫓だけだ。

「息子さん、いったいどうしちゃったんです!？」

「……………イジメを受けていたようなんです」

「イジメ!？」

登が驚いた様子を見せた。しかしその直後、最近明日香が元気がなかったことを思い出した。

「それに私が最後まで気づいてやれなかった。妻が気づき、問いただしていた最中なんです。突然飛び出したのは。きつと、きつと限

界が来たんでしよう。優しい子だから……なおさらキャパシティが
少なかったのかもれない」

二人は櫓を駆け上がり、ようやく夏樹のいるところへたどり着い
た。年甲斐もなく走ったせいで二人とも息が切れ切れた。

「お父さん……」

夏樹が驚いた様子を見せた。

「夏樹……こんなことはもうやめる」

「やめる？」

夏樹が俯きながら聞き返す。

「そつだ。皆に心配をかけて……もうやめるんだ」

夏樹が顔を上げた。不気味なくらい、笑顔が顔一面に広がる。祥
夫も登も思わず鳥肌が立ってしまった。

「やめるならさっさと落ちりや済む話じゃない？」

「違う！ 違う！ やめてくれ、夏樹！ 夏樹！」

祥夫が声を張り上げるが、夏樹の耳には届いていなかった。ふと
夏樹の視線がちひろ、恭輔、敬吾の3人を捉えた。

ビクツと体を震わせる3人を見てクスツと夏樹は笑った。

「3人とも！ 最後まで見て行ってね」

ちひろがペタツと座り込んだ。恭輔も敬吾も半泣きになっている。

「……お父さん」

夏樹が、ようやく夏樹らしい優しい笑顔を見せてくれたので祥夫
はホツとした様子を見せた。しかし、次の一言で戦慄が走った。

「今までありがとう」

櫓の柵から右手が離れる。

「お姉ちゃん。せっかくお姉ちゃんが病気から助けてくれたのに、

ゴメン」

左手。

「お母さん。晩御飯、最期に食べたかったな」

左脚。

「岡本……君のこと」

右脚を誰かが掴んだ。宙吊りになる。景色がひっくり返って夏樹の天地が逆転したようだ。誰かが叫ぶ。

「この座席を私一人きりにしないで！」

「岡本……」

夏樹が我に帰ったように呟いた。

「この座席で私たち、ずっといろんな話をするの！ 自然学校から帰ってきたらその思い出話するの。体育祭の終わった後、泥だらけの体操服で一日を振り返るの。テストの点が悪かったらここからそんなテスト、捨てるの！ 中学生になったら制服が似合ってるかどうか、二人でここで見せ合うの！ 高校生になったら、髪の毛染めてみたい！」

「……。」

「私一人だけでここでそんなことしてたって、楽しくも何ともない！」

明日香の両目からとめどなく涙がこぼれていく。それが夏樹の右脚に落ち、伝っていく。

「なっちゃんがないと、私！」

「……俺も」

夏樹の右目から涙がこぼれ、それが櫓から落ちて東京の夜景を反射させ輝いて下へ降っていく。

「俺も岡本と……そういうことしたい」

「だったら……だったら上がってきて！」

明日香の手が震える。限界が来ているのだ。

「お父さん！」

明日香が叫んだ。登と祥夫が精一杯力を入れて登が明日香を、祥夫が夏樹を引き上げる。

夏樹の目に映っていた東京の夜景が、元のように戻る。そして最後に、明日香の顔が視界に入ってきた。

「……なっちゃん」

明日香がすぐに夏樹を抱き締めた。

「岡本……」

明日香の目から涙がいくつもこぼれ、夏樹のグリーンのTシャツを濃くしていった。

「ゴメンね、ゴメンね……私、なっちゃんがイジメられてるのに……助けもしなかった」

「ううん、ううん……。俺が弱かったから、弱かったからダメだったんだ……俺が悪かったんだ……」

「イジメられてる人は悪くないんだよ。お父さんが、言ってた。なっちゃんは……頑張ったんだよ。頑張りすぎたんだよ」

「……ウツ……ううう」

夏樹は何か弾けたかのように泣き始めた。

「わああああ……ああああああ」

夏樹の泣き声は、夜の七海の街の隅々まで響くくらい、大きく聞こえていた。

第22話 昔あった席

「……………！ 夏……………。……………樹！」

誰かが呼ぶ声で、夏樹は目を覚ました。

「夏樹！」

綾音が心配そうに夏樹の体を揺らしていた。隣で玲子がタオル片手に覗き込んでいて、圭太と花菜もいる。

「よかった……………気づいたよ、おばさん」

綾音がホツとした表情を見せる。

「急に倒れたんだよ、夏樹くん。おばさんも綾音ちゃんもビックリしたわあ。だってお茶入れて帰ってきたら、仏壇前で倒れてるんだからねえ。いくら明日香と仲が良かったからって、明日香のところへ行ってもらっちゃ困るんだよ？」

きつと冗談ではない。玲子は、真剣にこう言ってるのだと夏樹は理解した。玲子はその日 櫓の日のこともすべて知っている。

「夏樹くん、きつと疲れてるんだよ。今日は帰ったほうがいいわ」

花菜が夏樹の汗を拭いながら優しく声をかけた。その様子が明日香を彷彿とさせるので、夏樹には少し辛いものがあった。

「そうだね。もう6時半だし、暗くなっちゃったから帰るほうがいいね」

玲子もそう言いながら、バタバタと隅に固めてあった夏樹と綾音のカバンを持ってきてくれた。

「すみません……………急に押しかけた上にご迷惑おかけして」

「やだねえ！ 夏樹くんとウチの仲じゃないの。そういう水臭いこと言いつこナシ！」

ガハハ！と玲子が威勢良く笑い飛ばす。綾音も思わず笑ってしまい、つられて夏樹が笑った。

帰り道。綾音と夏樹は特に言葉を交わさず、商店街を抜けていっ

た。商店街を抜けると神社がある。その神社の手前で急に夏樹の歩
くスピードが落ちた。

「夏樹？」

「綾音。聞かないの？」

「何を？」

「俺が、あの4人で写ってた写真の3人……いや、2人と疎遠にな
った理由」

わざとらしく、冷たい風が急に吹き始めた。紅葉した葉が散り、
夏樹と綾音の間に降り注ぐ。

「聞きたいよ」

綾音はハッキリ返し、それから続けた。

「でも、アンタ、その写真見ただけでぶっ倒れたやん。相当話した
くない理由があると見た！ だから、あたしは夏樹が話してくれる
のを待つことにしてん。わざわざ、人の思い出したくないことホジ
クリ返してまで聞きたくないからね」

夏樹がそつと綾音の手を握った。思わず鼓動が早くなる。それか
ら綾音は夏樹の顔を見た。いつもの、優しい夏樹の笑顔がそこにあ
った。

「話すよ」

「……いいん？」

「もう……いいんだ」

夏樹の顔が少し寂しそうになる。

「もう 7年も前のことなんだから」

夏樹は綾音の手を引いて神社の境内に入った。夜の神社は街灯こ
そあるが、やはり不気味だ。

「座ろう」

夏樹が散らばっていた葉を払い落とし、ベンチに座るように綾音
に促した。綾音は小さくうなずき、夏樹の隣に座った。

しばらく沈黙が続いて、不意に夏樹が言葉を発した。

「あそこ」

夏樹が茂みのほうを指差した。

「見える？」

「……茂みなら」

「茂みが少し、欠けてるのわかる？」

「うん」

「あそこに昔……そうだな。ちょうど5年前まで火の見櫓があったんだ」

夏樹が懐かしそうに笑う。

「なんか思い出あったん？」

「うん」

「そっかあ。さては、明日香さんとの秘密の場所やったとか？」

夏樹がプウツと頬を膨らませた。

「なんでわかるんだよ」

「やっぱりなあ。なんとなく。あたしも誰かと仲良くなったら、秘密の場所とかほしいと思うかも。親も親友も知らへん、彼氏と二人きりの場所」

「ハハツ！ 俺たち、似たもの同士かもしんないな」

夏樹の今の一言が、強く綾音の胸を締め付けた。キュンキュンしっぱなしだ。

「もっ……熱くなってきた」

綾音がそういうと夏樹は「え？ 熱あんじゃね？」といって額を

綾音の額に引つつけてきた。

「ヒヤア！」

綾音はたまらず後ろに退き、そのままベンチからひっくり返ってしまった。

「だ、大丈夫かよ？」

「な、なんとか」

「ホラ、手」

夏樹はしっかりと綾音の左手を握り、引き上げてくれた。

「あーあ。葉っぱがスカートに付いてる」

「サツとすぐに払ってくれた。綾音は夏樹のこつという小さな気配りもできるところが大好きだ。」

「ありがとう」

再び沈黙が落ちる。今度は綾音のほうからその沈黙を破った。

「で？ その火の見櫓でなんかあったん？」

「うん……まあ」

「……。」

話しくそうにする夏樹。

「ノロケやないんでしょ？」

「え？」

「真剣な話。違う？」

夏樹は小さくうなずき「うん……」と返した。

「話して」

綾音は優しく夏樹にそう促した。

「……いいのか？」

「さつきも言うたけど」

綾音が少し厳しい表情で言った。

「あたしは夏樹の全部、受け入れるつもりである」

「……うん」

「だから、言うて」

「わかった」

夏樹は覚悟を決めて全てを綾音に話した。

5年生の夏休み。先ほど写っていた少年が明日香とは違う少女に告白して以来、4人の仲が急速に悪くなったこと。

夏休みに明日香と親しくしていたところをクラスメイトに目撃され、それを新学期にバラされたこと。それが発端となったケンカ以来、クラスで仲間はずれにされ、イジメを受けたこと。

「それから……俺ってヘタレだから、イジメに耐えられなくなって

……」

綾音が突然憤慨しながら叫んだ。

「当たり前やん！ なんやの、そいつら！ かなりムカつく！
夏樹、アンタ優しすぎる！ キレてもええくらいやで!？」

「お、落ち着けよとりあえず」

「ああ……うん、よし、深呼吸」

綾音は深呼吸を三回してから「よし！ 続きを」と言った。

「それで……家でイジメを追及されて……多分、精神的におかしく
なってたんだろうな。俺、家を飛び出してこの神社にあった火の見
櫓に気づいたら来てたんだ」

「ははあ……明日香さんとおった場所で落ち着きたいってとこ？」

「ううん」

「え？ ちゃうの？」

「うん」

「じゃあ、なにしに来たん？」

夏樹は少しためらった後、その言葉を放った。その言葉を聞いて、
綾音は耳を疑った。

「自殺」

自殺。

じさつ。

ジサツ？

「ウソ……や」

綾音が震えながら返す。

「ううん。ホント。今にしてみれば、なにやってんだ、俺って感じ
だけど」

へへッと夏樹が笑う。しかし、その声は震えていた。

「ゴメンな……重すぎだよ。俺……重すぎるよな。男のクセにこんな……弱いのが、無理だろ。綾音」

「……。」

「だから俺なんかと付き合うのはや……め……。」

綾音がそつと夏樹を抱き締めた。

「話してくれて……ありがとう」

家へ帰ると、夏樹はすぐに自分の部屋に上がった。

「おかえり、夏樹」

由利が声をいつもかけてくれる。5年生のあの事件以来、特に気を配ってくれているのだと夏樹は感じていた。

「ご飯、食べるでしょ？」

「うん」

「じゃあ用意するから着替えてらっしゃい」

「はい」

夏樹は二階へ上がり、自分の部屋に入った。

ベッドに制服のまま寝転がった。

(話してくれて……ありがとう)

あの時、綾音の顔が辛くてまともに見れなかった。その後彼女を家まで見送り、別れた後に気づいた。

夏樹の制服の胸元が濡れていることに。

綾音は泣いていたのだ。泣いてくれたのだ。5年生 7年も前の夏樹の出来事に。

「……明日あたり、お別れかな」

この話をした次の日、必ず夏樹はフラれていた。しかも、全員同じセリフを吐いて。

「話してくれてありがとう、か……。」

今まで付き合った子たちのありがとはどういう意味だったのか、夏樹にはわからない。けれど、ケジメをつけさせてくれてありがとう、という意味があったと夏樹は確信している。

「……。」

急に眠気が襲ってきた。昨日の晩、古文の宿題をするのに追われて夜更かしをしたせいかもしれない。

そのまま夏樹は吸い込まれるように眠りに落ちていった。

第22話 昔あった席（後書き）

今はなくなった櫓での出来事を綾音に話した夏樹。ひとつひとつ、夏樹は明日香との思い出を綾音に語り始めます。果たして、現代の夏樹が考えていることとは……。

第23話 補助席

あの“騒ぎ”から1ヶ月半が経った。

季節は夏から秋へと移り変わり、夏樹の着る服も半袖から長袖の厚いトレーナーなどに替わりつつあった。

10月21日(月)。今日から富樫小学校5年生は4泊5日の自然学校へ出かける。夏樹はいま、そのバスの中にいた。

あの騒ぎのことを、夏樹は絶対学校の人には言わないでほしいと祥夫、由利、陽乃に念を押した。祥夫はそれを許そうとはしなかったが、夏樹が何度も何度もそれを繰り返すので、祥夫も折れたという形になった。しかし、大迫先生だけには伝えるという由利の強い意志により、大迫先生には全て事細かに伝えられたようだった。

あの“騒ぎ”を目撃した恭輔、敬吾、ちひろ、明日香の4人も表面上は特に変化なく見えるが、恭輔と敬吾、ちひろの3人はパタッとイジメを止めてしまった。もちろん止めないほうが変だけれども急な変化にクラスメイトは戸惑いを隠せないようだった。

それだけではない。

夏樹は風邪でしばらく学校を休んだということになっていたが、久しぶりに教室に顔を出した夏樹の表情にクラスメイトは違和感どころか、気味悪さすら感じていた。

普通に会話はするのだが、あまり表情が変化しなかった。変化しないというよりも、変化してもすぐに無表情に戻ってしまうのだ。笑顔で「ありがとう」と答えてもすぐにまた無表情に戻る。そんな状態だった。

女子生徒はそれを不気味がっていたが、男子生徒はやはり夏樹に対するイジメのような行為を繰り返し続けた。もちろん、それに気づかない学校側の対応にも問題はあったのだが、あれ以来夏樹はちよつとのことでは動じなくなっていた。

そんな中で迎えた自然学校。夏樹の班は以下のようなメンバーだ

った。

・朝倉 夏樹

・飯沼 水穂

・神田 和真

・岸 未波

・木暮 建都

男子3人、女子2人。幸い、未波も建都も和真も夏樹に対するイジメに加わってはいない、いわば傍観者。別に夏樹にしてみれば、彼らがいようとまいと関係ないといった様子だった。

現に、いまこのバスでの座席も夏樹は通路にある補助席に座っていた。誰とも関わりたくない。関わる必要もないのだと考え、自分から補助席に座った。左から建都、和真、夏樹、水穂、未波の順番で座っている。

「朝倉くん」

水穂が声をかけてきた。いま、このクラスで夏樹が本当に心を開けるのは水穂、明日香の二人だけだった。後は誰も信用できない。それが夏樹のクラスに対する印象だ。

「なに？」

しかし、信用できる人に対しても夏樹はあまり積極的に会話をしたりしようとしめない。それは家でも同じだった。特に、祥夫と由利に対しては本当に必要最低限のことしか話さない。陽乃に対する依存心が強くなりつつもあつた。

「私ね、家でビスケット焼いてみたの。食べない？」

「……………」

夏樹のあまり輝きのない目を見て水穂は落ち込んだ様子を見せた。不意に、夏樹の心が痛むような感覚に襲われた。

正直、夏樹はあの騒ぎより前の記憶、それも夏休みあたりからの記憶がアヤフヤであまりない状態だった。

朝倉くん……………なんで言わないの？

そんな……

あの廊下での出来事。寂しそうな水穂の顔だけが鮮明に蘇った。

水穂の手に、夏樹の温かい手が触れた。

「ありがとう。もらうね」

「……うん！」

水穂は久しぶりに夏樹が笑った顔を見た気がしていた。夏樹も久しぶりに自然な笑顔を出せた気がしていた。

「おいしいよ」

自然と言葉が出てきた。

「ホント！？ 良かった！ 朝早く起きて作ったカイがあるよ」

水穂が嬉しそうに声を上げた。その声を聞いて明日香が後ろを振り向いた。夏樹と目が合う。

夏樹はまた自然に、明日香に手を振った。

「！」

明日香は思わず赤くなってしまったが、小さく振り返しておいた。それを見た水穂が、嫉妬に近いような気持ちになるのを彼女自身が理解できずにいた。

オリエンテーションが終わると、もう午後4時半だった。旅館の周りは滝や公園がたくさんあり、先生たちも見回りをするので自由に回っていいということになっている。

「なあ、飯沼と朝倉は行かないの？」

建都が二人に声をかける。しかし、夏樹は寝転んだまま返事をしなかった。水穂も「バスでちょっと酔っちゃって……やめとくね」と苦笑いで返した。

「そっか。じゃあ俺らは行ってるね」

そう言って和真、建都、未波の3人は部屋を出て行った。

「……朝倉くん」

水穂はそつと夏樹に声をかけてみた。しかし、返事がない。

「朝倉くん？」

覗きこむと、夏樹はスウスウと寝息を立てて眠っていた。

「……寝ちゃったのか」

水穂はしばらく夏樹の顔を見つめた。

お姉さんがいると言っていた夏樹。一度だけ、家族写真か何かを4年生のときに見せてもらったそのお姉さんの顔は本当にまだ小学生だろうかというくらい、綺麗な顔をしたお姉さんだった。

夏樹はその美人なお姉さんとは少し顔のタイプが違う。陽乃はお母さん似だったのに対し、夏樹はお父さん似。一重でキリッとした目。唇は柔らかかそうな印象。夏樹に一度、香水か何かを付けているのか聞いたこともあった。とてもいい香りがしたからだ。その時、夏樹は笑いながら「シャンプーの香りだよ」と返してくれた。その後言ってくれた言葉が忘れられない。

「そんなの言われたの、初めて。飯沼、ちゃんと人のこと見てくれるんだね」

「……私はずっと、夏樹くんのこと見てたんだよ」

コンコン。

急にドアを叩く音がしたので、水穂は驚いてそちらを見た。

コンコン。

何か用事だろうか。先生かもしれない。

水穂は慌てて「はい！ いま開けます」と返事をしてドアを開けた。

「あつ……」

そこにいたのは、明日香だった。

第23話 補助席（後書き）

あの事件から季節は変わり、秋へ。夏樹たちは小学5年生最大の行事、自然学校へ向かいます。そして部屋割りには水穂と夏樹が一緒の部屋に、そこへ明日香がやってきた明日香は。

第24話 お座敷席

「どうぞ」

水穂は明日香を部屋の座敷に案内し、お茶を入れて差し出した。相変わらず夏樹は寝ている。

「いいの？ 起こさなくて」

水穂は心配そうに明日香に聞いた。

「いいの、いいの。せつかく寝てるのに悪いわ。それより、お茶ありがとう」

「ううん！ いいの。どうぞ」

「いただきます」

明日香はそつとお茶を口に含んだ。水穂はそれをジツと見つめる。

「ど、どうしたの？」

明日香はなんだか恥ずかしくなり、思わず聞いてしまった。

「あ、ゴメンなさい……。その、岡本さん……」

「明日香でもちゃん付けでもいいよ！ そんなよそよそしいの、ナシ！」

明日香はニツコリ笑って手を差し出してきた。水穂も笑って手を差し出し、二人はしばらく握り合っていた。

「岡本さん……あ、明日香さん」

「明日香ちゃんがいいよ」

「うん！ 明日香ちゃん、本当に綺麗だね！」

「えっ!?!」

明日香は驚いて真っ赤になってしまった。

「やだ……。なんか恥ずかしいな、女の子に言われるのも」

「私も言っつて恥ずかしい」

二人はクスクスと笑い合う。

「そっだ！ 私、ビスケット焼いてきてるの。食べる？」

「あ！ もらおうかな！」

水穂は包んでいた袋を開け、二人でポリポリとそれを食べ始めた。しばらくビスケットを食べる音だけが部屋に響く。

「あの……」

水穂が沈黙を破った。

「明日香ちゃん……朝倉くんのこと、どう思ってる？」

「えっ？」

明日香がビスケットを食べながら答えた。

「あ、ゴメンなさい！ 汚いよね……ンッ！ はい、OKです！」

明日香は慌ててビスケットを飲み込んで質問をもう一度聞きなおした。

「明日香ちゃんは、朝倉くんのこと……」

水穂はどう思ってる、ではなく、こう言い換えて質問した。

「好きだよね？」

「……！」

明日香はあっという間に顔を赤くした。

「やっぱり」

水穂はクスクス笑ってビスケットを一枚口にした。

「……バレてた？」

「うっん。クラスの子に話したら『それはありえないね』っていう意見ばかりだったよ。女の子から見たら、あれはただの友達って感じで接してるっていう意見ばかりだった。男の子はどうか知らないけど、女の子から見たら朝倉くんの片想いにしか見えないみたい」

「そっか……」

水穂は口にしていたビスケットを飲み込んでから次の質問をぶつめた。

「告白とかしないの？」

「……。」

明日香が呆然とした様子で水穂を見つめる。

「ど、どうかした？」

「ううん。ただ、水沼さんって意外とズバズバツと物を言うんだな
って思ってた」

水穂は慌てて「やだ！ ゴメンなさい！ 前からお母さんに悪い
クセって言われてたのに」と随分慌てた様子を見せた。

「ああ！ いいのいいの！ 私もそういうタイプの人、嫌いじゃな
いから」

「良かった。明日香ちゃんってやっぱり優しい、思いやりの人だね」
水穂は本当に安心した様子を見せた。

「それで……質問の答えなんだけど」

明日香はモジモジした様子で続けようかどうしようか迷っている。
夏樹のほうを気にしているようだ。

水穂はそつと夏樹の顔を覗き込んだ。

「大丈夫。寝てるから聞こえてないよ絶対」

「ありがと。その……答えの前に、いい？」

明日香は真剣な様子で、全てのことを話し始めた。

夏樹がイジメを受けていたこと（これは水穂も知っていた）。

夏休み中に自殺未遂を起こしたこと。

風邪で長期欠席は実は病院でしばらく診療を受けていたこと。

そもそもの原因が、明日香と二人で図書館にいたのを目撃された
ことから始まったこと。

「……それじゃあ」

水穂が不安そうに聞く。明日香は小さくうなずいた。

「うん。朝倉くんが様子が変なのは、それ以来ずっとなの」

「……知らなかった」

水穂はショックが大きすぎて、何をどう返したらいいのかわから
なくなった。

「ゴメンね。自然学校中にこんなこと、言つべきじゃないんだけど」

「ううん……」

水穂はすぐに質問を返した。

「でも、そんなんじゃない……明日香ちゃん、朝倉くんが好きでも付き

合ったりなんか……」

「できないよね」

寂しそうに明日香は笑った。

「でも……小学生で付き合ったりとかって早すぎる気がしない？」

「それはそうかも」

水穂はクスクスと笑った。

「こんなこと言っておいて悪いんだけど」

明日香は突然水穂の耳に口を近づけた。なんだかくすぐつたい気がする。そして、明日香は水穂に頼みごとを伝えた。

「……。」

「ええ！？ で、でも……」

「この状況をなくすには、そうするしかないって思うんだ」

明日香は寂しそうに笑う。その笑みがあまりにも寂しすぎる気がして、水穂は心が痛む。

「ダメだよ！ いくらなんでも……」

「でも、私は……ゴメン、呼び方変えるね」

「え？」

「私は、なっちゃんがこんな……暗い、塞ぎこんだままのほうが嫌なの」

「……。」

彼女は、朝倉くんを「なっちゃん」と親しげに呼ぶ。それなのに、どうしてこの二人は距離を置いてまで……私にそんなことをさせてまで、距離を置かなければならないのだろう。

水穂は自分のことのように悔しくなり、泣きだしてしまった。

「どうしたの！？ 水穂ちゃん！」

「ゴメン……なんか、悔しくって」

「……ありがとう」

明日香はそつとハンカチを取り出して、水穂の涙を拭いてくれた。

「ゴメンね、変なお願いして」

「本当にいいの？」

明日香は力強くうなずいた。

「……わかった。じゃあ、3日目の夜だね？」

「うん。お願い」

明日香はもう一度、うなずいた。

「うーん……」

夏樹が突然、起きそうな素振りを見せた。

「ヤバイね！ 私、部屋に戻るよ」

「う、うん！ じゃあ……私、頑張るよ」

「ありがとう、水穂ちゃん。じゃあ」

「またね！」

明日香が慌てて部屋を出るのを、水穂は見送るしかできなかった。

「あれ？ 飯沼一人？」

夏樹が寝ぼけ眼を擦りながら聞く。

「うん……一人だったよ」

水穂の頭の中を、明日香の頼みごとがグルグルと頭を巡っていた。

水穂ちゃんが、なっちゃんを好きだっていうことにしてほしい。

そうすれば、噂とか消えてしまう。

なっちゃんはステキな人だから、水穂ちゃんがなっちゃんを好きになるかもしれない。

そうなったとしたら、水穂ちゃんはその想いを貫いて。私は、あなたたちが幸せになるのを一番に思うから。

「そこまで強く願うなら……あなたといたほうがきっと幸せなのに」
水穂は明日香のことを思うと、涙が止まらなかった。

「ゴメン、朝倉くん……私、ちょっと出てくるね」

「え？」

「すぐに戻るから！」

水穂は夏樹の返事を聞かないうちに部屋を飛び出した。

明日香の部屋は1041号室。部屋を出て右のはずだと水穂は思い、必死に走った。部屋に入る寸前の明日香を辛うじて水穂は呼び止めた。

「明日香ちゃん！」

「水穂ちゃん？」

ハアハアと息を荒げる水穂。明日香は心配そうに見つめる。

「どうしたの？」

「私……私ね」

言おうかどうしようか一瞬迷ったが、言った。

「夏樹くんのこと……ずっと好きだったの」

「……。」

「……急にゴメンなさい」

「うっん。いつから？」

明日香は笑顔で聞いた。裏では怒っているのではないかと水穂は思ったが、この笑みにそんな邪な気持よこしまちはひとつも見えなかった。

「3年生の……秋から」

「そっかあ！ スゴいね！ 私よりずっと長く思ってるんだ！」

明日香はパチパチと手を叩いた。

「でも……きつと夏樹くんは明日香ちゃんじゃないとダメなんだよ！ 私なんかじゃダメ！ だから……さっきの話はナシにしようよ。ねえ、お願い！」

「……ダメだよ」

明日香の声が震えた。

「ダメ」

「どうして!？」

「だって……なっちゃん、私と噂立てられたせいでイジメられて、自殺しそうになって！ 私と一緒にいたばかりに今のなっちゃん

は昔のなつちゃんじゃなくなっちゃった！ 私だけならいい。でも、唯一普通に接してる水穂ちゃんにも本当の意味での笑顔で笑わなくなっちゃった。感情がないみたいになっちゃった！ そんなにした私が……なつちゃんを好きでいたって……なつちゃんは幸せになんかなれないよ」

最後のほうは涙で声が枯れて、とても聞き取りづらかった。むしろ聞こえなかったほうが良かったのかもしれない。明日香の切ない想いが、水穂の胸を締め付ける。

「だから……私はもう、なつちゃんと一緒にいられない」
「……そんな」

「でも、傍で支える人が絶対にいるの。家の人以外に。それは……水穂ちゃんしかいないと私、本当に思うの。だから……お願い」

「……本当にいいの？」

「うん……お願い」

明日香はギュツと水穂の手を握った。

「ね？ そろそろ皆帰ってくるよ。部屋に戻ったほうがいいよ」
「……わかった」

水穂はまだ納得がいかない様子だったが、明日香は自分の想いは伝えきったので後悔はなかった。

水穂を見送り、ドアを閉める。暗い玄関でドアにもたれ、明日香はため息をついた

「あれ……？」

涙が出る。止まらない。

「……後悔なんてしてないのに。おかしい……な……」

明日香は座り込んで、涙をただただ流し続けた。

第24話 お座敷席（後書き）

自分の気持ちを押し殺してまでして、夏樹のことを守ろうとする明日香。その明日香を気遣い、最後まで夏樹のことを見てほしいと望む水穂。

明日香の強い意志に負けて水穂は夏樹を見守ることを決意するが、後悔していないはずの明日香からこぼれる涙。果たして、その涙の理由は……。

第25話 食堂の席

「いただきまーす！」

夕食の時間。5年生一同は食堂に集まり、待ちに待った夕食をとり始めた。夏樹は水穂と建都の間で食べている。向かいの席は和真。その右隣は未波。左隣は ちひろだった。

夏樹は黙々とご飯を食べる。その様子を少し心配そうに見つめる水穂。なんとか夏樹と接触する回数を増やさなければいけないと思う水穂は緊張もあり、思わず橋の進むスピードが遅くなる。

「……。」

夏樹が所在無げにキョロキョロと顔を動かした。よく見れば、夏樹の豆腐に醤油がかかっている。

水穂は目の前にあった醤油を手に取り、夏樹に手渡した。

「どうぞ」

「ありがとう」

夏樹がニコツと笑って醤油を受け取る。その笑顔を見るだけで、

水穂は緊張が解ける気がした。

「ねえ、朝倉くん」

「なに？」

「朝倉くんは、豚カツ好き？」

水穂の唐突な質問に夏樹はしばらく呆然としていたが、すぐに「うん。それよりエビフライのほうが好きかな」と答えた。

「そうなんだ。あのさ、私、ちょっとおなかいっぱいだから豚カツ一切れ食べてくれない？」

「え？ いいの？」

夏樹が嬉しそうに顔をほころばせた。

「うん！ ホントに、どうぞどうぞ」

「ありがとう！ いただきます！」

夏樹が嬉しそうにフォークで水穂の豚カツを一切れ、自分の皿へ

と持っていく。なんとか夏樹と接点ができ、なおかつ増えつつある。水穂にとつても明日香にとつても順調だ。

「おいしい？」

「うん！ 飯沼にもらったから余計においしい」

その一言に水穂は思わずドキッとしてしまう。

(ダメよ、ダメ。好きになることなんてないんだから……)

しかし、ドキドキが止まらない。こんなにドキドキするなんて正直、水穂にとっては予想していなかった事態だ。

「飯沼？」

夏樹に声をかけられてハッと我に帰る水穂。目の前に心配そうに覗き込む夏樹の顔が、接近しすぎなくらい近づいていた。

「どした？ 気分悪いの？」

「うっ、うっん！ そんなことないよ！」

「でも……顔赤いし」

「ああ！ なんでもないので、なんでもない、ホントに。ほら、冷めないうちに食べちゃおう！」

そう言って水穂はソースのかかったキャベツを半ば強引に押し込んだ。

「……！」

あまりに勢いよく飲み込んだため、喉に詰まってしまった。水穂の顔色が悪くなる。

「お、おーい。食べすぎじゃね？」

「ゲホッ、ゲホゲホ！」

夏樹が心配そうに声をかけると同時に水穂がむせ始めた。

「あー！ もうほら、だから言ったのに！ 水飲め、水！」

しかし、水穂のコップは空っぽだった。慌ててペットボトルを探すが、運悪くどれも遠くにある。

「水沼！ 俺のヤツ飲めよ」

「んんんん！ あめ！（ダメー）」

「ダメとかじゃねーよ、ホラー！」

夏樹は強引に彼のコップを水穂に持たせ、飲ませた。詰まっていたキャベツがすぐに流れて喉の違和感がなくなった。

「……ありがとう」

「いーえ。飯沼って意外とそそっかしいのな」

そう言いながら笑う夏樹の顔が、水穂の目に焼きついて離れなかった。それ以上に、さっきの口にしたコップが間接キスではないかと思うと、ドキドキがますます止まらなくなった。水穂の心が、どんだん夏樹へ引き寄せられる。

夕食も終盤へ差しかかった時。夏樹の顔がさつきから前後に揺れている気がしていたが、水穂が気づくとなんと、水穂の肩に顔を乗せて夏樹が居眠りを始めたのだ。

（え、え、え……！？ ちょ、ちょっとこれは困る……）

水穂の顔がみるみるうちに赤くなる。しかし、そんな水穂のことはまったく気にしないという様子で夏樹は居眠りを続けた。

「……。」

水穂は緊張した面持ちでジッと体勢を崩さずに固まったままだった。起こしてもいいのだけれども、もう少しこういう時間が続いてほしいとも思う。

「あ……。」

不意に明日香と目が合った。口パクで何か言っている。注意深くその動きを見守ると、確かにこう言っていた。

いい感じだね！

「なんか照れちゃう……。」

水穂は少し俯いて呟いた。すると夏樹の顔がますます水穂に近づいてきた。

（ひいひい！）

夏樹の髪からシャンプーの香りが漂う。男の子なのに、なんでこんなにいい香りがするのか水穂には不思議でたまらなかった。しか

し、問題が起きた。夏樹の髪の毛が水穂の口の辺りに当たり、さつきからムズムズして仕方がないのだ。

(も、もうダメ……!)

「ヒックシュン!」

肩が揺れて夏樹の顔がガクン!と揺れてすぐにそのまま水穂の脚に、ちょうど膝枕のような状態で夏樹の顔が着地した。

(ひゃあああああ!)

さすがに周りの生徒たちも気づいてザワザワと騒ぎ始める。さすがに耐え切れなくなった水穂は夏樹を揺らして起こした。

「朝倉くん! 起きて、起きて!」

「んあ……あ?」

かなり寝ぼけているらしく、目を開けても状況がつかめていないようだった。

「恥ずかしいってば! 早く起きてよ!」

「うわっ……わあ!」「ぐ、ぐめん!」

夏樹がようやく正気に戻って思わず勢いよく顔を上げた拍子に思い切り水穂の顎あごに夏樹の頭が当たり、そのまま水穂は椅子ごとひっくり返ってしまった。

「うあー! い、飯沼!」

夏樹は慌てて水穂を抱き起こしたが、既に半分失神状態だった。

「朝倉くん! なにやってるの!?!」

美智子が騒ぎを聞きつけて血相を変えてやってきた。

水穂の耳には何か騒いでいる美智子の声。目には泣きそうな顔をした夏樹が映っていた。

「とにかく、部屋で安静にさせないと。朝倉くん、一緒に連れて行ってあげて」

「……はい」

夏樹は申し訳ない気持ちがいっぱいであったが、同時になんとなく、水穂と以前より近くなれたのではないかとも感じていた。

廊下を歩いていると、水穂が小さい声で呟いた。

「朝倉くん……」

「なに？」

夏樹は優しい声で返した。

「私ね……別に朝倉くんが頭、私の脚に乗せたことは嫌じゃなかったよ？」

「そうなの？」

夏樹は驚いた様子を見せた。

「ただ……恥ずかしかっただけ」

「……そっか」

夏樹はそう言ったきり、何も言わなくなった。

部屋に着くと夏樹はすぐに布団を敷いて、そのまま水穂を寝かせてくれた。

「ゴメンね。なんかホント悪いね」

「いいよ。元はといえば俺のせいだしね」

夏樹が笑う。やっぱり、彼は笑っているのが一番だと水穂は心底そう思った。

「なんか……眠くなってきちゃった」

水穂の目がトロンとしてくる。

「バスの移動とかで疲れたんだよ。お風呂の時間まで俺もいるし、少し寝たら？」

「そうしよっかな……」

「うん。それがいいよ」

「ありがとう……。そうする」

「じゃ。オヤスミ」

「おやすみなさい」

そう時間が経たないうちに、水穂は寝息を立てて気持ち良さそうに寝始めた。

「……。」

夏樹はその水穂の様子を微笑みながら見つめた。

いま思えば、夏樹は本当に水穂のことをそういう風に見ていたの

かもしれない。少なくとも、これは嘘偽りなく言えることだった。

家族以外に、明日香以外に、支えが欲しい。

家族に頼りっぱなしではいけない。明日香にはもう、頼りにすること
で迷惑をかけられない。水穂しかない。

そう思ったときには 夏樹は、水穂の唇に自らの唇を重ね合
せていた。

他人^{ひと}を好きになる。

好きになった。

夏樹は生まれて初めて、それを自覚した。

第25話 食堂の席（後書き）

自分の気持ちに気づいたとき、夏樹はその感情を行動へと移してしまいました。夏樹を支えてくれている水穂。彼女がクラスメイトから大事な人へと変わった瞬間だったので。

第26話 隣り合う席

25日(金)。長かった自然学校もとうとう終わりになった。富樫小学校5年生はバスに乗り込み、七海市へ向けてバスは発車した。帰りの席は左から未波、建都、補助席に和真、水穂、夏樹の順。当然だが、夏樹は水穂にキスをしたことなど伝えていない。好きだという気持ちすら伝えていないのだから、そんなことなど伝えられるはずもなかった。

顔を向けられない。夏樹は水穂の顔を見るだけでドキドキしてしまうので、とてもではないが見れる状態ではなかった。思い出すだけで水穂の唇に自分のそれを重ねた光景が蘇り、なんだか落ち着かない気分になる。

水穂は水穂で、ちつとも自分の顔を見てくれない夏樹にモヤモヤした気持ちを抱いていた。

和真は居眠りをしているし、未波と建都はカードゲームに夢中。前後の席にいる生徒も話をしていたりしているので、静まり返っているのは夏樹と水穂くらいだった。

しかし、それも1時間もすれば全員が静まり返っていた。疲れが出て一人、また一人と眠りに落ちていく。水穂も眠気が限界に達し、ウトウトしていた。一方の夏樹は前夜、爆睡していたのでちつとも眠くない。

ふと気づくと、起きているのは夏樹だけになっていた。

さらに、けっこうな霧が出ていて冷え込んできていた。バスの車内もいちおうエアコンで暖かめの風は出ていたが、それでもけっこう車内も冷えている。

夏樹がなんとなく水穂を見てみると、寒そうに縮こまっていた。

「……………」

起こさないように上着を脱いで、それを水穂に被せる。少し寒くなったかもしれないが、水穂のためなら構わないと思えるようにな

った。

立ち上がって水穂に上着を着せた後、前にいたのが明日香であることにも気づいた。明日香も寒そうな様子だった。

「……。」

夏樹は何か羽織るものがないかどうか確かめた末、自分のトレーナーを脱いで明日香に被せた。女の子に寒い思いをさせるくらいなら、自分が寒いほうがマシ。夏樹はそんなことを考えていた。

「みーずほ！」

一人きりで教室で待っていると、夏樹が飛び切りの笑顔で水穂に話し掛けてくれた。

「夏樹くん！」

水穂も思わず嬉しくなっただけで夏樹の手を握る。教室には二人きり。夕焼けが綺麗で、ちょうど逆光になった夏樹の顔は暗くなって表情が見えない。

「……。」

「……。」

ふと見詰め合う二人。そのまま、少し背が高くなった夏樹の顔が水穂の顔に近づく。そして、そのまま夏樹の唇が重なる直前。

「ハッ」

気づけば、そこはバスの中だった。何人かの生徒はまだ眠っているようだが、窓の外の景色が山中から都会へと変わっていた。高速道路を降りたところらしい。緑色の看板が見えた。

「え？」

見たことのない上着。女の子のものではない。柄がけっこう派手で、男の子のものだった。それがちょうど水穂の口と鼻を覆うように被さっていた。そこから漂ってくる香りは、間違いなく夏樹のあのシャンプーの香りだった。

「え？ え？」

隣を見ると、半袖姿の夏樹がいた。

「やだ！　ねえ、朝倉くん、朝倉くん！　風邪ひいちゃうよ！」
「うーん……」

それでも夏樹は起きようとしめない。水穂の声に先に明日香が起きてしまった。

「え？　やだ！　誰の服!？」

その声でようやく夏樹が起きた。

「ああ、それ、俺の服」

夏樹が眠そうな目をこすりながら前の座席に体を出して、グイッと明日香の手に握られていたトレーナーを引っ張った。

「え？　なっちゃんの?」

明日香が唾然としている間に、今度は水穂から上着を引っ張って取った。

「だつてさあ、二人とも寒そうなんだもん」

「だからつて……半袖になるくらいだったらいいのに」

水穂が赤くなって答えた。

「いいの。俺が寒そうって思って、被せてあげたいって思ったからそれでいいの」

「……ありがとう」

水穂と明日香は同時に呟いた。水穂の周りにはまだシャンプーの香り。明日香の周りには柔軟剤の香りが残っていた。

(なっちゃんの香り……)

明日香はその残り香をソツと匂いながら、夏樹の優しさを思い出していた。

(夏樹くんの腕、意外と太かったな。筋肉質……かな)

水穂は半袖から見えていた夏樹の腕に少しドキキしていた。いろんな思いが交錯する中、バスは富樫小学校前に到着した。

「ゲホッ……ゲホッ」

解散式が終わり、自宅へ着くなり夏樹は咳をし始めた。

「やだ。咳?」

由利が心配そうに夏樹の額に手を当てた。

「熱っ！ ちょっと、熱測ってごらん！」

1分もしないうちに電子音がリビングに響いた。

「ウソ！ あんた、38度5分も熱があるじゃないの！ なんともないの！？」

「……そういえばちょっと寒い」

返答もボーツとしている。これは相当悪いようだ。

「とにかく、すぐに布団に入りなさい。後で冷えピタ持っていつてあげるから。飲み物はどうする？」

「ポカリがいいな」

「わかった。いい？ すぐに上がって布団に入るのよ？」

「はい」

夏樹はフラフラしながら自分の部屋に転がり込み、そのまま布団を押し入れから引つ張り出してすぐにイビキをかき始めた。

風邪の原因はわかっている。バスの中であれだけ薄着になったのだから、当然だろう。でも、夏樹は後悔なんてしていなかった。二人のために風邪をひけたなんて、本望じゃないか。そう思っていた。隣り合った席。真正面にいた明日香も隣り合っていたなんていえるだろうか。それはわからなかった。けれど、もうあんな機会はない気がする。

水穂の笑顔が頭をよぎる。そして、明日香の笑顔。

そのまま夏樹は、深い眠りに落ちていった。

第26話 隣り合う席（後書き）

水穂への気配り。明日香への気配り。夏樹は水穂のことが好きだと自覚したが、明日香への気持ちは忘れられない。それは明日香も同じだったのかもしれない。

その気配りの代償がもたらした風邪。この風邪がもたらすものは…
…？

第27話 夏樹の部屋の席

「ねえ、明日香ちゃん」

水穂が夏樹への手土産として持った給食のプリンを片手に明日香に話しかけた。

「なあに？」

明日香は明日香で、算数と国語のプリント、参観日の手紙を持っていた。

「朝倉くんの家、行ったことある？」

「まさか！ 全然ないよ」

「そっか……」

水穂はその返事を聞いて少し安心した。

「ねえ、それはそうとなつちゃんとの後何か進展あった？」

明日香はワクワクした様子を浮かべながら水穂に聞く。

「なーんにも。だって朝倉くん、きつとまだ明日香ちゃんが好きだよ」

「まつさかー！ だったらなんで私のこと興味ないような素振り見せるの？ 好きなら好きでなんか絡んでくるって」

「でも……」

「でも？」

その先は言わないほうがいい。昔のことをほじくり返してまでそんなことは聞きたくなかった。

「なんでもない！ それより、早く朝倉くんの家に行つてあげよ。きつと待ってるから！」

「そうだね！」

水穂と明日香は雨が止んだばかりの道を水たまりをよけながら、夏樹の家へと向かった。

「……」

「……」

いざ夏樹の家の前に立つと、緊張してインターホンすら押せないで二人は呆然と立っていた。

「お、押します?」

水穂が明日香をインターホンの前に立たせた。

「いやいや!そこは水穂ちゃんが」

明日香が後ろに回って水穂をグイグイと押した。

「や!きつとおばさんは私より明日香ちゃんのことをよく知っているはず」

また入れ替わって明日香が立つ。

「や!水穂ちゃんのほうをなっちゃんは待ってるって!」

「や!明日香ちゃんのほうが仲良しだし」

そんなこんなでグルグル入れ替わりを繰り返して5分が過ぎた。

そんなことをしているのだから息も切れてくる。

「ハア……ハア……」

明日香はすっかり疲れてしまっていた。

「こ、これじゃいつまでたってもラチあかないよ」

水穂も息を切らせている。

「それじゃ、こうするしかないよね?」

「そうだね」

明日香と水穂は同時にインターホンを押した。ピンポーン、と音がする。しかし、誰も出てこない。

もう一度二人で押すはずが、タイミングがずれてピンピンポーンと2回連続で鳴らすはめになってしまった。

「しまった……」

明日香が思わず水穂の後ろに隠れる。

「やっっちゃった」

水穂がオロオロしていると、シャツと言う音の後にガラガラガラ、と音がした。その音に反応して明日香と水穂が顔をそちらへ向けると、パジャマ姿で少し寝癖のついた髪をした夏樹が顔を出していた。「チーッス」

熱があるようで少ししんどそうだが、笑顔を見せてくれたので二人はほっとした表情を見せた。

「入りなよ。いま、母さん買い物で留守してるだけだから」

「い、いいの？」

明日香がもう一度確認した。夏樹が、つい最近まで笑っていたように、本当の意味で笑って二人を手招きした。

「しっ、失礼します！」

夏樹の部屋に入る前に、水穂がまるで職員室に入るときのように挨拶をした。

「失礼されます」

夏樹が少し意地悪そうに返事をした。明日香もそれを聞いてクスクス笑う。

「座りなよ。そのクッション二つあるでしょ。取ってテーブルの前にでも座って」

「う、うん」

明日香も水穂も緊張した面持ちでクッションを取り、言われたテーブルの前に座った。さつき夏樹が顔を出した窓側のほうに明日香布団の敷いてあるほうに水穂。

「これ、今日の給食のプリン」

水穂がプリンを手渡すと、嬉しそうに「俺、このカスタードプリン好きなんだ」と少し温ぬるくなったそれを見つめた。

「あ、あと手紙と算数と国語のプリント。これは宿題だって」

明日香がそれを手渡そうとすると夏樹がプーツと頬を膨らませた。

「ねえ、それ岡本がやっといてくんない？」

「バカ言わないでよ！ なっちゃんの宿題なの。自分でするの」

「チエーツ。熱がまだ37度以上ある人に宿題なんて出す大迫先生の意味がわかんない」

「ブツクサ言わずに頑張つてね」

明日香はテーブルの上にプリントを2枚置いておいた。

水穂はキョロキョロと夏樹の部屋を見渡した。

勉強机の上はやっぱり鉛筆やら勉強道具が散らかっていた。水穂の机もたいがい散らかっているが、夏樹よりは綺麗だったので少し安心したが、帰ってから片付けようと思った。

明日香もキョロキョロと物珍しそうに部屋を見渡す。さっき入ったときには気づかなかったが、押入れの横の壁に志田^{しだ}未来^{みらい}、岡本杏^{あけもとあん}理^り、福田^{ふくだ}麻由子^{まゆこ}のポスターが飾ってあった。

「なに二人して俺の部屋の調査してんだよ。恥ずかしいじゃん！」夏樹のその声にドキツとしてすぐに顔をテーブルのほうへ戻した。

「冗談だよ、冗談」

夏樹が大声で笑い出すと、つられて二人も笑ってしまう。

「夏樹、入るわよ」

由利が帰ってきていたようだ。部屋に入ってくるなり水穂と明日香は「こんにちは！ お邪魔してます！」と挨拶をした。

「あらあら、そんなかしこまらないで！ リラックスしてていいのよ」

由利は優しく二人に微笑んで、持ってきた紅茶とビスケットを差し出した。夏樹と一緒にそれを取ろうとしたので「あんたはこっち！」と手を弾いてポカリスエットを渡した。

それから他愛^{たわい}もない話を1時間ほど続けていたが、明日香が「お手洗い貸してもらっていい？」と言って下へ降りて行ってしまった。

「……………」

水穂は突然黙り込んでしまう。緊張のあまり、何を話しているかわからないのだ。夏樹の部屋に初めて入って、しかも二人きりになるなんて予想すらしていなかった。

「急に黙んなくてもいいじゃん」

夏樹が少しふてくされたように呟く。

「き、緊張しちゃって……………」

水穂もそう言われても何を話していいのかわからなかったの、やっぱり沈黙が続く。

「……………」

「……………」

沈黙ばかりが続く。

(明日香ちゃん！早く戻ってきて！)

トントン、と肩を叩かれたので振り向いた瞬間、夏樹の顔がものすごい近くにまで迫っていた。

「ふえっ!？」

しかし、夏樹は真剣な表情のままだ。

「あのさ、飯沼」

「はい……………」

しばらくためらった後、一気に夏樹は言った。

「俺、飯沼のこと好き」

「え……………」

水穂の顔があっという間に真っ赤になった。

「や、やだ。冗談やめてよ」。だって教室で見てたら夏樹くん、明日香ちゃんとすっごい仲いいじゃ……………」

「夏樹くん?」

「!」

ついうっかり、夏樹のことを「くん」付けで呼んでしまった。水穂は焦って言い直そうとするが、夏樹は半分押し倒す形で水穂のほうへ迫ってきた。

「やだ! ちよっ……………」

「飯沼は俺のこと嫌い?」

「……………」

「ねえ、どっ?」

水穂は真っ赤になりながら小さい声で答えた。

「好き……………です」

「……………ありがとう」

夏樹は初めてではないキスを、水穂にした。

「岡本、戻ってくるかも。ゴメンな」

夏樹は照れながらすぐに布団に戻った。

「うつん……」

水穂もなんとか明日香が戻るまでに顔が赤いのをなんとかしようと手で顔を仰いだ。

「なあ、水穂」

「へ!？」

水穂は急に下の名前で呼ばれたので真っ赤になってしまった。これでは一所懸命仰いだ意味がない。

「俺たち、付き合っつてことでいいよね？」

「……うつん」

「やった!」

夏樹が小さく微笑んだが、その中に少し後悔の念が含まれていたことを、水穂は知る由もなかった。

「……これでいいんだ」

明日香は夏樹の部屋のドアにもたれて、二人の会話をずっと聞いていた。胸が締め付けられるような思いがしたが、そろそろ部屋に戻らないと怪しまれる。明日香は深呼吸をしてから、ドアをノックして部屋へと戻った。

「それじゃ、また治ったら学校でね」

「おう。ありがと、二人とも」

玄関で由利と夏樹に見送られてから、二人は夕暮れの住宅街をてくてくと歩き続けた。

「そっついえばさ!」

明日香が思い出したように水穂に言った。

「私がお手洗い行ってる間、なんか進展あった!？」

「え……っつと」

水穂が少し戸惑った様子を見せた。

(しまった。なんかワザとらしかったかな)

明日香も少し緊張しつつ、水穂の返事を待った。

「明日香ちゃんだから言っておくね。私たち……付き合っつことにな

ったの」

わかっていたとはいえ、明日香に少なからずのショックが走った。「そっかー！ やったね、良かったじゃん！」

けれども、その気持ちを押し殺して喜びを表現する。しかし、意外にも納得がいていないのは水穂本人だった。

「ねえ、本当にこれでいいの!？」

「え?」

「だって、明日香ちゃんは夏樹くんのことずっと好きだったんでしょ?」

「やあだ、そんな昔のこと……」

明日香は水穂と目を合わせないようにそう呟いた。

「昔じゃないよ!」

水穂がグツと明日香の肩を掴んだ。思わず明日香も驚いて水穂の顔を見てしまう。

「ねえ、本当にこのままでいいの!？」

「……。」

「ホントは夏樹くんだったってきつと明日香ちゃんのこと……」

明日香はそつと水穂の手を掴んだ。

「なっちゃんに聞きもしないのに、そんなわからないこと言わないほうがいいよ」

「それじゃ、今からでも聞きに戻ろう!」

水穂が夏樹の家のほうへと戻り始めたとき、明日香がグイッとその手を引いた。

「ダメ」

「なんで!？」

「ねえ……自然学校で約束したでしょ?」

水穂の頭に、あのとときの明日香の声が響いた。

水穂ちゃんが、なっちゃんを好きだっていうことにしてほしい。

そうすれば、噂とか消えてしまう。

なっちゃんはステキな人だから、水穂ちゃんがなっちゃんを好きになるかもしれない。

そうだったとしたら、水穂ちゃんはその想いを貫いて。私は、あなたたちが幸せになるのを一番に思うから。

「……うん」

水穂は小さくうなずいた。

「だから、貫いてね」

明日香はニッコリ笑った。水穂はまだ少し納得がいかないようだったが、とりあえずうなずいた。

その後は無言のまま歩き続け、舞子原商店街の北にある大通りで「じゃあ、私はここだから」と明日香が水穂に挨拶をした。

「気をつけてね」

水穂が小さく手を振る。

「水穂ちゃんもね」

「うん……」

相変わらず元気がない。

「暗いな〜！ そんなで明日、学校に来ちゃダメだよ？」

「うん……」

これ以上一緒にいたら、水穂はますます暗くなるだろうと明日香は思い「それじゃね！」と言って家のほうへと走り出した。

後ろ髪を引かれる思いをしながら、明日香は何度も心の中で呟きながら家へと一気に駆け込んだ。

これでよかったんだ、と。

第27話 夏樹の部屋の席（後書き）

夏樹に告白され、付き合うことになった水穂。けれど、夏樹も水穂も明日香も、本心を隠したまま。そのまま季節はどんどん過ぎて行き、秋が終わろうとしています。

第28話 いつもと違う席

季節が移り変わるのは早い。日本は既に、12月を迎えていた。今年は何年にもなく暖かい冬になっていた。地球温暖化だとか難しいことは夏樹にはわからなかった。でも、ちょっと天気がおかしいな、とは思うようになっていた。

そんな12月。夏樹に1枚の手書きの手紙が届いた。それは、優翔からだった。

X'masパーティーのお知らせ

来る12月24日(火)に僕、坂上ゆう翔の家でクリスマスパーティーをします

クラスメイトや友達を中心にこのお手紙を送っています。

プレゼントとかそんなのいらないので、気軽に参加してほしいです

当日、待ってます

「……。」

夏樹はあの自殺未遂以来、優翔と顔を合わすことが極端に減っていた。この優翔のクリスマスパーティーは毎年あったが、今年はさすがに来ないだろうと思っただけに驚いた。

手紙の最後に、わざわざ書き足したと思われる夏樹宛のメッセージがあった。

会いたい。

夏樹と話がしたい。

お願いだから、来てください。

ゆう翔

なぜ優翔が自分の「優」の字をいつも平仮名で書いているのか夏樹は気になってだったが、今はそれよりもなぜここまでして優翔が夏樹に会いたがっているのか、真意がわからなかった。

考えた挙句、夏樹は水穂と一緒にパーティーに参加することにした。そして二人で現れた姿を見た優翔はかなり驚いた様子を見せた。「久しぶり」

夏樹は最近になって、ようやく自然に笑顔が出せるようになっていた。

「え……つと。こちらは？」

優翔が水穂のほうをジツと見て夏樹に聞く。

「ああ……クラスメイトで……その……」

言おうかどうか迷ったが、言った。

「いま付き合ってる、飯沼水穂」

「初めまして、飯沼です」

「……。」

優翔はポカンとしたまま二人を何度も見つめた。

「な、なんだよ。そんな見るなよ。恥ずかしいから……」

「い、いや。ゴメン！ それより入れよ」

「うん。行こ、水穂」

「お邪魔します」

夏樹と水穂は仲良さそうに廊下を歩いてパーティー会場であるリビングへ向かった。

「ゴメン……俺、全然知らなくって」

優翔の弟の部屋から出てきたのは、明日香だった。

「いいよ。私は知ってたから」

明日香はこんな手紙を、優翔からもらっていた。

Xmasパーティーのお知らせ

来る12月24日(火)に僕、坂上ゆう翔の家でクリスマスパーティーをします

クラスメイトや友達を中心にこのお手紙を送っています。
プレゼントとかそんなのいらないので、気軽に参加してほしいで
す

当日、待っています

P・S 夏樹、誘っておきます。俺も話したいことがあるので。
ぜひ来てね

夏樹が水穂同伴で来ることは事前に知っていた。それを承知で、
パーティーに来た。むしろ、彼らがうまくいつているのかどうか
心配で今日パーティーにそれを確かめに来たようなものだった。

優翔に悪い気はしたが、仕方がないと言いつ聞かせてきた。

「ゴメンな。なんか……」

優翔がばつ悪そうに呟いた。

「いいってば！ 私、純粹にパーティーを楽しみたかったしね」

「ホント？ 良かった。じゃあ、リビング行こうぜ」

「うん！」

明日香は優翔の後を追ってリビングに入った。

夏樹はしばらく水穂とジュースを飲んだりお菓子を食べたりして
いたが、しばらくいると緊張して汗が出てきた。夏以来、人の多い
ところにいるとなぜか落ち着かなくなり、気分が悪くなることが多
くなった。まだ、精神状態が安定しないために起きることだった。
それに、家のリビングや学校のような慣れた場所ではなく、いつ
もと違う席に座っているというのも緊張を高めている原因だった。
その様子を察した優翔が声を掛けた。

「夏樹。ちょっといい？」

「ああ……うん。水穂、ちょっと行ってくるね」

「うん。体調、大丈夫？」

水穂が心配そうに尋ねた。

「大丈夫だよ。ありがと」

夏樹は努めて笑顔で答えた。

部屋を出て外に出た。やっぱり少し寒いので、夏樹は思わず手に息を吐きかけた。

「ゴメンな。急に呼んだりして」

優翔が申し訳なさそうに話した。

「ううん。いいよ。それより、久しぶりだな」

夏樹が笑顔で話し掛けてくれたので、優翔もリラックスして話すことができた。

「それと……本当にゴメン。今まで、素っ気ないフリして……」

「え？」

「俺さ……お前が……その……あれ以来、様子がおかしいから怖くて、話しかけらんなくて……」

あれ。自殺未遂の件であるのは、夏樹もすぐわかった。

「しょーがないよ。俺、別に優翔がどうとか思っていない。俺が逆だったら、ゼツタイ話しかけないし」

夏樹はクスクスと笑った。優翔もつられて笑う。

「良かったよ。俺、夏樹に嫌われたかと思った。夏祭りの件もあったし。今日も……来ないと思ってたから……」

優翔は涙ぐんでポロポロと涙をこぼした。

「わわわ！ 泣くなつて、も」

夏樹は慌ててハンカチを優翔の頬に当てた。

「ありがとう」

しばらく沈黙が続いた。

「なあ、夏樹」

「なに？」

「お前、飯沼さんと付き合ってるの、マジ？」

「……マジだよ。ウソついてどうすんのさ」

夏樹は庭に置いてあった椅子に座った。違う人の家の違う椅子に座るのは、やっぱり少し緊張する。

「岡本は？」

「……………」

「お前、岡本のこと好きじゃなかったのかよ？」

「……………」
「好きだったよ」

「じゃあなんで、飯沼と!？」

「俺といると、岡本がイジメられるから……………」だから、付き合わない
って決めたんだ」

「……………」

「それだけ」

優翔はそれ以上、問い詰めも何もしなかった。ただ、さすがは親友だと思える行動をした。

初めて、男友達に頭を撫でられた。

「お前……………」強いな」

「……………」

「俺だったら、そんな風に……………」他人のことまで考えられないよ。夏

樹は、強い」

「強くなんかないよ」

夏樹の声が急に震えだした。

「俺、ホントは明日香が好きだよ。でも、水穂も好きだよ。もう、何がなんだかわからないんだ。自分が自分じゃない気もすることがあるし、もう頭の中がグシャグシャで……………」

「……………」お前さ、ずっとそんなだよな」

「え？」

「なんか、自分が他人に迷惑を掛けないように、自分の気持ち隠して毎日過ごすっていうか……………」なんかさ、そんなのしんどくね？」

「……………」

「もつと、ポジティブに行こうぜ!」

優翔はやっぱり、いい友達だ。夏樹は心底そう思った。

「よし! そうと決まればとりあえず中に戻って料理とケーキ食

「べようぜ！」

「ええっ!?!」

「ほーら、グズグズすんな！ レッツゴー！」

優翔は強引に夏樹を家へ連れ戻して、リビングに連れて行った。

第28話 いつもと違う席（後書き）

クリスマスパーティーで絆を取り戻した優翔と夏樹。クリスマスパーティーはまだまだこれから！ 思う存分楽しんで想い出は作れるでしょうか？

第29話 ランダム席

「夏樹、このくじ引き引いて」

水穂とジュースを飲みながら話をしていたところに、優翔が箱を両手に抱えてやってきた。

「何？ このくじ」

「いいからいいから！ ほら、飯沼さんも引いてよ」

「なあんか怪しいコト考えてんじゃないの」

夏樹が少し笑いながら優翔の持つている箱を振った。ガサガサと音がするあたり、くじはまだたくさん残っているようだ。

「いいじゃん朝倉くん。引こう？」

水穂が率先して箱の中に手をつ突っ込んでくじを引いた。

「おつ、飯沼さん意外と積極的だね？」

「まあね！ ほら、朝倉くん」

「わかったよ」

夏樹は水穂が手をつ突っ込んだばかりの箱に同じようにしてくじを引いた。

ものの5分もしないうちに参加している全員がくじを引き終えた。優翔を含めて今日の参加者は14名。くじを引いた後に優翔の両親が長テーブルをセッティングしてくれていた。座席は7つずつ。参加者それぞれが向き合う座席配置になる。

「えーと、それじゃこれから座席に座ってもらうんだけど、窓際の席が奇数、ドア側の席が偶数番号の人に座ってもらうんで、よろしくです！ それじゃ、くじオープンしちゃってください！」

優翔の一言で参加者全員がくじを一齐に引いた。夏樹も同じようにくじを引くと、そこには「6」の数字。

「ねえねえ、朝倉くんはどうだった？」

水穂が興味津々という表情で夏樹のくじを覗き込んだ。

「あ……6番だよ」

「えー！ 残念。私、12番なんだ。席も向かい合わせにならないし、隣同士でもないね」

「ああ……。でもさ、帰りだって一緒に帰れるし、学校も一緒じゃん」

夏樹が笑いながらそう言うと、水穂もつられて笑った。

「ほら、飯沼も座りなよ。オレも座るから」

「うん！ それじゃ、また後でね」

水穂が座ったのを見届けて、夏樹も番号の席に座った。向かいを確認したが、どうやら優翔のクラスメイトの男子らしく、夏樹と面識はなかった。夏樹が次に探したのは、意識していたわけではないのに明日香の姿だった。

明日香は9番の席に座っていた。話をするにはちょっと遠すぎる距離だったうえに、明日香は隣にいたこれはまた優翔のクラスメイトらしい女子生徒と話しこんでいた。

「はい！ 見て見て！」

優翔が小さなボードに14人の名前が書かれた紙を貼り付けていた。

	窓際		ドア側
1	戸川	2	松本
3	西山	4	大飯 <small>おおい</small>
5	森崎	6	朝倉
7	田所	8	久堀 <small>ひさほり</small>
9	岡本	10	栗田
11	坂上	12	飯沼
13	前園	14	鹿島

「それで、この番号あるんだけど、この番号でいうと3番の人は1番の人に持ってきたプレゼントを渡してください！ 2番の人は4番の人についていう順で渡してください。あと、1番の人は2番の人、

14番の人は13番の人に渡してください！ あ、ちなみにプレゼントは今から預かって、包装紙などを全部統一させてもらいます」
優翔の両親がプレゼントを預かっていく。

それから優翔はCDをセッティングして音楽を鳴らし始めた。夏樹は聞いたことのある曲だったが、何の曲かが思い出せない。

「あつ、山下達郎の『クリスマス・イヴ』だよ！」

鹿島という女の子が大声で言った。すぐに前園という男子が「なんだよ、辛気くさい曲流すなよ、優翔〜！」と笑い出した。

「それで、この曲を母さんが止めてくれるからそのときに持っている回ってきたプレゼントを止めてください」

すると曲が流れ出した。同時に両親が包装も箱も統一された夏樹たちのプレゼントが返ってきた。

「ちなみに、今の時点ではちゃんとみんなのプレゼントが返ってるのでそれはご心配なく！ はい、それじゃいきまーす」

イントロから流れ出した曲。プレゼントが回るや否や、すぐに曲が止まった。夏樹の持ってきたプレゼントはいま、水穂の手にある。それに水穂も気づいているらしく、嬉しそうにそれを握っていた。

すぐに曲が流れ出した。今度は長い。もう夏樹も自分のプレゼントがどこへいったかわからない。プレゼント包装が違うのならわかりそうなのだが、残念なことにさっき包装紙を全部統一してしまったためにサツパリ誰のものかわからなくなっている。

結局、曲が全部流れきるまでプレゼントは回り続けた。こうなってしまうってはもう、誰も自分のものがどれなのか、さっぱりわからない。自分のが回ってきている可能性も、途中で回す順番をランダムにしてしまったためにほとんどなくなってしまった。

「はい！ それじゃ、これでクリスマスプレゼントは皆に回ったと思います！ 今日のパーティーはいかがでしたか！？」

優翔の問いに全員が「楽しかったです！」と返事をした。

「それじゃ、今日のクリスマスパーティーをこれで終わります！」

「飯沼？ どしたの？」

パーティーを終えてからすぐに優翔の家を出た夏樹は、水穂がしんどそうに歩いていることに気づいた。

「なんか……ちよつと頭痛くて」

「頭痛？」

夏樹が水穂の額に手を当てると、とても熱くなっていることに気づいた。

「おい、飯沼まさか熱あんのに今日来たのか？」

「……。」

「そうなんだな？」

水穂は何も言わない。しかし、それが逆にイエスであるということを知った夏樹は知っていた。

「早く帰ったほうがいい。ほら、急ぐぞ」

夏樹は水穂の体をしっかり支えて歩き出した。その目の前を、真っ白いものが降っていく。

「あ……雪だ」

同じ頃、一人歩いていた明日香も手のひらに落ちてきた雪に気づいていた。

「雪……」

今年の冬は、暖冬だと聞いていた。それにも関わらず、雪が降っている。天気予報なんてものはあまりアテにならないものなのかもしれない。

「これが知ってる場所だったら、ロマンティックなだけだなあ」

明日香がため息を漏らすと、白くなってすぐに消えていった。

実は、明日香はいま自分自身がどこにいるのかサッパリわかっていなかった。あれだけ顔を知っている優翔の家の場所を実は全然知らなかったのだ。

「ヤッバいなあ……。今日に限ってなんで私ケータイも忘れちゃったんだろ」

路傍に座り込んで手袋をしても冷え切った手に息を吐きかけ

た。その息もすぐに白くなって消えていく。

「誰かと一緒に帰ればよかった」

不安になってきた明日香は立ち上がり、公衆電話がないか探し始めた。災害時に携帯電話が使用できないという事態を想定してか、最近NTT東日本では公衆電話を再設置する動きが出てきている。

しかし、探せど探せど公衆電話は見つからない。さらに動き回ったことでますます現在地がどこなのかわからなくなっていた。ここが七海市なのかどうかすら疑わしい。

「参ったなあ……」

もう一度座り込んでため息をつく。するとそのすぐ後に、聞き慣れた声が明日香の耳に入ってきた。

「それじゃ、お邪魔しました」

水穂を送り終えた夏樹は水穂の母に挨拶をし、雪の散る中家路を歩き出した。

「うわっ……寒っ」

雪が降り始めたことでますます寒さが厳しくなっていた。夏樹はマフラーに首をすぼめてあまり明るくない住宅街を歩いていく。

しばらくすると、後ろからスタスタと足早に近づいてくる足音が聞こえてきた。振り向くが、暗くて誰かはつきり見えない。ふと前を見れば「チカン注意！」の看板。夏樹は男の子だったが、なんとなく嫌で足早に歩き始めた。すると、その足音も近づいてくる。

（な、なんなんだよ）

夏樹は走ろうとして体勢を変えたが、その瞬間声が聞こえた。

「待って！ なっちゃん！」

振り向くと、息が切れながらも走ってくる明日香の姿が目に入った。

「岡本？」

「み、道に……迷っちゃって……ハア、よかった。知ってる人に会えて」

「道に迷ったって……。じゃあ行くときはどうやって来たのさ？」

「地図見て」

「その地図はどうしたわけ？」

「優翔くん家に忘れてきちゃって……」

「……プツ」

夏樹が笑い出した。

「な、なによ？」

「岡本って、意外と忘れっぽいんだな」

夏樹が笑顔で明日香のほうへ近寄りながら呟いた。

雪がウツスラと積もってきた。降り方も強くなってきた。明日は大雪かもしれない。

「雪なんてこの冬初めてかもね」

明日香は手を広げて雪を受け取りながら楽しそうに言う。一方の夏樹は明日香の手に行っているプレゼントが誰のものか気になって仕方なかった。

「な、なあ、岡本」

「何？」

「その……なんていうか」

「あ、そうそう！ 私なっちゃんに聞きたいことがあってさ」
遮るように明日香が喋り始めた。

「う、うん！ 何？」

「なっちゃんのプレゼント、誰のだった？」

「え？」

「ちょっと開けてほしいな。見てみたい」

「うん、わかった。開けるよ」

夏樹は内心ドキドキしながらプレゼントを開ける。ひよっとしたら明日香のプレゼントかもしれない。そんな期待を持ちながら。

プレゼントを開けた瞬間、バネの付いたピエロの顔が飛び出してきて思い切り夏樹の鼻を叩きつけた。

「うあっ!?!?」

夏樹はプレゼントを落として鼻を痛そうに押さえた。

「きゃ、ちよつとヤダ！ 誰よこんなの入れたの！」

明日香が慌ててプレゼントを見ると何とも下手な字で「まえぞの」と書かれていた。

「アイツだ……」

夏樹は半泣きになりながら鼻をさすった。

「大丈夫？」

明日香がハンカチで夏樹の涙を拭き取った。

「ああ、平気。ありがとな」

しばらく沈黙が続く。

「それよりさ、寒くなってきたから帰ろうぜ」

「あ、うん……そうだね。帰ろう」

二人はそのまま無言で歩き出した。

20分ほど歩くと、舞子原商店街の明日香の家に着いた。すっかり雪が一面に積もり、まさにホワイトクリスマスだ。

「それじゃ……また来年、かな？」

夏樹が明日香の頭に付いた雪を払った。いつのまにか夏樹の背が明日香の頭より少し高くなっていた。それを意識すると、思わず明日香は赤くなってしまった。

「うん。また、来年ね」

「じゃ」

そう言っただけで夏樹はいま来た道を引き返した。しばらく話をしなくなっているうちに、二人はずいぶん話が下手になった。明日香はそう思った。

「え……」

夏樹は足を止めた。明日香が後を追ってきて、夏樹のジャンパーを引っ張っている。

「岡本？」

「……かないで」

「何？」

「行かないで」

そう、はつきり言った。夏樹も思わず固まってしまふ。

「……なに言ってるんだよ。ほら、もう帰らないと家の人心配するからな」

「……。」

夏樹はそつと明日香の頭をもう一度、撫なでた。

「オレは、どこにも行かないよ」

夏樹の記憶が蘇る。あの日、夏樹が火の見櫓でしたこと。きつと明日香はそのことを言っているに違いない。そつ夏樹は思った。

「……約束、してね」

明日香が笑顔で言う。

「もちろん。どこへ行っても、きつと帰ってくる」

「きつとだよ？」

「うん。さ、もう帰ろう？」

「……わかった」

そつ答えたが、夏樹が見えなくなるまで明日香は手を振っていた。

「意味が違うよ……」

明日香はそつ呟いた。

第29話 ランダム席（後書き）

夏樹と明日香が出逢った2002年がまもなく終わりを告げようとしています。しかし、夏樹は明日香の言葉をきちんと理解しないまま、履き違えたままの答えを彼女に出したのでした。

第30話 置き去りの席

「……………」

夏樹がふと目を覚ますと、煌々（こうこう）と灯かりの点いた自分の部屋の電気が目に映った。

「寝てたのか……………」

時計は午後10時半を指していた。

「夏樹？ 寝てるの？」

姉の陽乃がドアをノックした。

「いや……………起きてる」

今までは寝ていたけれど、今はもう起きているのであながち間違いではない。

「入るわよ」

風呂上がりらしい陽乃は頭にバスタオルを巻いていた。

「これ、夕方に届いてたわ」

夏樹が陽乃から手渡されたのは1枚の手紙だった。差出人の名前には見覚えがある。

「でもどうせアンタ、行かないでしょ」

陽乃は夏樹の学習机の椅子に座って言った。この手紙が前に来たのは高校1年生の秋だった。夏樹はその時、とても行く気分にはなれなかったので、欠席と返事をした覚えがある。その時も手紙を渡してきたのは陽乃だった。

「……………今年は、行こうかな」

「あれ？ どういう心境の変化？」

陽乃は少し驚いて夏樹のほうを見た。少し寂しそうに笑う夏樹。

「区切りをつけるため、かな」

「……………そう」

陽乃もその言葉が何を意味するのか、なんとなくわかっている。だからこそ、あえて口にはしないのだ。

「まあ、せっかく行くんだし楽しんでおいでよ。じゃ、おやすみ」
「おやすみ」

陽乃は小さく手を振って部屋を出た。ボタン、と隣の部屋のドアが閉まる音を聞いてから、夏樹は手紙の入っている封筒を開けた。

第2回 富樫小学校6年2組 同窓会のお知らせ

2009年12月6日(日) 18時より、登戸駅前のレストラン「ウエルシア」で同窓会を行います。前回の同窓会に出席できなかった方も、ぜひ出席ください。お待ちしております。

同窓会

幹事 坂上優翔／飯沼水穂

ご出席

ご欠席

懐かしい名前が書かれている。さすがに優翔はもうひらがなで名前を書くことはなくなつたようだ。

とりあえずボールペンを手にはしたが、出席と欠席のどちらに丸を付けようか迷ってしまう。夏樹は6年2組に対してあまり想い出も未練もなかつた。富樫小学校よりも、ずっと大切な場所と大切な友達、そして大好きな自分の座席いばしがあつた。

それでも、区切りをつけるために夏樹はこの1ヶ月ですべてを片付けるつもりでいた。綾音のために。家族のために。そして、夏樹自身のために。

夏樹はためらうことなく「ご出席」の「ご」の字を消し、出席に丸を付けた。

「まずは……ここからだ」

あの日のことが蘇る。それを思い出すと、辛く、苦しい。なぜあ

の時、あんなに残酷なことができたのか理解に苦しむ。あの時の自分に会えるのなら、夏樹は思い切り自分を殴り飛ばしてやりたいほどだった。

ひよつとすると、もう誰もそんな昔のことはあまり気にはしていないかもしれない。しかし、夏樹自身がその思いに囚われ、まるで自分だけ置き去りにされているような感覚がしていた。

夏樹はもう一度、葉書の字を見つめた。その視線は「飯沼水穂」の字を、しっかりと捉えていた。

第30話 置き去りの席（後書き）

夏樹だけが囚われているかもしれないある「想い」。その想いを少しでも溶かすため、夏樹は同窓会への出席を決意します。夏樹がした、残酷なこととは……。

第31話 同窓会での席

12月6日。

夏樹は七海市クリエイイトホールと呼ばれる会館の3階にある中宴会場に向かって階段を上がっていた。

今日はいよいよ同窓会である。昨日はなかなか寝付けず、若干寝不足気味の夏樹だったが、それよりも緊張のほうまよが勝っていたのであまり眠気は感じない。

階段を上がり終わると、少し先に受付らしい場所を見つけた。受付では簡単な手続きが必要だったので、そこでまず当時のクラスメイトだった人物と会うことになる。しかし、夏樹はこのクラスに在籍はしていたものの、面識のある者はほとんどいなかった。なぜなら、七海市から遠く離れた場所に一時的に移り住んでいたからだ。結局、卒業式にすら出席しなかったこのクラスの同窓会の葉書が届いたこと自体、夏樹にとって驚きのほか何でもなかった。おそらく優翔と水穂が同窓会幹事だからこそ届いたのだろう。夏樹はそんな風に思っていた。

「こんにちは！」

受付の女の子が明るく声を掛け、夏樹の顔を見てから一瞬強ばったような気が夏樹にはした。

「こんにちは。朝倉夏樹です」

夏樹は冷静に自分の名前を伝えた。

「はい……。朝倉くんですね。では、名札をそのテーブルで書いて中へどうぞ」

「ありがとう」

夏樹は去り際に彼女の胸についていた名札を見た。「中塚麻里」と書かれていた。彼女も6年2組だったんだな、と夏樹はそこで初めて知った。

中に入ると、6年2組の生徒の半分くらいがあつまっているよう

だった。男子が少なめ。おそらく開始ギリギリに来るのだろう。

なんとなく、所在無げな夏樹は適当にテーブルに着いた。左隣の男子生徒を見た。彼もまた、夏樹の顔を見てばつ悪そうな表情を浮かべた。

名札を見ると「半田敬吾」という字。

（ああ……。だろうな）

話しかけづらいのも当然だろう。あれから謝罪もされないうちに消えるように夏樹はこの富樫小学校を去った。それから麻里、萌、敬吾、恭輔とは一度も会っていない。急にこんな所で会ったところで謝るのも変だろうし、だからといって普通には話しかけづらい。

右隣の女子は、全然知らない子だった。正面にはまだ誰もいない。夏樹は仕方なく、目の前のペットボトルからジュースを注ごうとした。その時、敬吾の手が重なった。

「……………」

夏樹は特に表情を変えず、パツとボトルから手を放した。敬吾は遠慮なくボトルを手にし、自分のほうへと持っていく。

（やっぱり変わってないな。まあ、期待してたわけじゃないけど）

すると、そのボトルが夏樹のコップに近づき、トクトクと音を立てて夏樹のコップをジュースが満たしていった。

「え……………」

「ひ、久しぶりだね」

敬吾は少し緊張している様子を浮かべたが、努めて笑顔で話しかけた。

「ああ……………うん」

急に話しかけられて、夏樹も少し戸惑った。

「いま、どこの高校？ 俺は風見台高校に行ってる」

「そっか。俺は七海高校」

「七海か。ちよつと遠いよな」

「まあな」

会話が途切れた。敬吾もどうしていいかわからないようだった。

その時、正面の席に女子が座った。

「あ……」

夏樹は胸が痛むような感覚に襲われた。胸の名札には「飯沼水穂」の字。

「朝倉くん……だよな？」

「飯沼……」

「それに、半田くん。二人とも、久しぶりだよな」

「ああ！ 飯沼じゃん！ 久しぶり」

敬吾は「よく来てくれた」と言わんばかりの嬉しそうな表情を浮かべた。水穂は笑って、夏樹に言った。

「来てくれたんだ。ありがとうね」

夏樹は思わず赤くなってしまう。それから、少し小さい声で返した。

「うん……なんか、会いたくなって」

「そっか。後で優翔くんやちひろちゃん、萌ちゃんも来るから、みんなで久しぶりに話そうよ」

「……」

「ね？」

水穂は相変わらず優しい子だ。言葉遣いでわかる。しかし、その中にもしっかりと強さがある。

「そうだな」

夏樹は微笑んで返事をした。

同窓会が始まってはや1時間。全員が集まるのは珍しいと思いつつ、夏樹はジュースを口にした。少しぬるくなったオレンジジュースが喉を通っていくのがハッキリとわかる。

「朝倉くん」

水穂がトントンと肩を叩いて夏樹を呼んだ。

「なに？」

「ちよっと、外に出ない？」

「外？ この寒いのに」

「うん。ちよつと話したいことがあるんだ」

「わかった。すぐ行くよ」

夏樹はパーカーを羽織って中宴会場を出た。水穂が少し前を歩いている。この寒いのに、あんなに短いスカートをはいている。夏樹は思わずスカートの少ししたあたりを見てから、顔を赤らめた。

水穂がバルコニーらしいところへ通じる窓を開けると、冷たい風が吹き込んできた。夏樹も慌てて後を追う。

「……！」

外へ出ると、そこにいたのは恭輔、敬吾、ちひろ、優翔の4人だった。

「よう」

恭輔がぎこちない笑顔で夏樹に手を振った。

「久しぶり……」

夏樹はいつもより幾分低い声で返した。優翔がいつもの夏樹ではないことに真っ先に気づいたようだった。

「元気だった？」

ちひろの声。少しやわらかくなった感じはするが、夏樹の耳に届くこの声はあまり好きになれない。小学校の頃の嫌味があった声が蘇ってくる。

「まあ……」

なぜ水穂がここへ自分を呼んだのかわからない夏樹はなんとなく落ち着かなくなってきた。沈黙が続くにつれて、夏樹はだんだんイライラしてきた。

「なあ、なんでここに俺を呼んだの。飯沼」

「あつ……えつと」

水穂はチラチラとちひろのほうを見た。ちひろが少し歩み寄ってきた。

「今さらだけど……小学校から中学校のことを、謝りたかったの」「は……？」

恭輔が近寄ってきて、勢いよくお辞儀をして謝りだした。

「ゴメン！ 謝って許されるようなことかどうかはわかんないけど……。俺、小学校でお前に本当にヒドいことをした。でも、謝れなかった……。あんなことをするまで俺、お前を追い詰めてるだなんて思ってたんだよ！」

夏樹は黙り込んでしまった。

「本当に……ゴメンなさい」

ちひろが呟いた。心配そうな顔をして優翔や水穂が夏樹を見つめている。

「ハッ……」

夏樹が突然笑ったので全員が驚いた顔をした。

「今さらそんな前のこと言われたって……困るし」

ハッキリ言った。自分が思っていたことを率直に言った。

「どうだろうね。あの時……俺がもし火の見櫓から飛び降りて死んで、いまここにいなかったら同窓会で俺の話するようなヤツ、この中にいるかな？」

「……」

誰も口を開かない。夏樹は自分でも不気味に思うくらい、冷静に続けた。

「だってさ。どうよ。現にもう岡本明日香が……いなくなってからずいぶん経つけど、彼女もこのクラスに在籍してたろ？」

優翔から聞いたことだ。明日香は2組になって間もなく、転校したのだ。

「今日、このクラスで一回でも岡本の話したヤツ、いる？」

「……」

誰も答えない。答えられないのだ。実際に話してなんかいないのだから。

「ほらね。俺にそんな風に謝るのは、俺が今生きてみんなの目の前にいるから。明日香と同じようにいなくなったら……名前すらも出てこなかっただろうね」

長い沈黙。冷たい風が全員頬をなでる。

「飯沼と優翔だけには……俺からも謝るよ」

水穂がハツとした表情を浮かべて夏樹を見た。

「ゴメンな？ 黙ってあんなことして……」

「いいよ……。私、朝倉くんの気持ちは痛いほどわかるから……なんて、またわかりもしないのにこんなこと言っちゃってなんだけど……」

夏樹は首を横に振った。

「俺が全部悪かったんだ。飯沼は、悪くない。なあ、あの時のこと、怒ってる？」

今度は水穂が首を横に振った。それを見て夏樹がホツとした表情を浮かべる。

「よかった。それが聞けただけでも、来たかいがあったよ」

「……」

「優翔」

優翔はジツと夏樹を見つめて放さない。

「ありがとね。いろいろ。マジで」

「気にすんな」

「……」

それだけで十分だった。二人には、この会話だけで意図することがハッキリ伝わる。

「のど渴いたな……」

夏樹は恭輔の傍にあった缶を手にしてグイッと中身を飲んだ。

「あっ！」

恭輔が叫ぶ。

「なに？」

「それ……カシスオレンジなんだけど……」

「へ？」

夏樹は呆然とする。缶には「これはジュースではありません！」の表記。

5分もしないうちに夏樹は真っ赤になって、まるで子ども返りしたかのように騒ぎ出した。しかも、父親らしい人の名前を叫んで泣きじゃくるばかりだ。

困惑する恭輔やちひろをよそに、事情を知る優翔だけが、あの時の同じように夏樹に語りかけた。

「夏樹」

「やだー！ やだ！ 俺、離れたくない！ 七海にいたい〜！」

優翔がニツコリ笑って夏樹の手を握った。

「聞き分けのないこと言うなよ。別に一生の別れじゃないじゃん」

「やだ……。だって……」

「また会える。絶対、また会える……。だから、な？」

「絶対だよ？」

「うん。絶対」

「……わかった。俺、頑張る」

「待ってるね」

「うん……」

そう言い終わると、夏樹はスウスウと寝息を立てて眠ってしまった。

「坂上くん……。今の、どうしたの？」

水穂が聞いた。

「ああ……。もういいだろ。そろそろ話すぜ、夏樹」

優翔は夏樹をロビーへ運んでから4人を中へ呼んで、話し始めた。

第31話 同窓会での席（後書き）

突然の夏樹の退行現象。そこで交わされた夏樹と優翔のやり取りが示す過去とは……。

第32話 血染めの席

「……………」

夏樹が靴箱を開けると、箱が転がり落ちてきた。

「あんなことあっても……俺にこんなのくれる人いるんだ」

そう思うと夏樹は少し嬉しくなった。

月曜日。ただそれだけなら、男子も女子もなんら変わらない週明けの日を過ごすだろう。しかし、今日は違う。

2月14日だ。言わずと知れた、バレンタイン。

夏樹は転がってきた箱の裏を見た。差出人の名前があるかと思っただが、残念ながら「5年5組」と書かれた字が辛うじて見えるだけで、名前の部分は油性ペンで消されていた。

「まあ……受け取るときですか」

夏樹は少し嬉しそうに笑い、教室へ入った。

「おはよ〜」

夏樹がそう言ったところで、別に返してくれる人はいない。

教室へ入ると、予想どおり男子も女子もザワついているようだった。夏樹は黙って席に着き、その様子を見守る。

去年は萌や麻里もチョコレートをくれたが、今年は期待できそうにない。別に夏樹は期待などしていなかったが、こうした行事が好きな夏樹は少し寂しく感じていた。

「あの……………」

夏樹は自分を呼んでいるのかと思いつつ振り返った。すると、水穂が箱を片手に立っているのだ。

「おはよ！ どした？」

「あの……………これ。手作りなんだけど……………その、バレンタインだし……………」

「えっ……………」

嬉しかった。けれど、夏樹には先ほどのチョコも合わせてもらっ

たところで食べられない理由があった。

「チョコレートアレルギーだ。」

「あ、ありがとな！ でも……」

「……？」

「あーっ！ 飯沼が朝倉にチョコあげてるー！」

二人が驚いて振り返ると、男子生徒がよってたかつて夏樹の周りに集まっていた。

「やー、こんなクラスでもチョコもらえるなんてうらやましいー！」

「飯沼も物好きだよなあ」

それを聞いているクラスメイトたちがグスクス笑う。水穂は慌てて箱をしまつて言った。

「ゴメン……。迷惑だよな」

その表情は、夏樹の胸が痛むほど悲しげだった。

「そ、そんなこと……！」

動いた拍子にランドセルにしまったはずの靴箱に入っていたチョコレートが落ちてきた。

「あっ！」

「うわあ！ 見るよ、朝倉のヤツ！ もうチョコレートもらってるのに飯沼のチョコは断る気だぞ！」

「やー！ 飯沼と仲いいのになあ。なんでもらってあげないの？」

夏樹は真っ赤になってしまった。水穂は「やめてよ。やめて！」と叫ぶが、男子生徒たちは茶化すのをやめようとはしない。

「あ！ わかった、そのチョコ絶対岡本からのんだぜ！」

「あー、なるほどね！ 本命からチョコもらったんだから、他の女子からはもらえないよなあ」

夏樹の周りをなないことばかり言い続ける男子生徒たちの言葉が飛ぶ。我慢しきれず、半ば強引に夏樹は水穂の持ってきたチョコレートの箱を開け、しばらく見つめた後そのチョコレートを頬張った。

「なっちゃん……！」

明日香が同時に教室へ入ってきた。

「なんで!? なんで! ダメじゃん! お姉さんと約束したんじや……」

「平気だよ」

優しい目で、夏樹は明日香にそう言った。

「俺なら、大丈夫だから。な?」

「……ホントだよな?」

明日香はもう一度、聞き返した。

「ああ」

水穂や男子たちは意味がわからず、ただ呆然と二人の会話を聞くしかなかった。ちひろは、少し離れたところからその様子を見守っていた。

「それで、こういう言葉を接続詞って言うんだけれども……」

1時間目、国語。まだ元気な生徒たちは熱心に授業を聴いていたのだが、夏樹はもうそれどころではなかった。

腹痛がスゴいのだ。ただ食べ過ぎたときの腹痛ではない。ズキン、ズキンと全身に響くような腹痛。脂汗も出てきている。

(やつぱ……やばかったかな)

夏樹はおなかを押さえながらなんとか腹痛が収まるのを待っていた。

「え?」

夏樹のノートに赤い斑点がポタポタとこぼれてきた。

「ウグッ……」

夏樹の右隣には麻里が座っている。その耳に聞いたことのない夏樹の声が聞こえた。それに反応して左を向くと、夏樹が激しく嘔吐してノートが嘔吐物で汚れた瞬間が見えた。それからすぐに真っ赤な何かが口から吐き出された。

「ゲボオッ! グエエエッ!」

激しく嘔吐し、血も混じってあつという間にノートや教科書、筆

箱が汚れていった。

「きゃあああああああ〜！」

麻里と夏樹の左にいた女子が悲鳴を上げた。美智子が振り向くと、床と机一面に夏樹の血と嘔吐物がぶちまけられた後だった。

「朝倉くん!？」

「ゲオゲホゲホッ！ オエエエッ……ゲボッ！」

美智子が近寄るより前にさらに嘔吐し、夏樹は椅子ごと倒れてしまった。吐き出された血が麻里のスカートを汚した。

「イヤアアアアアアッ！」

水穂、明日香、萌。ほとんどの女子生徒が悲鳴をあげ、青ざめている。男子生徒は呆然と立ち尽くすばかりだ。

「ああ……ああ！ 朝倉くん、どうしたの！ しっかりして！ 朝倉くん！ ど、どうしよう。どうしよう……！」

美智子もオロオロしてすっかり平常心を失っている。

「ゼエー……ゼエー……」

息が苦しいのか、喘息ぜんそくのような症状も出てきた。鼻、口と両方から血がしきりに出ている。

「先生、どうしま……ウツ!？」

4組の担任である山藤先生さんとうが悲鳴を聞きつけて教室内に入ると、血に染まった夏樹の服、机、椅子や床が目に入った。

「先生！ 先生！ しっかりして！ すぐに救急車を呼びに行ってください！」

「……。」

「大迫先生！」

「ああ……救急車……そうですね、はい！」

それからようやく、美智子は職員室へ向かって走り出した。

（ああ……またか。怒られるかな……姉ちゃんに父さんに……母さんに……）

夏樹はクスツと笑った。家族の顔が頭をよぎる。

（でも……最期に食べたのが水穂のチョコで……うれしか……）

そこで、夏樹の意識は途切れた。

「なっちゃん……」

明日香がヨロヨロと水穂と一緒に夏樹の近くへ寄った。返事が無い。さっきまで起きていた痙攣けいれんも、嘔吐もない。

「なっちゃん……返事して、お願い！」

「飯沼さん、岡本さん！ 下がって、寄っちゃダメだ！」

山藤先生が制止するが、二人は言うことをきかない。

「なっちゃん！」

「夏樹くん！」

「起きて！」

「返事して！」

「なっちゃん！ん！」

明日香の声が教室中に響き渡ったが、その声が夏樹の耳に届くことはなかった。

第32話 血染めの席（後書き）

再び襲った悪夢。二度目のアレルギーを引き起こした夏樹は……。

第33話 待合席

午前9時。由利は朝食の片付けも終え、ようやくワイドショーをゆつくりと見れる時間になった。洗濯機をこの時間から回し始め、45分程度で終わるのでちょうど休憩に良い感じだ。

「えっと……今日の特集はっと」

新聞のテレビ欄を確認する。

「よし、6チャンネルがいいわね」

毎日決まったチャンネルを見るのではなく、いろんな番組を見ている。その時々で興味のある内容があればその番組を見るし、なければたいていNHKか6チャンネルを見ている。

テレビを点けた瞬間、電話がなった。

「はいはい。珍しいわね、こんな時間に」

由利は電話を取ってから一瞬、カレンダーを見た。2月14日。何か特別な日でもないのに、由利はその日に限ってカレンダーを見た。

「はあい、朝倉でございます」

「もしもし！」

電話の相手は異様に焦った声を出していた。

「朝倉夏樹くんのお宅でよろしいでしょうか!？」

「は……はい。そうですか？」

「私、七海市立富樫小学校5年5組で夏樹くんの担任をしております、大迫美智子と申します」

「ああ！ 先生。いつもお世話になっております」

「お母さん！ 申し訳ありません！」

「は？ どうなさいました？」

由利はずいぶん取り乱した美智子の電話に呆気に取られていた。その直後、信じられない言葉が由利の耳に入った。

「夏樹くんが、倒れたんです！」

「朝倉課長」

今年入社したばかりの後輩社員が祥夫を呼んだ。

「なんだ？」

「奥様からお電話です」

「なんだ。会社には電話をするなど言っているのに……。後でかけ直すと言ってくれ」

「はい」

そう伝えたようだが、すぐに「課長」と彼はまた祥夫を呼んだ。

「なんだね」

「奥様、ずいぶん取り乱されているようなんです。どうも泣かれておられるようで……」

「まったく……」

後輩社員もどうしていいかわからなさそうだったので、とりあえず祥夫は電話を取った。

「もしもし。由利か。会社には電話をかけずに携帯に連絡を取るようにとあれだけ……」

「あなた！ どうしよう、どうしよう」

祥夫はいつになく取り乱した由利の声を聞いてすぐに異変を察知した。

「どうした？」

「どうしたらいいかわからないの。どうしたら……」

「泣いてばかりじゃわからんだろう。用件を言いなさい」

「夏樹が……」

「夏樹？ 夏樹は今日学校じゃないか」

「その学校で、夏樹が倒れたの！」

その由利の言葉を聞いて、祥夫の頭が真っ白になった。

「おはよ〜」

午前8時20分。少しギリギリだったが陽乃は無事学校へ到着し

た。だが、そのカバンの中身は実は教科書とノートは普通の半分の量になっている。

「陽ちゃん！」

未華乃が嬉しそうに声を掛けてきた。

「おはよ！」

「陽ちゃんは準備してきた!？」

「もちろん! でも……手作りじゃないんだけどね」

「あ……。それは家の事情だもん。手作りじゃないかとか問題じゃないよ。要は気持ちだよ、キモチ！」

未華乃はドンドン!と陽乃の肩を思い切り叩いた。

「痛いって! それより、ミカちゃんは誰にあげるの?」

「え?」

「しらばっくれようったってダメだよ?」

「えっと……」

未華乃の顔が少し赤くなる。

「誰? 誰?」

「すっ……」

「す?」

「巢鴨くん……」

「へえ〜! ミカちゃんとお似合いだね!」

巢鴨すがもとは1年4組にいるサッカー部1年で唯一のレギュラーを獲得した期待の新生だそうだ。けれども、サッカー以外ではそれほど目立たないので、未華乃ならきつとOKがもらえるだろう。

「おっはよー!」

続いてやってきたのは未咲。未咲は思い切りデカイ紙袋を肩にぶら下げて来ていた。

「ミサ……その袋は?」

「ああ、これ? こっちは義理用。クラスみんなにばら撒くの」

「ばら撒くって……」

「まあまあ、そんな渋い顔しないで受け取ってよ、はい!」

陽乃は強引に手渡された未咲のチョコレートを受け取った。いつもなら、これだけの量があれば夏樹にあげられたのだけれども、今年からは無理だ。

不意に夏樹のことが心配になった。でも、あんな件があった年だからきつとチョコレートの数は少ないだろうし、夏樹本人にもアレルギーの危険性は由利と祥夫から厳しく聞かされている。きつと大丈夫だ。

どこか根拠のない自信が、陽乃の中にはあった。

9時10分。1時間目は地理。日本の地理は陽乃も大好きだったので、白地図にすんなり単語が入っていく。

「京阪神工業地帯……京浜工業地帯……中京工業地帯……」

ガラガラ、とドアが開いた。遅刻した生徒だろうか、と陽乃が目をやると教頭先生が地理の先生になにやら話している。

「朝倉！」

急に自分の名前を呼ばれて陽乃はギョツとして先生二人のほうを見つめた。

「いいか、落ち着いて聞きなさい」

心臓が高鳴る。これが2月14日でなければ、そんなことは考えないのにと陽乃は嫌な思いをめぐらせていた。

「さつき、お母さんから連絡があつて」

きつと違う。教科書とノートをいっぱい置いてきたから、お怒りの電話だ。陽乃はそう思うことで自分の不安を消そうとした。

「弟さんが」

「……！」

汗が出てきた。未華乃と未咲も「まさか」という表情をしている。学校で、倒れたそうだ

「……っ！」

グラツとそのまま陽乃は倒れこんだ。

「陽ちゃん！」

「朝倉！ おい、しっかりしろ、朝倉！」

ウソだ。

そんなの、間違いだ。

「せつ……先生」

陽乃は震えながらも聞いた。

「倒れた……原因は聞いてますか？」

「……。」

「教えてください！」

「チョコレートを食べ……倒れたと聞いている」

陽乃の顔が真っ青になった。

「失礼します！」

救急隊員が5年5組の教室に入ると、血まみれになった夏樹の座席周辺と血と汚物で汚れた夏樹の姿が目に入った。山藤先生と3組の担任の先生が夏樹の名前を何度も呼んでいるが、応答はないようだった。

「先生、後ろへ下がってください。それと、生徒さんのお名前は？」

「朝倉夏樹です」

「ナツキくん！？ ナツキくん！？」

応答がない。救急隊員は今度は名前を呼びながら夏樹の体を何度も叩いた。

「ナツキくん！ 聞こえるかな？」

叩きながら呼びかけても応答がない。何度も叩いたり捻^{ひね}ったりを繰り返す間に、突然夏樹が救急隊員の手を払い除けた。

「意識レベル100！ 早急に搬送が必要！」

ようやく担架が教室へ上がってきた。クラスメイトは全員廊下へ出され、夏樹に近づくことすらできなかった。

応急処置らしいものをこなしながら、あっという間に夏樹が担架と一緒に下へ降ろされた。

「待ちなさい！ 岡本さん、飯沼さん！」

明日香と水穂が手を繋いで同時に階段を駆け下りて行った。2組

の先生が止めるのも聞かず、あっという間に姿が見えなくなった。

「ちい！」

優翔に呼びかけられて、呆然としていたちひろが優翔のほうを向いた。

「俺たちも行くぞ！」

優翔に手を引かれるがまま、ちひろは駆けていく。

「待ちなさい！ ころ、ちょっと！」

後に続くように恭輔、敬吾、萌、麻里が走って階段を降りていった。

玄関へ降りてすぐ、水槽の前に吐き出された物と鼻血の跡が続いていた。

「ウツ……！」

あまりの悲惨さに萌と麻里が鼻を覆った。

「夏樹！」

優翔が我慢できずに救急車の中に飛び込んだ。

「夏樹！ 夏樹！」

何度呼んでも応答がない。目も閉じたままで、ピクリとも動かない。

「なあ、なあ！ 夏樹ってば！」

優翔が半泣きで何度も夏樹の体を揺すった。

「坂上！ 離れなさい！」

山藤先生がようやく追いついて、優翔の体を無理やり夏樹から離れた。

「やだ！ 俺も行く！ 俺も救急車に乗っていく！」

「ダメだ！ お前は学校にいなさい！」

「先生！ お願い、あたしたちも乗せて行って！」

ちひろも泣きながら山藤先生にしがみついた。明日香、水穂も同じように請い続ける。

「今はダメだ！ 早く救急車が出ないと、朝倉が……どうなるかわからないんだぞ！」

その言葉に全員が黙り込んだ。

「よろしいですか!？」

「大迫先生、急いで!」

美智子がスリッパのまま救急車に乗り込み、そのまま扉が閉められた。サイレンと共に救急車が校門を出ていく。「七海市救急医療センター」の字が書かれた救急車がどんどん小さくなっていく。サイレンの音も遠くなった。

「大丈夫だから……。きつとすぐに良くなるから、みんなは教室に戻ろう?」

3組の先生に促されて水穂たちは泣きながら教室へ向かおうとした。彼らのその耳に、ガシャン!という音が聞こえたのはすぐ後だった。

「ありがとうございます! 用務員さん!」

「おつ、岡本!？」

明日香が今しがた作業から戻ってきた用務員さんの自転車に跨って、校門に向かって走り出した。

「いま行くよ、なっちゃん!」

明日香は全員の声などさっぱり耳に入らず、自転車をただ必死にこぎ始めた。

待合席では合流した由利と祥夫が夏樹を搬送している救急車をジツと待っていた。

「来た!」

サイレンの音がして、看護師と医師が慌しくその周りに駆け寄る。あの時もお世話になった中島医師と三浦看護師もいた。

「夏樹い!」

由利が運ばれてくる夏樹を呼びかけたが、あの時と違い反応がない。

「由利! よしなさい、今は治療が一番だ」

その夏樹の後に、美智子と山藤先生が入ってきた。由利は間髪い

れず美智子に詰め寄り、大声で叫んだ。

「なんで……なんで学校にいてこんなことになるのよ！ チョコレートを学校に持ってこさせるなんて、どういうこと!?!」

「やめなさい、由利！」

「あなたからも何か言っつてよ！ あれほど気をつけてっつてあなた、言っつたでしょ!?! なのになんでよ!」

「落ち着きなさい、由利！」

「あああゝ……!」

由利は祥夫に抱きついて大声を上げて泣き出した。

「陽乃さんのお母様ですか？」

男性の声に振り向くと、泣きながらしっかりとその人に抱きついている陽乃の姿が目に入った。

「陽乃！ どうしたの？」

今度は涙もそのままに、由利は陽乃の両肩をしっかりと握った。

「弟さんの件を聞いてショックを受けて、少し取り乱して……」
男性は陽乃の担任である岩後先生いわごだった。わざわざ車で陽乃をこの医療センターまで連れてきてくれたのだ。

「弟さんは？」

岩後が心配そうに聞く。祥夫が「いま、集中治療室で……」とだけ返した。

「そうですか……。すいません、私、学校へ戻らなくてはならないので……」

「いえ、わざわざありがとうございます。陽乃、先生にお礼を言いなさい」

「せつ……んせい、あつ……りがとう」

岩後はニッコリ笑って「大丈夫だ。弟さん、朝倉みたいに強いだろう? きつとすぐに良くなるよ」と言っつてから由利たちにもお辞儀をし、すぐに学校へ戻っつていった。

「……」

沈黙が続く。待合席の時計の針の音だけが聞こえてくる。その沈

黙を破るように、表で何かガシャン！と倒れる音がした。その音に驚いて3人が顔を上げると、自動ドアが開いて誰かが入ってきた。「あっ……………！」

「明日香ちゃん!?」

それは、泥だらけになった明日香だった。

「どうしたの!? 学校は!?!」

由利が驚いて泥を払いながら明日香に聞く。

「学校なんていつでも行けます! なっちゃんのほうが私、心配なんです!」

「そうは言っても、きつと学校もご両親も心配するわよ」

「大丈夫です。いま、ケータイでお母さんに病院に向かうって連絡したので」

明日香は携帯電話の発信履歴を由利に見せた。

「なので、私もここで待たせてください」

「でも……………」

「由利」

祥夫が俯いたままだったが、はっきりこう言った。

「待ってもらいなさい」

「……………そうね。明日香ちゃん、隣に座って」

「はい!」

由利の隣に明日香も座って、由利、陽乃、祥夫、美智子、山藤先生の6人はただひたすら夏樹の治療が終わるのを待ち続けた。

第33話 待合席（後書き）

緊急処置を受ける夏樹を待つ家族。果たして、2度目になる治療はどうなるのでしょうか……。

意識レベル：意識レベルとは『意識の明瞭度』『意識の内容』の二つを数値的に現すためのグラフみたいなものです。意識レベルを表すにはJCSとGCSがあります。ドラマで『意識レベル300です』と言ってるのはJCSです。JCSは日本だけで使われている指標で、GCSは世界共通になります。JCSのレベルは9段階に分かれています。

意識レベル0、清明（普通の意識がすっかりしている人）

- 1、大体意識清明だが今ひとつはつきりしない
- 2、見当式障害がある（場所などがわからない）
- 3、自分の名前、生年月日が言えない
- 10、普通の呼びかけで容易に開眼する
- 20、大きな声または身体を揺さぶることにより開眼する
- 30、痛み刺激を加えつつ呼びかけを繰り返しかろうじて

開眼する

- 100、痛み刺激に対して、払い除けるような動作をする
- 200、痛み刺激で少し手足を動かしたり、顔をしかめる
- 300、痛み刺激に反応しない

となっております。

第34話 欠席

「……………」

夏樹が目を覚ますと、日の差し込む部屋にあるベッドの上で寝かされていることに気づいた。その日差しは優しく、暖かい。

「と……………うさん？」

ふと右を見ると、祥夫がベッドの隣に置かれた椅子に座ってうたた寝をしていた。

「あら……………！ 先生、先生〜！」

夏樹は先生と呼ぶその女の人のことをハッキリと覚えていた。あの時、お世話になった三浦さんという看護師さんだった。

「朝倉くんが目を覚ましましたよ！」

「おっ……………どれどれ」

そう言っ出てきた先生という人にも、夏樹は見覚えがあった。中島という名前の医者だ。

「朝倉くん。喋れるかい？」

「あ……………はい」

「ふむ。どこか、気分は悪いかな？」

「ちよつと体がダルいかな……………って感じで。それ以外は特に……………」

「そうか。吐き気は？」

「まだ少し」

「なるほど。おなかは痛い？」

「しばらく考えてみたが、あまり痛くない。

「そんなに」

「ふんふん……………そうか。まだしばらく経過観察が必要だな。三浦さん、ご家族呼んできて」

「お父さんならそこで眠ってらっしゃいますよ」

理恵子がクスクスと笑いながら祥夫のほうを見た。

「夏樹くん。お父さんね、夏樹くんが倒れた日から毎晩、傍にいて

くれたのよ」

「え？」

夏樹はかなり驚いた。

「お仕事を欠勤……ああ、学校で言う欠席みたいに休むことはできない分、夜に来て汗をかいてる夏樹くんの額を拭いてくれてたわ」

「……そうなんですか」

「それに、お母さんは朝から昼まで。お姉さんは夕方からお父さんが来るまで毎日来てくれたたのよ」

「そ、そんなに？」

「ええ。ご家族、みんな夏樹くん思いなのねきつと」

眠っている父の姿を見て、夏樹は胸が熱くなって涙が自然にこぼれてきた。

「お母さんとお姉さんには今から連絡入れますね」

そう言つて三浦看護師は病室から出て行った。

「お父さん、お父さん」

中島医師が祥夫を起こした。

「んっ……はい」

「息子さんが気づかれましたよ」

その声にすぐに目を覚まし、祥夫はしっかりと夏樹を見つめた。

「夏樹……！」

祥夫は思い切り、夏樹を抱きしめた。少し恥ずかしい。そうは言えないから、夏樹はこう言つてその気持ちをごまかした。

「痛いよ、父さん」

今日の日付は2月17日。丸3日間、夏樹は眠り続けていたことになる。その間、学校も欠席しているのだからきつと先生や明日香、水穂も心配しているだろう。今すぐにでも目を覚ましたことを伝えに行きたかったが、まだ退院はできなさそうだったので後で明日香と水穂には電話をしようと考えていた。

夏樹自身、倒れた瞬間は覚えていない。血の味と胃液の酸っぱい

味が口一面に広がって、椅子と机で体を打って、美智子の声と女子生徒の悲鳴が聞こえ、それから水穂の顔と明日香の顔が過よぎって、その後意識はない。気づけば、17日になっていた。

水穂からもらったチヨコはきつと血にまみれてしまっただろうから、処分されてしまったかもしれない。あの日、靴箱に入っていたチヨコはどうなったのか、定かではなかった。

祥夫は仕事があるので早々に病室を出て行った。入れ替わりで由利がやって来た。

「夏樹……！」

病室に入るなり、由利も同じように夏樹をしっかりと抱きしめた。祥夫のときほど恥ずかしくはない。

「母さん……痛いから」

でも急に誰かが来ると恥ずかしいので祥夫のときと同じように、夏樹は由利の体を離れた。

「ああ……ゴメンね。夏樹と喋るの、3日ぶりだからお母さん嬉しくて」

そう言うのと由利はリンゴを取り出した。クーラーボックスに入れてきたようだ。

「リンゴ、食べるでしょ？」

「うん！」

「いま剥くわね」

由利が手慣れた手つきでリンゴを剥き始めた。

「……。」

由利なら聞けるかもしれない。

あの日もらったチヨコレート、どうなった？

ただ、それだけなのに。その言葉が重くて夏樹は聞けないまま、ベッドに横になった。

「あのチヨコ……誰のだったんだろ」

呟いたつもりだったのに、意外と大きい声だったようで由利が「えー？ なぁに？」と聞き返してきたので少しドキツとした。

「うっん！ 何でもないよ」

「そう？ ならいいんだけど」

ひよっとしたら、明日香のチョコレートだったのかもしれない。そうだとしたら本当に惜しいことをしたな、と夏樹は思った。

だが、今日からまたしばらく学校は欠席しなければならない。退院して、学校に通えるようになったら明日香に聞いてみよう。夏樹はそう決心した。

しかし、夏樹が5年5組のあの席に戻ることは二度となかったのだ。

第34話 欠席（後書き）

無事意識を取り戻した夏樹。しかし、その彼さえ予想していなかった事態が学校をも巻き込んで大きく波及していきます。

第35話 対面席

翌日。夏樹は小春日和の日差しを受けながらベッドから立ち上がった。

「あら、夏樹くん。おはよう。今日は体調どう？」

三浦看護師が笑顔で夏樹に問い掛ける。夏樹も自然と笑顔になる。こんなにリラックスした気持ちは久しぶりだと夏樹自身、思っていた。

「おはようございます。気分はいいです。少し体がまだダルいけど……」

「微熱がまだ残ってるものね。免疫力が弱ってるから、あんまり無理のないようにね」

三浦はそう言いながら朝食を置いた。

「ありがとう！ おいしそう、いただきます！」

夏樹は嬉しそうにベッドに戻り、朝食を口にし始めた。

「あ、おはようございます」

三浦が出ると同時に入ってきたのは、祥夫だった。

「お父さん……！ おはよう」

「うん、おはよう」

祥夫は静かに病室に入り、三浦に軽く会釈するとすぐにベッドの正面に置いてある椅子に座った。

「今日仕事は？」

「ああ……夏樹に話があるから昼から行くと伝えてあるよ。心配するな」

「そっなの？」

夏樹は特に不思議に思わず、朝食のおかずである卵焼きを口に運んだ。

「夏樹」

「なに？」

「夏樹は……病気が落ち着いたら、またあの学校に通うのか？」

「……うん。そのつもり」

「そうか……」

再び沈黙。夏樹は祥夫の意図するところがよくわからないまま、朝食を夢中で食べ続けた。

「夏樹」

「なに？」

さっきと同じやり取り。祥夫は何か言いにくそうな顔をしている。「どうしたの、お父さん。何か今日変だよ？」

夏樹の的を射た質問に、祥夫は動揺を隠せずにいた。

「どうしたの？」

「……。」

「あ！ わかった。何か隠し事でしょ？ いいよ。遠慮しないで言っつて」

「あんな、夏樹」

「うん」

「お父さん、昨日、夏樹の小学校へ行ってきたんだ」

「そうなの？ 何で」

夏樹は次に続いた祥夫の言葉を聞いて、持っていたスプーンを落とした。

「夏樹を転校させてほしいって頼んできたんだ」

「……は？」

「夏樹は退院次第、転校するんだ」

「な、何言ってるの？」

夏樹は手を震わせながら祥夫に聞き返した。同時に次には声を荒げて言い返していた。

「なんで勝手にそんなことするのさ！ 俺、転校したいだなんて1回も言った覚えはないよ！？」

祥夫もつい声が荒くなる。

「お前はイジメを受けて、今度は学校にお菓子を、それもあろうこ

とかお前が一番食べてはいけないチョコレートなんか持ってきたやつがいるんだぞ!? 学校はお菓子禁止だろう!？」

「そうだけど……バレンタインデーは特別な日なんだ。チョコくらい持つてくるさ!」

「そんなことは関係ない! そういうことが続くような学校……監督不行き届きもいい所だ!」

「そんな難しいこと言われてもわかんないけど、急にそんな理由で転校なんてしたくない!」

夏樹はふてくされて布団を被って祥夫から顔を背けた。しかし、祥夫は強引に布団を取り上げた。

「なにすんだよ!」
「話を聞きなさい!」

「やだ!」
「聞きなさい!」

「……。」
夏樹は祥夫のすごい形相に気圧けおされてスゴスゴとした様子でベッドの端に座り込んだ。

「夏樹、まだそれほど体調が良くないだろう」
「うん……」

「それも転校させたい理由なんだ」
「……。」

夏樹は俯いたまま返事をしない。祥夫はそれを気にせず続けた。
「転校先は……秋田のおじさんのところを考えているんだ」

「そ……そんな遠くなんて嫌だよ!」
「じゃあ逆に聞くが、夏樹はなんでそんなに転校するのが嫌なんだ?」

その言葉を聞いて、不意に明日香の顔がよぎった。思わず会いた
いと思ってしまった。

「言いなさい。お父さんが納得のできる理由でなければ、認めないぞ」

「……………」

「夏樹」

「言いたくない」

「なら、転校だぞ。退院次第、すぐだ」

「やだ！」

「なら理由を言いなさいと言ってるんだ！」

祥夫も我慢できず、朝食の置いてあったテーブルを叩きつけた。ガタン！と大きな音がして食器や箸が少し動いた。

「言ったって、絶対お父さんが認めてくれるような理由じゃないもん！」

その言葉を聞いて祥夫が少し悲しそうな顔をした。言ってから夏樹も後悔したが、ずっと言いたかったことを言えたような気もした。「なんで……………なんでそう思うんだ」

「だって……………お父さん、俺のことどれくらいわかってくれるか……………わかんないんだもん」

「言ってみなけりゃわからんだろう？」

「そうだけど……………」

しばらく沈黙が続いた。

「言っでごらんなさい」

「わかった」

心臓がドキドキする。本当に言っただけでなんとかなるのだろうか。夏樹にはきつとダメだと思ふ気持ちが強くあつた。

「好きな人が……………いるんだ」

祥夫は何も言わない。黙って見つめて聞いてくれている。ひよつとしたら希望が持てるかもしれない。夏樹の胸の中で、温かさのよくなものが芽生えてくる。

「俺、その子のこと本当に好きでさ。だから……………今は離れたくないんだ」

それを聞き終わるか否や、すぐに祥夫は立ち上がった。

「ど、どうしたの？」

「よくわかったよ」

「ほ、ほんと!？」

「ああ」

しかし、その後の祥夫の返事は夏樹の期待を裏切るものだった。

「そんな理由では、転校させるしかないな」

「……な、なんで!？」

「人を好きになっただと? 小学校5年生程度で人を本気で好きになれるのか!？」

夏樹は顔を真っ赤にして涙を流しながら叫んだ。

「なれる!」

「調子のいいことを言うんじゃない! とにかく、もう手続きをしてくる。今日はそのために午前中は休暇を取ったようなもんだからな」

そういうと、祥夫は立ち上がってカバンを片手に病室を出ようとした。その時、夏樹は信じられないくらい素直に言葉が出た。

「バカ……」

もちろん、その言葉を祥夫も聞き逃すはずがなかった。

「なんだと? いま、なんて言った?」

「バカ」

「夏樹! 親に向かってなんだ、その言葉遣いは!」

祥夫はカバンを床に投げ捨てて夏樹の胸倉を掴んでそのまま平手打ちを喰らわせた。乾いた音が病室に響く。

「お父さんのバカ! やっぱり、お父さんは俺のことなんかちっともわかってきてくれないんだ!」

「何を言ってるんだ! お父さんはお前のことを考えて転校を……」

「それなら、転校したくないって俺の気持ちを尊重してよ!」

「好きな人がいるから転校したくないなんていうバカらしい理由でそんなことができるか!」

夏樹の目が突然、虚ろうつろになった。祥夫も掴んでいた手を放し、カバンを取りに行く。

「とにかく、手続きは今日のうちに……」

「……け」

夏樹が何かを呟いたのに祥夫は気づいて振り返った。

「で……け」

「なんだ？」

よく聞こえないので聞き返そうとした祥夫の右耳のすぐ横を何か
が飛んでいく感触がした。バサツ！という音と共にドアにぶつかつ
たのは、枕だった。

「出て行け」

「夏樹！ またそんな口の利き方を……！」

近づいて叱りつけようとした祥夫の目の前を飛んだのは、今度は
箸だった。バラバラ！と音を立てて床に落ちる。

「出て行け！ 今すぐここから出て行け！」

そう言い放つ夏樹の目は、明らかに狼狽ろぐたいしたものだだった。

「な、夏樹、落ち着け、落ち着きなさい」

「俺に命令するヤツなんか大嫌いだ！ 出て行って！」

「夏樹……」

祥夫は愕然とした様子で夏樹に近づこうとする。今度は茶碗が飛
んできた。瀬戸物のそれは大きな音を立てて祥夫の足元で割れた。

「出て行け！ 今すぐ出て行け！ もう顔も見たくない！ 出てけ、
出てけ、出てけ！」

布団やマンガ、筆箱からノートまで夏樹は周りにあるものをどん
どん祥夫に向かって投げつける。

音を聞きつけて三浦看護師や他の看護師、中島医師が病室に駆け
込んできた。祥夫はすぐに病室から出され、三浦や中島が何度も夏
樹をなだめる声だけがその耳に入るばかりだった。

第35話 対面席（後書き）

突然の転校を切り出された夏樹は思わず混乱してしまいます。果たして彼の混乱振りを見た父・祥夫は夏樹を本当に転校させてしまうのでしょうか……？

第36話 川沿いの席

「ちい」

呼ばれた声を聞いてちひろがそちらを振り向くと、優翔と明日香が立っていた。

「ゴメンな、遅くなって」

優翔が苦笑いしながらちひろの隣に座った。

「うん。私のほうこそ……急に呼び出してゴメンね。あ、岡本さんもこっちに座って？」

「うん。ありがとう」

明日香もちひろに促され、そこへ座った。

3人がいるのは、七海市の中央を流れるつくし野川と呼ばれる川沿いにある河川敷公園のベンチだ。寒さの厳しいこの時期、夕方の公園に人の姿はあまり見当たらない。

「……聞いてるよね？」

明日香が話を切り出した。

「ああ」

優翔が短く答える。ちひろも小さくうなずいた。

「いつだって言ってた？」

優翔が明日香に聞き返した。

「退院したら、すぐ」

「退院は？」

ちひろが今度は明日香に聞く。

「遅くても……あと2週間くらい」

「思ってたより早いね」

ちひろが寂しそうに呟いた。

昨日のことだった。明日香たちが、担任である大迫先生からこのことを聞いたのは。

朝のホームルームでのこと。ひととおり連絡事項を終えると、美智子は夏樹のことをクラスメイトに伝え始めたのだ。

「朝倉くんですが……」

クラスメイトが唾を飲む。夏樹の机の周りや床にはまだ生々しい血痕が残っていた。

「長くても2週間ほどで退院できることが決まりました」

生徒たちはワアッと嬉しそうな声や安心した声を上げた。明日香と水穂も手を握り合って喜んでいいる。しかし、次の言葉を聞いて生徒たちは一気に黙り込んでしまう。

「それと同時に……朝倉くんはこの富樫小学校を転校することになりました」

「え……?」

明日香と水穂が声を失ってしまった。

「事情は……家庭の事情ですので皆さんには詳しくお伝えできませんが」

「教えてください!」

立ち上がったのは明日香だった。

「先生、お願いします!」

「岡本さんの気持ちはわかるわ……。でも、お父様から絶対に伝えないようにと先生も念を押されているの」

「そんな……」

明日香が呆然とした様子で座り込んだ。水穂も敬吾もちひろも恭輔も俯いたままだ。

「お別れの挨拶くらい、できないんですか?」

敬吾が手を挙げて聞いた。

「退院したらすぐ出るそうだから……残念だけど」

教室が静まり返る。麻里が泣き始めた。

「個別に朝倉くんの家へ行ったり、お見舞いに行くのもご両親から控えてほしいと言われているから……入院先は教えられませんが。家にもなるべく、行かないようにしてくださいね。それじゃ、授業を始

めるから……。1時間目は理科だったわね。理科室へ移動しておいでね」

美智子も堪え切れない様子で目を押さえながら教室を出て行った。

「家にも病院にも来るなつてか……」

優翔はため息を漏らした。JRの列車が走る音が聞こえた。冬の空気は音を伝えやすいのだろうか。いつもより大きく聞こえる。

「もう会えないのかな」

ちひろが呟いた。

「そんなことないだろ！ だって、転校するのだって夏樹だけだろ？ 家族全員引越してワケじゃなさそうだし、それに転校だから市内だろう！ な？ 心配いらねえよ」

「違うの」

明日香が首を振った。

「私、先生に聞いたの。どうしても知りたいって」

「そうなのか？」

優翔が明日香の顔をジッと見つめた。

「それで、先生、夏樹はどこへ転校するって？」

「……秋田」

「あ……きた？」

明日香は小さくうなずいた。

「秋田って、秋田県？」

「うん……」

「そんな遠いところ……」

それっきり、誰も何も話さなくなった。

5時半にもなると真っ暗になってしまった。街灯が灯る。寒さがますます厳しくなってきた。

「……帰ろうか」

優翔が立ち上がる。

「もう遅いもんね」

明日香も立ち上がった。

「俺、送ってくよ」

優翔がちひろと明日香の背中を押した。

「ありがとう。助かる」

ちひろがぎこちない笑顔で笑う。その笑顔があまりにも痛々しいので、優翔も明日香もまともに見ることができなかった。

ちひろを送り、明日香も送り終えた優翔は帰路へ着いた。優翔の家の近所は住宅街で夜になるとヒソソリしているし、病院と学校が立ち並んでいて少し不気味だったので優翔自身、このあたりは夜、歩きたくないと思っていた。

「不気味だなあ……………」

そう呟いた瞬間だった。

「いやだあ………… いやだあ……………」

「……………!？」

誰かの泣き声がする。男の子だ。

「な、なんだよ……………」

優翔はおそろおそろ、声のするほうへと歩み寄った。間違いない。声は救急医療センターのほうからする。

「この部屋だ……………」

ハッキリと聞こえる。道路沿いの角部屋。優翔は悪いと思いながらも、中を覗き込んだ。

「大丈夫よ。心配いらないわ」

看護師さんらしい女性が少年を抱いてなだめている。少年は肩を震わせてないているようだ。年は優翔と変わらないくらいだろうか。後ろ髪は長めだ。

「……………いやだよお、俺」

「でも、お父さんは君のためを思ってくれているんだから」

「絶対違う！ 俺のことなんてホントはどうでもいいんだ……………」

「ほら、そんなこと言わないで。ね？」

優翔はあまりにも痛々しい姿のその少年をジッと見つめた。どこ

かで見覚えのある後姿だった。

「あ……ほら。そろそろ夕食の時間よ。持ってくるから、待っててね」

そう言っただけで看護師さんは少年の元から離れて部屋を出て行った。

「な……」

その少年は、夏樹だった。

「夏樹……」

しかし、何度も泣きはらしたその目は腫れあがっていたし、すっかり元気がなくなっているようだった。

「……！」

夏樹も視線を感じ取ったようでふと振り向いた。

「ゆ……うと？」

気まずい空気が流れる。しかし、優翔の顔を見た瞬間、夏樹の顔色がにわかによくなくなって笑顔になった。

「ゆうと！ どうしたの？」

「いや……夏樹の声が聞こえたから、覗いてみたら本当にいたからさ。ビックリだよ！」

「嬉しいよ、俺は。優翔に……会えて本当に」

そう言っただけで、夏樹はポロポロと涙を流し始めた。

「入っていいか？」

優翔は努めて笑顔で夏樹に問い掛けた。

「うん……ゴメンな？ 急に泣きだしたりして」

「いや……全然構わないよ。じゃ、ちよつと失礼」

優翔は昨日、祥夫が座っていた椅子に座った。それから続くしばらくの沈黙。それを破ったのは優翔だった。

「夏樹……」

「なに？」

とても聞きづらいことだったけれども、聞かずにはいられなかった。優翔は意を決して夏樹に聞いた。

「お前、本当に転校するの？」

「……………」

「ホントか？」

「……ウン」

夏樹は弱々しい声で答えた。どうやら、本当のようだ。

「そっか……………」

また沈黙。いつの間に夏樹と会話するときにこんなに沈黙が生まれるようになったのだろうか。昔は（といてもつい1年前だけれども）こんなことはなかった。親友だった優翔と夏樹は毎日一緒にいてピンポンダッシュのようなイタズラをしたり、近所のコンビニでガチャガチャをやって遊んだり、つくし野川で遊んだりと本当にいろんなことをした。

「秋田だろ？ 転校先」

「ウン……………」

「いいなあ！ 自然がいっぱいじゃん。七海みたいにゴミゴミしてないだろうし、きっと空気もおいしいよ」

「そっかな……………」

「絶対そうだって。きっと楽しいぜ、秋田！」

「ウン……………」

素っ気ない答え。本当は嫌だろう。けれど、きっとお父さんが許さなかったのだろうということは優翔にも容易に想像できた。

「俺、実際夏樹は秋田行ったほうがいいと思うしな」

「なんで？」

夏樹が寂しそうな顔をして聞き返した。その表情を見て優翔も胸が痛む感覚になったが、落ち着いて続ける。

「だって……………夏樹、本当にいろいろあっただろ。この1年」

「ウン……………」

「一回……………七海を離れてゆっくりしたほうがいって……………」

答えがない。不安そうに優翔が夏樹の顔を覗き込むと、ポロポロと涙をこぼし出した。

「わわわ、な、夏樹！ どしたんだよ!?」

「行きたくない……本当は秋田なんて行きたくない！ 七海にいたいんだ」

「……気持ちわかるけど」

「みんなそう言うよ！ でも、でも結局みんな秋田へ行けって言おう！ 誰も俺のことなんて理解してくれないんだよ！」

「違う！ 違うよ、夏樹！ それは……」

優翔は思わずベッドに乗りかかって夏樹の体をしっかりと握った。違わないよ！ 絶対にそうだ。俺、みんなにいらなんて思われてるから……だから……」

優翔は我慢できず、夏樹を思い切り抱きしめた。

「ゆっ……優翔?」

「そんなこと言うな」

「……でも、俺……」

「そんな辛いこと言うな。寂しいこと言うな」

「優翔は……俺がいる?」

「当たり前だろ」

そう呟く優翔の目から涙が一筋、こぼれ落ちた。夏樹の目からも涙がとめどなく溢れ出る。

「だったら……七海にいたい」

「俺は……お前に昔みたいに元気になってほしいんだ」

「……。」

その言葉を聞いて、夏樹が黙り込んだ。

「七海にいるままじゃ、きっとそれは無理なんだよ」

「やだ！ やだー！ やだ！ 俺、離れたくない！ 七海にいたい」

「……」

優翔も支えきれないくらい、夏樹が暴れだした。思わずベッドから落ちそうになったが、優翔はなんとか堪えた。

「聞き分けのないこと言うなよ。別に一生の別れじゃないじゃん」

「やだ……。だって……」

「また会える。絶対、また会える……。だから、な？」

「絶対だよ？」

「うん。絶対」

「……わかった。俺、頑張る」

「待ってるね」

「うん……」

優翔はもう一度、夏樹をしっかりと抱きしめた。別に変な意味はない。そんな風に思われたっていい。優翔はただ、夏樹をしっかりと抱き続けた。

そのうち、夏樹はスウスウと優翔の胸の中で寝息を立て始めた。

優翔はゆっくりと夏樹をベッドに寝かせ、布団を被せる。

「……。」

優翔は入ってきた窓から出て、もう一度夏樹を振り返った。

「またな……」

もうしばらく会えないかもしれない。小学校の間は、会えない気がする。優翔はそう思った。夏樹の顔を目に焼き付ける。

「また、会おうな。じゃあな……」

そういう優翔の最後のほうの声は、確かに震えていた。

「うん……絶対だよ？」

そう返事した夏樹の声は、窓を閉める音でかき消されて優翔には届いていなかった。

第37話 窓際の席

「忘れ物……ない？」

「うん」

2月23日（日）。朝倉陽乃と夏樹の姉弟きょうだいは小田急電鉄七海駅のホームにいた。いつになく厳しい寒波がやって来たこの日、七海市内は元より関東全域で大雪が降っていた。その影響で小田急電鉄にも遅れが出ている。

陽乃と夏樹はホームで待っていては寒いので、待合室に入って体を寄り添いあつて電車が来るのを待っていた。

「メルアドちゃんとメモしたよね？」

陽乃が笑顔で聞く。

「うん」

それとは対照的に、夏樹は緊張した面持ちで答える。

一昨日の金曜日。夏樹は無事に救急医療センターを退院した。それと同時に、秋田へ転校する日がやってきたのだ。しかし、夏樹は祥夫と由利が見送りに来ることを断固拒否した。あまりにも激しく拒絶されたので、由利は思わず泣いてしまったがそれでも夏樹が了承することはなかった。

そして今、夏樹の傍には現時点で最も信頼を寄せる人物 陽乃がいた。

「七海でこうだから……きつと秋田はもつと雪スゴいだろうね」

「だね……」

あまり乗客もいないホーム。こんな寒い日は家でジツとしている人がほとんどだろう。陽乃は待合室にいても寒かったので、手袋を付けた。

「姉ちゃん……寒いのか？」

夏樹が心配そうに陽乃に聞く。

「うん。ちょっとね。でも、手袋したら平気よ」

「ゴメンね？ 俺なんかの見送りのせいで……」

「やあだ！ 大事な弟のためなら、秋田にだって行くんだから」

陽乃がニッコリ笑ってそう言うと、夏樹の顔が曇った。それから急に夏樹がギョツと陽乃を抱きしめた。

「ちよ、ちよ！？ 夏樹！？」

「……。」

夏樹は黙ったまま、しっかりと陽乃を抱きしめる。陽乃は驚きながらもすっかりと夏樹を抱いた。

「どうしたの？」

「……。」

グスツという音。泣いているのだろうか。陽乃が覗き込むと、陽乃のセーターに夏樹の涙がこぼれ落ちていた。

「泣かないでよ……夏樹」

そう言う陽乃の声も震えた。やがて、彼女の目からも涙が流れて夏樹の髪を濡らした。

「姉ちゃん……姉ちゃんも一緒に来てよ」

「行けるもんなら行きたいわよ」

二人とも声が震える。やがて二人は何も喋らず、ただ抱き合って泣き続けた。

5分ほどそうし続け、夏樹が涙を拭って立ち上がった。

「もう……姉ちゃん、帰っていいよ」

「え……でも」

「お願い……俺、これ以上姉ちゃんと一緒にいたら……秋田に行けなく……なるか……ら」

夏樹の声が震え始めた。もう、大泣きする直前だと陽乃は察知した。

「わかった……行くね」

陽乃は立ち上がり、待合室の戸を開けた。雪と冷たい風が吹き込む。

「また……あたしも秋田に行くからね」

「うん……待ってるね」

「じゃ……」

「ん。バイバイ」

夏樹は笑顔で手を振る。陽乃も笑顔で手を振る。涙は見せない。そう誓った。夏樹も陽乃もそうするつもりだった。

それにも関わらず、次から次へと涙が溢れ出る。これ以上、夏樹も陽乃もお互いを見ることができなかった。

陽乃は我慢できず、走り出した。雪が目に入って余計に涙が溢れる。もう絶対に振り返らないと思い、陽乃は階段を駆け下りた。

「キャツ!？」

前を見ずに走り続けたものだから、陽乃は階段を上がる人に気づかずぶつかってしまった。

「ゴメンなさ……あっ!」

「まもなく、各駅停車新宿行きが参ります。15分遅れで到着しており、皆様にはご迷惑をおかけいたします」

見慣れたブルーのラインの列車が滑り込む。夏樹はようやく治まり始めた涙をもう一度軽く拭い、ホームへ出た。

優翔の顔が浮かぶ。

(最後に……会えてよかった)

次に水穂の顔が浮かぶ。

(ゴメンな。黙って行っちゃって)

さらに、陽乃の顔が浮かぶ。

(絶対、会いに来てね)

そして、最後は

「なっちゃんっ」!

(え……?)

夏樹はいつもの聞きなれた声に振り向いた。そして、その方向には見慣れた髪型の少女。そのまま夏樹は、慣れた口調でその少女を呼んだ。

「おか……」

いったん口を開いて、夏樹は再び口を閉じた。そして、改めて口を開き、大声で彼女の名を叫んだ。

「明日香っ!」

明日香がそれに答えるように、夏樹に飛びついた。

「なっちゃん!」

「明日香……明日香……」

列車が停車した。数少ない乗客が列車に乗り込む。明日香が口を開いた。

「帰ってくるよね?」

「ああ」

「連絡しようだね。これ、私のメルアド」

「ああ」

「元気に……なって帰ってくるよね?」

「ああ」

「私のこと……忘れないでくれるよね?」

「ああ」

発車のベルが鳴る。

「行かなきゃ……」

「うん……」

夏樹が列車に乗り込む。明日香も思わず一緒に乗り込みそうになった。しかし、なんとか直前で思い留まる。

「絶対……メール送るよ」

「うん」

「七海に笑顔で帰ってくる」

「うん」

「明日香のこと、絶対忘れない」

「うん」

「明日香……俺……」

その時、非情にも「ドアが閉まります。ご注意ください」のアナ

ウンスと共にドアが閉まった。

夏樹はすぐに窓際の席に座った。窓は最新式の車両のために、開かない。夏樹はそれが齒がゆく、わかっていても何度も開けようとした。

列車が走り始める。明日香が滑りやすい雪の積もったホームを走り始めた。

「明日香！」

聞こえないとわかっていても、夏樹は声を大にして彼女の名前を呼んだ。

「なっちゃん……なっちゃん！」

明日香も答えるように叫び、列車を追いかける。

「明日香……俺」

明日香の姿が離れていく。涙が溢れ出してきて、目の前が見えなくなる。その涙を拭い、夏樹はしっかりと明日香の姿を目に焼き付ける。

「なっちゃんああ ん！」

明日香は最後に声を振り絞って夏樹に向かって手を振った。やがて、夏樹の乗った列車はカーブを曲がり、姿を消した。

夏樹は窓際の席に座りこみ、震えながら呟いた。

「明日香……俺、明日香のこと……好きだ」

その座席に、涙がいくつもこぼれ落ちていった。

主な登場人物（秋田 ・ 小学校編）

朝倉 夏樹
あさくら なつき

秋田県稲賀沢町立 沖由小学校 おきよし 足立分校5年生。出身は神奈川県七海市だが、かつて通っていた富樫小学校 とみがしでのイジメやバレンタインデーのトラブル、夏樹自身のアレルギーや精神不安など様々な理由によりこの分校に一時的に転校している。

富樫小学校時代は飯沼水穂と付き合っていたが、現在は岡本明日香が好きであることを自覚している。

チヨコレートアレルギーを持っており今までで2回発症し、特に2回目は意識不明の重体に陥った経験もある。また、精神的に現在は不安定な面がある。

岡本明日香
おかもと あすか

七海市立富樫小学校に通う5年生。おとなしく控えめで、常に入りの気持ちを第一に考える子。5年5組時代に夏樹と急接近し、好きだという想いを自覚しているにも関わらず、夏樹に迷惑が掛かると思い込んでその気持ちを封じ込めている。

しかし、自殺未遂を起こした夏樹を寸前のところで止めるなど強い面もある。

< 足立分校 >

足立分校：現在中学生1名、小学生6名（夏樹を除く）の計7名の学校。人数の割りに教室もあり、設備としては整っている。

幾田 早苗
いくた さなえ

足立分校5年生。しっかり者で何でもハキハキ物を言うタイプ。

今まで夏樹が出くわしたことがないタイプだけに、夏樹も少し物怖じしている。

森脇 勇人

足立分校5年生。実はお金持ちで町内一の豪邸に住んでいる。しかし嫌味っぱさは微塵も感じられず、夏樹は雰囲気は優翔に似ている。親近感を覚えている。

新谷 拓弥

足立分校中学1年生。最年長という意識が強く、常に年下である夏樹たちのことを考えて発言・行動する。

吉本 花音

足立分校小学1年生。引っ込み思案であり喋らない。夏樹にはすぐ懐いて「お兄ちゃん」と呼んでいつも慕う。

林堂 靖治

足立分校専任教師。生徒たちのことを第一に考える優しい先生。夏樹の過去のことは夏樹の小母を通じて聞いている。

<秋田・朝倉家>

朝倉 純

祥夫の弟。農家を営んでおり、祥夫とは異なり大胆で快活なおジサン。

朝倉 珠子

純の妻。夏樹のことも我が子のようにかわいがってくれる心優しい小母さん。

朝倉 奏七太

純と珠子の間に生まれた長男。足立分校に通っている小学6年生。夏樹を弟として温かく迎え入れてくれた。特技はフルート演奏とサッカーという文武両道派。

朝倉 樹音

純と珠子の間に生まれた長女。足立分校に通っている小学3年生。夏樹になかなか懐かない上、兄にもてはやされる嫉妬心から夏樹に意地悪をする。

<七海・朝倉家>

朝倉 陽乃

夏樹の姉。家族に対する疑心が高い夏樹が唯一、心を開いている。

朝倉 由利

夏樹の母。夏樹に拒絶されたことで傷心の日々を送っている。今まで夏樹を安心して育てられるという思いからプレッシャーをかけたのではないかと思っている。

朝倉 祥夫

夏樹の父。夏樹のこれまでの事件などを通して今までの自分の行動を反省しているが、心を開いてくれない夏樹にヤキモキしている。

朝倉 知恵子

夏樹の父方祖母。夏樹が元気になって帰ってきてくれる日を心待ちにしている。

<七海・元同級生>

飯沼 水穂
いぬま みずほ

夏樹の元彼女。バレンタインデー事件の引き金になったことを悔やんでいる。

和田 ちひろ
わた ちひろ

幼なじみだが、夏樹のイジメに加担した。

嘉村 恭輔
かむら きょうすけ

イジメの主犯格。現在はかつてとはまったく異なるおとなしい少年になっている。

半田 敬吾
はんだ けいご

イジメに加わっていた一人。今は夏樹の事件以来、不登校気味。

坂上 優翔
さかがみ ゆうと

夏樹が心を開く数少ない人物のうちの一人。正義感が強い。

<陽乃の友人>

多部 未華乃
たべ みかの
志田 未咲
しだ みさき

明るく友達思い。陽乃の大親友である。

<岡本家>

岡本 登
おかもと のぼる

明日香の父。自営業で八百屋を営む「親父」という言葉がピッタリの男性。

岡本 玲子
おかもと れいこ

明日香の母。登を支え、時に叱る肝つ玉母ちゃん。娘も息子も大好きで、愛情表現が率直過ぎるくらいである。

おかもと
岡本 圭太 けいた

明日香の弟。小学校2年生。やんちゃ盛りでよく明日香や花那にもいたずらをして玲子に叱られている。

おかもと
岡本 花那 はるな

明日香の姉。中学3年生で、しっかり者の受験生。

第38話 新たな席

「失礼します……」

3月4日（火）。夏樹は秋田県稲賀沢町立 沖由おきよし小学校 足立あだち分校の職員室兼校長室の扉をゆつくりと開き、中へ入った。

「おつ、君が朝倉夏樹くん？ 僕はこつちやある足立分校の教師の林堂靖治りんどうやすはるつてええます。これがらなんとがね」

「!?!」

夏樹は突然訳のわからない言葉で話しかけられてかなり戸惑い、思わず扉の後ろに隠れてしまった。すると奥からその林堂という教師よりも年上らしい先生が彼に言った。

「林堂くん。朝倉くんにあぎだ弁で話しかけても通じねよ。東京弁で話してあげねと」

「ああ！ すいません、つい癖が出てしまつて」

「……!?!」

ますますもつて奇怪な空間に来てしまったと夏樹はオロオロするばかり。

「ゴメンね、朝倉くん。ついつい秋田弁が出ちゃつて。僕は君の担任の林堂靖治といます。これからどうぞよろしく」

靖治は大きな手を夏樹に差し伸べた。

「よ、よろしくお願いします」

夏樹も緊張しながら彼に手を差し伸べた。ギュツと力強く靖治が夏樹の手を握り締めた。

「それから、後ろにいるのは校長の堀江茂一ほりえしげいちです」

「朝倉くん。よろしく」

「よろしくお願いします……」

緊張はしているが、夏樹には彼らがとても優しい人なのではないかというのは直感でわかった気がした。

その夏樹たちのいる職員室の扉が再び開いたので夏樹が振り返る

と、長髪で背が夏樹と同じくらいの女の子が入ってきた。

「おはようあったたいばー！先生、今日はめっちゃめっちゃ寒いですね！私、今日日直なんで、日誌取りに……」

カチツと夏樹と目が合った。そして第一声がこれだった。

「わあ！イケメンさんだ！」

「へ？」

すると彼女は夏樹のほうに近づいてマジマジとその顔を見つめる。「うーん……目が一重で、シュツとして鼻が高い。鼻筋も通ってるし、唇薄め。まさに私の好みね！」

「あ、あの……」

夏樹が戸惑っているとき靖治が彼女を夏樹から少し放して「こちら！自己紹介せんか！」とゲンコツを喰らわせた。夏樹は生徒に平気でゲンコツを喰らわせる靖治に驚いたが、それにちっとも参った様子を見せないその女の子にも驚かされた。

「はあーい。私、幾田^{いくた}早苗^{さなえ}です。今はまだ5年生で、4月から6年生になります。よろしくね」

「よ、よろしく……」

「それじゃ、次、君だよ？」

「え？」

早苗は夏樹の手をしっかりと握り、言った。

「君の番！」

「あ……はい」

夏樹は少しドキドキしながら自己紹介をした。

「神奈川県から転校してきた朝倉夏樹といます。よろしくお願ひします」

「神奈川！都会だね！」

早苗は転校生である夏樹が来たことで俄然、テンションが上がったようだ。靖治が夏樹の分の教科書を引き出しから取り出し、早苗に手渡した。

「幾田。教室と一緒に行って教科書をご渡してあげて」

「はい！ 了解です！ 行こ、朝倉くん」

グイグイ手を引く早苗に若干振り回され気味の夏樹だが、最後に靖治に礼を言うのは忘れなかった。

「あ、ちよつと待って……えと、ありがとございました！」

「はいはい。じゃ、また後でね」

靖治も微笑ましい気持ちになりながら、彼らを見送った。堀江校長がため息を漏らす。

「確かに……ちつと人と関わるのが苦手そうに見えるな」

「そうですね。小学生にはきつすぎる経験どごてっぺしてますし…

…とにかく、注意して様子どご見ておきます」

一方の夏樹は早苗に部屋を案内されながらギシギシと音の鳴る木造校舎の廊下を歩いていた。

「すごいね。木造なんだ」

「そつだよ。この分校、歴史あるんだ」

早苗が自慢げに言った。

「いつこの建物は建つたの？」

「昭和3年って聞いてるよ。戦争でも燃えなかったし、昭和の終わりにでつかーい地震来たけど、それでも潰つぶれなかった頑丈な校舎なんだ」

「ふうん……すごいな」

夏樹は富樫小学校を思い出した。冬場は保温性と断熱性が高いおかげで温かかったが、どこか無機質な感じは拭いきれない校舎だったのを覚えている。だからこそ、こういう雰囲気きふきの校舎は慣れてはいないけれど、夏樹は好きだった。

「ここが昇降口。先生も生徒もここで履き替えるんだよ」

すると、制服を着た少年が入ってきた。

「あ！ たくちゃん！」

たくちゃんと呼ばれた少年は夏樹にしてみれば随分とお兄さんに見える人だ。背も高いし、何よりキリツとした表情が大人っぽさをアピールしている。

「さな。おはよ」

「おはよう！ あのねたくちゃん、この子今日からここに転校してきた朝倉くん！」

「ああ、この子？ 聞いてるよ。ソナタからちゃんと」

ソナタ。夏樹のいところである朝倉奏七太のことだ。奏七太とはまた珍しい名前だが、夏樹はこんな名前がカッコよくて羨ましいと思っ
ている。ちなみに、奏七太の妹は樹音じゅおんといい、某雑誌を思い起こさせる名前になっている。

「なあんだ。ソナタさんから聞いたのかあ。つまんないの」

「それより、俺のことよくわかんないだろ。自己紹介させてよ」

そういうとたくちゃんは夏樹の前に立った。随分と背が高く感じる。

「初めまして。俺、新谷拓弥しんたにたくやといいます。この分校に通う中学1年生。ここは小学生と中学生が一緒に通うんだ。教室も一緒だからねよろしく」

「え？ 中学1年生ですか？」

「うん。もつと年上だと思った？」

「はい……」

夏樹には衝撃的という言葉以外に浮かんでこなかった。なぜなら、陽乃と拓弥が同じ年なのだから。

「よく言われるよね、たくちゃん。老けて見えるんだ」

すると再び早苗がゲンコツを喰らった。本日二度目だが、先ほどの靖治よりもかなり強力なゲンコツだ。

「痛いな〜。私にはキツイんだよね、たくちゃん」

早苗は頭を摩りながらブツブツ文句を言っている。そんな早苗を無視して、拓弥は夏樹の隣に立った。

「とりあえずさ、教室へ行こう。そろそろ先生来る時間だしな」

「あ……はい」

「堅いな〜！」

突然拓弥が大声を出し、バシバシと夏樹の背中を叩いた。

「この分校、朝倉くんを入れても8人しかいないんだから、タメ口利いてくれていいよ！」

「ええ！？ で、でも……」

夏樹は戸惑いながら拓弥の顔を見つめた。

「ほら、試しにたくちゃんって呼んでみなよ」

「たっ……たっ……」

緊張して舌が回らない。しかし、なんとか言い切ることができた。

「たくちゃん……！」

拓弥は嬉しそうに笑い、夏樹の頭をクシヤクシヤと撫でた。

「よし！ これで少しお近づきになったな。これからもっと仲良くなるうぜ！ よろしくな、夏樹！」

「う、うん！」

するとそんな二人に嫉妬して早苗が強引に二人の間に入ってきた。

「それじゃ朝倉くん！ 私は『さな』って呼んでよ！？」

「へ？」

「ほら！ 簡単でしょ、お願い！」

夏樹は少し赤くなりながら「さな」と呼んだ。

「キヤーツ！ 嬉しい！ よろしくね、夏樹くん！」

早苗はブンブンと夏樹の手を握って振り上げた。夏樹は揺れる視界に少し驚きながらも、ここでならうまくやっていけるといつ自信が湧きつつあった。

第39話 明日香の部屋の席

3月に入って関東地方は急に暖かくなった。明日香も最近は大分春らしい。明日香も最近は大分春らしい。明日香も最近は大分春らしい。

そんな明日香だが、天気予報の際には神奈川県以外にもしっかりと予報を見る地域が増えた。それは言うまでもなく、秋田県だ。

秋田県は今でもしっかりと雪だるまマークが並んでいる。東北地方はまだまだ冬の気配が抜けきらないようで、最低気温は1といふ日すらあるのだ。最高気温も10程度で止まる日がある。

「なつちゃん……風邪ひいてないといいけどな」

明日香は朝食のアジを口に運びながら呟く。連絡は、まだ来ない。夏樹が転校してからまだ少ししか経っていないのにも関わらず、明日香にとってはもう3ヶ月くらい過ぎたような気がしていた。

夏樹が転校して以来、クラスの面々にも劇的な変化が起きている。まず、嘉村恭輔はあれだけ活発だったのに、今ではほとんど口を利かなくなってしまった。特に明日香や水穂とはほとんど喋らない。喋ってくれないのだ。それ以外は普通に喋っていることから考えると、何か後ろめたい気持ちがあるのかもしれない。

半田敬吾。彼は週1回学校に来ればいいような状態になってしまった。いわゆる不登校だ。

和田ちひろ。以前のように明るく活発な雰囲気になったが、時折見せる暗さがまだ夏樹のことを引きずっているという明確な証拠になっていた。

そして、飯沼水穂。彼女はもう、夏樹のことを忘れようと思うと言った。なぜかと聞いたのだが、夏樹が吐血したのは紛れもなく彼女が渡したチョコレートが原因のひとつだった。もちろん、夏樹が自ら口にしたし、水穂自身夏樹のチョコレートアレルギーはまったく知らなかったのだから、彼女に悪い点などあるはずもないのだ。

しかし、夏樹が転校してしまうような事件を引き起こした原因は

自分にあると水穂は思っているようで、もう手紙もメールもせせずに彼に自分のことを忘れてもらうつもりだと言った。

そして今日。水穂から手紙を預かった。夏樹からメールが来たときに、一緒にその手紙の内容を送ってほしいということだった。

「ただいま」

明日香は静かに勝手口から家へ入った。春の野菜が入荷されセー
ルを最近、明日香の八百屋ではやっていたので表から入れないくらい奥様が押し寄せていたのだ。当然両親は店に出ているので、家へ入ったところで誰も「おかえり」と迎えてくれることなどない。

「おかえり」

「へ？」

明日香が驚いて部屋を覗き込むと、花菜がおやつクッキーを頼張りながら雑誌を読んでいた。花菜は念願の私立高校に無事合格し、今は悠々自適の日々を送っている。そんな花菜が自宅にいることを明日香はすっかり忘れていた。

「ただいま」

「おやつあるよ？ 食べないの？」

「とりあえず、メールチェックしてから降りてくるよ」

「そっかあ。夏樹くん、そろそろ落ち着いてるだろうから今日あたりメール来るんじゃない？」

花菜は笑顔で明日香に言った。

「私もそう思いたい。でもなかなか来なくてさ。結構寂しいよ」

「大丈夫よ。夏樹くんはそんないい加減な子じゃないから。そろそろ来てるって」

「そうかもね。ありがと、お姉ちゃん」

明日香は花菜の気遣いに少しの恥ずかしさとたくさん嬉しさを感じながら2階へ上がった。

パソコンの電源を入れる。すぐに起動してデスクトップが映る。

デスクトップの壁紙は 自然学校で写した写真を拡大したものだ
った。

あの時、本当に偶然だったけれども夏樹と隣同士になったのだ。
あの時はまだ元気だった夏樹。

岡本〜！ もっと仲良しな雰囲気出して写らない？

やだよ、そんなの。別にふつうでいいじゃない
いいからいいから、ほら、もうすぐ写るって！

ちよ、もう。強引だなあ

そうして写ったのがこの写真だった。夏樹が明日香の肩に手を回してくれている。あの時、こんなに夏樹との距離は近かったのだ。当たり前だと思っていた時間と空間があっという間にねじれ、乱れ、今のような状態になってしまった。

「何がキツカケでこうなるかわかんないなあ……」

明日香はため息をついてからメールを立ち上げる。それから受信のボタンをクリックする。

『12件の受信メールがあります』

すぐに全部を受信する。明日香は1件1件チェックしていく。1件目はアマゾンからの広告メール。2件目は花菜が書いているブログのお知らせメール。3件目と4件目は八百屋でやっている通販の依頼メール。

それからもまったく明日香に関係ないメールばかりだった。全部いちおうクリックして覗いては見るが、やっぱり関係のないメールばかりだった。

「今日も来てない……か」

メールを閉じようとした瞬間『メールを1件受信しました』という表示がリアルタイムで出た。

「おっ、グッドタイミング。どれどれ」

メールアドレスを確認すると、見たことのないアドレスであることに変わりはない。

m o r n i n g - w a r e h o u s e @ e o n e t . n e . j p

「m o r n i n g ? 朝……」

明日香は気になって「warehouse」という単語を調べた。
意味は「倉庫」。

「朝……倉庫……。朝……倉!？」

驚いてメールをクリックすると、長い長い文章が打たれていた。
しかし、その冒頭を見れば誰からのメールが一発でわかった。

『2003.03.05(Wed)

Dear 岡本明日香様

久しぶり！ 元気にしてる？ 覚えてるかな、俺のこと(笑)

朝倉夏樹です。秋田県は稲賀沢町の叔父さんの家から送ってます。
いとこのお兄ちゃんの奏七太(そなたっていう名前だよ。カッコよくね?) 兄ちゃんのパソコン借りて送ってます 兄ちゃんがわざわざ俺用のメールを準備してくれて……! これから毎日メール送れそうだよ。

秋田県ってチヨイ寒いんだけど! (>|<) 天気予報見てたら、
たまに神奈川のほうは14 くらいの日もあるんでしょ? 羨ましい
いなあ。

でも秋田ではめっちゃんこ雪降ります! 登校するときは何回こ
けたかわかないもん(^^;) 雪だるまも何回も作ったし

あ、学校は俺を入れて8人しかいないんだ(笑) でも校舎も綺麗
だしみんな優しいし 初めは転校が嫌だったけど、今は転校し
て良かったかな、と思います。

岡本もいつか遊びに来てね! 待ってるから
』

それから何行もの空白行を挟んで、文章は続いていた。

『今さらだけど、俺の本音を書きます。嫌だったらここから下は見ないでください。』

明日香はかなり緊張した。それでも、見ないままメールを閉じるのも返信するのも嫌だったので勢いよく下へスクロールした。

『俺は、岡本が好きです。大好きです。もしよかったら……：……しばらくメールで交換日記的なことをしませんか？ もちろん、岡本が嫌ならハッキリ言ってくれていいから。返事、待ってます』

心臓がバクバク鳴っているのを明日香自身、はっきりと感じ取っていた。しかし、答えは一つだ。

『 朝倉夏樹サマ

メールありがとう。すっごく、すっごく嬉しかったです
学校、人数少ないんだね！ ビックリしちゃった。私もそっちへ行
行ってノンビリした学校生活送りたいな。いつか案内してね？

それから……一番下に書いてあった件のお返事もしておきます。』

緊張しつつも、しっかりとその文字を打ち込んだ。これだけで十分だ。

『よろしくお願いします』

「これでヨシッ！」

明日香は送信ボタンを押す。それから机の上に置いた水穂の手紙を見て、少し後悔しつつもその手紙の内容はまたの機会に送ろうと決めて、下へおやつを食べるために明日香はメールを閉じてからパソコンをシャットダウンさせた。

第40話 ボロボロの席

「……………」

夏樹は足立分校の教室にある自分の机の前で呆然と立ち尽くしていた。

「どした？」

奏七太そなたが横にやってきて声をかける。夏樹は答えずにチラツと奏七太の机を見た。

「同じくらいか……………」

そう言っただけ息を漏らした。夏樹の言いたいことが奏七太もわかったようで「この分校、昔は倉庫だったくらいだから何もかもボロくてボロくて」と言った。夏樹は慌てて「いや！別に嫌とかじゃないんだよ！？」と答える。

「ボロいのが嫌だズラ、神奈川に帰ればええじゃあん」
前にむくれた様子で座つたのは奏七太の妹である樹音じゅのんだった。なかなか気が強い上になぜか夏樹に敵意むき出しなので、いつも冷たくあしらわれることが多い。

「樹音！なんで夏樹にほんたらにきつくあたるんだべ」

「別に。あたしはいつものあたしだよ」

相変わらずムスツとした様子で樹音は自分の席に着いてからうつ伏せになった。

「ゴメンな、夏樹。なんか樹音のヤツ最近機嫌悪くて」

「いいよいいよ。俺だって急に樹音ちゃんや奏七太くんの家に上がりこんだわけだし……………」

すると「気安く名前と呼んで！」と樹音がうつ伏せのまま言い放った。夏樹はションボリした様子で「ごめん……………」と小声で謝った。

見かねた勇人と早苗がパタパタと夏樹に近寄り声をかけた。

「おっはよ、ナツ！」

「ああ、おはよ！ 勇人」

「おは！」

「おはよ、サナ」

「ねえ、それ何書いてるの？」

早苗は夏樹が手にしていたメモ帳を指差して聞いた。

「あ、これ？ これね、秋田弁をメモしたノート。わかんない言葉があつたらメモして先生や奏七太くんに聞いてるんだ」

「へえ〜！ ナツってマメだなあ」

勇人がそのノートの一部を見ると『ほんたらに』そんな』など事細かにメモがしてあるのが目に入った。

「すつげえなあ。ナツってホントマメだわ。俺には無理だね！」

そう言つて勇人は大笑いする。横から早苗がデコピンを喰らわせて「アンタは勉強とかできなさすぎ！」と言つた。

「痛い！ つたく、そんなじゃモテねーだるどうせ」

「なっ……なんでアンタはそんなデリカシーのないこと言うの！？」

「うわ、デリカシーだつて。難しい言葉知ってるじゃーん」

「バツ、バカにしてえ！ 待ちなさいよ、ぶっ飛ばしてやる！」

そう言つと早苗は逃げ出した勇人の後を追つて教室を出て行つてしまった。

「んだよもう。朝っぱらから騒々しいなあ」

早苗たちが出て行つたのとは反対側の入口から拓弥たくやが入ってきた。拓弥は中学1年生なのに随分と大人びて見える子だ。

「おはよう、拓弥さん」

2つも年上だところも違うのだろうか。姉の陽乃を思い浮かべてみた。姉弟せいていではそれほど違和感も感じないのだが、他人となるとどうも大人びて見える。

拓弥は無表情で夏樹に近寄り、頭をワシヤワシヤと急に撫でてきた。

「わわわ！ た、拓弥さん！？」

「ほら、また『さん』付けだ！」

「へ？」

夏樹は呆然と拓弥を見つめる。拓弥はニツと笑ってから言った。

「2つしか変わんないだろ？ 年」

「ああ……はい」

「だったら『さん』付けなんていらねえよ。お前、姉ちゃんいるんだろ？ 姉ちゃんのこと『さん』付けで呼ぶのか？」

夏樹は首を横に振った。

「だろ？ だから俺のことも奏七太のことも呼び捨てにすること！ この分校じゃそれが決まりなんだ。OKかな？」

「はい……」

「じゃあ練習！ はい、俺のこと呼んでみて」

「えっと……」

夏樹の心臓がドキドキする。緊張のあまり冷や汗まで出てきた。

「たっ」

心臓の音が拓弥にまで聞こえている気がする。

「拓弥」

「はいよー！」

すると拓弥は嬉しそうに夏樹の頭を撫でた。さっきよりも優しい撫で方だ。

「やればできんじゃないー！」

「へへ……」

夏樹は久しぶりに自然な笑みを浮かべた。夏樹自身、それが久しぶりであったことは自覚できてはいなかった。

樹音が羨ましそうにその夏樹をジツと見つめていたのを知っているのは1年生の吉本花音よしもとかのんだけだった。

昼休み。

都会みやこっ子の夏樹は昼休みに外で元気に遊び回る分校のメンバーについていけず、教室の机でうつ伏せになっていた。

「元気だねえ……俺にはついていけないよ」

クスツと夏樹は笑った。もつとも、自分もついこの間までは七海の小学校で走り回っていた元気な生徒の一員だったのだが。

ボロボロの机。まさか転校してすぐにこんなボロボロの席に座らされるとは思っても見なかった。しかし、夏樹はこのボロボロの席が大好きだ。

富樫小学校の頃。夏樹の椅子はピカピカツルツルの綺麗な椅子だったのに机だけはボロボロだったのを覚えていた。他の子はみんな綺麗な机だったのになぜ自分だけこんな机なのかと最初は不満タラタラだった。

そんなある日、こう言ったのは明日香だった。

「いいじゃん。昔、この机使ってた人の何かが残ってるかもしれないよ?」

そんなの残っていたってしょうがないと思っていたけれど、意外なところでその言葉の意味がわかったのだ。

あれはちょうど6月の梅雨の頃。連日雨で外で遊ぶことができなかつた日が続いたのでボーツとしながら夏樹は自分の机を見つめていた。するとその机になにやら書かれているのに気づいたのだ。

『机の裏を見てください』

「机の裏?」

机の裏を見るとメモ用紙が貼られていた。そのメモ用紙を取るとまた何か書かれている。

『掃除用具入れを見てください』

夏樹は指示されるがまま、掃除用具入れを開けた。すると掃除用具入れの上にメモが貼つてある。

そのメモを剥がして見てみると今度は『教卓の下に何かあるぞ』というメモ。夏樹は不審がるクラスメイトをよそに教卓の下を覗き込んだ。

すると、教卓の下にメモとは違う何か貼り付けてあった。夏樹はそれを剥がしてみた。それはシャーペンだった。そしてそのシャーペンに付いていたメモを剥がしてみた。

『おめでとう！ 実はこれを置いたのは君の1年上の者です。去年、僕が座ったときに同じようなメモがあったので同じようにやってみました。見つからないと意味がないけど……（笑） 見つけてくれたなら、ぜひ君もやってみてください。案外おもしろいよ』

夏樹はありがたくそのシャープンをもらっておいた。しかし、それが誰の仕業かわからぬまま、そしてそれを引き継がないまま、秋田へやって来た。少し心残りだったかもしれない。

「……動いてみないとわからないかな」

夏樹はそう呟くと立ち上がり、玄関へ向かった。靴を履き替えて、サッカーをしている奏七太たちのところへ駆け寄った。

心臓がドキドキする。拒まれたりしないだろうかという不安が夏樹の胸の中を巡った。

「おっ、俺も入れてほしい……な」

最後のほうは声が小さくなった。しばらくして顔を見上げると、拓弥が手を差し伸べていた。

「当たり前だろ」

「……あっ、ありがとう！」

夏樹は嬉しそうに笑い、すぐその輪の中に加わった。

（秋田で……俺、元気になるよ、明日香）

夏樹は心の中でそう呟いた。

第41話 カウンター席

「終わった終わった〜！」

授業が終わるや否や、勇人が大きく伸びをした。

「タクちゃん、今日はどっか行くの？」

早苗がワクワクした様子で拓弥に聞く。

「そうだなあ……。ナツもあんまりこの町のこと知らんだろうし…

…」

「じゃあ、カノンはお好み焼きパーティーしたい」

1年生の花音は未だに「テイ」の発音が苦手らしく、妙な言葉になっっている。夏樹はそれがかわいらしくて仕方なかった。

「そうか。じゃあ、オカさん久しぶりに行く？」

「いいねー！ 行こう行こう！」

夏樹は昼食を食べてからまだ2時間程度しか経っていないのに、もうお好み焼きを食べるといふ彼らの言葉を聞いてかなり驚いた。

「もうお好み焼き食べるの？」

「うん！ 腹減らねえ？」

拓弥はおなかを摩った。まだそれほど空いていないというのが夏樹の本音だ。

「まだそんなに。それにお好み焼きって主食じゃない？」

「ああ……。まあふつうそうかも。でも、俺たちはおやつ感覚なんだ。いいじゃん、見るだけでも話に加われるし、行こうぜ！」

「でも実はお金をそんなに持ち合わせてなくて……」

「お前は新入りだろ？ 俺がおごってやるよ！」

「いいの!？」

「当たり前だろ」

拓弥がニツと笑う。ここまで優しく暖かい人たちに触れるのはかなり久しぶりだ。夏樹は嬉しくなってスキップをしながら廊下に出た。

「ご機嫌だね、彼も」

堀江校長が職員室から見える夏樹の姿を見て安心した様子で言った。

「でも、まだ目が放せませんからね。常に気をつけておきます」
靖治も少し安心した様子でそう言った。

「ね、ねえ……」

息を荒くした夏樹が奏七太を呼んだ。

「どした？」

「まだ着かないわけ……？」

「ああ、あと20分くらい歩くよ」

「ええ〜！ マジかよお」

既に学校を出て歩くこと30分。田んぼと山林しか見当たらない砂利道を延々と夏樹たちは歩いてきた。夏樹はとつくに疲れてきているのに、奏七太たちはまったくそんな様子を見せない。夏樹も体力には自信があるつもりだったけれど、彼らには勝てないと思った。「もう。これだから都会まちから来た人は嫌なんだ」

樹音があからさまに聞こえる大きさを嫌味を言った。夏樹がすぐにシユンとした表情に変わる。まだ精神的に不安定な夏樹に追い討ちをかけるように、樹音はどんどん口調を強めた。

「だいたい、ちょっとあたしたちより勉強が進んでるからって調子に乗らんでほしいな。タクちゃんにまで勉強教えるとか、正直あたし、うつつとしいし」

「樹音！」

奏七太が止めようとするが、もう樹音は止まらない。

「それに体育のとき、ワアワア騒ぎながら球技されんのも正直たまらん。花音やあたし、早苗ちゃんのこと無視してるとしか思えんよ」
「樹音！」

唯一夏樹の事情を知る拓弥が止めようとするが、既に遅かった。

「ナツ？ 大丈夫か？」

拓弥が駆け寄るが、夏樹は顔を真っ青にしている。気分が悪いよ
うだ。

「しつかりせえ。な？ 今の、気にせんでいいから！ な？」

ここで逃げ出したら、また自分は昔のままだ。

そう思った夏樹は逃げ出したい気持ちを抑え、拓弥を見て笑った。

「大丈夫。行こ？」

「……本当に平気か？」

「うん」

不自然な笑みだったかもしれないが、彼らを安心させるには十分な笑顔だった。

「着いたぞ、ナツ！」

勇人が嬉しそうな声を上げる。出発してからほとんど1時間が経っていた。集落の端に、その店があった。

「ここかあ」

夏樹も嬉しそうな声を上げる。看板を見ているが、古びて剥げた看板は「お好み焼き」と肝心な部分が見えない状態になっていた。

「おばちゃん！」

拓弥が元気な声を出すと「はあーいよあ！」と中から数倍元気な声が返ってきた。

「久しぶり！」

「あんれま！ 久しぶりだねえ！ どうしたんだい、今日は？」

「転校生来たから、おばちゃんに紹介しようって思っただ。ほら、ナツ」

拓弥に手を引かれて、夏樹は女性の前に立った。

「あ……初めまして。神奈川県から引っ越してきた朝倉夏樹といいます」

「あれ。カワイイ子だねえ！ へえ、朝倉くんかい……」

女性はマジマジと夏樹を見つめ、静かに言った。

「どこかで会わなかったかい？」

「へ？」

しばらく見つめた後、女性は「気のせいだね」と言った。

「さあて、それじゃ今日はおばちゃん奮発するよ！ さあ、座った座った！」

「ありがとー！」

拓弥たちは嬉しそうに笑い、各々（おのおの）席に着いた。座ったのは、数ある席の中でもお好み焼きを焼くのが見れる、カウンタ―席だ。

ジュウウツ！という音と共にキレイな色をした生地が鉄板に広がる。同時にいい匂いが夏樹の鼻に入り込んできた。

「おいしそお！」

夏樹は嬉しそうに身を乗り出しておばさんが焼くのを見る。興味津々なようだ。

「あれあれ、この子は！ まったく、うちの姪っ子そっくりだねえ」「姪っ子？」

拓弥と勇人は始めて聞いたようで、少し驚いた様子を見せた。

「ああ！ あんたたちは知らんでも無理ないよ。来たのはちょうど前の春休みでね。なかなかあんたたちと会うタイミングがずれてるからねえ」

夏樹は少し気になることがあっておばさんに質問を始めた。

「あの……その姪っ子さんが来たのって……」

「ああ、去年の3月末……いつからだったか忘れちゃったけど、4月の1日までいたねえ」

夏樹の心臓がドキドキと鳴る。夏樹はその鼓動を感じながら、続けた。

「その子……ひよつとして、神奈川に住んでいますか？」

「あら、どうして知ってるんだい？ そうだよ、神奈川県に住んでるんだ」

夏樹は続けた。これを聞けば、確実だ。

「ひよつとして……七海市に住んでいますか？」

おばさんが驚いた顔に変わった。

「やだ！ 朝倉くんだっけ？ なんで知ってるんだい？」

確信はまだない。けれども、可能性は高まった。夏樹はそう感じていた。最後にこれさえ聞けばわかる。夏樹はドキドキを抑えながら、最後の質問に入ろうとした。その瞬間、お店の入口から郵便配達員が入ってきて第一声、こう言った。

「岡本さ〜ん、書留ですよ！」

夏樹の中で、モヤモヤしていた気持ちが確信に変わった瞬間だった。

第42話 君がいた席

「岡本……。おばさん、岡本っていうの!？」

夏樹は興奮した様子でおばさんに身を乗り出して聞いた。

「ああ! そうだよ、あたしはこの稲賀沢で一番お好み焼きを焼くのが上手い、岡本千鶴子おかもとちづこって言うオバサンさ」

千鶴子はガハハハ!と豪快に笑った。間違いなく、あの明日香に初めて逢った日に電車のホームで彼女たちを見送っていた女性だ。

「ところで朝倉くん。ひよっとしたら明日香と同じ学校かい？」

「うん! とても仲良くしてもらってるんだ」

「そうかいそうかい! いやねえ、アスちゃんがよく手紙に夏樹って男の子の話を書いてくるもんだから、好きな子ができたんだねえってあたしやお父さんと話をしてるんだ」

「すっ、好きな子!？」

夏樹は途端に真っ赤になった。千鶴子はわかっていつつも続けた。

「そうだよ、きつとアスちゃんは夏樹くんのが好きだね!」

まるでボン!という音がしたかのように夏樹は真っ赤になって机に伏せてしまった。

「アハハハハ! ひよっとして夏樹くんもアスちゃんのが好きなのかい!？」

「えっ!？ そっ、そんなこと……わっ!？」

突然奏七太と拓弥が横へ座って夏樹をグイグイと両方から押した。

「おうおう、夏樹い。実際のところ、どうなのさ？」

奏七太が意地悪く笑う。夏樹は真っ赤になったまま俯いている。

「あれえ? お返事ないっすね。なっつきさーん」

拓弥も同じように意地悪く笑って夏樹の頬をつついた。

「……また俺たちだけのときに話させてよ」

夏樹は樹音や早苗に聞こえないように小さく呟いた。

「ようし! 約束だぜ?」

拓弥が嬉しそうに指きりげんまんを求めたので、夏樹も指を出した。

「うん……」

まさか転校してすぐにこんな話をする事になるとは思っていなかったが、嬉しくてつい笑ってしまった。

お好み焼きができたので男子グループと女子グループに分かれて食べ始めた。拓弥と奏七太はずっと夏樹に付きっ切りだ。

「まったく。あんなにナツをイジツたら登校拒否になっちゃいそうだね」

早苗が呆れながらお好み焼きを口に運んだ。

「ラブラブ」

花音が笑いながら夏樹たちを指差した。早苗が笑いながら「カノン？ 男同士でラブラブっていうと誤解招くからよそうね」と言ったが、花音はもちろん意味をよくわかっていないようだった。

「……」

一方の樹音は不機嫌そうな顔をしたままお好み焼きも食べず、ジツと夏樹を睨むように見つめていた。

「ジュノン。どうしたのよ。最近不機嫌だねえ」

「別に。ただ、男の子ってくだらないツルミが多いなあと思ってため息を漏らす。

「そうかな？ 女子だって似たようなもんでしょ。好きな芸能人の話とかお菓子の話とか」

「そんなんじゃないけど……。それに……」

「それに？」

樹音は悔しそうに唇を噛み締めながら続けた。

「最近、お兄ちゃん夏樹ばかりで私のこと相手にしてくれない」

「……それで？」

「転校生だからってチャホヤしなくなっちゃっていいじゃん」

「なるほど。じゃあ女の子が来たら、特に町の案内もせず樹音は転校生ほったらかしにするんだ」

「……そんなことしないけど」

「じゃあなんなの。なんでナツにそんな敵意ガンガンなの？」

「……わかんない！ そんなの！」

樹音は怒りながら冷めかけたお好み焼きを口に押し込んだ。自分でもその気持ちの説明できないモヤモヤ感を抱えているのが樹音は嫌で仕方がなかった。

千鶴子は夏樹の座っている場所をジッと見つめて微笑んだ。

「どしたの、おばちゃん」

夏樹がその視線に気づいて千鶴子に聞いた。

「ええ？ 何が？」

「おばちゃん、さつきからジーツと俺のほう見てる」

「ああ、気づいてたのかい。アンタは鋭い子だねえ」

千鶴子はそう言っていると茶の間へ戻り、写真を一枚持ってきて夏樹にそれを手渡した。そこには「2010・03・31」と日付が記されていた。

「あ……」

そしてその写真には笑う千鶴子と圭太、花菜、そして明日香が写っていた。

「アスちゃんが座ってるトコ、アンタの座ってるトコだよ」

「……」

夏樹は思わず赤くなる。なんだかそれだけで照れてしまう自分が恥ずかしかった。

「さつきも身を乗り出すし、それにアンタたち、笑い方そっくり。」

お好み焼きもなんだっけ、よく焼いたほうが好きだっけね。でも焦げ目がつくまで焼くのはアンタとアスちゃんくらいなもんだよ」

もうトマトのように夏樹は真っ赤になっていた。恥ずかしくてしようがない。奏七太と拓弥も茶化す笑いをやめてなんだか赤くなっている。

「お似合いだよ、アンタたち。お互い気持ちは伝えているのかい？」

千鶴子は遠慮せず質問をガンガンぶつける。夏樹は真っ赤になり

つつも小さくうなずいた。

「あれまあ、やっぱりねえ！ オバサンは何でもお見通しだよ」

ガハハハ！とまた笑う千鶴子。奏七太や拓弥、早苗も赤くなりつつもうらやましそうな目を夏樹に見せた。

ジリリリン！と古い電話の音がする。

「あ、電話だね。まあゆつくりしていつてちょうだい」

千鶴子が去っていった後、何ともいえない空気が残ってしまった。

「とりあえず、冷めないうちに食べちゃお！」

早苗が笑いながら言った。

「そうだそうだ！ とりあえず食べる、ナツ！」

強引に奏七太がお好み焼きを夏樹の皿に載せた。

「うん……いただきます！」

すぐに元の雰囲気に戻ったので夏樹は改めて周りを見渡した。

少し焦げた鉄板。古いマンガが並ぶ本棚。木製の椅子。明日香は去年の3月、間違いなくこの席で同じ視点でこの店を眺めていたのだろう。そして同じ味の千鶴子が焼くお好み焼きを食べていたのだろう。

その場所に座って同じことをしていると、夏樹は何かを感じられずにいられなかった。

不意に涙がこぼれた。

「ナツ……？」

拓弥がその涙に気づいて声をかけるが、もう夏樹には涙を止めることができなかった。

会いたい。

君に会いたい。

話したい。

ここまで君の存在が大きくなっているなんて思ってもみなかった。

「会いたい……明日香……」

夏樹は小さく呟いた。

同じ頃。神奈川県七海市にある八幡神社。そのハズレにある火の見櫓の上で、明日香は沈んでいく夕陽を見ていた。

「ちようどあつちのほうかなあ」

秋田県の方角を見つめる。もちろん東京の背の高いビルに遮られているので山は見えない。

「なつちゃんが行ってからまだそんなに経たないのに、寂しいな」
明日香は突然去ってしまった夏樹のことにいつも思いをはせていた。優翔が「岡本だけは会ってほしい」と寸前のところで伝えに来てくれたのだ。そして、二人は自分の思いを伝え、コンピューター上ではあつたが結ばれることとなった。

しかし、その日以来夏樹と明日香が直接顔を合わせることはなかった。メールでただやり取りをする日々。顔文字をつけてはくれるが、それでも直接声を聞くことはできない。

「……」

明日香はあの夏祭りの日を思い出す。あの日確かに夏樹は、隣にいたのだ。

そつと彼が座っていた場所に手を触れるが、その場所は冷たい。

だって、俺そのつもりで岡本をここへ連れて来たんだから

「え？」

明日香は夏樹の声がした気がして振り向いた。しかし、もちろん夏樹の姿はない。

「……声が聞こえるくらい、寂しいんだな」

明日香は自虐気味に笑った。自然と涙がこぼれる。

うん。俺だけ独り占めにするのはもつたいない場所だしね

そつ言ったくせに、今は明日香一人きりだ。

「ウソつき……」

明日香は小さくかがんで夕陽を反射させる新宿副都心のビルを眺めた。スカイツリーはあと半年ほどで完成すると聞いた。夏樹は完成するとき、帰ってきてくれるだろうか。

今日からここは、俺と岡本の特別席 二人きりの座席まじりだよ

「それなら……お願いだから早く帰ってきてきて」
明日香は涙を流しながら、小さく呟いた。

第43話 予約席

「ナツ！ 早く、早く！」

拓弥が嬉しそくに夏樹よりずいぶん先のところへ走っていく。夏樹は息を切らしながらなんとか早苗と勇人の後ろをついていくが、いつのまにか彼らからも距離を離されてしまっていた。

「まつ……待つてよお」

季節はあれから流れ、4月下旬。秋田では雪解けを終えて春を迎えようとしていた。既に関西地方や関東地方では桜が咲いている。

例年になく厳しい寒さが続いた東北地方では少し開花が遅れていた。夏樹は蕾が膨らみ始めた桜並木の道を走る。転校してから奏七太に教えられて始めたサツカーのおかげで少し体力はついたが、やはり元・都会っ子。元気いっぱい外で遊ぶのが習慣化している拓弥たちにはなかなか勝てない。

今日、駅前のチケット屋へ向かっているのは他でもない、修学旅行の電車の切符を買うためだ。6年生になった早苗、勇人、夏樹の3人に加えて中2の拓弥の合計4人で修学旅行へ行く。中学2年生で修学旅行というのも早すぎるかもしれないが、高校受験のために足立分校ではいつも2年生で実施するのだという。

夏樹は彼らと修学旅行へいけるのはとても楽しみにしていた。しかし、行き先に少し不満があった。それは他でもない、神奈川県と東京都だったからだ。神奈川県鎌倉市で2泊、東京都内で1泊の合計3泊4日の修学旅行。主に観光が中心だというこの修学旅行。夏樹は鎌倉にも何回か遠足で行ったことがあるため、よく知っている場所だったのだ。

てつきり県内で済ませると思っていただけに残念だったが、拓弥や勇人は「夏樹、東京とかよく知ってるだろ？ 案内頼むな！」と言っているのが嫌だと言える雰囲気でもなかった。その証拠に、ただか切符を買いに行くだけで彼らのテンションは尋常ではなくな

っていた。

もう一つの変化。それは自分の畑を与えられたという点だろう。

転校してから1ヶ月ほど経ったある日の放課後。夏樹は林堂先生に呼ばれて校庭の中でも日当たりのいい場所にある花壇に連れて行かれた。その花壇には『タクヤ』、『はやと』、『カノン』、『じゅのん!』と友人の名前が書かれた札が立っていた。

「あの……なんですか、これ？」

「これね、生徒たちで畑で野菜を毎年育ててるんだ」

「野菜？」

「そう。それに学校から少し離れた田んぼでお米作りもやってるんだ」

「お米……」

グウウツと夏樹のおながが鳴った。

「すみません」

夏樹が真つ赤になって謝る。靖治は「ハハハッ！」と笑ってからまた説明を続けた。

「夏樹くんのスペース作っておいたから、札に名前を書いて春に野菜の苗を植えよう」

「俺が育てるんですか!？」

「そうだよ。水やりから雑草むしりまで全部自分の花壇のものは自分ですること。その代わり、野菜がうまく育ったらそれは全部夏樹くんのものだ」

夏樹はワクワクした様子で靖治が見せてくれた去年の写真を見せてくれた。大きなトマトを手にした拓弥、きゅうりをおいしそうにかじる奏七太、ミニトマトをカゴいっぱい摘んだ花音。みんな弾けるような笑顔だった。

「どうだい？ やってみる？」

夏樹の答えに迷いはなかった。

「うん！」

夏樹が待ちに待っていた苗を植えるのは5月初めの土曜日。土日

は学校は休みだが、夏樹は出る気満々でいた。また、修学旅行はその2日後の月曜日から。5月は夏樹にとってとても待ち遠しい月となっている。

「よかつた〜！ まだ満席になる前で」

拓弥は買ったばかりの新幹線のチケットを嬉しそうに見つめて笑う。

「俺さ、秋田から今まで出たことなかったんだよね、実は」

「え？ そうなの？」

夏樹は驚いた様子で拓弥に聞いた。

「うん。今まで県外に出たことあるのって、勇人と花音くらいのもんだよね」

「あ〜、そういえば私も出たことなかったな」

早苗が思い出したように言う。夏樹にとっては本当に驚きの言葉だった。

「俺は東京とか静岡とか行くけど……。旅行で出たりしないの？」
「あ〜……。出てもいいんだけど、私の家は農家だからあんまり長期間留守にできないのよ」

早苗が残念そうに呟く。早苗の家が農家というのも初めて知ったことであつたし、農家の仕事がそれほど大変だとも思っていなかっただけに、夏樹には想像できないことだ。

「農家って大変なんだねえ」

夏樹がホウツとため息をついた。

「まあ……。大変なんだけど、別に私自身がそんなに大変なわけじゃないし」

早苗がクシャクシャと頭を撫でる。夏樹は恥ずかしくなった。同い年の早苗に頭を撫でられるとは思ってもなかったのだ。よく考えてみれば、夏樹より早苗のほうが少し背が高い。小学校高学年というのはこれくらいものだろうか。

チケットを買い終えて駅前の商店街を出たところで拓弥が腕時計を見た。

「ゲツ！ もう3時半かよ」

「なんかあるの？」

「俺さあ、春休みから塾入れさせられたの、塾」

「塾う！？」

勇人があからさまに嫌そうな顔をした。その顔を見て拓弥は勇人に思い切りゲンコツを喰らわせた。

「ひでえよお、拓ちゃん」

「俺だつて好きで行つてるんじゃないよ。あー！ 遅刻するから悪い、俺先帰るわ！」

そう言つと「またなー！」と叫びながら拓弥は走つていつてしまった。

「あ……花音ちゃん。そろそろお家帰らないと暗くなるよ」
「そうなの？」

花音は辺りを見渡した。よく見れば西の方角が赤く染まり始めている。

「勇人兄ちゃんが連れて帰つてあげようか？」

「ホント！？ わあーい、花音一緒に帰る帰る！」

花音は嬉しそうに勇人の手を握つた。

「というわけで……俺もボチボチ帰るわ」

「あ……そうなの。気をつけてね」

「うん。またな。ほら、カノンちゃんも夏樹兄ちゃんたちに挨拶しなよ」

花音はかわいらしく小さく手を振つた。夏樹もつられて小さく手を振る。直後、奏七太の持つ携帯電話の音が激しく鳴つた。

「はい、もしもし？」

すると電話の相手は彼らの母である珠子だったようで、怒鳴り声が聞こえてきた。

「アンタらなあ！ どこの誰が仕事ほつたらかして遊びに出ていって行つた！？」

「うっげ！ ヤベエ、樹音！ 母ちゃんに畑仕事放り出して来たの

「バレたぞ！」

「ええ！？」

明らかに樹音も焦った様子になった。奏七太が「ゴメン！ 今からすぐ行く！ 行くから夕飯又キにしないで！」と叫んだ。

「ゴメン、ナツ、サナ。俺ら先に行くわ！」

「また明日ね！」

そういうと挨拶もろくにできないまま、二人は走っていつてしまった。夏樹は特に挨拶しなくても後で会えるからいいか、と思いつつも急に二人きりにされてしまったこの微妙な空気をどうしようか、悩んでいた。

「みんな勝手だねえ」

早苗が苦笑いする。

「だな……」

夏樹が答えてから、沈黙が続く。夏樹は沈黙が苦手だ。どちらともなく歩き始めた。カラスが鳴く。まだ少し冷たい風が二人の頬を撫でる。

「ツクシユン！」

夏樹は思わずクシャミをしてしまった。

「冷える？」

「ああ……少しだけ」

夏樹は鼻をすすって笑って答えた。早苗から見える夏樹の鼻が赤くなっている。

「ねえ！ ちょっと温まらない？」

「え？」

「待っててね」

そういうと早苗は走って自動販売機のところへ行った。何かを二本買ってすぐに帰り、手に持っていたそれを夏樹に手渡した。

「ハイ！」

それはコーンポタージュスープだった。

「しばらく熱いから、カイロ代わりに使えるよ」

「サンキュー」

夏樹は嬉しそうに笑い、早苗から受け取ったポタージュスープを頬に当てた。

「あつたかい」

夏樹が頬を赤くして笑った。早苗の心臓の鼓動が高鳴る。

「ねえ、ナツ」

早苗は立ち上がって後ろを指差した。

「ちょっと上へ上がらない？」

「上？」

早苗が指す方角は、階段を上がった神社の広場だった。早苗に引かれるがまま、夏樹は上へ上がった。

「うわぁ……！」

上がった夏樹の目の前に広がったのは、一面真っ赤に染まった町並み、田んぼ、畑、そして空だった。

「どう？ 綺麗でしょ。稲賀沢でも一番綺麗だって私が思ってる場所なんだ」

「……スゲー」

不意に、明日香と約束した『二人きりの座席』^{ほし}のことが蘇った。田んぼが家へ、畑がビルへ、カラスの鳴き声が街を行き交う人と車の音に変わる。

「ナツ？」

夏樹が涙を流した。早苗はあまりに綺麗に見える夏樹の顔を見て心臓がドキドキ鳴りっぱなしだ。

「ナツ……」

夏樹は震える手でそっと早苗を抱きしめた。ガサツ、と芽吹き始めた草の上に早苗が持っていたポタージュの缶が落ちる。

「ナツ……私ね」

「……。」

夏樹は何も答えない。

「夏樹のことが好きなの」

「……………」

なおも続く沈黙。その状態が5分ほど続いて、ようやく夏樹が口を開いた。

「サナ……………」

「何？」

しかし、その次に出てきた言葉は早苗が期待していたものとは違うものだった。

「ゴメンな……………」

ザアッと強い風が吹き、早苗の髪の毛が夏樹の頬に触れた。

第44話 沈黙の席

「わっ！ ナツ、どうしたんだよその顔！」

翌日登校してきた夏樹の顔を見て拓弥と勇人が驚いた声を上げた。昨日、帰ってきた奏七太とさすがの樹音も夏樹の顔を見るなり驚いた声を上げた。

「えっと……ちょっといろいろあってね」

夏樹は正確には言わず、言葉を濁して自分の席へ着いた。それから早苗の席を見るが、彼女はいつも一番に来ているにもかかわらず、今日は姿が見当たらない。きっと、欠席するだろうとは思っていたけれど、実際に休みということを知るとショックも大きい。

(俺……最低なことしちゃったもん)

夏樹は俯いてため息を漏らした。早苗が一所懸命告白してくれたというのに、夏樹は明日香との思い出に重ねて彼女が明日香の代わりのように接してしまったのだ。

あの抱擁は、確実に明日香へ向いていた。断言できる。

「サナ……」

「何？」

「ゴメンな……」

「なんで……謝るの？ 付き合えないの？ あたしと」

「うん……」

早苗の顔が曇った。

「そこまでハッキリ言われるとは……思ってたかな」

早苗が悲しそうな声を出した。これ以上彼女を苦しめるつもりはなかったが、夏樹は言ってしまった。

「俺……何回かサナと目が合ったことあったよな？」

「うん。嬉しかった。あたしとナツ、両想いなんだか思っちゃって」

「あれさあ……」

「うん？」

「あれ、サナが俺の好きな人と似てるから…… ついつい目が行っちゃって」

「は？」

「……ゴメン」

「じゃあ……何？ あたし、ナツはあたしを見てたんじゃなくって…… あたし越しに……好きな人を？」

「……ゴメン」

次の瞬間、パシツと乾いた音が聞こえると同時に、夏樹の目の前に火花が走ったように見えた。それから左の頬にジンジンする痛み目を開けると、早苗が右手を思い切り振り切って、夏樹の頬をはいた後だとわかった。

「ヒドいよ……ヒドいよ、ナツ！」

そういつと早苗は落としたポタージユの缶を拾いもせず走り去っていた。

「……」

いつもは賑やかな早苗がいるはずの場所。周りにはいつも勇人、花音、樹音の3人が楽しそうに話している姿があるはずだった。しかし、今日はその姿はない。

早苗がいなければ教室も一際静かだった。別に誰も喋らないわけではないが、何か雰囲気が違う。早苗一人でここまで違ったものだったのかと夏樹は思った。

給食の時間。

ジーツと夏樹を見つめる拓弥と勇人の視線が痛くてついつい夏樹は視線を彼らから逸らしてしまっていた。

「ナツ、お前、今日、変」

まるでロボットが喋るように拓弥が単語を区切って喋るので思わず笑いそうになりつつ、夏樹は冷静を装って「そう？ なんでもな

いよ」と答えた。

「ふうん。なんでもない……か」

意味深な発言をする勇人を上目遣いで見た。その目はどこかオロオロしているようにも見えたのは、夏樹の気のせいだったのだろうか。

同じ頃、千鶴子の店の前で早苗はウロウロしていた。夏樹と明日香の関係を聞き出さたくて学校へ行くときに、分かれ道でお好み焼き屋へ続く道を曲がった。結果、学校を欠席する^{サボリ}ことになってしまった。

「でもきつとオバサンにバレたら怒られる……よね」

「心配しなくても、もうバレてるよ」

ギョツとした表情で振り向くと、千鶴子がカゴにお好み焼きで使う材料を目いっぱい入れて買い物から帰ってきたところだった。

「どうしたんだい、サナちゃん。学校は？」

「……。」

早苗は答えない。答えは一つ、『サボリ』だからだ。

「アツハハハ！ まあ、サナちゃん普段から真面目だからねえ。学校が窮屈に感じちゃうこともあるんだろうに」

そういうと千鶴子はグイグイと早苗を店へ押しだした。

「エッ！？ お、おばさん？」

「ホラホラ、もうご飯の時間だよ。ウチでお好み焼き食べてきな！」

「でもあたし、今日お金持ってないから……」

「お金なんていらんよお！ ほら、入った入った！」

強引に入れられて仕方なく早苗はランドセルを机に置き、座敷のテーブルに座った。しばらくすると目の前で千鶴子はお好み焼きを焼き始めた。おいしそうな匂いが漂う。

「……。」

早苗はキョロキョロと辺りを見渡す。何か明日香が写っている写真とかがないか探しているのだ。

「ん？」

その様子に気づいた千鶴子が聞いた。

「何か探し物かい？」

「あつ……ごめんなさい」

早苗は悪いことをしている気分になり、謝ってしまった。千鶴子は早苗が何を気にしているのかわかったようで、お好み焼きを焼く手をいったん止めて、茶の間の引き出しから何かをゴソゴソと出してきた。

「ほれ！　これが見たいんだろう？」

たくさんの写真。まるで自分の心が見透かされているようでドキツとしてしまった。

「なんか……ゴメンなさい」

「いいよいいよ。食べながら見な」

早苗はホカホカのお好み焼きがお皿に乗ったのを見届けて、割り箸を割った。ふんわりとした生地が最高だ。

ある程度食べてから、写真を見始めた。どうやら明日香と千鶴子は頻繁にメールをするようで、そのたびに添付された画像を千鶴子はプリントアウトして貯めていたのだという。

「これは？」

「ああ、クラス替えのときの写真だつてさ。あの子の通う学校変でね、進級のたびに写真撮るんだつてさ。想い出のためだとかでね」
屈託なく笑う明日香と夏樹がそこには写っていた。続いて出てきたのは、これは小学校のお祭のようだった。トミガシフェスティバルという看板でなんとなくわかる。法被を着た夏樹と男子数名、それから女子数名と明日香がいた。この笑顔も夏樹は本当に楽しそうだった。

そして自然学校。これは梅雨時の6月の日付がある。パジャマ姿だったり、眠そうな顔をしていたり、食堂で残ったフライドポテトの取り合いをしたりしている夏樹の姿がたくさん写っている。

そして、別の一枚。まったく知らない子ばかり写っている写真の左隅。見慣れた後姿の少年と、明日香が写っていた。何か約束して

いるのか、指きりげんまんをしているように見えた。それから次の写真。それは集合写真だった。

明日香に腕を回している、夏樹がいた。それを見た瞬間、早苗は思った。彼らの間に割って入れる人はいないだろう、と。

「それにしても、会ったことのない明日香の写真を見たいって……変わった子だね」

千鶴子は笑いながら言った。どうやら、早苗の真意は読み取られていないようだったので安心した。

「いえ……ナツが、やたら明日香ちゃん明日香ちゃんっていうもんですから……」

悔しかった。それが本音だ。でも写真を見てわかったのだ。彼らの絆は、そう簡単に切れるものではないと。

「まったく、あの子もなかなかヒドい子だねえ」

千鶴子が苦笑いする。

「ナツですか？」

「そうだよ。サナちゃんみたいにカワイイ子がいるのに、遠くの明日香の話ばかりしてねえ」

早苗は少し嬉しかった。ウソでもお世辞でもいい。今は自分を元気づけてくれる言葉が本当に必要なのだから。

「サナちゃんも諦めずに、夏樹くんを振り向かせられるくらいビックリするような美人になるだよ！ サナちゃん、カワイイからさあ！」

「ありがとうございます」

早苗は赤くなりながら、少し冷めたお好み焼きを口へ運んだ。

第45話 自由席

「うわー！ うわー！ すげえ、すげえな新幹線！」

拓弥は大声で座席から身を乗り出して景色を眺めている。

「でしょ！ 俺もここから見える風景ホント好きなんだ」

夏樹も同じようになつて身を乗り出して一緒に風景を見る。まだ少し残っている雪と芽吹いてきた草のコントラストが本当に綺麗だ。「おーい、お前ら。他のお客さんもいるんだから静かにせんか」

靖治が呆れた様子で二人に注意をするが、もちろん耳に入らない。勇人が「先生にゲンコツ落とされるぞ」と注意してようやく二人はきちんと席に着いた。

ここは秋田新幹線の車内。予算の都合上、いつも夏樹が家族で秋田を訪問したときと違い、自由席で座っている。

窓際に拓弥と夏樹。拓弥の隣に勇人。そして、夏樹の隣に早苗だ。夏樹はあの日以来、どうも早苗と喋りにくくて仕方がなかった。しかし、一方の早苗は翌日に欠席して以来元気いっぱい、夏樹にも普通に話し掛けてくれる。

「ねえ、ナツ」

早苗が急に声を掛けてきた。

「う、うん。なに？」

「なんか妙によそよそしいね」

バレた。心を見透かされている気がして夏樹は落ち着かないが、自然を装って冷静に答える。

「そっ、そんなことないよ」

どうも話すときに言葉が詰まる。早苗はフウツとため息をついた。「どうせあの時のこと、気にしてるんでしょ？」

「……。」

「黙ってたってダメ。わかるんだから」

「……ゴメン」

「もう！」

早苗はパンパンと夏樹の背中を叩いた。

「ワッ!？」

「いつまでも男の子がウジウジしてないで！ ナツ、いま好きな人いるんでしょ？」

「う、うん……」

「じゃ、その子のこと大切にしておいて」

「……うん」

「ただ、私のことはちゃんど友達として見てくれること！ OK?」

夏樹の顔が明るくなった。

「もちろん！」

「ヨシ、OK！ じゃ、修学旅行楽しむよ！」

早苗の笑顔をようやく夏樹はまともに見ることができた。その瞬間、夏樹も心から笑うことができたのだった。

「ナツ、ナツ！ 待ってえ！」

JR品川駅に到着した夏樹たちは新幹線から在来線へ乗り換えるためにホームを移動していた。しかし、あまりの人の多さに早苗、拓弥、勇人の3人は困惑気味だ。

「ハヤト、こつちこつち」

夏樹が慣れた様子で人ごみの間をはいくぐり、夏樹より少し大きい勇人の手を握った。

「プハア！ 助かった……東京って人が多いなあ」

「これぐらいまだ普通だよ」

「ええ〜？ そうなの？」

「お父さんが言ってたけど、会社行く人とかで朝はもっと混むんだってさ」

「へえ〜。なあ、夏樹のお父さんって何してる人？」

そこで夏樹は初めて自分が秋田の友人に父の話をしていることに気づいた。無意識だった。

「うーんと……会社員？」

「なんでそこ疑問形なんだよ」

勇人は笑って返してくれた。その後はすぐに別の話に切り替えてくれたので、夏樹もなんとなくホツとため息をついた。

「見るよ、勇人！ 電光掲示板！」

夏樹が勇人と同時に掲示板を見ると、次の電車の案内が表示されていた。

「こんど、つぎ、そのつぎだって！ 『こんど』と『つぎ』ってどう違うんだよ！」

拓弥は大声で笑い出した。

「ホントだ！ なんだよ、『こんど』と『つぎ』の違いって！ ヤバい、おもしろい！」

ゲラゲラと笑う二人をなんだか冷たい目で見ているホームで待つ人たち。夏樹はなんとなく居心地が悪くなった。

「やめなさいよ！ 恥ずかしい！」

早苗が二人の頭をそれぞれ叩いた。

「痛ってえ……こんな暴力女、絶対モテねえな」

勇人がブツブツ文句を言うのを早苗は聞き逃さず「アンタ、いっぺん地獄へ行け！」とホームで勇人を追い掛け回し始めた。

「やめんかー！」

靖治のゲンコツが早苗と勇人に飛んできたのは、そのすぐ後だった。

1時間ほど各駅停車でゆっくり揺られて夏樹たちは午後2時、鎌倉市内へ入った。まずJR北鎌倉駅で下車し、鶴岡八幡宮へと向かった。

「はあ……」

徒歩15分ほどで着いた鶴岡八幡宮を見るなり、拓弥たちはため息を漏らした。

「大きなイチヨウの木だねえ……」

早苗が大銀杏の木を見上げた。

「ね、夏樹！　なんかこの木で知ってることないの？」

勇人が興味津々といった様子で夏樹の袖を引く。

「え〜？　俺が知ってるのはこの木が樹齢1000年くらいってことだけかなあ……」

「1000年！？　それって俺たちの何倍生きてるんだ！？」

拓弥が一所懸命計算を始めた。

「うへっ！　100倍かあ。スゲエなあ」

「人間もそれくらい生きられたらいいのにね」

「俺は嫌だなあ。ジイさんになっちゃうし」

勇人が嫌そうな顔をしてイチヨウを見上げた。

「何もおじいさんになってからの姿で長生きするとは限らないですよ。単純に考えて200歳くらいまではピチピチなんじゃないの？」

「そっか！　じゃあこの木はジイさんか？」

「それも違うと思うけど……」

夏樹は彼らの会話に苦笑いする。でも、この鶴岡八幡宮には今まで何度も来たことはあったが、ここまで素を丸出して感動して人を見るのは拓弥たちが初めてだった。

「わっ！　スゲエ長い階段！」

勇人が指差したのは本宮へ続く大石段だ。

「ナツ！　これ、何段あるの？」

「これは61段」

「中途半端だなあ」

拓弥が笑いながら真剣に段数を数え始めた。

「さつきから言いたい放題だね、勇人と拓弥は」

夏樹も思わず笑ってしまう。勇人が「62段あるぞ！」と言ってすぐに早苗が「私、59しかない！」と言い、拓弥は「70段もある！」と悲鳴に近い声を上げた。

「そんなわけないだろ！　ちゃんと数えろよ。ねえ、先生？」

「先生も70段あるんだけどな……」

「……………」

この少ない人数でこれほど大石段のことで盛り上がれるグループもないだろう。夏樹はそう思うと笑わずにいられなかった。

「じゃあ、数えながら上がるうか」

「それいいねえ！」

夏樹の提案に全員が賛成し、ゆっくり数えながら上がる。

「30！」

4人で手を繋いで上がる。そんな彼らを周りの観光客が笑いながら見守る。

「58……………59……………60……………」

残り1段。やっぱり61段だった。

「61！」

上がった先でうつすら出た汗を拭い、夏樹が前を見たときだった。

「待ってよ、恭輔」

聞き覚えのある名前が夏樹の耳に入った。

「おっせーよ、敬吾。お前、家で引きこもってる間に体力落ちてる！」

夏樹の心臓が急に早く鳴りだした。

「ナツ？ どした？」

勇人が心配そうに声をかける。

「勘弁してあげなよ、嘉村くん」

女子の声が聞こえると、夏樹はかがんで震えだした。

「やだ……………やだ！」

「ナツ！ 落ち着けて、どうしたんだよ！？」

拓弥が震える夏樹の体をさする。早苗が慌てて靖治を呼んだが、

夏樹の震えは治まらない。

「あつ……………！」

夏樹の耳に懐かしい声が聞こえた。すると、少し震えが治まった。

「ねえ、ねえ！」

その声が誰かを呼ぶ。懐かしい。そう遠くない、最近までよく聞

いていた声。

「あつ……」

その声に今度は違う心臓の音がした。

「なっちゃん……」

顔を上げると、嘉村恭輔、半田敬吾、和田ちひろ、飯沼水穂、そして岡本明日香の姿があった。

第46話 一般席

白旗神社の前。一般でも見学できる座席に夏樹たち足立分校のメンバーは明日香たちと一緒に座っていた。

心配そうにその様子を見守る拓弥たち。それは水穂たちも同じだった。拓弥たちにしてみれば、突然震えだした夏樹の体調が心配だったし、水穂たちにしてみれば突然自分たちと出くわしたことで夏樹が何か嫌なことを思い出したりしないかが心配だったのだ。

しかし、夏樹と明日香にしてみれば予想しない再会だったので、二人は温かな気持ちでいることができた。

手を繋いだりしないが、二人は偶然を装って隣同士に座った。5月28日は白旗神社例祭が毎年開かれる。夏樹たち一般参拝客も参加できる行事だ。

夏樹は小声で明日香に話しかける。

「ねえ……なんでココにいるの？」

「うん……私たちね、遠足で来たの」

明日香も小声で返す。なるべく二人の関係を悟られないようにコツソリ。

「遠足か……。俺たちは、修学旅行だ」

「早いんだね」

「俺たちの学校、いろいろ変わったことをするからね」

「例えば？」

「野菜育て？」

「何それ」

明日香はククツと笑った。夏樹も思わず笑う。

「笑っちゃうだろ。でも……俺、案外楽しみだったり」

「そうなの？」

「うん。何かを育てるって……いいと思わない？」

夏樹がニッコリ笑った。そんな表情を、明日香は久しぶりに見た

気がした。

「……そうだね」

夏樹が嬉しいならそれでいい。笑ってくれていればそれでいい。明日香はただ、そういう気持ちだった。

例祭を見学し終わると、夏樹たちと明日香たちは当然ながら別行動となる。一緒に行動する理由など何も無い。だが、明日香と夏樹は違う。理由があるのだ。

「……岡本さん。行こう？」

ちひろが明日香の袖を引く。ちひろは一瞬夏樹を見やったが、すぐに目を逸らした。しかし、夏樹は目を放さない。

「……。」

凍るような冷たい目で夏樹はちひろを睨みつける。その異様さに気づいた早苗や勇人も夏樹に声がかけれられない。

「なつちゃん」

明日香に声をかけられた瞬間、夏樹の目がいつもの優しさを取り戻した。

「また、ね」

「……うん！」

明日香はちひろの手を振りほどいて先に駆けていった。

「ナツ……？」

早苗がおそろおそろ夏樹に声をかけると、いつものように人懐っこい笑顔で「なに？」と返してくれた。

「……なんでも無い！ 先生、向こうで待ってるよ。行こう！」

「うん！」

その後、様々な場所を見学した夏樹たちは宿泊先の東京都内のホテルへ向かうことになっていた。小田急電鉄片瀬江ノ島駅でロマンスカーに乗車し、相模大野駅まで行く。その後、急行に乗車する。

「相模大野〜。相模大野〜。新宿方面へお越しのお客様は……」

夏樹たちは相変わらず混雑したホームを移動していく。ちょうど滑り込んできた急行に乗り込む。夏樹は見るものすべてが懐かしく

写っていた。

「おい、お前ら！ 急行がちょうど来たから乗るぞ！」

「はぁーい！」

拓弥が夏樹と勇人を突き飛ばすようにして車内に入る。見慣れた塗装の列車。見慣れた座席。つり革。車内広告。すべてが懐かしい。ドアが閉まる。ゆっくりと動き出し、それから車内放送がかかる。秋田の電車はワンマンカーだからいつも車内放送は機械の声だ。

「ご乗車ありがとうございます」

この後、いつも停車駅名を読み上げる。

「停車駅をご案内いたします」

夏樹は思わず耳を塞いだ。あの名前を聞けば、動かすには無理やいなと思うたからだ。

「町田、新百合ヶ丘」

「!？」

突然、両手がはがされた。勇人が夏樹の両手を無理やり耳から放したのだ。

「どした？」

「……あ」

「七海」

聞いてしまった。

「どした？」

「……ううん。なんでもないよ」

「なんでもないことないだろ。急に耳を塞いで……」

「大丈夫だよ。本当に」

勇人は心配そうに夏樹の顔を覗き込み「心配事あれば、俺にでもたくちゃんにでも言えよ？」と優しく言ってくれた。本当に彼らは優しい。心底夏樹はそう思う。

町田駅を過ぎ、新百合ヶ丘に停車する。夏樹の心臓の鼓動が早くなる。

「次は、七海。七海です」

……樹、夏……。

「七海の次は、登戸に停車します」

ナツ……、……キ。

不意に夏樹の前にいる靖治や右にいる勇人、左隣にいる早苗の姿が白黒に変化する。

聞き覚えのない声。誰かが夏樹を呼んでいる。

「……ッ！……ッ！」

聞き覚えのあるはずの声がまったく聞こえなくなる。

(この声は……誰だった……?)

頭が痛い。誰の声かわからない。聞き覚えがあるのかもしれないのかもわからなくなってきた。

「夏樹ッ！」

「！」

夏樹が目覚めると、優翔と水穂がそばにいた。

「優翔……飯沼……」

頭がガンガンする。頭痛など久しぶりだ。汗もびっしょりかいている。水穂が彼女のハンカチで濡れた夏樹の額を拭ってくれた。

「ずいぶん息が切れてたし……それに寝言で『行かせて！ お願いだから！』とか何度も言ってたけど……」

「……ああ、うん」

夏樹は水穂のハンカチを借りて汗を拭う。

「ひよつとして……あの日のこと？」

水穂が聞いた。夏樹は無言で小さくうなずく。

「あの日……夏樹にしちゃあ無茶なことしたよな」

優翔が懐かしそうに笑う。夏樹は恥ずかしくて俯いてしまった。

「でも、俺は嬉しかった、かな」

優翔の一言で、夏樹はあの日取った自分の行動が間違いでなかったという気持ちになり、救われた感覚になった。

夏樹はあの日、自分の周りを囲む殻を初めて破ったのだ。

第47話 後部座席

「頭 痛^{いて}え……………」

夏樹はガンガン痛む頭を抑えながら立ち上がった。足元がもつれてうまく歩けない。

「おいおい、酔っ払いがムチャすんなよ」

優翔は苦笑いしながらよろける夏樹の体を支える。夏樹も苦笑いするが、すぐに頭痛で顔をしかめてしまった。

「好きで酔っ払ったんじゃねえっつの……………痛^{いて}ッ」

「強がつてんじゃねーの。で？ 今日は何で来た？」

「チャリンコ」

「ダメだそりゃ」

優翔がプツと吹き出した。

「なんで」

「飲酒運転だろ」

「え？ そうなの？」

水穂が驚いたように聞き返す。

「そつだよ。チャリンコは軽車両。酒飲んで運転したら立派な飲酒運転だ」

「チャリンコくらい平気だよ。飲酒運転なんてクソくらえ」

夏樹はおぼつかない足でウロウロする。水穂が慌てて体を支えるが、とても支えきれないようだ。そのまま水穂に抱きつくように倒れてしまった。

「ちよつとー！ 重い！ 重いよ朝倉くん！」

「んー、飯沼なんかいい香りする」

「キヤー！ ちよつとヤダ！ ねえ、起きてよ起きて！」

「いい香り……………痛^{いた}ッ！」

夏樹の頭に突然の衝撃。もちろんそれを加えたのは優翔だ。

「セクハラオヤジみたいなことやってんじゃねえよ」

「んだよ。今日の優翔はオレに敵しいな」

夏樹はプウツと頬を膨らませる。優翔はすぐに着ていた上着を夏樹に被せ、夏樹のカバンを手に持った。

「帰るぞ」

「チャリンコだめなんですよ。オレまだいるよ歩いて帰るよ」

「バカ言うなよ」

「だってもうオレ18歳」

水穂も苦笑いする。酒が入るとどうも夏樹は少し夕チが悪くなるらしい。

「そう、18歳。未成年ですね」

夏樹の動きがピタツと止まる。優翔は寂しそうな顔をして続けた。

「未成年はタバコやお酒は禁止されてるんだよなあ、法律で」

水穂がクスツと笑いつつも続ける。

「そうね。なのに朝倉くんはお酒今日飲んじゃった。もし歩いて帰って警察の人にバッタリ出くわしたりしたら……」

優翔がクンクンとワザとらしく夏樹の顔の周りで匂いをかく。

「んっ？ 君、酒臭いね」

水穂も同じようにクンクンする。

「あらっ、本当。君、20歳？」

「あつ、高校生じゃないか」

「ダメねえ」

「ちよつと署まで来てもらおうか。水沼くん、名前と住所、電話番号を聞いて」

「はい。もしもし？ 朝倉夏樹さんのお宅ですか？ 実は息子さんが……」

「わかったあ！」

夏樹が顔を真っ赤にしながら叫んだ。

「じゃあどうして帰ればいいのさ!？」

「心配するな」

優翔は右手の人差し指で何かのキーをクルクル回した。

「何それ？」

「マイカーのキーですよ」

「優翔、運転できるの？」

「18歳ですからね」

「じゃあ悪いけど……お願いね」

水穂と麻里が優翔に両手を合わせて頼み込んだ。夏樹は頭痛を我慢しながら優翔の車の後部座席に乗った。

「余裕余裕。任せて。また連絡するよ、飯沼」

「うん！」

「じゃあな」

優翔はエンジンを掛けてから窓を閉め、車を発進させた。車の走行音だけが聞こえる。たまにバックミラーから優翔が後ろを確認しているのが見えて、目が合う。そのたびに優翔はニツと笑ってくれた。

「……優翔」

信号に引っかかってすぐ、夏樹は優翔の名前を小声で呼んだ。

「飯沼と付き合ってたの？」

「どう思う？」

「また連絡するなんて言っただろ」

「相変わらず鋭いなあ、夏樹は」

正確には言わなかったが、それが答えだろう。

「いつから？」

「今年の4月から」

「長いじゃん」

「まあな」

信号が青に変わる。ゆっくりと発進し、法定速度の市内40キロで走り始めた。真面目なところはそのままのようだ。

「優翔なら飯沼を大事にするんだろうな」

「なんだよ、急に」

優翔はクスツと笑った。

「何を基準でそんなこと言っつなさ」

「車の運転」

「なんでまた」

夏樹はしばらく黙って、考えてから言った。自分はいつからあの人のことを普通に話せるようになったのだろうか。

「車の運転は人柄が出るんだってさ。親父がそう言ってた。優翔は車の運転がとつても丁寧だ。きっと飯沼のことも大切にするだろな」

「……そうだといいけどな」

優翔が呟く。
「俺さ、ホントはチョー不安。ホントに水穂のこと、大切にできてんのかな……」

「……。」

「どうだろなあ」

「心配いらないよ」

夏樹は心底そう思ってた。嘘偽りなく。

「飯沼、最後うん！って言ったとき、嬉しそうだった」

「そうなの？」

「なんだ。優翔、気づいてなかったのかよ」

夏樹はおかしくなって笑ってしまった。優翔らしい。肝心なところは見落としてばかりだ。

「まあ……大切に上げて」

「……サンキュ」

夏樹の家の前で丁寧に優翔は停車した。

「ありがとうね」

「860円です」

「マジかよ！」

「冗談」

アハハハツと笑い声が響いた。

「夏樹」

「なに？」

「お前……行くの？」

「……。」

「行ってやれよ」

沈黙が続く。強い風が吹いて、葉のない木が音を立てた。

「考えとく」

夏樹はハッキリ言わなかった。まだ、心の整理ができていない。

「考えついたら、連絡ちょうだい」

「わかった」

「じゃ……」

「また」

優翔は最後にもう一度手を振って、車をゆっくり発進させた。夏樹は見えなくなるまで、優翔を見送った。

第48話 横座席

12月7日(月)。夏樹は登校のために自転車に乗っていた。本
当なら家を出て、つくし野川という川を越えて津上橋つがみという橋を渡
ってしまえば学校はすぐだ。しかし、夏樹はあえていつもそのつく
し野川沿いを北へ向かって行き、香神橋こうがみという違う橋を渡っていく。
そこを上ると小田急電鉄が走っているのが見える。

朝のラッシュ時。電車の中にはサラリーマンや学生がたくさん乗
っている。鉄橋の轟音が夏樹の耳にも届いた。

「え？」

不意に車両の中に見覚えのある姿が目に入った。長髪。あまり高
くない背。確信などない。そもそも見間違えかもしれない。しかし、
夏樹はそう思いつつも確かめずにはいらなかった。

気づいたときには、自転車を七海駅に向けて走らせていた。

自転車を駅に繋がる歩道橋の横に置いて、鍵をかけてから慌てて
歩道橋を駆け上がる。途中、クラスメイトらしい高校生とすれ違っ
たのか、「夏樹!？」という驚いた声が聞こえたが、振り向く余裕
などなかった。

急いで切符を買い、改札を出る高校生とはまったく逆の流れで夏
樹はホームへ駆け込んだ。

「……はあ……はあ……ハアッ……」

何の意味もない行動。夏樹自身がそれをわかっていたはずなのに、
なぜかここまで来てしまった。

冷たい風を思い切り喰らわせながら、特急がホームを通過する。

「……ホントになやってんだろ、俺」

夏樹はフツと自嘲気味に笑い、とりあえずホームにあるベンチに
腰掛けた。何度も電車が停車し、通過する。気づけば9時を過ぎて
いた。

メールが入る。綾音だ。

『何やってるん？ どうしたん？ 三浦くんが夏樹を見たって教えてくれた（>|<） いまどこにおるん？』

心配してくれるのは嬉しいが、今はそつとしておいてほしいと思
い、夏樹は携帯電話の電源を切ってカバンにしまいこんだ。

どれくらい時間が経ったのかわからない。いつの間にかラッシュ
も終わって客の姿がまばらになってきた。夏樹は手にあごを寄せた
まま、呆然と何度も通り過ぎる電車を見つめ続けた。

「あ……」

雪が降ってきた。今朝からどんよりと曇ってはいたが、降るとは
思っていなかっただけに少し嬉しい。そして、少し早い初雪でもあ
った。

「あの時は春も過ぎてたから……新緑の頃だっけなあ」

自分にしては大胆な行動だった。拓弥や勇人はオロオロしていた
が、早苗と靖治は至って冷静。あの時出迎えた玲子と登、花菜、圭
人、そして明日香も冷静に優しく迎え入れてくれた。だから、あの
時のことは家族も友人も誰も知らない。

「夏樹 ツ！」

「!?!」

自分を呼ぶ声があったので振り向くと、なぜか今までホームにいた
はずの夏樹は電車の中にいた。

「サナ……拓弥……勇人……先生」

勇人が誰かを慌てて止めようとするが、その人物は手を振りほど
いてホームへ出てしまった。

「あれは……俺？」

夏樹は自分らしき人物を追う。不思議なくらい、人がいない。夏
樹は気にせず、その人物の後を追うがおかしいほどに足が速い。

「クソッ！ チビのくせして……」

そう言った瞬間、そのチビの足が止まった。夏樹はそのチビの姿

を見て凍り付いてしまう。

「お前……やっぱり、俺なのか？」

「……。」

間違いなかった。自分の幼い頃の顔を見間違えるはずなどない。いま、自分の目の前にいるのは紛れもない、小学6年生の夏樹自身だった。

「あの時の……俺は正しかったと思う？」

「……。」

「あの時の俺の行動は……明日香を……」

「今の俺はどう思ってるの？」

「！」

夏樹は突然喋りだした『自分』に不気味さを感じつつも、会話を始めた。

「俺は……俺は……ただ、明日香に会いたかったんだ。ただ、それだけで……」

「そっか」

『夏樹』は少し笑いながらそう答えた。自分はこんなにも寂しうに笑うのかと思うと、夏樹は切なくなった。

「明日香も俺に……そしてお前に会いたがっていた」

「だろ？ だから……」

「でも、それが明日香を傷つけたんだ」

「……っ」

夏樹は『自分』に吐かれた言葉に答えを詰まらせた。

「でも……俺もお前も後で、もっともつと傷つくんだよな」

『夏樹』は夏樹以外の他ならない。目の前にいる『夏樹』はいったい何者なんだろうか。

「俺は……2011年の俺は、ずっと模索してる」

「何を？」

「それはお前が一番よく知ってるハズさ」

「わかんねえよ！」

「お前も……現代そうちで模索してるんだろ？」

「そんなの……わかんねえよ！」

「……クセに」

「え？」

目の前にいる『夏樹』の姿が急に遠のく。

「待てよ！ 待つてくれ……まだ、まだ聞きたいことが……！」

声が出なくなる。音が聞こえなくなり、やがて『夏樹』の姿は見えなくなった。

「君、君」

ハッと夏樹が目を覚ますと、駅員が心配そうな様子で夏樹を揺り起こしていた。周りにはオバサンとオジサンが夏樹を同じく心配そうに取り囲んでいる。

「大丈夫かい？」

「えっ……」

慌てて起き上がると、自分がホームの上で倒れていたことに気づいた。

「顔色は悪くないから病気とかではないと思うけどねえ」

オバサンが優しくそうに笑い、夏樹の額に手を当てた。

「……すみません、なんか」

夏樹は制服についたホコリを落として立ち上がった。

「切符、落としてるよ」

おばあさんが落とした切符を拾ってくれた。

「すみません」

「……いいえ」

夏樹が大丈夫だと確認した駅員やオバサン、オジサンは静かに散っていく。おばあさんだけが残った。

「柿生駅」

「え？」

「おばあちゃんね、柿生駅に用事があるんだけどね」

「そうツスカ」

「あなたも、柿生駅に用事があるんだろう」
切符の行き先を見られていたらしい。

「学校は……お休みかい？」

「……自主休校ツス」

おあばさんはクスツと笑った。

「おいくつかね？」

「18です」

「若いねえ」

しばらく続く沈黙。おばあさんは寒そうに手に息を吹きかけた。

「どうぞ」

夏樹ははめていた手袋をおばあさんに手渡した。おばあさんはしばらく手袋を見つめて、それから少し嬉しそうにはめた。

「ずいぶん、小さいんだね」

ドキツとした。夏樹のはめている手袋はずいぶんと年季が入っている。流行の手袋とかではなく、ずっとその手袋を使っている。もうサイズはとづくに合わなくなっているし、何より右手小指と左手薬指の先には穴が開いている。

「大事な……モノだったのかい」

「……はい」

「おばあちゃんもね、昔、大事な人がいたんだよ」

おばあさんに似つかわしくない、最新式の携帯電話を持っていた。

「スゲエ！ それ、先週発売のケータイじゃないですか！」

「おばあちゃんねえ、こう見えても若い人と話するのは好きなんだよ」

「スゲエ！ ちょっと見せてくださいね」

夏樹はおばあさんから電話を受け取り、外観を見つめた。それからすぐにメインディスプレイを開いて、ハツとした。

ディスプレイに映るおばあさんは、明らかに若かった。

「ああ、見ちゃったのかい」

おばあさんは携帯電話を見つめ、懐かしそうに言った。

「それはね、孫なんだよ」

「お孫さん……」

「もうねえ、あの子の歳は14歳で止まったままだねえ」

「……。」

なぜ止まっているのか。それはもう、言うまでもない。夏樹は辛くて聞けなかった。

各駅電車が滑り込んできた。小田急の通勤電車は基本的に横座席ロングシートが設置されている。夏樹とおばあさんは乗り込んで、隣同士で座った。

発車して間もなく、夏樹は気になることを聞いた。

「あの……」

「なんだい？」

本当に聞いていいかどうか、迷いに迷った末の発言だった。

「どうして、お孫さんは14歳で……その……」

亡くなった。そうは言えなかった。亡くなったとは限らないからだ。しかし、おばあさんは夏樹の予想どおりの言葉を口にした。

「あなたは西暦で言うと、何年生まれだい？」

「えつと……1991年です」

「そうかい……あの子は1981年生まれだったから、10歳違っただねえ」

電車の走行音だけが聞こえる。車内には夏樹とおばあさん、買い物へ行く若いお母さんとその娘さん、競馬新聞を読んでいるオジサンくらいしか乗っていないかった。先頭車両だからだろうか、サラリーマンの姿は見当たらない。聞こえるのがはばかられる話題かと思っただが、おばあさんは何の抵抗もなく続けた。

「これはね、1995年のお正月、娘たちが住んでいた神戸で撮ったものなんだよ」

「俺が生まれる4年前ですね」

「そう。それで、これが最期の写真だった」

「……なんで。何かあったんですか？」

「この16日後にね。阪神淡路大震災っていう、それはそれは大きな地震があつてね」

日本史で習った気がする。しかし、太字になっていただけでそれがどんな災害だったが、そこまでは教えてくれなかった。

「娘と旦那さんは無事だったけど……この子だけね。この子だけ、ダメだった。受験でね、勉強のために朝早くからやっていたみたいで。高校の受験なんてまだまだ先なのに。それで、地震が来て……本棚がね」

「……。」

「でも、その顔を見たら綺麗でねえ。きっとあなたが見たら恋しちやっただかもしれないねえ」

夏樹はもう一度、ディスプレイに映る少女を見た。確かに、地味だけどかわいい。

「あのすぐ後は、その写真がもう見るのも嫌でね。何度捨てようとしたか。何度焼こうとしたか。何度この子のところへ行こうとしたか。でもね、そんなことしたってあの子は帰ってこないんだよね」

「……。」

夏樹にも痛いほどわかる。夏樹も、この手袋を何度捨てようとしたか、何度ちぎろうとしたかわからない。あの後、この手袋を見ると泣き叫んで誰も手がつけられなくなるほどだった。でも、今はこうしてまた一緒に冬を迎えている。

「あなたは、手袋が大事なんだね」

「ハイ……」

「これからも、大事にしてやりなさい」

「ハイ……」

夏樹の目に涙が溢れてきた。視界がボヤける。電車が揺れ拍子に、たまった涙が目からこぼれ落ちた。

第49話 小奇麗な席

おばあさんとは駅前で別れた。お互い、目的こそ同じだったが目的地は違っていた。複数ある場所だから当然といえば当然である。狭い路地を抜け、何回も右折と左折を繰り返してようやくたどり着いた。夏樹は門扉を開けて中へ入る。やはりこの時期にこの場所へ来る人など少ないのかもしれない。門扉の横には「柿生北霊園」という看板が立っていた。

砂利を踏みしめながら中へ入る。冬の霊園は昼間でもひっそりしていて人気がない。高校生が平日のこの時間帯に霊園にいること自体、おかしいので夏樹にしてみれば都合がよかった。場所は覚えていた。大きな道を通って突き当りを左へ。そして見えてきたのは。

「明日香。おひさ」

「岡本家」と刻まれた墓石の前に、夏樹は座りこんだ。まず、柄杓ひしやくに汲んできた水を掬すくって墓石にかける。いつもやっていることだ。冬場で寒くとも、これを欠かしたことはない。

「明日香は汚いのが嫌いだもんな」

夏樹の部屋の汚さを怒られたこともあった。どっちの部屋も汚いとプリプリされたものだ。

ある程度水をかけ終わると今度は線香を点けて供える。手を合わせる。2分ほど黙り込んで、ひたすらに祈る。

「よし！ えつとな、今日果物も持ってきた。もうすぐクリスマスだろ？ イチゴが出てたから、持ってきた……」

夏樹はイチゴを供えようとして気づいた。綺麗な花が供えられていることに。それも、まだ供えられたばかりの綺麗な花。よく考えてみれば、墓石自体も綺麗だったことに気づいた。

「……おばさんとおじさんかな」

しかし、年末商戦のこの時期だ。八百屋を営んでいる明日香の両親が来る余裕はないように思う。店は毎年大繁盛だからだ。

「じゃあ圭太か花菜さんかな……」

姉弟の彼らなら納得もいく。しかし、圭太がここまで綺麗にするとは思えない。そうなると、残る可能性は花菜だけだ。

「まあ……誰にしても、綺麗にもらえるのはいいことだよな」

夏樹は笑ってイチゴを供えた。もう一度手を合わせてから、夏樹は立ち上がって墓石の前を後にした。

「……行つた？」

足音が遠のいたのを確認して、声をかける。

「大丈夫そうだ」

「じゃあ出ようか」

そう言つて顔を出したのは、和田ちひろだった。

「リョーカイ」

続いて出てきたのは、嘉村恭輔だった。

「まさか急に来るなんて思わなかった」

「ホントにな」

「バレなくてよかったけど」

ちひろが笑つて言う。恭輔も笑つて「ホントな」と返した。

ちひろは中途半端だった花をもう一度生けなおした。恭輔はお茶を入れて供える。それから夏樹の供えたイチゴをお茶の横に移動させて、彼が点けていった線香に便乗して手を合わせる。ちひろが無言で同じようにしていた。

「あ……しまった。ケータイ置いてきたじゃん」

夏樹は霊園の入口で携帯電話を置き忘れてきたことに気づいて、足早に墓石のところへ戻りたした。

「あれ？ 嘉村くん。これ、あなたのケータイ？」

ちひろはオレンジ色の鮮やかなケータイを恭輔に見せた。

「いいや？ お前のじゃねえの？」

「あたしのじゃないよ」

ちひろはケータイを開いて心臓がドクン、と鳴ったのを感じた。
「どした？」

恭輔もディスプレイを覗き込んで、動きを止めた。

そのディスプレイに映っていたのは、中学の制服を着た夏樹と明日香だった。

「これ……」

ちひろが声を詰まらせた

「忘れたんじゃ……」

恭輔がそう呟いた瞬間、後ろで砂利が踏まれる音がした。

二人が驚いて振り向くと、夏樹も同じように驚いた顔をして立ち尽くしていた。

「……」

気まずい空気が流れる。妙に続く沈黙。しかし、それを最初に破ったのは意外にも夏樹だった。

「よう」

「……ウス」

苦笑いしながら恭輔が返す。ちひろは逃げ出したい気持ちでいっぱいだった。夏樹がちひろと恭輔のところへ無言で近寄ってきた。何か怒られそうな気がして、ちひろは身を縮こまらせた。

「ありがとな、ちい」

夏樹に「ちい」と呼ばれるのは、本当に久しぶりだった。それに、ありがとうと言われるのも。

「お前らだろ？ 明日香のいるとこ、綺麗にしてくれてたの」

「……」

「おかしいと思ってたんだ。ご家族がそんなに頻繁にお花を活けに来たり、掃除に来れるほど時間ないもん。それなのに、いつも綺麗な花が咲いて、新鮮なお供え物があつて。たまにまだ火が点いたままのお線香もあつた」

「……そこまで見てるのか、お前」

恭輔がため息を漏らした。

「観察眼はあるんでね」

「はい、温かいお茶。うちで入れてきたの」

ちひろは夏樹と恭輔に紙コップにいれたお茶を渡した。

「ありがとう」

夏樹はニツコリ笑ってお茶を受け取る。ちひろの顔はまだ緊張したままだ。

「……もう口も利いてくれないと思ってたのに」

「え？」

「同窓会でも……ろくに話もできなかったから」

「ああ……あれは俺もベロンベロンになったつてもあるし」

夏樹は笑いながら答えた。本当にあれは恥ずかしかった。

「本当はさ、言いたいこといっぱいあったよ。でも……なんだろう。

優翔に呼ばれて行ったときに、ちいと嘉村は本当に辛そうな顔してた」

「あまり会いたくなかったかな……事実。まあ、朝倉のほうが俺たちに出会いたくなかったらうけど」

恭輔がお茶を飲み干してからやっと口を開いた。

「いや……俺は、みんなに会いたかった……のかな。わかんない」

「……あたしは、会いたかった」

ちひろが涙をこぼしながら震える声で言い始めた。

「ひどいことしたのに、何にも謝罪しないで。なんとか言おうとしたとき……もう朝倉くんはいなくて。言えなくて。遠足で会ったときにも何も言えなかった。中学で再会したときも、同窓会でも……」

震えるちひろの頭を、夏樹の手が優しく撫でた。

「もういいよ……」

「でも……でも……」

「ひとつだけ、いい？」

「なに？」

「いつから……こういうことしてたの？」

ちひろは涙を拭いてから言った。

「明日香がここへ来てから……ずっと」

夏樹はある程度予想はしていたが、本当にそう言われると驚きのほかなかった。同時に、自然とその言葉が出た。

「本当に……ありがとう」

夏樹は七海へ戻る電車の中で、恭輔とちひろに挟まれて揺られていた。ここから見える風景も、あの日とはずいぶん変わってしまった。

「お前さ」

恭輔がおもむろに話し始めた。

「よっぼどだったんだな」

「何が？」

「修学旅行抜け出してまで会いたかったんだな……」

夏樹の胸が締め付けられる思いがした。

「あたしも見たよ。もう、必死な朝倉くんを……」

(みんなは知らないだけだ。あれで、あれで明日香は……)

「……朝倉？」

急に夏樹の呼吸が荒くなってきた。

「ゼエ……ゼエ……！」

「朝倉くん？ どうしたの!？」

ちひろの声が頭に響く。息苦しくなり、そのまま倒れてしまった。

「朝倉！」

「朝倉くん!!」

「和田！ 車掌呼んで来い！」

「わかった！」

「朝倉……！ ……倉！ 朝……ッ！」

次第に恭輔の声が遠のく。目の前が暗くなって、そのまま何も聞こえなくなった。

第50話 君のいる席

「ナツ？」

ハツと夏樹が気づくと、勇人と早苗が心配そうに覗き込んでいた。「どうしたん？ 顔色悪い」

噴き出た汗を早苗が優しくハンカチで拭き取ってくれた。

「ありがと……。もう、平気だから」

「そうか？ 体調悪いなら早めに言えよ」

「うん。ありがと」

勇人は安心したように再び、拓弥と楽しそうに話を始めた。早苗も樹音と話を再開しだした。夏樹は呆然と前を流れていく車窓に目を取られていた。見たことのある建物が増えるにしたがって、落ち着かなくなってくる。

「まもなく、七海く、七海です」

グツと気持ちを堪^{こた}える。ここで堪えないと、きっと歯止めが利かなくなると夏樹は思った。

電車はブレーキを掛けてゆっくりと七海駅構内へ進入した。ドアが開くと同時に外の新鮮な空気が入り込んできた。

「七海く、七海です」

懐かしい音がする。七海の空気は味があっただろうか。空気に味がある気がしたのは、生まれて初めてだった。

「……。」

開いたドアの向こうに広がる町並みを見つめた。学校、家、公園、駄菓子屋、スーパー……。今まで当たり前だった、今までのいつもの生活が今、目の前にある。

「まもなく、ドアが閉まります。ご乗車のお客様はお急ぎください」
ウズウズする。気持ちが落ち着かない。

「ドアが閉まります」

そして、「ご注意ください」のアナウンスが掛かる直前、夏樹は

立ち上がってまるでスライディングをするように駅のホームへ飛び出した。

ボタン！とドアが閉じる音と同時に早苗や勇人が「ナツ！」と叫ぶ声が聞こえた。

「ナツっ！」

拓弥も驚いて立ち上がるが、既にドアが閉まって電車は動き出ししている。もう遅すぎだった。

靖治も驚いて立ち上がるが、駅名を見て動きを止めた。これは必然だったのかもしれないと、靖治は思ったのだ。

「朝倉！」

靖治は窓を開け、夏樹に呼びかけた。

「お前、泊まるホテルの名前と場所は知ってるな!？」

「はい！」

教育者として、担任として許されざる発言だったかもしれない。

しかし、靖治はそれを承知で叫んだ。

「後悔だけはするな！」

「……先生」

「わかったな!？」

遠ざかる夏樹に向かってもう一度大声で聞いた。夏樹は両手で大きく丸の字を描いた。

「先生！　なんで!？」

早苗が驚いて靖治に聞いた。

「後で……後でちゃんとみんなに説明するから」

夏樹は両手や膝についたゴミを払って急いで階段を駆け上がった。途中下車だったので、切符は駅員に半ば強引に手渡して外へ出る。

駅員はつつこむヒマもなく夏樹が出て行ったので、啞然としていた。

「うわっ!？」

駅舎を出てすぐ、誰かにぶつかった。

「い、ごめんなさい……あっ！」

ぶつかつたのは、嘉村恭輔だった。

「あ……朝倉？」

夏樹はすぐ顔を隠して走り出した。恭輔は後を追っては来なかった。

「なんで……ここにいるんだ？」

恭輔は啞然としたまま、小さくなる夏樹の背中を見つめた。

夏樹は夢中で走り続けた。見覚えのある家、公園、商店、コンビニ。懐かしさと嬉しさがこみ上げてきて、走っていると自然に笑みがこぼれた。今、自分は間違いなく七海にいる。そして、明日香の元へ向かっている。

「……あれ？」

ちひろは目を擦った。もう一度目を凝らして見るが、やはりあの後姿は夏樹だ。

「な、なんでいるんだろ……」

ちひろはドキドキしながらゆっくり近づく。すると夏樹はすぐに気配を察知したようで、ちひろのほうを振り向いた。

「！」

ちひろは思わず動きを止めてしまった。目が合う。沈黙が続いて、ちひろは心臓が飛び出しそうなほど鳴っていた。

小学校6年生。ちひろも、体つきが大人へ最近近づいてきていた。夏樹はまだまだだろうと思っただけに、少し面食らった。

ちひろもちひろで、夏樹が急に大人びた顔になったので驚いて声を失った。

「……。」

夏樹は信号が青になったのを確認して走り出した。

「あつ……ま、待って！」

ちひろは慌てて後を追うが、サッカーで鍛えた夏樹の足に追いつけるはずもなく、あつという間に見失ってしまった。

明日香の家まであと少し。夏樹はただ、一目散に明日香の家を指した。そしてようやく着いた明日香の家は、今日は定休日なのか

シャッターが下りていた。

「……………」

夏樹はとりあえず、シャッターをノックした。しかし、中から返事はない。

「留守だろな……………」

シャッターにもたれて夏樹は誰か来ないか待つことにした。やがて日が暮れて、買い物客らしいおばさんが増え始めた。汗をかきながら座ったままの夏樹を奇異の目で見るおばさんたち。夏樹は気にしないままでしたが、そろそろ由利が買い物に來たり陽乃が下校中に通ったりするのではないかと思い、商店街から離れることにした。「会いたかったけど……………急には無理か」

夏樹はフウツとため息をついて八百屋を離れた。もう一度振り返り、明日香の部屋を見上げる。

「またな」

夏祭りの日。明日香と夏樹で帰り道、無言でここを歩いたのを今でも鮮明に覚えている。二人きりの座席はしだと約束した、あの日。何がいけなかったのだろう。

自分だろうか。

優翔？

ちひろ……………」

恭輔？

お父さん。

お母さん？

姉ちゃん？

敬吾。

明日香が悪いはずはないと思う。

夏樹の中で、誰が悪くてこんなことになったのかわからなかった。

「……………」

気づけば、いつのまにかあの火の見櫓の前にいた。無意識のうちに来ていたのだ。強い風が吹き、砂埃が舞う。

目に砂が入ったのか、自分の目から自然と出てきたのかわからない。頬を幾筋もの涙がこぼれていく。

「俺……七海にいたいんじゃない」

そっと扉を開けた。鍵はかかっている。ゆっくり階段を歩き、櫓の最上部へ上がった。

「あ……れ？」

夏樹の目に、懐かしい後姿が見えた。その見慣れた姿が振り返るときに、風に吹かれた髪の毛が綺麗に揺れた。

「……待ってたよ」

「ウソ……だ」

夏樹は目を何度も擦る。しかし、ウソではないようだ。その姿は、ずっと夏樹の目に映っている。

「待ってたって……言ったでしょ？」

「……マジ、だよな」

「マジ、ですよ」

夏樹の目から、一気に涙がこぼれ落ちた。悲しいのではない。嬉しいのだ。嬉しいのに、涙が出る。こんなことは、夏樹にとって初めての経験だった。

「明日香……！」

夏樹は大きくなって少し筋肉質になった腕で明日香を抱いた。声変わりしたのか、少し低い声のように明日香は感じた。

「なっちゃん……待ってたよ」

明日香がそっと夏樹を抱きしめる。しばらく見つめあい、お互いに目をつむった。そして、そっと、その唇を重ね合った。

やわらかい、温かい唇。

二人は夕陽が沈んでいく中、お互いの温もりを感じていた。

第51話 汚れた席

修学旅行から帰ってから、夏樹はいまひとつ勉強にも体育にも集中できずにいた。何かとボーツとすることが増え、気づけば唇に鉛筆を当てたりしている。

靖治は夏樹が家族に会いに行ったのだと勇人たちに説明したようだった。実際、靖治もそう思っていた。夏樹に好きな人がいて、その人に会いに行ったなど知る由もない。

あの時、夏樹は七海の誰にもほとんど会わず、明日香との再会を果たすことができた。あの日交わしたキスのおかげで、夏樹と明日香の絆は深まった。間違いなく、夏樹はそう思っていた。しかし、それは夏樹だけの思い過ごしだった。

「アスちゃん……食べないの？」

水穂がボーツとした様子の明日香に声をかけた。

「え？」

「早く食べないと、冷めちゃうよ？」

今は給食の時間。いただきますの挨拶をしてから10分経つといつのに、明日香はほとんど給食に手をつけられずにいた。

「ああ……うん、食べるよ」

「ミネストローネ、おいしいよ」

「うん」

水穂はすっかり明るくなった。以前よりずっと積極的になったし、何より女の子らしさにますます磨きが掛かった。一度恋を経験したからだ、いつか恭輔が言っていた。恋をすると、女の子は綺麗になるそうだ。

（私も……綺麗になれるかな。なっちゃんに相応しい女の子にならなきゃ）

そう思うと、あまり食べずにいようと考えてしまう。だから、あ

まり食が進まなかった。

結局、給食はほとんど口にせず終わってしまった。「食べないと体に良くないよ?」と水穂や麻里が心配するが、明日香は「ホント、平気だから」と返しておいた。

家へ帰ってからそれもそれは同じだった。圭太や花菜と夕食を摂ることがほとんどなので、玲子や登は知ることはまったくくないまま、ほとんど明日香の食べる量は減っていった。一度、圭太が心配して「姉ちゃん、ゴハンの量増やしてあげる」と言って勝手にゴハンをよそったとき、明日香は今までに見せないほど怒ったことがあった。

あまりの激昂ぶりに圭太は泣いてしまい、なんとか花菜がなだめることで事は収まった。それ以来、圭太も花菜もどこか明日香の様子がおかしいとは思っているが、それを指摘すると怒るため、両親にも言えないままだった。

「ただいま」

家へ帰ると、珍しく玲子が台所で料理に励んでいた。

「どうしたの?」

「ええ? あー、今日はね、ちょっとお父さんの体調が芳しくなくてさあ。お客さんには申し訳ないんだけど、臨時休業にしたんだよ」

「そうなの……」

「それはそうと明日香、最近アンタ、ご飯いっぱい残してるでしょ?」

「あ……うん」

「体の具合でも悪いのかい?」

「ううん。そんなことないの」

「そう? ならいいけど……まあ、時期的なものもあって食欲ない時もあるかもしれないけどね、しっかり食べないと大きくなれないからね!」

「うん。わかってる」

「それならいいわ。ご飯になったら呼ぶからね」

「わかった」

明日香は微笑んですぐに二階の自分の部屋へ上がった。ご飯が嫌いなわけではない。むしろ、最近は料理の雑誌を買ったり、インターネットでいろんな料理番組の情報を集めたりしているくらいだ。しかし、どうしても食べる気にはなれなかった。食べたい気持ちになれない。

「明日香〜！ ご飯だよ！」

料理の本を読みふけているうちに、時計は午後6時になっていた。あまり食欲はないが、親がいる手前、食べないわけにはいかない。

居間へ入ると、山盛りのトンカツがテーブルの中央に盛られている。圭太と花菜が心配そうに見守る中、明日香は静かに椅子に座り、トンカツを食べ始めた。

「どうだい？」

玲子が聞くと、明日香はニッコリ笑って「おいしい！」と答え、どンドントンカツを食べ始めた。それを見た花菜と圭太も安心してトンカツを食べ始めた。

1時間後には、すっかりトンカツはなくなってしまった。明日香も普段からは考えられないほどたくさん食べたので、圭太も花菜も驚くばかり。

「そんなにおいしかったかい!？」

玲子は心底嬉しそうだ。

「うん！ おいしかったよ。お母さん、料理上手だもんね！ うらやましいよ」

「あらあら！ 普段は何も言わないのに、今日はどうしたんだろうねえ」

玲子がワシヤワシヤと明日香の頭を撫でるので、明日香は恥ずかしくて赤くなってしまうた。

「ごちそうさまでした！」

明日香は食器を片付け終わってから二階へ上がろうとした。

「はいよ！ お風呂はいつ入る？」

玲子も嬉しそうに食器を片付けながら、明日香に聞く。

「1時間くらいしたら入るよ」

「じゃあ沸いたら呼ぶから、それまで宿題でもやっといで」

「はあ〜い」

明日香が上がったのを確認してから、花菜に言った。

「そんなに普段は食べないのかい？」

「うん……今日は不気味なくらい食べてたわ。ねえ、圭ちゃん」

圭太も不安そうな顔で答える。

「うん……姉ちゃん、なんか普段とテンション違ってた」

「そうかい……。でも、普段どおりに見えるからねえ。もうちょっと様子を見たらどう？」

「そうだね。そうするしかないみたいだし……」

花菜はため息をついた。

その頃、明日香は二階のトイレにいた。

「ウエツ……ゲホッ、ゲホゲホゲホッ！ エグツ……ゲエツ！」

右手の人差し指と中指を喉の奥に突っ込んで何度も戻していた。

食べたばかりのトンカツやご飯がほとんどそのままになって戻って

いた。

「ハア……ハア……ハア……」

「ハア……ハア……ハア……」

ようやく落ち着いたので水を流し、戻した物を綺麗に流しておい

た。それから手を入念に洗い、何事もなかったかのようにトイレを

出た。

「これで……いいよね、なっちゃん」

明日香は安心したように部屋へ戻り、夏樹の写真を見つめる。再

会したあの日、夏樹が言った言葉が明日香の頭から離れずにいた。

「ちょっと、ふっくらしたね。」

「ちょっと、ふっくらしたね。」

何気ない夏樹の一言が、明日香の頭を巡って巡って、止まらなか

った。それ以来、明日香はほとんど毎日このような行為を繰り返していた。

夏樹も家族も、誰も知らないまま、月日だけが過ぎていった。

第52話 野原の席

6月14日(土)。今日はいよいよ全校生徒が待ちに待っていた田植えの日だ。

「よっしやっ！ やるぞお！」

拓弥がやる気マンマンでTシャツに短パン姿で教室に現れた。

「また出たよ」

早苗がウンザリした様子で拓弥を見つめる。正直、見たくもない格好を見せられるのだから女子としてはたまったものではない。

「あれ？ そういえば勇人やナツがいないね」

樹音がふと気づいてあたりを見渡した。もう8時20分。集合時間は8時25分だから、もう遅刻寸前という時間だ。

「ホントだ。どうしたんだろね？」

「ねえ」

横にいた花音が早苗の真似をして語尾を伸ばす。すると、教室のドアがガラガラと音を立てて開いた。そして現れたのは、拓弥とまったく同じ格好をした奏七太、勇人の姿だった。

「ブツ……アハッ、アハハハハ！」

樹音が堪えきれず爆笑し出した。早苗もおなかを抱えて笑い、状況をいまひとつ掴めていない花音だけがポカンとしていた。

「やあだあ！ 男子、全員そろってそんな格好してんの！？」

「全員じゃねえよ！」

すると、廊下から拓弥の大声が聞こえてきた。それとバタバタと廊下を走る音がする。

「待てやあ！ 逃がさない！」

「嫌だ！ 誰がそんなもん着るか！」

外を覗くと、Tシャツに短パンを持った拓弥が夏樹を追い掛け回している。

「アハハ！ まだやってる」

早苗がおもしろそうに笑う。勇人と奏七太は「がんばれ、ナツ！絶対に捕まるなよ！」と必死に応援していた。

「ダメダメ。都会もやしっ子だからどうせすぐ捕まるって」

樹音だけがおもしろくなさそうに鼻で笑って適当にあしらった。

「……。」

早苗がジッと樹音を見つめる。

「なに？」

「ジュノンってさ、ナツにいつまでたっても冷たいよね」

「そう？」

「都会もやしっ子って言ったり、なんだか意地悪してるみたい」

「そんなことないよ」

「そうかな。ま、あたしの勘違いならいいんだけどね」

会話が終わった頃、夏樹が今度は教室へ逃げ込んできた。顔中汗だくだ。逃がすまいと拓弥も必死になって追いかけている。

「この暑いのによく頑張るねえ」

「まあね！ 運動、運動！」

夏樹はサラツと言いのけて早苗と樹音の前を通り過ぎる。フワツ

と夏樹のシャンプーの香りが漂ってきた。

「汗かいてるのにいい香りするんだな。意外」

ククツと早苗が笑う。

「……。」

樹音は夏樹のどこがいいのかまったく理解できなかった。早苗や勇人、拓弥があんなに構うのが理解できない。それより腹立たしいのが、今まで何かと構ってくれていた拓弥がちつとも構ってくれなくなったことだ。

「捕まえた！」

ようやく夏樹を捕まえた拓弥が怪しげに笑って夏樹の服を脱がし始めた。

「ひえー！ やめろよ、女子もいるのに！」

「関係ねえ〜！ 覚悟しろ、ナツ！」

「ちょっとお！　いくらなんでもあたしたちの目の前で着替えたりするのやめてよ！」

ケラケラと笑う早苗に花音、服を脱がそうとする拓弥、ただ見つめるだけの勇人、奏七太。そして抵抗する夏樹。見ているだけでイライラしてくる。気づけば樹音は大声を出してしまっていた。

「うるさいから、静かにしてくれん！」

一気に教室内が静まり返った。同時に靖治が「えらい今日は静かだな」と感心した様子で入ってきたので、誰のフォローもないまま気まずい雰囲気ですべて全員が着席した。

田植えが本格的に始まると同時に、6月にしてはきつい日差しが学校から5分ほど歩いたところにある田んぼに差していた。

ギヤーギヤーと騒ぎ立ててちつとも田植えを進めない勇人たちが靖治に「コラー！　早くせんかあ！」と怒鳴られているのを、ボヤーンとした様子で木陰から見つめているのは樹音だった。

田んぼの周りは家も建っておらず、だだっ広い野原だった。その野原のど真ん中に立っているのが、この樹齢100年とも言われる大きな木の下で、樹音は息を少し荒くしながら休んでいた。

靖治は田んぼで指導をするのが精一杯なので、なかなか樹音のところへ様子を見に来ることもできずにいた。楽しそうに田植えを続ける拓弥が羨ましいし、少し腹が立つ。この気持ちなんなのか、樹音自身も説明できずにいた。

「ひゃっ!？」

突然冷たい何かが顔に当てられて、樹音は小さな悲鳴を上げた。

「どうしたの？」

「……別に」

「よいしょつと」

夏樹はこの木に作られて随分経ったと見えるブランコに乗った。ギイツと木独特の音がする。

「飲む？」

「……いない」

「あ、そ」

夏樹は持つてきたペットボトルを樹音のそばに置いてブランコをこぎ始めた。

「ねえ」

「何？」

夏樹は人懐っこく笑って樹音に答える。

「アンタってさ……」

思わず言葉に詰まる。夏樹とこんなに近くで話すのは初めてだったので、少し緊張する。しかし、拓弥を前にしての緊張と違うことはわかる。

「ん？ 何？」

「友達がね、ある人を見るとイライラしたり、冷たくしたりしちゃうんだって」

「友達？ サナか花音？ それとも、勇人？ 拓弥？ 奏七太は兄貴だから友達ってことはないよね」

そうだった。この周辺で友達といっても、限られている。

「アンタってそういうとこ、鋭いよね」

樹音はハアツとため息をついた。

「まあね。それでさ、誰なの、それ」

「……。」

もう隠し通せるものでもないと思い、樹音はハッキリ言った。

「私、拓弥のことが好きなの！」

「……ふうん」

随分あっさりした反応しか返ってこなかったもので、樹音はむしろ不満だった。

「なんで私、アンタにこんなこと言ったんだろ」

「そうだね。なんで、それを俺に言うんだらうね」

「……？」

樹音はいまひとつ、夏樹の言わんとすることがわからなかった。

「それ、ホントは拓弥に伝えるもんじゃないの？」

「……！」

樹音の顔が真っ赤になった。それからガツン！と何かで軽く叩かれる感じがした。それは夏樹がさっき置いたペットボトルだった。

「わかってるよ、そんなこと！」

夏樹はよく知っていた。自分から言わないと、動かないと何も変わらないことを。樹音が自分に冷たいのは夏樹が拓弥と絡むことが多いからだというのはよくわかっていた。

自分のこの行動が、樹音の背中を押せたのなら嬉しいと夏樹はプリップリしながら去っていく樹音を見つめた。

第53話 二人用の席

昼休み。勇人や奏七太は少し疲れたのか、木陰でおにぎりを食べた後はずっと居眠りをしている。樹音は夏樹の一言が背中を押したのか、さつきからずっと拓弥と少し恥ずかしそうに、しかし嬉しそうに話をしている。

ふと靖治を見ると、一人落ち着かない様子で辺りを見渡していた。「……？」

不思議に思った夏樹は靖治の元へ駆けていく。

「先生？」

「おっと！」

靖治は驚いた様子で振り向いた。ますます怪しい。

「どうしたんですか、さつきからキョロキョロして」

「いや……ちよつとな」

「俺たちに言えないようなことですか？」

「んー、まあな。大人の事情だ」

「ズルいなあ……大人つて」

夏樹はプウツと頬を膨らませた。

「まあそうプリプリするな。それより、お前修学旅行のときに家族に会ってどうだった？」

「え？」

「会えたんだらう？」

あの抜け出して明日香に会いに行った日、靖治や勇人たち同級生には家族に会いに行ったという設定にしていたのを危うく忘れるところだった。

「お姉ちゃんに……一番会いたかったから」

「……やっぱりそうか」

靖治がそう呟くと同時に、彼の携帯電話が鳴った。

「もしもし？」

靖治は出た途端、嬉しそうな声になった。

「そうですか！ 着きましたか。場所はわかりますか？ ええ……
そうです、そうです。じゃあ、お気をつけて来てくださいね」

電話を切った靖治に夏樹はすぐ疑問をぶつけた。

「先生、誰か来るんですか？」

「ああ、強力な助っ人だぞ。とりあえず、戻ってご飯を食べてなさい」

「はあ〜い」

夏樹は渋々戻って中途半端に食べたおにぎりを再び口に始めた。そしていよいよ最後のおにぎりをかじったすぐ後だった。

「そのおにぎり、何味？」

「えー？」

どこかで聞いた覚えがなくもない声だったが、夏樹は特に気にせず返した。

「これは勇人のおばちゃんお手製の鮭おにぎり」

「へえ〜！ 塩はよくきいてる？」

「そりゃあね。勇人のおばちゃん、手え大きいんだから」

「そうなの？ ねえ、そのハヤトくんのおばちゃんってあの中にいる？」

夏樹は田んぼのあぜ道でガハハハ！と豪快に笑っているおばさんのほづを見て、「あの水玉の頭巾を被ってる人がそうだよ」と言うてから違和感に気づいた。

勇人のおばさん知らないメンバーはいないはずだった。すると、後ろから話しかけているのは誰なのか。夏樹は不審に思いながら後ろを振り向いた。

「ヨッ、夏樹！ 元気？」

そこにいたのは、なんと陽乃だった。

「ね、姉ちゃん！？」

それだけではない。その後ろには陽乃の親友である多部未華乃と志田未咲がいたのだ。

「未咲さん、未華乃さん！」

未華乃がニツコリ笑って手を振った。

「やほー！ 夏樹くん、大きくなった？」

「相変わらずイケメンぶりが引き立ってるね」

未咲もかわらず二つくくりのヘアスタイルがよく似合っている。

「3人とも、なんでここに？」

「先生が呼んだんだ」

靖治が夏樹の頭をクシャクシャと撫でながら夏樹の疑問に答えた。

「なんでそんなことしたんですか！？」

夏樹は驚きを隠せない。そんな話、陽乃からも靖治からもまったく聞かされていないからだ。

「田植え、この人数じゃ大変だろう？ それに朝倉はお姉さんに随

分会いたがっているようだったから」

「え？」

陽乃が少し驚いた表情を見せた。

「ほら、修学旅行のときにお姉さんに会いに行ったんでしょ？」

「……。」

その話は陽乃にも全然していない。それどころか、明日香に会ったことすら知らせていないのだから、陽乃にとってみればまったく訳がわからない話というわけだ。

夏樹の背中に汗が流れる。冷たい、嫌な汗だ。陽乃はしばらく考えて夏樹の目をチラツと見てから答えた。

「そうですね！ コイツ、昔からお姉ちゃんっ子で困っちゃうんです」

陽乃の予想外の返答に夏樹は目を丸くした。

（いいから、話合わせてな！）

陽乃の目がそう訴えているように感じたので、夏樹はとりあえず話を合わせておいた。

「えへへ……なんかこんなところまで気遣いしてもらっちゃって申し訳ないです」

夏樹は不自然にならないように気をつけながら答えた。未華乃や未咲もクスクスと笑う。

「それよりお姉さん、後ろの方は……？」

そう呼ばれて初めて出てきた人物を見て、夏樹は顔が真っ赤になった。陽乃がニヤニヤ笑いながら彼女を紹介した。

「あたしの知り合いの、岡本明日香ちゃんっていいいます」

「はじめまして。岡本です」

「はあ……こりやまたカワイイ子が4人も揃ったもんだ」

靖治はごくごく自然にそう言った。すると4人とも真っ赤になっ
てしまった。夏樹は明日香のその反応を見て少し嫉妬してしまった。
ひととおり紹介やら何やらが終わって、陽乃は明日香を夏樹の真
隣に座らせた。

「ほらほら、ここは二人の専用席だから座って座って」

「で、でもお姉さん、久しぶりに夏樹くんに会うのに……」

「いいのいいの！ あたしなんて会おうと思えばいつでも夏樹に腐
るほど会えるんだから」

「腐るって……」

「冗談よ、冗談。それより、ゆっくり話すの久しぶりでしょ？ お
気遣いなく」

陽乃は笑って走って行ってしまった。しばらく沈黙が続く。

「なあ」

夏樹が声変わりした低めの声で明日香を呼んだ。

「なに？」

明日香が振り向いた瞬間、夏樹がイタズラっぽく頬にキスをした。

「……久しぶり」

「……！？」

明日香の思考回路が急停止し、何を考えているのか自分でもわか
らなくなってしまった。気づいたときには、思い切り夏樹の頬をは
たいていた。

乾いた音が響き、すぐ後に「痛ってえー！」という夏樹の音が山

彦しながら消えて行った。

第54話 茶の間の席

「……………」

夏樹は違和感を隠しきれず、その状況を見守っていた。いつもは奏七太が座っているはずの場所に、陽乃。そしておばさんが座る場所に、未華乃。そしておじさんの場所には未咲。極めつけは夏樹の向かい、樹音の席に明日香がいた。

(なんか……………いつもの茶の間じゃない)

夏樹はぎこちない動きで箸を口に運ぶ。そして、最大の違和感はその前にいる人物、明日香にあった。

食べる量が異様なのだ。

(明日香って……………こんなに食ったっけ)

それは他の面々も思っているようだった。

「明日香ちゃん、けっこう食べるねえ」

驚いた未咲が笑いながら聞く。

「え？　そうですか？」

「うん。華奢なのに、大食いだわ」

未華乃も認める大食い。夏樹は明日香がそんな風だったとは記憶していない。

「未咲、アンタ負けてらんないんじゃない？」

陽乃がニヤニヤ笑いながら未咲の肩をつついた。

「ちよつとお！　恥ずかしいこと言わないでしょ！」

すると全員が大笑いし始めた。明日香の笑い声も、笑顔も変わらない。夏樹はそう思っていた。

ただ、本当のことを知らないだけだった。

「……………」

真夜中。午前3時。陽乃が目を覚ますと、寝ていたはずの明日香の姿が見当たらない。

「明日香ちゃん？」

トイレだろうか。しかし、この広い家で迷子になっていたりしたら大変だと思った。陽乃自身、トイレへ行った後に無事、部屋へ帰れるかどうかと聞かれると、自信がなかった。

寝ている未咲と未華乃を起こさないようにそっと部屋を出た。

「うわぁ……綺麗」

秋田の夜空は、七海とは比べ物にならないほど綺麗な空だった。透き通るほどの空に散りばめられたたくさんの星。こんなたくさんの星を見るのは初めてだ。

陽乃はしばらく呆然と空を見上げる。

「あっ」

流れ星だった。陽乃は慌ててお願いをする。

「……。」

願いは一つ。

夏樹が、元気になって七海に戻ってきますように。

それだけだ。

「さて……トイレはどこだろ」

陽乃は勝手に明日香がトイレにいると決めつけて、トイレを探し始めた。

「う……ん……」

ギシギシと誰かが歩く音がしたので、夏樹は目を覚ました。

「なんだよ……こんな時間に」

夏樹は目を摩りながら音のしたほうを見た。しかし、人影も気配もない。

「ん……」

そっと障子を開けて確認するが、誰かがいた気配はなかった。

「気のせい？」

しかし、目が覚めたついでにトイレへ行きたくなったので、夏樹は起き上がってトイレへ向かった。

「あ……」

陽乃の予想どおり。トイレらしき場所からは明かりが漏れてきて

いた。

「なんだ。やっぱりトイレだったのか。心配して損した」

陽乃はクスツと笑いながら戻るうとしたが、違和感を覚えたので足を止めた。

「ウエウツ……ゲホツ……ゴホゴホ！」

「……明日香ちゃん？」

「ゴホゴボツ……！ゲホツ！」

普通ではない。間違いない。この音は、夏樹がアレルギーを起こしたときに聞いた音だった。戻している。

「明日香ちゃん？」

ドアをノックするが、戻す音はおさまらない。相当ひどいのだろうかと心配になった陽乃は一瞬ためらったが、すぐにドアを開いた。「ゲホツ！ゲホゲホツ！」

ドアを開いた陽乃が目にしたのは、喉の奥に指を突っ込みながら何度も戻している明日香の姿だった。

「……。」

呆然とその姿を見る陽乃にようやく気づいた明日香は、指を出して口の中に残っていた吐しゃ物を吐き出した。

「……陽乃さん」

「明日香ちゃん……どうしたの？」

「……。」

明日香は答えない。

「なんで？なんでそんなこと……」

明日香は水を流して手を洗った。それから突然、陽乃に泣きついてきたのだ。

「陽乃さん！お願いです、お願いです！」

「どうしたの？ねえ、落ち着いて明日香ちゃん」

「お願いします！なっちゃんにも、お父さんやお母さんに見たこと、内緒にしてください！」

「で、でも……とてもしんどそうだったし」

「お願い！ お願いです！」

「……………」

尋常でない明日香の様子に少し引いてしまったが、ここまで懇願されて断るわけにも行かず、陽乃は「うん」と答えてしまった。

「ありがとう……………」

「とりあえず、いつぱい戻しちゃったし…………水分摂って寝よう？」

「はい！」

明日香の顔が急に笑顔になった。その笑顔に陽乃は不安を少し感じた。しかし、これ以上問い詰めたりなどできるはずもなく、一緒に戻っていくしかなかった。

「…………やっぱ誰もいないか」

陽乃と明日香がトイレを離れた直後、夏樹が同じ場所に立った。

「あれ？」

電気が点いている。誰かいるのかと思い、ノックしたが応答はない。

「誰だよ。エコじゃないなあ」

夏樹はクスクス笑いながらトイレに入った。途端に、酸っぱい臭いが鼻を突いた。

「うわっ…………臭ッ」

かなり濃い匂いだ。そして夏樹自身、その臭いに覚えがあった。

「戻したときの臭いだ……………」

胃液の酸っぱい臭い。これは戻したときに漂う特有の臭いだった。ふと、明日香が夕食のときに尋常でない量を食べていたことが思い出される。

「アイツ、食いすぎて気分悪くなってんじゃねえの」

夏樹は心配になり、明日香たちが眠っている部屋へ向かった。そと障子を開けると、陽乃と明日香の布団が空になっていた。

「あれ？」

もう3時半になるうとしていている。こんな時間に、女の子二人がどこへ行くというのか。夏樹は広い朝倉家の中をグルグル回った。こ

の家ももう夏樹の庭のようなものだ。

居間。洋間。土間。

回れど回れど、二人の姿は見当たらない。もう戻って寝ているのかと思つて寝室を見てみたが、やはり布団はもぬけの殻のままだ。

「あつ」

茶の間を探していないことに夏樹は気づき、急いでそこへ駆け込んだ。

「わっ！」

陽乃が突然開いた障子に驚いて声を上げた。明日香も目を丸くしている。

「どうしたのよ、夏樹」

「それはこっちのセリフだよ！ 夜中に二人して何してんのさ!？」

「それは……その……」

明日香の手が陽乃のパジャマの袖を引っ張った。

(言わないで)

そう訴えているのがヒシヒシと伝わってきた。

「暑いから、喉渴いたら明日香ちゃんも起きてて！ それでちょっと話し込んで感ぜたって感じ?」

「なんだよ……心配させないでよね」

「あれー？ あたしのことも心配してくれてるんだ？ てつきり明日香ちゃんだけだと思つてたわ」

陽乃が茶化すように夏樹の額にデコピンを喰らわせた。

「バカ言つなよ！ ほら、もうさっさと寝ようぜ!」

夏樹は顔を真っ赤にして部屋を出た。

「わかりやすいね、アイツ」

陽乃が言つと、明日香もおもしろくなって笑ってしまった。夏樹は少し離れた場所で、立ち止まって何も言えなかつた自分が悔しかった。

なんともないんだよな？

ただ、それだけ。その言葉が出てこなかった。あの時、何か言っていたら状況は変わったのか、今でもわからないまま。

第55話 今、いる席

「明日香」

夏樹は朝食を終えて休憩している明日香に声をかけた。今日で田植えも終わりの予定となっている。午前10時から開始予定だ。

「なに？」

「田植えの前に、今オレがいる教室に行ってみない？」

「いいの!？」

明日香の顔がパツと明るくなった。夏樹もこの笑顔を見ると嬉しくなる。

「うん！ 田植えだと学校も開いてるから、教室にも頼んだら入れると思うんだ」

「やったあ！ 行こう行こう」

明日香はすぐに行くつもりでいたらしく、夏樹の手を引いて玄関へ向かいだした。

「わわわ、ちょ、ストップストップ！ ちゃんとおばさんや姉ちゃんに先に行くって言ってからいかないと」

「あ……そうだね！ ゴメンゴメン！」

二人は台所にいる珠子に先に学校へ向かうことを告げ、陽乃や奏七太、樹音にも伝えてから出てきた。

「あの二人……お付き合いとかしてるの？」

樹音が陽乃に聞いた。陽乃は小さくうなずいた。

「案外お似合いじゃん」

奏七太が笑う。陽乃もそう思っている。しかし、夏樹も明日香も何か、どこか不安定な部分があるような気がしてならなかった。

「なっちゃんの学校って広い？」

明日香と夏樹は最近舗装されたばかりの歩道を並んで歩きながら他愛無い話をしていた。

「そうだな……。人数が少ないから、広く感じるかも」

「それいいなあ！ やっぱり、富樫は狭いよね」

「どうしても人数が多いからなあ」

6月。七海ならそろそろジメジメしてくる頃だが、今年はまだ梅雨が来ていない稲賀沢は過ごしやすい5月の陽気が漂っていた。

かなり長く歩いてから、ようやく信号で足止めを食らった。5月の陽気とはいえ、やはり長く歩いていると汗ばんでくる。

（喉渴いたらダメだから、ペットボトルでお茶入れて持って行きなさい）

そう言っつて珠子が渡してくれたペットボトルを夏樹は思い出したように取り出す。そして、いつか陽乃に言われたことを思い出して、初めに明日香の前に差し出した。差し出す直前に、夏樹と明日香で身長差が出てきていることに夏樹は気づいた。

この4月の身体測定で夏樹は164cm、48kgになった。明日香の身長はよく知らないが、夏樹より低いのは確実だ。

「どうしたの？」

夏樹は自分の目線が明日香の胸元へ行っているのに気づいて顔を赤くした。

「あ……お茶飲みなよ。喉、渴いたろ？」

「わあ！ ありがとう」

明日香はペットボトルを受け取ると、おいしそうに飲み始めた。

その様子を嬉しそうに見る夏樹。しかし、なんとなく胸元へ目が行く。

（俺って……エッチ？）

「なっちゃん？」

「へ？」

「飲まないの？」

「あ、ああ！ 飲む飲む……」

飲もうとペットボトルをもらってから、これが間接キスではないかなどという考えが夏樹の頭を巡り、手が止まった。

「なっちゃん？」

「……な、なんでもない！」

夏樹は意を決してペットボトルに口をつけた。急にボトルを顔に向けたので、一気にお茶が口へ入ってきてむせてしまった。

「ゲホッ！ ゲホゲホ！」

「あーああ！ なにやってんの、なっちゃん！」

明日香は慌ててハンカチを夏樹の頬に当てた。フワリとやわらかい感触といい香りが夏樹の五感を刺激する。

「大丈夫？ 本当にさっきからどうしたの？」

「……。」

夏樹はしばらく目を逸らしてから、ボソボソと小さい声で返した。

「久しぶりに……明日香に会えるから嬉しい」

「……やだなあ。なんか、恥ずかしい」

明日香は顔を赤くして俯いた。

「あ」

「え？」

夏樹の声に反応して明日香が見上げると、青信号がいつのまにか再び赤になっていた。

「もうちょっと待つか」

「そだね」

夏樹は苦笑いしながらペットボトルの水をグイッと飲み始めた。

声変わりし始めた夏樹の喉は喉仏が出始めて、男らしくなってきた。飲むたびに上下する喉仏を明日香は気づけばジッと見つめていた。

「なに？」

夏樹がその視線に気づいたらしく、ポーツとしている明日香に声をかけた。

「なっ、なんでもないよ……」

「そう？ ならいいけど」

信号が青になって二人は横断歩道を歩く。5分ほど歩くと、学校へ着いた。

「うわあ〜！ 木造なんだ！」

「うん。戦争でも地震でも壊れなかった校舎なんだって」

「スゴいねえ〜」

明日香は物珍しそうにキョロキョロとあたりを見渡す。

「ねえ、あれは？」

明日香が指差すのは、5月に植えた夏野菜の畑だった。

「あれはトマトとかピーマンの畑。俺たち一人ひとりの畑があって、各自で世話をするんだ」

「へえ〜……スゴいなあ。私たちの学校じゃ、こんなことさせてもらえないもんなあ」

「まあ、俺も楽しいしな。富樫より……毎日楽しいし」

「……そっか」

明日香の顔が少し曇った。いつもの夏樹なら、この後の言葉がなかなか出ないのに、スツと次の言葉が出てきた。

「明日香がいたら……もつと楽しい」

「……ありがとう」

明日香の顔が真っ赤になる。このとき、明日香の心を覗くことができたなら。夏樹は、たくさんの言葉を後悔することになることをまだ、知らない。

「ひつろーい！」

教室に入るなり、明日香は大声を上げた。

「なつちゃんの席、どこ？」

「窓際の前から2番目……あ、それ、一番後ろって言い方もありか」
「少ないね！ みんな仲良くなりそう」

明日香は夏樹の席には座らず、隣の花音の席に座った。

「どした？」

「なつちゃん、ここに座って」

「え……ああ、うん」

夏樹はキョトンとした表情で自分の席に腰掛けた。

「そっかあ〜」

「何が？」

「なつちゃんの隣って、こういう風に見えるんだ」

思い返してみれば、同じクラスだったのに明日香と隣同士の席になったことはなかった。もし、富樫から転校しなければ明日香と同じクラスになり、隣同士の席になっていたかもしれない。

転校さえしなければ。

もっと自分が強ければ。

だんだんと暗い考えが頭にまとわりついてきて、夏樹の表情が曇るのが明日香からもすぐわかった。

「なつちゃん」

「……ん？」

明日香が手を握ってくれた。温かい小さな手。

「早く、七海に帰ってきてね！」

「……うん」

夏樹はギュッと明日香を抱きしめた。明日香も夏樹を抱き返す。

気づけば、唇を重ね合わせていた。

「……恥ずかし」

夏樹が顔を赤くする。

「なんで？」

「いつも……みんなと勉強してるトコでキスなんて……」

「……ホントだね」

明日香も気づいたように赤くなった。

「……ゴメン！」

「え？」

明日香が急に立ち上がった。

「どしたんだよ？」

「ちよつと……お手洗い」

「あ、なあんだ。場所わかる？」

「来るとき見たよ。大丈夫」

「なら……行ってらっしゃい？つてのも変だな」

「エへへ……。じゃ、ちょっと行ってくる」

「ああ」

明日香はそつと教室のドアを閉めた。しばらく歩いて、足音が聞こえないだろうと思つた場所から一気に走り出した。

吐きたい。

吐きたい。

吐きたくて仕方がない。

自分のおなかの中にモノがあるのがキモチ悪い。

吐きたい。

はきたい。

ハキタイ！

明日香は狂うようにトイレへ駆け込み、喉へ指を突っ込んで嘔吐を繰り返した。

「……長いな」

夏樹はなかなか戻つてこない明日香が心配になり、トイレのほうへ様子を見に行った。

「！」

その足音に気づいた明日香は急いでトイレから出て、口をすすぎ手を洗つた。バテてはいけない。その一心だった。

「明日香？」

応答がない。夏樹は抵抗を覚えつつ、女子トイレの戸を開けようとした瞬間だった。

「きゃっ！ ちょっとお、女子トイレに何の用！？」

「あ……いや、明日香がなかなか帰つてこないから心配で」

「変な心配しなくていいの！ ホラ、そろそろ集合時間だし、行くっ？」

「あゝ、うん」

「ほうら、早く早く！」

夏樹は押されるがままトイレを出た。出る瞬間、夜中に家のトイ

レで臭った酸っぱい臭いがした気がして、夏樹は足を止めた。

「どうしたの？」

「いや……なんでもない」

「変ななっちゃん」

明日香の笑顔を見ると、不快感が消えていく。夏樹は明日香と手を繋いで、廊下を歩いていった。

第56話 話し合いの席

「はい……はい……」

夏も近づいた7月1日（火）。学校から夏樹が奏七太たちと帰ると、深刻な様子で珠子が電話で話をしている。

「あ、いま夏樹くん帰ったけど……」

「？」

夏樹がポカンとした様子で珠子と目を合わせた。

「どうする？ 代わろうか？」

ええ、ええと何度も答える珠子。何度も夏樹に目配せする。

「なんだろか」

奏七太が不思議そうに首をかしげた。樹音が先に部屋に入り、メモで「誰？」と書いて珠子に見せた。珠子は面倒そうに樹音を追い払い、話を続ける。

追い払われた樹音は不服そうに夏樹たちの元へ戻った。

「オトナの話じゃない？」

オトナ、という言葉に少しトゲがあるような気が夏樹はした。しかし、最近樹音は夏樹に対してそこまでトゲを見せなくなっていた。夏樹の言葉をキツカケに、拓弥と親しくなれたからかどうかは、夏樹も知らずにいた。

「おつす。どした？」

すぐに現れたのは拓弥、早苗、勇人の3人。

「あれ？ 花音は？」

奏七太が姿の見えない花音を探す。

「今日は留守番だつて」

早苗がつまらなさそうに答えた。

「なあんじゃ。今日は皆で裏山散策しよつてたのに」

奏七太はブウツと頬を膨らませた。そうこうしていると突然珠子が「夏樹くん、ちょっと代わろうか」と電話口へ呼んだ。

「え……あの、誰ですか？」

「……。」

珠子は少し言いづらそうな顔をしてから、しかしハッキリと言った。

「お母さん」

「ッ！」

夏樹の顔が明らかに動揺したのが、誰から見てもわかった。脳裏に、転校寸前の状態の頃が思い出された。

出て行け！ 今すぐ出て行け！ もう顔も見たくない！ 出てけ、出てけ、出てけ！

いらない！ 姉ちゃんだけでいい！ 父さんも母さんもだいつきらいだ！

こんな家……絶対帰らない！

「夏樹くん……」

珠子が受話器を握ったまま夏樹を見つめていた。奏七たちも雰囲気を察知したのか、言葉を発さない。

夏樹はそつと部屋に上がり、受話器をそつと取った。

「……夏樹？」

懐かしい声だった。毎日、当たり前のように聞いていた、母親の声。

「……。」

夏樹の頬に、涙が一筋こぼれ落ちた。

「ナツ……」

勇人や早苗が初めて見る夏樹の姿だった。

「ただいま」

電話口の向こうから、最近聞いた声が聞こえた。

「も〜！ 今日の体育ちよ〜しんどかつたんだけど。あれ？ お母さん、電話？」

陽乃の声だった。ついこの間聴いたばかりだったのに、妙に懐かしい。さらに夏樹の目から涙が次々と溢れる。

「夏樹？ 聞こえる？」

由利の優しい声。夏樹が転校するときの話し合いのときのようなきつい口調ではなかった。心から心配してくれている、そういう声だった。

「あ……」

次の言葉が出てこない。夏樹はどうしようか迷った挙句、勢いで受話器を置いてしまった。チーン！という音が響き渡る。

「夏樹くん!？」

いたたまれなくなった夏樹は、そのまま2階へ上がっていつてしまった。

「……おばさん、俺行ってきていい？」

そう言って靴を脱いだのは、拓弥だった。拓弥は珠子の返事か来ないうちに2階へ上がり、夏樹と奏七太の部屋の前に立ってノックをした。

「ナツ？」

返事はない。その代わりに、グスグスツと鼻をすする音が聞こえてくる。

「入るぞ」

断る素振りもないので、拓弥はためらいなく入った。グスグスと泣いてばかりいる夏樹。奏七太の勉強机の椅子に座る。ギィツと音を立てた。さすがに6年も経つと古くなってくるようだ。

「ナツ。なんで電話切った？」

「単刀直入。体育会系の拓弥に遠慮などない。」

「……。」

答えようとしないう夏樹。しかし、拓弥の中で答えは出ていた。

「お前……神奈川に……七海に帰りたいんじゃないのか？」

「……………」

「ナツ！ 答えるって」

夏樹は声を発さず、ただ小さくうなずいた。

「なら、なんで電話切るんだよ」

「……………」

夏樹は再び答えを返さなくなってしまった。拓弥は答えが返ってくるまで、ひらすら待ち続けることにした。

待つこと10分。突然、夏樹が話し始めた。

「なんで……………」

「え？」

「なんで、大切な人は、一人じゃないんだろう……………」

「ナツ……………」

夏樹は立ち上がり、窓を開けた。ムアツとした暑さが夕暮れ時になったからか、だいぶと引いていたようだった。

「俺………… ホントは早く戻りたかった。母さんに、姉ちゃん。友達。それに………… 明日香に会いたい」

夏樹の本音だった。

「でも、拓弥も勇人も、奏七太も樹音も花音も………… 早苗もおばさんも………… みんな大好きなんだ」

「うん………… わかるよ。俺も、お前が大好きだ」

夏樹がそこでギョツとした顔をした。

「あ、そういう意味じゃないぜ」

クスツと笑う拓弥。こういうイタズラっぽいところがあるのも拓弥らしく、夏樹も変な意味でなく友達として、好きだ。

「でも、やっぱさ。大切な人はホント、一人じゃないんだよ」

「……………」

「残念だけだな」

ひぐらしの鳴き声が聞こえた。

「夏樹………… ホントは、どうなんだ？」

「俺………… 俺……………」

拓弥がそつと夏樹の頭を撫でた。今までで、夏樹が一番自分に正直になった瞬間だった。

「俺……七海に帰りたい」

「そつ……か」

覚悟していたとはいえ、拓弥も少なからず動揺した。その目から、涙がこぼれ落ちそうになったが、拓弥はグッと堪えた。

階段を降りてきてすぐ、夏樹は自宅へ電話をかけた。拓弥は勇人たちへ外に出ようと促し、みんなも雰囲気を感じて出て行った。

コール音が鳴る。緊張感は相変わらずだが、さっきよりマシになった。

「もしもし！」

すぐに由利が出てくれた。この様子からすると、ずっと電話を待っていたのだろう。

「お母さん……」

「うん……久しぶりね」

「あのね……俺……」

「なに？」

ホントは、どうなんだ？

拓弥の一言が蘇る。それに答えるように、夏樹は一言一言、ハッキリと言い切った。

「俺……七海に帰りたい」

夏樹が大きく、一歩だけだが、前進した瞬間だった。

第57話 男同士の席

7月21日(月)。明日、夏樹は七海へ帰る日だ。既に荷物の準備は済んでいる。奏七太も樹音も普通に接してくれているが、夏樹は知っていた。昨日、奏七太がずっと珠子に同じ質問を執拗に繰り返していたことを。

「夏樹、今度はいつ帰るの？」

それは、正確に決まってなどいないだけに珠子もなかなか答えをハッキリ出せずにいた。夏樹自身、それは一番よく知っている。

自分はもう、おそらくこの稲賀沢には帰ってこない。

自分で決めたことだった。それを覆す気持ちはもう、なかった。けれども、それをハッキリ言えない自分がいた。それが、奏七太をどれだけ苦しませているのかわかっているつもりだった。しかし、言えないままこの日がやってきた。

いつのまにか、奏七太はこの質問を珠子にしなくなっていた。それ以来、夏樹に対して特に態度が変化することもなく、ごくごく普通の日々が流れていく。そして、今日になった。

「夏樹！」

ポーツと机に座っていると、奏七太が庭から夏樹を呼んだ。

「なにー？」

「ちょっと出てこない？」

「わかった。すぐ行く」

夏樹はすっかり慣れた、ギシギシと音を立てる階段を降りて庭へ出た。

「あれ？」

しかし、庭へ出ても奏七太の姿はなかった。

「おーい、どこ行ったのさ」

すると、上から「こつちこつち！」と呼ぶ声が聞こえた。

「うわ！ なにやってんの!？」

奏七太と拓弥が屋根の上によじ登っていた。

「いいから、ナツも来いよ!」

「う、うん……。でも、どこから?」

「ほら、倉庫の横にハシゴあるだろ？ そっから登ってきて」

「わかった」

奏七太のいうとおり、倉庫にはハシゴが掛かっていた。そこを登り、さらに倉庫の屋根から家の1階の屋根へ登る。

「上がれない!」

2階の屋根へなかなか上がれない。身長が拓弥や奏七太より少しだけ低いので、届かないのだ。

「あーあ。これだからチビは困る」

拓弥がニヤニヤしながら言う。

「チビツて言うな!」

「はいはい。ほら、手え出せよ」

拓弥に引っ張ってもらって、夏樹はようやく屋根の上へ上がった。

「も……疲れた! 帰る前日に体力使わせないでほしい!」

「ブチブチ文句言うなよ。ほら、いいもんやるから」

拓弥は強引に夏樹へスイカを押し付けた。

「でっかいなあ。こんなに食べれないよ」

「まあ、そう言うなよ」

「んじやく、いただきます」

夏樹はまだまだ冷たいスイカを頬張った。それからしばらく、拓弥も奏七太も口を開かないまま、時間だけが過ぎていく。

(な、なに……この沈黙)

夏樹がいたたまれなくなつて口を開こうとした瞬間、先に奏七太が喋りだした。

「なあ、夏樹」

「なに?」

「お前さ……次、いつ、こっちへ帰ってくるの？」

「……。」

「いや……こっちに帰ること、あるの？」

その表現のほう为正しいのだろう。このような状況になった今、稲賀沢へ帰ってくる可能性というのは極めて低くなった。今は、七海や家族のことを思い出しても不快感が沸いてこない。むしろ、会いたい気持ちのほう勝っているのが事実だ。

しかし、それは同時に稲賀沢とはしばらく距離を置くということだ。ようやく親密になってきた奏七太たちとの距離も置かざるを得なくなる。

「正直……こっちにいたいよ」

夏樹は隠さず、本音を話し出した。けじめをつける形だ。

「でもさ、俺はやっぱり家族ではないでしょ。親戚だけだね、奏七太たちとは。でも、俺の家族は神奈川にいるわけ。なんだかんだで、12年俺を育ててくれた父さんやいつもケンカしてもいざとなったら優しい姉ちゃんとかがいるわけ。いつまでもこっちにいたら……みんなに心配かけるんじゃないかなって思うわけ」

「そういうもんなのか？」

拓弥が奏七太に聞いた。

「知らないよ。俺、親じゃないもん」

「あー、そっか。じゃあ何、夏樹は親になったことあんの？」

「タク、根本的に話のピントがズレてる」

「え？ そっ？」

夏樹は思わず笑ってしまった。

「笑うなよ。だいたい、ナツが難しい話するから悪いんだ」

拓弥はプウツと頬を膨らませた。

「そっだよな。夏樹って、なんか小学生のわりに考えてることオッサン臭い」

「オッサン……」

夏樹があからさまに落ち込んだ様子を見せた。

「お前なあ…… オッサンはねえだろ、オッサンは」
「え!？」

「見るよ。ナツ、めっちゃめっちゃ落ち込んでる」

「あわわわ! 夏樹、ゴメン! ゴメンって!」

「……知らない」

夏樹がそっぽを向いたので、奏七太は何度も夏樹に「ゴメンって! マジ!」と謝ってきた。それを見て拓弥が笑いを堪えている。

「プツ!」

夏樹も堪えきれず、笑い出した。

「アハハハ! も〜、ソナタっていつつも人が怒ると慌てるわりに、空気読めないこと言うよね!」

「へ?」

「冗談だよ。何も怒らないよ、そんなくらいじゃ」

「ヒドいなあ! だましただろ?」

「だまされるほうが悪いんだい」

「このやる!」

奏七太は夏樹にデコピンを喰らわせた。しばらく大笑いしていたが、不意に沈黙が降りた。

「……明日の今頃は、どうしてる?」

奏七太が聞いた。どこかで、鳥が鳴いている。きつと巢へ戻るの
だろう。

「……新幹線のホーム、かな」

「そっか……」

拓弥が小さい声で答えた。

「でも、一生の別れじゃないし」

奏七太が声を震わせた。泣いているのだろうか。夏樹からは逆光
で顔があまり見えなかった。

「そうそう。また会おうと思えば会え……る……」

拓弥の声も詰まった。

(二人ともわかりやすすぎる……)

夏樹はクスツと笑った。寂しくないと言えば、うそになる。でも、夏樹は笑顔で別れようと決めていた。いつか必ず、戻ってくる。夏樹はそう決めていたからだ。涙を出して別れると、簡単に会えなくなる気がする。それは嫌だったからこそ、泣かないと決めた。

「俺、また帰るよ」

「え？」

拓弥と奏七太は同時に声を出した。

「俺さ、ゼツタイ、またここへ帰ってくる」

「ナツ……」

「だってさ、田植えしたのに稲刈りしてないし！ 餅も食べたいし！」

それを聞いて、ガクンと奏七太と拓弥が脱力した。

「どうしたの？」

「帰りたい理由って、それだけ？」

奏七太が苦笑いして聞いた。

「うん！」

「……そっか！ ゼツタイ稲刈り来いよ！ 来なかったら餅やんねえぞ！」

拓弥が夏樹の背中をバシバシ叩いた。

「わかったよ、わかったから！」

夏樹は笑いながら、心の中で呟いた。

「言えないよ。」

「君たちともっといたいから、なんて。」

「恥ずかしくて。」

こうして、稲賀沢での最後の日は、静かに過ぎていった。

第58話 さよならの席

「……気をつけてな」

拓弥が笑って言った。夏樹も笑顔で返す。

「ありがとう。いつも来てる電車だから、平気」

「そっか」

「……。」

沈黙が降りる。奏七太、樹音、花音、拓弥、勇人、早苗。いつものメンバーだ。それに珠子、純、靖治、千鶴子まで来ている。それだけじゃない。奏七太の隣に住んでいるおじいさん、おばあさん。いつも新聞配達をしているお兄さんまでいる。

「やだなあ、ホント盛大でなんか」

夏樹は照れ笑いをした。千鶴子が豪快に笑った。

「ホントだねえ！ ちょっと帰るくらいなのにねえ！」

千鶴子にもちゃんと帰る旨は伝えておいた。ちょっと、と言った覚えはない。でも、帰ってこないとは言わなかった。きつと帰る。そう、夏樹は信じている。だからこそ、千鶴子は「ちょっと」と言ったのかもしれない。ちょっとでないことは、千鶴子もわかってい

る。

「気をつけるよ」

靖治がいつものように優しい声で言った。

「はい。短い間でしたけど、ありがとございました」

「夏休みが明けたら、向こうの小学校に通うのかい？」

おばあさんが聞いてきた。そんなことは考えてもなかったが、おそらくそうなる可能性は低い。夏樹はもう一度、あの学校に祥夫が戻してくれるとは考えていなかった。そうした話は、すべて七海へ帰ってからだ。

「まだ……わからないです」

事情を知るメンバーだけが黙り込んでいた。

「ねえ、ナツ」

早苗が樹音と花音と一緒に何かを差し出した。

「これね、ひまわりの花で作ったの。押し花」

「押し花……」

綺麗で鮮やかな黄色。夏樹の好きな黄色だ。

「ナツの名前、夏樹でしょ。ちょうど今の季節じゃん？ そんなナツにピッタリの花って考えたら……ひまわりが一番かなって思ってた……。」

夏樹は思わず涙が溢れ出そうになった。しかし、泣かないと決めたのだから、涙をグツと堪える。その代わり、高ぶる感情が抑えきれず、気づけば早苗を抱きしめていた。

「ナ……ツ……」

（ゴメン、明日香。今だけ……許して）

「ありがとう」

そして、次に樹音を抱いた。この稲賀沢にいる間に、夏樹は5センチも背が伸びた。来た当時はあまり身長の変わらなかった樹音が、今は少し小さく感じる。

「頑張れよ、樹音」

「……言われなくてもわかってる」

樹音の声が震えた。樹音も強がりだ。きっと、泣かないと決めていることは夏樹にもすぐわかった。続いて、花音を抱きしめた。彼女はまだ小さい。だから、高ぶる感情を押さえ込むなんて無理だった。

「なづきにいぢちゃん……ヒグツ、エグツ」

「泣くな。な？ 泣くと俺まで泣きたくなるだろ？」

「エグツ……ツク、ウウツク……」

「な？ 花音、いい子だろ？」

「ウエツク……わがっだ」

無理やり自分を納得させるように、花音はうなずいた。

「おばさん……本当にお世話に」

「まだ言わないでよ、そんなこと！ あたしはねえ、まだまだこれから夏樹も陽乃もお世話する気マンマンでいるんだから！」

珠子がバシバシと夏樹の肩を叩いた。

「おばさん……」

純が間から顔を出す。

「そうだぞ！ また冬休みにも遊びに来い！ いや、その前に稲刈りがあるだろ。それにも来ないと承知しないぞ。ちゃあんと、陽乃ちゃんと明日香ちゃん、未咲ちゃんと未華乃ちゃんも連れてくること！ わかったな？」

「アンタ！ それはアンタが若い子好きなだけでしょうが！」

「バレたか」

ドツと笑いが起きる。夏樹もおかしくて笑いが止まらない。

「16時48分発、秋田新幹線、東京行きがまもなく入ります」

「……！」

奏七太の顔があからさまに悲しそうになるのを、夏樹は見失ってしまった。思わず目を逸らしてしまう。やがて、新幹線が滑り込んできた。風が起きて、早苗と樹音の髪の毛が舞い上がった。

「……行くね」

「ああ……」

拓弥と奏七太とはあえて何も話さず、乗り込んだ。昨日の約束がある。「じゃあな」とか言わないつもりでいた。

「ここか……」

ホーム側の列。窓際だ。全員の顔が見える。

電車が動き出した。夏樹は笑顔で手を振る。皆も、笑顔で送ってくれる。

（大丈夫。このまま……このまま……）

しかし、夏樹の目の前を誰かが走り出した。

奏七太だった。

「夏樹！」

「奏七太！」

電車の窓は分厚い。しかも、昔のものと違って窓は開かなくなっていた。それがもどかしい。夏樹はなんとかして開けようとするが、開かない。

「奏七太！」

夏樹は目いっぱい大声を出した。

「夏樹！」

「待ってよ、ズルイ！」

そう言っただけで走り出したのは、樹音だった。

「夏樹兄ちゃん！」

初めて叫んだ、夏樹の名前だった。夏樹には聞こえていないだろうと樹音は思った。しかし、夏樹は確かにこう言った。口の動きでわかった。

「ありがとう！」

「行くぞ、花音！」

拓弥が花音を抱き上げて走り出した。メンバーの中で一番運動神経がいい拓弥はあつという間に夏樹に追いついた。しかし、電車の速さには勝てない。

「夏樹！ 夏樹！」

言いたいことはいっぱいある。しかし、拓弥の頭にはそれを言葉にできる余裕がなかった。最後に、叫んだ。

「絶対、帰って来い！」

言うつもりはなかった。しかし、そう言わなければ夏樹が帰ってこない気がしたからこそ、拓弥はそう叫んだ。

「わかった！」

聞こえるはずのない声が、聞こえた。電車はやがてホームを離れていった。

「どうして……」

夏樹は電車の中で、押し花に涙をこぼしながら声を漏らした。

「どうして、大事なものはひとつじゃないんだろう……」

夕暮れを反射する窓。夏樹の頬についた、雫の跡がそれを反射さ

せた。

第59話 見てはいけない席

「……………」

夏樹が目を覚ますと、見慣れた天井が目映った。ここは洋間だ。……………。そっか。俺、帰ってきたんだ」

下からは、久しぶりに聞く両親と陽乃の声が聞こえる。蝉が盛大に鳴いていて、少し耳障りな感じがする。夏樹は布団から出て、とりあえずパジャマから着替えた。部屋を出て階段を降りる。あの時の血痕はようやく廊下から消えた。けれど、チヨコレートは相変わらず食べられないままだ。むしろ、見ると気分が悪くなる。

「考えないでござい」

チヨコレートのことを考えるだけで気分が悪くなる。ギシギシと音がしない階段を降りて、リビングに入った。

「あつ、おっはよ、夏樹！」

真っ先に声をかけてくれたのは、やはり陽乃だった。

「おはよう」

なるべく普通に振舞おうと意識してしまう。自分の家なのに、そんな感じがいまひとつしないような感覚。夏樹はこの感覚が何なのか、よくわからなかった。

「おはよ、夏樹」

由利が笑顔で夏樹に挨拶をする。

「おは……………よう」

一瞬声が詰まったが、なんとか挨拶できた。

「ご飯にする？ それともパン？」

「お母さん。夏樹はいつもパンだよ？」

「あ……………そうだったわね」

由利が夏樹の朝食がいつも何だったか忘れるくらい、自分は家を空けていたのだと考えさせられる。それ以外に、夏樹が留守中にも変わったことがあった。

「おや、おはよう夏樹」

それは、祥夫の母、夏樹にとって父方祖母にあたる知恵子の同居だった。夏樹が留守中に一度怪我をして、老化もあるから今後は一緒に暮らそうと由利が提案したのだそうだ。

「おはよう。おばあちゃん」

いつもニコニコとしている知恵子が、夏樹は大好きだ。彼女がいるからこそ、家へ帰ってもなんとなく落ち着けるのだろう。それに陽乃が以前よりもずっと頻繁に夏樹を気に掛けてくれる。それも大きかった。

「はあ……」

朝食後、夏樹はクチャクチャになった布団の上で寝転がっていた。小学校のことはまだ何も聞かされていない。しかし、夏樹は富樫小学校に戻るつもりなど、あまりなかった。帰宅後、祥夫ともあまり話はしていないが、それだけはきちんと伝えておいた。秋田にいる間、いい友人に恵まれただけにあんなことがあつた富樫小学校に戻る気など、ほとんどない。

おそらく、校区が少し違うが家から歩いて20分程度のところにある北七海小学校に通うことになるだろう、と祥夫は夏樹に言った。夏樹にしてみれば、富樫小学校でなければどこでもいい、という感じだった。

ノックが聞こえた。

「なに？」

「あたし。陽乃」

「どーぞ」

陽乃はウキウキ気分で夏樹の部屋に入ってきた。

「どうしたの？」

「夏樹さ、ちゃんと帰ってきた挨拶した？」

「え？ したじゃん」

「違うわよ。あたしたちじゃなくって！」

「……」

夏樹の顔がみるみる赤くなる。それから小さい声で「まだ」と呟いた。

「ダメじゃん！ちゃんと、無事帰ってきたことを伝えなきゃ！」
「……恥ずかしい」

夏樹は顔を真っ赤にして俯く。陽乃はクスツと笑ってから続けた。
「恥ずかしがってる場合じゃないよ？ せっかく、好き同士なんですよ？ ほら、仲良くなつとかないと」

「でも……」
「あたしもついていってあげるから！ ね？」
「……わかった」

昼食後。陽乃と夏樹は外へ出かける格好をして、玄関にいた。

「あら？ どこか行くの？」

「岡本さんの家」

「あ、帰って来たんだもんね。ご挨拶行かなきゃね。いろいろお世話になってるし」

「そういうこと！ ま、夕飯までには帰るから」

「よろしく言っておいてね」

「いつてきまーす！」

陽乃に続いて夏樹が黙って家を出る。

「夏樹。ほら、いつてきますは？」

陽乃が無理やり夏樹を回れ右させた。

「え？」

「家を出るときは、いつてきます！ ほら！」

「……。」

由利がにこやかに夏樹を見つめる。恥ずかしくなったが、言わな
いまま陽乃が出させてくれそうにもなかったので、小声で言った。

「いつてきます」

「いつてらっしゃい」

由利の笑顔に、夏樹は少し安心感を覚えた。

「暑いな」

陽乃は帽子を深く被って恨めしそうに太陽を見上げる。夏樹も秋田の涼しさに慣れていただけに、こちらの暑さが辛い。自然と息が荒くなる。

「水飲む？」

「ありがと」

ずいぶん体力が落ちているのを感じさせられた。

「夏樹、向こうじゃ都会もやじつ子って言われておちよくられてたんでしょ？」

「な、なんでそんなこと知ってるのさ!？」

夏樹が暑さによるのとは違う意味で、顔を真っ赤にした。

「残念〜！ 実はね、樹音ちゃんにいろいろ手紙で報告してもらってたんだよ？ あの子、夏樹に素っ気ないふりして実は一番夏樹のことを見てたんだから」

「ウソだあ！」

そう笑う夏樹だが、顔が引きつっている。

「ウソじゃないわよ？ ほら、誰だっけ？ 奏七太でもなくて勇人くんでもない」

「拓弥？」

「そうそう！ 拓弥くん！ その子と一緒に樹音ちゃん、夏樹のことうよく見てくれてたんだよ？ ほら、これが証拠の品」

陽乃はカバンからたくさんさんの写真を取り出した。どうやら夏樹が気づいていないうちに、すべて撮られたようだった。

「げっ!？ これ、野菜植えのとき？」

5月の中旬に、夏野菜を植えたときの写真だ。土で頬を汚しながらも、一所懸命ピーマンの苗を植えている自分の姿が写っていた。

「そうよ。これは放課後、水まきしてる写真」

ホースが思うように伸びず、無理やり引っ張ったらホースが抜けて水道から噴水のように水が噴き出たことがあった。そのシーンをこれは樹音が収めたようだ。端のほうに笑っている拓弥と勇人、慌てている早苗と花音が写っていた。

「それに、これは田植え」

陽乃、未華乃、未咲、夏樹、奏七太で綺麗に並んで植えているときの写真だった。

「いつものまにこんなの……」

「夏樹にバレないように、バレないようにやってくれてたみたい」
「そうなんだ……」

あくまで想像だが、ひょっとしたら樹音が素っ気なかったのはこのためだったのだろうか。夏樹はそう思うと嬉しくなり、自然と笑みがこぼれた。

「久しぶりね〜！」

明日香の家に到着した。今日は定休日らしく、シャッターは閉まっている。

「裏から行かないとね」

「うん」

夏樹は緊張と嬉しさでいっぱいだった。久しぶりに明日香に会えるのだから、喜びもひとしおだ。

ドアをノックする。しかし、応答がない。

「あれ？ 留守なのかな」

「え〜……」

陽乃はドアに耳を当ててみた。

「……ホ。……ガ……」

「あ、声がするわ」

陽乃は勝手にドアを開けた。

「ダメだよ、姉ちゃん」

「いいじゃない。おばさん、用があるときは自由に入ってって言うてくれるから平気よ」

陽乃は靴を脱いで部屋へ上がる。夏樹も渋々ついていった。

「あ……上から声がするわ」

「え？」

「明日香ちゃんかも！ ねえ、夏樹。上へ行っておどかしてきなよ」

陽乃がグイグイ夏樹の背中を押した。

「い、いいよそんなの!」

「ホーラ、照れるな! 行ってこい!」

夏樹は仕方なく、2階へ上がる。心臓が飛び出しそうなほど鳴っている。そして、とうとう明日香の部屋の前に着いた。

「んんっ!」

軽く咳払いをして、ドアをノックする。しかし、やはり応答はなかった。

「……………」

すると、奥のほうから声と水の流れる音がする。

「あっちか」

夏樹は奥へと向かった。すると、トイレのドアが全開になっていた。

(わ!? ヤバいじゃん!)

危うく覗いてしまうとこころだった。夏樹は戻ろうとして、妙なことに気づいた。

(……………なんで? ふつう、開けっ放しですか?)

そもそも、水が流れっぱなしということ自体、妙だった。

「……………」

夏樹はおそろおそろ、トイレを覗き込んだ。

「ゲボツ……………ゲホ……………ウツ……………エエエエツ!」

喉に指を突っ込み、何度も何度も戻す女の子。

それは。

「明日……………香……………」

間違いなく、明日香だった。

第60話 狂乱した席

「ウエエッ……ゲボツ、ゴホゴホゴホ！」

夏樹が明日香の名前を呼んでも彼女は振り向かず、吐き続けた。

夏樹はシャツの袖から見える明日香の腕を見てゾツとした。びつくりするほど、痩せている。いったいどうしたのか。

「明日香……？」

夏樹の声に明日香がバツと振り向いた。頬がすこしこけている気が夏樹にはした。

「……。」

明日香が呆然とした目で夏樹を見つめる。夏樹も明日香を呆然とした目で見つめる。

「ど、どうしたんだよ？ 体調悪い？」

「……あ……」

「どした？」

夏樹はそっと明日香に近寄る。何か言おうとしているのだが、それがうまく聞き取れない。

「熱でもあるの？」

「どうして……」

「へ？」

次の瞬間、夏樹は思い切り明日香に突き飛ばされていた。

「うあっ！？」

ドーン！と大きな音を立てて尻餅をついてしまった。腰に痛みが走る。

「なんで……！ なんているの！？」

「え？」

夏樹は自分が帰ってきたことを報告しに来たのを思い出した。痛みが残る腰をさすりながら、夏樹は説明を始めた。

「俺さ、昨日やっと秋田から帰ってきたから、それを知らせに」

「そんなこと聞いてるんじゃない！」

明日香の怒鳴り声に夏樹は黙り込んでしまった。

「……………」

明日香の表情が怖い。夏樹は初めて恐怖というものを身をもって感じた。

「なんで……………なんでいるの？」

「だから、昨日帰ってきたのを明日香に知らせに……………来たんだけど」「誰もそんなことしてって頼んでない！」

明日香は棚に置いてあった花瓶を夏樹に向かって投げつけた。激しい音を立てて花瓶が割れ、水がこぼれて花が散る。破片が夏樹の足を少し傷つけた。

「痛ッ……………！」

夏樹にはわけがわからない。急にどうしたのだろうか。目の前にいる明日香が明日香でないように見える。

激しい物音は階下にいる陽乃にも届いていた。まず、ドオンと何かが倒れる音。次に誰かが叫ぶ声。きつと明日香が夏樹に会えた嬉しさでテンションが上がっているのだろう。そんな風に思った。しかし、その直後ガラスか何かが割れる音がした。

「なに……………？」

陽乃はそつと上がり、階段のほうへと向かった。

「帰って！」

荒々しい声を上げる明日香。

「夏樹？ どうしたの？」

「帰ってって言うてるでしょ！」

バアンと何かがぶつかる音がした。すぐに倒れる音がして、夏樹の悲鳴に近い声が聞こえた。

「やめてよ、なあ、明日香！ 痛い、痛い！ やめて！ 帰るからお願いだよ、放し……………痛いイタイイタイ！」

「ちよつとどうしたの!？」

陽乃は慌てて2階へ上がった。すると、明日香より少し背が高い

夏樹が明日香に馬乗りになって分厚い辞書のような本で叩きつけられていた。

「キヤ ツ!? ちょ、やめなよ二人とも! どうしたの!?!」
「来ないでよ! 帰って!」

明日香は夏樹を叩きつけていた辞書を陽乃のほうへ放り投げた。

「きゃあっ!?!」

それが障子を突き破って部屋へと消えていった。陽乃は放心状態でヘタリと座り込む。

「やめてくれよ、明日香! 痛い、痛いお願いやめてやめてやめて!」

「帰って! 帰ってよ帰ってよ私を気安く呼ばないで帰って帰って!」

陽乃は目の前で繰り広げられる状況が夢のような感覚に襲われていた。目の前にいるのは、間違いなくつい1ヶ月ほど前に一緒に夏樹に会いに行った、あの明日香だ。その明日香が、夏樹を傷つけている。

「や……めて」

陽乃は声を震わせながら呟いた。辞書で殴られたときにできたのか、額から夏樹は出血していた。さらに引つ掻き傷ができて、頬が真っ赤になっている。

「やめてよ明日香ちゃん! ねえ、どうしたの落ち着いて!」

「放してよ! 今すぐ帰って! 来ないで! 帰ってえ!」

「やつめて!」

陽乃は力をこめて明日香を突き飛ばした。

「夏樹! 立って? 大丈夫?」

「姉ちゃん……デコが痛い」

「帰るよとりあえず……キャッ!?!」

時計が飛んできた。バネやガラスの破片が飛び散って陽乃と夏樹に破片が叩きつけられる。

「帰ってよお! 早く! 邪魔、邪魔!」

夏樹の目が寂しそうな感じになっても、明日香は気にすることなく叫び続けた。

「そんな……ヒドいよ、明日香」

「帰って！」

二人を睨みつける明日香の視線は尋常ではない。

「でも、どうしたの明日香ちゃん？」

「帰ってって言うてるじゃない！」

明日香が夏樹を突き飛ばして陽乃に飛び掛かった。

「キャ　！　やめて、痛い！　いやああー！」

明日香は陽乃の髪の毛を引っ張り倒している。

「やめろよ！　やめろって！　明日香あ！」

「ちよっと！　どうしたのよ！？」

帰宅した花那が騒ぎに気づき、制服のまま3人の間に割って入った。

「明日香！　やめなさいよ……明日香！」

「お姉ちゃんには関係ない！」

「キャッ！」

突き飛ばされた花那は柱で背中を打った。

「大丈夫ですか？」

夏樹がすぐに駆け寄る。

「それより、陽乃ちゃんが……」

「ねえ、明日香やめてよ！　姉ちゃんがケガしちゃっ！」

「アンタたちが早く帰らないから悪いんだ！　帰れ、帰れ！　帰れ

！」

「明日香！　やめなさい！」

花那が明日香を無理やり引き剥がした。

「きゃっ！？」

明日香がよろけて、階段のほうへ倒れる。

「あっ……」

そのまま、階段から落ちそうな体勢になる。

「明日香！」

夏樹は間一髪のところまで明日香を引つ張って難を逃れた。

「なんで見るのよ！　なんでよ……なんで……」

泣き崩れる明日香に、全員が呆然とするしかなかった。

「……。」

帰路へついて、陽乃と夏樹はただ呆然と歩くしかなかった。あの後、明日香の両親が帰ってきた。帰りに聞かされたのは、夏樹にも陽乃にもシヨックだったことだ。

「明日香ね……前からちよつと様子はおかしかったの」

玲子が悔しそうに呟く。登が続けた。

「私たちが気をつけてたんだ。イライラすることも多かつたし、食べる量も少ないし。花那や圭太に八つ当たりのようなことをするのも増えていてな……」

「ただ、まさかこんな騒ぎ起こすとは思わなくて……。二人には申し訳ないわ」

ケガの手当てをしてくれる花那も「ごめんなさい」と消え入るような声で謝った。夏樹も陽乃も、返す言葉がなかった。圭太は最近、すっかりおびえて明日香と話もしないという。

「明日香ちゃんは……」

迎えに来てくれた祥夫がようやく口を開いた。

「病気かもしれんな」

「病気……」

夏樹が寂しそうに呟く。

「そう。夏樹や、陽乃やお父さんにはわからない、何か大きなことを抱えているのかもしれない」

「……想像つかないや」

夏樹は悔しくて仕方がなかった。帰れ。邪魔。明日香に言われた言葉すべてが胸に突き刺さり、どうしようもなくなる。気づけば、涙が溢れ出ていた。

「夏樹。辛かったか？」

祥夫の質問に、ますます涙が溢れる。

「きつとな、明日香ちゃんはやっとイライラしてるだけなんだ。それが抑えきれないんだよ」

「それって病気なの？」

夏樹が聞く。祥夫は残念そうにうなずいた。

「お父さんの会社にもな……いるんだ、そういう人」

「……そう」

「今はどうしてるの？」

陽乃が聞いた。

「長期休暇を取っている。辞めたい、と本人は言ったんだ。まあ、ちよっとトラブルがあったからな。でも、お父さんの大事な仲間だから……」

それ以上、祥夫は何も言わなかった。苦手だった父が、少し近くになった気が夏樹にはした。

「明日香ちゃんのこと、大事にしてあげるんだぞ？」

祥夫は優しく夏樹の頭を撫でながら言った。小さく、しかし力強く夏樹はうなずいた。

第61話 語り合いの席

「ちょっと、ふっくらしたね」

「……………ッ……………！」

夏樹が目を覚ますと、見慣れない天井が映った。

「あれ……………？」

まったく見覚えがない。しかし、フカフカの布団に白いシート、白い壁。ナースコールもある。どうやら病院のようだ。

「ちい？」

ちひろの持っていたカバンが椅子に置いてあった。けれども、ちひろの姿はない。恭輔もいたことを思い出すが、もちろんその姿もない。

「俺、どうしたんだろ」

頭を押さえながら立ち上がる。周りのベッドにも患者さんがいたりする様子はない。そっと引き戸を開けると、一気に雑踏が聞こえてきた。名前を呼ぶ館内放送、咳き込む人の声、談話室で話す人の声。

「ちい？ 嘉村？」

フラフラとおぼつかない足で歩きながら、夏樹は入口のほうへ向かった。夏樹が最初の曲がり角を曲がったところで、後ろから恭輔とちひろが入れ違いで帰ってきた。

「ご両親には連絡ついた？」

恭輔が飲み物を抱えながらちひろに聞く。

「うん。ご無沙汰だけど、おばさんがいたから連絡ついた。すぐに向かって言ってくれたよ」

「怒ってなかったか？」

「全然。むしろ、すっごい心配してた」

「そうなのか？」

「うん……。この時期になると、いつもなんか様子がおかしいんだって」

「そっか……。アイツ、まだ自分が言ったこと引きずってるのかな」「どうだろう。でも、あの一言が直接明日香に影響したとは思えないな」

「俺も思っけど……。でも、明日香がもう……。なあ」

「明日香がハッキリそう言ったことは一度もなかったよ。それは、断言できる」

「知ってるよ。優翔に後で聞いたから」

「そろそろやめとこう」

「そうだな」

病室に近づいたところで二人はこの話を切り上げた。ちひろが元気がいっぱい引き戸を引いた。

「朝倉くん！ ジューズ買って……」

ベッドがもぬけの殻になっていた。

「どこ行ったんだよ」

恭輔が慌ててジューズを置いて辺りを見渡す。しかし、夏樹の姿はない。

「和田！ お前玄関のほう行って！ 俺、裏口のほう見てくる！」

「わかった！」

二人は廊下を走り出した。

「なあんか来た覚えあるんだけどなあ……」

夏樹は玄関のあたりをウロウロしていた。雰囲気はまったく違うが、間取りなどがかつて来たことのある場所によく似ている。

「気のせいかなあ」

すると後ろから看護師さんが声をかけてきた。

「あれ？ 朝倉くん？」

振り返ると、見覚えのある人が立っていた。

「三浦さん！」

夏樹が倒れたときにいろいろとしてくれた、みづらりえ三浦理恵子看護師だ

った。

「あららー！ 久しぶりねえ。どう？ 元気にしてるの？」

「まあ……それなりに」

「そう！ いま何歳？」

「もう18で、大学受験控えています」

「あら！ そうだそうだ、ウチの子と同じ年だったね。どこの高校？」

「七海高校です」

「えー！ ウチの子と同じ高校じゃないの」

理恵子は目を丸くしてかなり喜んだ表情になった。夏樹も心当たりがある。

「ひょっとして、三浦悟史くんですか？」

「そうよそう！ あらあ、もうウチの子全然学校の話なんてしないもんだから……知らなかったわあ」

その後しばらく、理恵子と夏樹は時間が経つのも忘れて会話を続けた。

「そう……。もうすぐなのね」

「毎年この時期になるとけっこう辛くて……」

「でも、彼女は別段あなたのせいでどうこうっていうわけじゃなかったんじゃない？」

「違うんです。俺が……俺が明日香を……」

夏樹の様子が明らかに変化したのを、理恵子は察知したようだった。

「落ち着いて。誰もあなたのせいだなんて言っていないでしょう？」

「でも……でも、俺があの時あんなこと言わなかったら」

「考えすぎよ。誰かあなたを責めた？」

夏樹は首を横に振った。理恵子が肩に手を置く。

「そうでしょう？ それなのに、なんでそういう風に考えるの？」

「わかんない……。こうでもしないとなんか……怒りとか悔しさとか持っていきようがなくなって」

「……あなた一人で抱え込んでちゃダメよ」

「こんなこと誰にも言えない」

「本当に？ 今日、あなたを助けてくれたお友達は？」

恭輔とちひろの顔が蘇る。一瞬、小学校のときの顔が浮かんだが、すぐにその記憶をかき消して今の顔を浮かべた。同じ人物とは思えないくらい、二人とも優しくなった。それは、あの事件があったからこそだろう。

「今なら、信用できそうかな」

「それなら、少しずつでも本当のことを吐露しなさい」

「……そんなことで解決できる？」

「そう簡単じゃないの。でも、溜め込んでいたらきつといつか……」

理恵子は少し間を開けて言った。

「あなたがダメになってしまう」

理恵子が真剣な顔で諭した。ここまで自分を思ってくれる人がたくさんいるのに、なぜ自分はいつまでも一人で抱え込んでいるのだろう。そんな気持ちで胸が締め付けられそうになった。

「俺……二回ダメになったんです」

「そう……」

理恵子は追及しなかったが、夏樹は静かに語り始めた。

「一回目は小学校のとき。二回目は……二回目……はっ……」

「やめよう。もう思い出す必要はないわ。落ち着いて」

しかし、既に遅かったようで呼吸が荒くなる。

「朝倉くん。落ち着いて、ゆっくり呼吸して」

「ゼエ……ゼエ……ハア、ハッハアッハッハッ……ゲホッ、ゲホゲ

ホ！」

「朝倉くん！ ちょっと、中島先生！ 先生！」

意識が遠のく。中島医師の顔が見えた。

「先生……ひさ……し、ぶ、り」

「……！ ……！」

何か声が聞こえる。しかし、次第に何も聞こえなくなって、視界

が真っ暗になった。

「……………！ 朝……………。……………なさい、朝倉！」

「え？」

目を覚ますと、先生がものさしで夏樹の頭を軽く何度も叩いていた。

「ふえ？ 夢？」

「夢じゃない！ まったく、1時間目から寝るとはどういうつもりだ？」

「え？ え？」

夏樹はいつたいたいどうなったのかわけがわからない。

「あれ？ いま……………ここ、どこ？」

「何を言ってるんだ！ ここは葉島中学校1年1組の教室。今は数学の時間だ！」

「……………す、すみません」

ドツと笑い声が起こった。夏樹は真っ赤になって起き上がり、シヤーペンを手にした。

2004年4月19日（月）。朝倉夏樹は、中学1年生になった。

主な登場人物（七海 ・ 中学校編）

朝倉 夏樹
あさくら なつき

七海市立葉島中学校に通う少年。小学校時代はアレルギー発症やイジメを受けるなど受難が続いた。中学校ではそうした事実を知る者は富樫小学校出身の者だけのため、新しい自分を作るために明るく振舞っている。しかし、富樫小学校出身の者にはほとんど近づこうとしない。

岡本明日香と付き合っているが、最近では会うことすらできずにいるため、少々不満な日々を過ごしている。

岡本明日香
おかもと あすか

七海市立葉島中学校に在籍しているが、現在は長期欠席中。夏樹と付き合ってはいるものの、最近まともに会うこともできないでいる。性格はおとなしく控えめで、常に人の気持ちを第一に考える子。しかし、自殺未遂を起こした夏樹を寸前のところで止めるなど強い面もある。

<葉島中学校>

飯沼 水穂
いひぬま みずほ

夏樹の元彼女。バレンタインデー事件の引き金になったことを悔やんでいる。現在、夏樹が唯一近づく富樫小学校出身者。

和田 ちひろ
わだ ちひろ

幼なじみだが、夏樹のイジメに加担した。現在では夏樹と仲直りしようとしているが、激しく拒絶されている。

嘉村 恭輔
かむら きょうすけ

小学校時代の夏樹に対するイジメの主犯格。現在はかつてとはまったく異なるおとなしい少年になっている。自分を見るたびに凄惨な形相になる夏樹に少しおびえている。

速水 騎士

1年生以来の親友。名前に反しておっとりした親切な少年。

片岡 なぎさ

夏樹に片想いしている控えめな少女。明日香と似た雰囲気がある。

高橋 良輔

陽乃のクラスメイト。陽乃がよく夏樹の相談を持ちかけている。サッカー部所属。

<私立 風見台中学校>
坂上 優翔

夏樹が心を開く数少ない人物のうちの一人。正義感が強い。

<岡本家>
岡本 登

明日香の父。自営業で八百屋を営む「親父」という言葉がピッタリの男性。

岡本 玲子

明日香の母。登を支え、時に叱る肝つ玉母ちゃん。娘も息子も大好きで、愛情表現が率直過ぎるくらいである。現在は明日香の療養に付き添いつつ、店を手伝っている。

岡本 圭太

明日香の弟。小学生。明日香の療養で留守が増えた母親に代わり、店に立つことが増えている。

岡本 花那

明日香の姉。高校生になり、現在は毎日勉強に追われる進学校の生徒である。

<七海・朝倉家>

朝倉 陽乃

陽気で誰に対しても親切な夏樹の頼れる姉。まだ少し不安定なところがある夏樹に常に気をかけている。葉島中学校3年生。

朝倉 由利

夏樹の母。夏樹が秋田から帰って以来、以前よりも活発になったことを嬉しく思っている。

朝倉 祥夫

夏樹の父。夏樹のこれまでの事件などを通して今までの自分の行動を反省して、今ではよく夏樹に気をかけているが反抗期に差し掛かった陽乃に少し手を焼いている。

朝倉 知恵子

夏樹の父方祖母。現在は夏樹たちと同居している、優しいおばあちゃん。

<現代編>

佐野 綾音

高校3年生。夏樹と現在付き合っている。

佐野 翔さの かける

大学2年生。夏樹の姉・陽乃と付き合っている。

三浦 理恵子みづら りえこ

夏樹がアレルギーを起こした際に治療を手伝った看護師。現在は七海市内にある入江総合病院に勤務。

三浦 悟史みづら さとし

理恵子の次男で七海高校3年生にして夏樹のクラスメイト。夏樹とはクラスの中では一番仲が良い。

第62話 1年1組の席

「ふあーああ……」

夏樹は昼休みというのに自分の席に座ったまま、机でうつ伏せになつて校庭を見つめていた。クラスメイトがワイワイと外で騒いでいるのを遠目に見る。

「元気だよなあみんな」

「朝倉くんが冷めてるだけなんじゃん？」

「？」

振り向くと、見慣れない男子がいた。

「誰？」

「おっと、やっぱ思ったとおりクールだね」

「別にそんなことないけど……。っていうか、誰？」

「やっぱりクールじゃん」

(なんだよコイツ。自己紹介しろっての)

夏樹はプイツと顔を背けた。男子生徒はガタンと前の席に腰掛け、ようやく自己紹介を始めた。

「俺、ハヤミナイト」

「ナイト？」

「うん。『速』い『水』の『騎士』、ナイトの『騎士』って書いて、
速水騎士はやみナイト」

「なんだかファンタジーに出てきそうな名前だと思い、ポカンとしてしまった。」

「はあ……。スゴい名前だな」

「よろしくね、朝倉くん」

「うん。あ、朝倉くんなんてなんかうっとおしいからさ、夏樹でも何でも呼んで。朝倉って呼び捨てにしてくれてもいいし」

「ホント？ じゃあ夏樹って呼ばせて？」

「どつぞ」

「やったー」

騎士はニコニコと笑う。屈託のない笑顔。よく見れば、夏樹よりずっと背が低い。童顔ってこういう子のことを言うんだろうか。まあ、まだ子供だけだ。

「何考えてるの？」

「え？」

ドキッとした。何かを見透かされている気がした夏樹は一瞬言葉に詰まったが、すぐに冷静に返した。

「別に。ただ、速水が背が低いと思っただけ」

「けっこうヒドいことズバズバ言うね」

騎士が苦笑いする。夏樹も思わず苦笑いしてしまった。どちらかといえば、自嘲の笑い。最近、なんだか無意味にイライラすることが多い。家ではそうでもないが、学校ではどうも落ち着かない。

「ゴメン……」

「いや、いいんだけど。ちょっと聞いていい？」

「何？」

騎士は耳元でそつと囁いた。

「岡本さんって、どんな子？」

「え？」

騎士の質問に心臓がドクン、と大きく反応した。

「病気で休んでるっていうから……全然会ったことないじゃん？」

「……そうだな。でも、なんで俺に聞くの？」

「えっ……と……」

騎士はしばらく言葉を詰まらせたが、先ほどと同じように耳元で囁くように答えた。

「君たち二人、駅で見たことあるんだ」

「俺たちを？」

「うん。雪が降ってた日っていうのは覚えてるけど。俺、たまたま君と同じ電車に乗ってた。なんか……お別れっぽい雰囲気だから、君がどこか引越すするのかと思ってさ。でも今、君がここにいて岡

本さんがいないでしょ？」

「ちよ、ちよっと待って」

夏樹は騎士の会話を中断させた。

「なんで速水はあ……岡本のこと、知ってるの？」

「俺の親が岡本さんの店によく行くから、それで話するみたい」

「そうなんだ……」

夏樹は少し驚いていた。まさか、明日香と接点のある子がこんなにも早く自分に寄ってくるとは思っていなかったからだ。

「でも俺自身、岡本さんに会ったことなくって。名前だけ知ってたんだ！でも学校病気で来ないっていうから……。そのとき、駅で夏樹を見たこと思い出して。そしたら偶然、同じクラスじゃん？

だから、岡本さんと仲良さそうな夏樹なら、何か知ってるかなって思ってた」

「そっか……」

夏樹は悩んだ。騎士に明日香を紹介するのは簡単だ。あそこへ連れて行けばいい。しかし、初対面であんな姿の明日香に会わせるとどう思うだろう。そもそも、母親が知り合いなら、話を聞いていないのだろうか。

「あの、さ」

「なに？」

「お母さんから……岡本の話、聞いてないの？」

騎士は顔をしかめた。この様子だと知っているようだ。

「聞こうとしたけど、子供の知ることじゃありません！って怒られるだけでどうしようもないんだ」

「……」

それはそうだろう。夏樹にとっても、おかしくなりそうな現実。それが明日香の現状だ。

「誰にも言わない？」

「へ？」

「誰にも言わない。そう、約束する？」

「う、うん……」

「わかった。じゃあ、放課後に校門で待ち合わせしよう」

「わかった。ヨロシクね！」

「うん」

「じゃ、後でね！」

そう言つと騎士は嬉しそうに自分の席へ戻つていった。

(やっぱり……やめとくべきだったかな)

夏樹は少し、自分のやったことを後悔した。

放課後。校門で待っていると、騎士が女子生徒と歩いてやってきた。

「夏樹……あの、さ」

「ん？」

夏樹と目が合った女子生徒は少し戸惑いながら騎士の後ろに隠れていた。その表情に夏樹は思わずドキツとする。

「似てる……」

「え？」

「な、なんでもない！で、その子どうしたの？」

「実は……岡本さんに会いたいわって子で……今日、ついてきたいって」

「え……。言ったの？」

「ゴメン……。言つてないんだけど、聞かれてたみたいで」

夏樹は彼女の顔をマジマジと見つめた。

「あ、君、俺の横にいる……」

「か、片岡です。片岡かたおかなぎさ」

そう。彼女は夏樹の横にいる片岡なぎさだった。

「それで、あたしも岡本さんに会いたいわっていうもんだから……断りきれなくって」

「……」

夏樹はしばらく黙り込んだ後、小さくうなずいた。

「いいよ」

「本当!？」

なぎさと騎士は同時に声を上げた。

「その前に、これだけ見て行って」

夏樹は制服のボタンを取り、カッターシャツのボタンも開けた。

「お、おいおい! ヤバイよそれは」

騎士が慌てて止めようとする。

「勘違いしないでよ。そういう意味じゃない」

「そうなの?」

夏樹は胸元を少し見せた。

「ひっ!？」

騎士が息を吸うような悲鳴を上げた。

「あ……」

なぎさが啞然とする。

夏樹の胸元には、幅10センチくらいの痣あざがあった。

「こうなるかもしれない。もちろん、そうならないように俺やおばさんが気をつけるようにする。でも、絶対に驚かない。言わない。

なぜとか聞かない。それでいいなら……来て」

夏樹はそういうと歩き出した。騎士が黙ってうなずき、なぎさが後を追った。

(夏樹って大人びてると思ったけど……もしかして、岡本さんとの関係で……なのかな)

騎士はこれから起きることに少しおびえながら、黙って歩く夏樹の後を追った。

学校から歩くこと30分。七海市の北側に位置する入江総合病院に着いた。

「……」

その不気味な外観に、なぎさも騎士も呆然と見上げるばかりだ。

「大丈夫だよ。お化けなんて出ないから」

ニツと夏樹が笑った。普段は妙に大人びている分、そんな風に笑

うとホツとする。

「こっち」

夏樹の後を追うばかりの二人。暗い待合室を抜けて、湿っぽい階段を上がって5階に到着した。

「ここだよ」

騎士となぎさは表札を見上げる。『岡本明日香様』と書いてある。

「じゃ、入ろっか」

夏樹がドアノブに手をかけた瞬間だった。

「いらないうって言うてるじゃない！」

明日香の怒鳴り声の後に、食器やスプーンが落ちる音がした。

「でもね明日香、ちよつとは食べないと……」

「いらないうって！　なんで無理に食べさせようとするのよ!？」

夏樹が慌てて戸を開けて中に入った。

「夏樹くん！」

「明日香、やめろよ！　ちよつとは食べないと体に悪いって！」

「放してよ！　なんでお母さんもなっちゃん私に何でもかんでも無理やり食べさせようとするのよ！　意味わかんない！」

騎士となぎさは目の前で繰り広げられる光景が、自分たちのいる世界とはまったく違うもののように見えていた。想像していたものとは違う、異次元の世界。そんな様相だった。

「放してっ!！」

「痛ッ……!！」

夏樹が突き飛ばされ、ベッドから落ちて背中を強く打った。

「夏樹！」

思わず騎士が夏樹を助けに入った。

「誰……あなた？」

明日香の目に映った見慣れない少年に、彼女は冷たい目を向ける。

「勝手に私の部屋に入らないで！　出て行って！　出て！」

「あ……」

明日香が騎士に向かって皿を投げつけた。

「速水くん！」

なぎさが泣きながら声を上げる。玲子はナースコールでさっきからずっと大声を上げている。

「騎士！」

夏樹が騎士をかばった。夏樹の背中にプラスチックの皿が鈍い音を立てて当たった。

「……痛ッ！」

そこへ男性看護師と女性看護師数名、医師が入ってきて明日香に何かの処置を行った。

「あ……な、夏樹い」

「大丈夫、大丈夫だから、外出よう」

夏樹は痛みを堪え、なぎさと騎士を連れて談話室へと向かった。

第63話 談話室の席

「ゴメンな……急にあんなシーンのとこ連れて行ったりして」

夏樹は寂しそうな笑顔を浮かべて騎士となぎさに謝罪した。

「ううん。俺たちが強引に夏樹に頼んだりするから……俺たちこそ、ゴメン」

「速水たちは何も知らないんだから、謝る必要なんてないよ」

「……。」

それつきり、全員が黙り込んでしまった。明日香の部屋から怒号がしばらく聞こえていたが、やがて静かになった。

「夏樹……」

騎士は一番聞きづらいことをあえて聞いておきたかった。ここまで踏み込んだ以上、騎士にも覚悟はできている。

「何？」

「今からの質問に、ウソ偽りなく答えて」

「……何、突然」

「お願い」

「いいけど……内容にもよるよ」

騎士はガシツと夏樹の肩を掴んで、泣きそうな声を出して言った。「俺も片岡も、もう岡本さんのことに関して踏み込んでしまったんだ。だったら、彼女の大変さも夏樹の苦しさも受け入れるくらいの覚悟はできてるよ」

「……それ、中1のセリフにしてはカッコよすぎ」

「へへ……まあ、テレビの受け売りだよ」

「……ゴメン。もう少し、考えさせて」

夏樹は買ってきて汗をかき始めたジュースに手を伸ばした。半分くらい飲み干してから、夏樹は息を吸い込んだ。

「多分、きっかけは小さなことだった」

「え？」

「本当に、本当に小さなこと。小学校の修学旅行のとき、俺は途中で抜け出して、明日香に会いに行った」

騎士となぎさは息を呑んで夏樹の話に耳を傾ける。夏樹は淡々と続けた。

「会って……俺と明日香で大事にしてる『二人きりの座席』で再会したんだ。本当に嬉しかった。でも……俺、そのとき明日香に『ちよつとふつくらしたね』って言った。俺もそんな本気とかじゃなくて。家族の人も気づいてなかったけど、そこから明日香どんどん食べなくなつて。食べても吐いたりしてたみたいで……」

「それって……拒食症？」

なぎさが呟いた。夏樹は小さくうなずいた。

「拒食症って？」

「自分が太っているって思って、食べなくなつたりして極端に痩せる……病気だよな？」

「病気……」

「うん。片岡の言うとおり」

「でも、それが夏樹のせいってわけじゃないんじゃないの？」

騎士がなんとか夏樹に元気を出させようとしてくれているのが、夏樹自身に伝わってきて思わず涙が出そうになった。

「そつよ！ 朝倉くんの考えすぎじゃ……」

「そつだったらいいけどね」

夏樹は冷たい声で返した。

「どついつこと？」

「俺、明日香に直接言われた」

「……何を？」

聞くのが怖いと思いつつ、騎士はあえて聞き返した。

「『なつちゃんのために痩せようとしてるのに』ってさ……」

（1週間前）

「明日香……食べないの？」

明日香の目の前には昼食が置かれたまま。今日の昼食は温かいシチューとご飯。それにリンゴ半分。明日香は食べることを制限しないといけない病気ではないため、通常の患者より食事は多めに準備されている。

「食べない」

「でも、食べないと元気にならないじゃん？」

明日香は目の前に並んでいた皿を左手で一気に吹き飛ばした。シチューが床に飛び散り、皿が音を立てて転がる。

「誰のせいでこんなに辛い思いしてるかわかってる！？」

明日香がすごい形相で夏樹を睨みつけた。

「え……？」

「何もわかってない！」

バァン！と音を立ててお盆を机に叩きつけて明日香は怒り出した。「なっちゃんが秋田から修学旅行で七海に私に会いに来たとき、なっちゃんは『少しふつくらしたね』って言った！」

「あ……」

夏樹はそれを思い出した。しかし、夏樹は別段それを気にはしていなかった。

「私はきつと太ってる！ そう思って頑張って痩せようとしたの！ で、頑張って痩せだしたら周りみんな食べる、食べるって言う！ 私はなっちゃんのために頑張ってるの！ なっちゃんのために痩せようとしてるのに！ それなのに何！？ なっちゃんまで食べるって！ 知ってるんだから私。お医者さん、私のこと病気だって私は病気じゃない！ 普通なの。そうでしょ？ 普通の女の子なの！」

夏樹は自分の言ったことがここまで明日香を苦しめていると知り、体の震えが止まらなかった。

「仮に私が病気だったとしたらそれは誰のせいなの？ 誰？ 誰の

せい!？」

夏樹は自然と涙がこぼれ落ちた。しかし、それを見た明日香はますます激情し始めた。

「泣かないでよ! 泣きたいのは私よ! 誰のせいって!?! 決まってるじゃない、なつちゃん! アンタのせい! アンタがあんなこと言うから、私はおかしい子みたいな扱いされるんだ! アンタのせいだ!」

明日香は夏樹に向かってお盆を思い切り投げつけた。鈍い音を立てて、夏樹の華奢な胸にお盆が直撃した。

「グツ……!」

激痛が走り、顔を歪める夏樹を見ても明日香は平然としたままだった。

「帰って……帰って!」

夏樹は涙を流し、痛みを堪えながら病室を出た。ドアを閉めてからヘタリと座り込み、嗚咽ばかりが漏れた。

「だから……明日香が病気なのは……俺のせいなんだ」

騎士もなぎさも言い返せなかった。何も言えない自分たちがあまりにも無力で、悔しいだけだった。

「ゴメン……。こんな話されても困るよな」

夏樹は立ち上がって半分残ったジュースを一気飲みした。

「そろそろ二人は帰りなよ」

「え……でも……」

「明日香、今日はあんな状態だし。もっと落ち着いたらもう一回見舞いに来てやって」

「でも……」

何かを言おうとして、なぎさが騎士の手を引いた。

「そうだね。じゃあ、また私たち来るよ」

「うん……ありがとな。速水。片岡」

「じゃあね」

なぎさは強引に騎士の手を引いて談話室を出た。

「なんであんな強引に……」

「速水くん。今日のことは誰にも言わないでおこう?」

「え?」

「きっと、朝倉くん……本当はもっと辛いと思う。でも、私たちにも頼らず自分で解決しようとしている。あれは、朝倉くん自身がすごく悩んでると思うの」

「……それはわかるけど」

「どうしてもダメになって、誰かを頼りたい。そうなったとき、私たちが手を貸してあげよう」

「……。」

「ね?」

「……わかった」

少々不本意だったが、渋々騎士は納得して二人は家路に着いた。

第64話 日向の席

「こんにちは」

翌日、夏樹が明日香の病室に入るとベッドはもぬけの殻だった。

「あれ？」

驚いて夏樹は周囲を見渡すが、明日香の姿はない。すると、看護師さんがやってきて夏樹に声をかけた。

「あら、夏樹くん。こんにちは」

「あ、こんにちは！ あの……岡本さんは？」

「ああ、今日はちょっと検査だね。あと30分ほどしたら戻ると思
うわ」

「そうなんですか。わかりました」

看護師さんはそれだけ説明すると、すぐに別の部屋へ巡回に向かった。夏樹は病室の奥にある明日香のベッドの横に置かれた椅子に座った。明日香の病室は日当たりが良く、春の日差しがサンサンと降り注いでいる。暖かくて気持ちいい。窓際に顔を乗せて、ポーツと外を見つめる。

「あーあ。明日香が元気だったら……外へ行って遊ぶのになあ」

しかし、明日香をここまで追い込んだのは自分だと夏樹は確信していたので、そういうことを考えるたびに胸が痛む。

「ゴメンな……明日香」

夏樹は日差しをゾーツと見つめながらそう呟いた。

「……あれ？」

どれくらい時間が経ったのか、夏樹はふと目を覚ました。

「あれ？ ヤバイ！ いま何時だ！？」

夏樹が腕時計を見ると、既に時計は5時半を指していた。この病院の面会時間は午後5時までなのにも関わらず、夏樹はまだ病室に残っている。間違いなく違反なのだ。

「うえっ！？」

隣を見ると、同じような姿勢で眠っている明日香がいた。

「うわわわ！ い、いつのまに……っというか、ああ！ いつのまに帰ってきてんだよ！」

夏樹がワタワタと焦っていると、音に気づいて明日香が目覚めました。

「ああ……おはよ、なつちゃん」

これほど落ち着いた様子の明日香を見るのは久しぶりだった。かなり痩せているが、それでもカワイイものはカワイイ。夏樹は思わずジッと明日香を見つめてしまった。

「どうしたの？」

「うつ、うつん！ なんでもな……」

突然明日香がグイッと夏樹の腕を引っ張った。

「え？ 何、どうしたの？」

ギューッと夏樹の腕に顔を寄せる明日香。夏樹は真っ赤になって取り乱してしまった。

「わーわわわわ、ちょ、ホントどしたの明日香!？」

「久しぶりだよね、なつちゃんと二人きりでの」

「……」

明日香の一言に、ようやく夏樹も気づいた。こんなに落ち着いた時間を送るのは、本当に久しぶりだったのだ。

「そうだな……。どれくらいだろう？」

「もう忘れちゃった」

夏樹も正確には覚えていない。かなり長い時間が過ぎたように思う。

「あの場所にも……長い間行ってないね」

「うつん……」

二人きりの座席せじき。明日香が入院してから、ずっと行けていない。

夏樹も明日香と一緒にでないと、あの場所へは足が向かなかった。

「ゴメンね」

急に明日香が震える声でそう言った。夏樹は驚いて明日香のほう

を見る。明日香は夏樹と目を合わせずに続けた。

「私……本当になっちゃんにヒドいことしてる」

「……そんなことないよ」

すぐに違うと答えられなかった自分に嫌気が差した。しかし、明日香は気にせず続ける。

「胸……昨日、お盆ぶつけちゃって本当にゴメン」

「あんなの平気だよ！ 全然問題な……」

バツと明日香が夏樹の制服をめぐり上げた。お盆をぶつけられた場所が青く痣になって残っている。

「ウソつき……」

「……ゴメン」

沈黙が降りた。時計の秒針が二人の耳に小さく聞こえる。

「あーあ。何やってんだろ、私」

ゴロンと明日香は寝転がった。夕陽が明日香の寝るベッドに差し込み、明日香の顔がオレンジ色に染まる。

「せっかくの中学校生活、ちーっとも満喫できてない！」

「……。」

「なんだっけ？ 野外学習？」

「ああ、宿泊訓練だろ？」

「そう、それ！ 私も行きたかったな。そしたら友達だっけっていっ
ぱいできたのに」

「そうかな。俺、あんまりできなかったよ」

「それはなっちゃんがおとなしいからだよ。もっと動き回ればいい
のに」

「初対面の人ばっかなのに、はっちゃけたりするのは俺には無理だ」
「なっちゃんらしい」

明日香はククツと笑った。こうして落ち着いていれば、何ら今ま
でと変わらない明日香の姿がある。

「ね！ 葉島中学校ってさ、今度6月に文化祭あるんでしょ？」

「あ、そんなこと言ってたっけな」

「その頃には、病気治して絶対行くようにするよ!」

「ホントか!？」

夏樹はついつい嬉しくなって、面会時間が過ぎていくことも忘れて大声を出してしまった。

「シーッ!」

「あ……ゴメンゴメン」

明日香は人差し指を夏樹の口元に当てた。

「バレたら怒られちゃうから」

夏樹は苦笑いして明日香の指をそっと放した。冷静を装っているが、実は心臓がバクバク鳴っている。

(なんで急に唇に……)

「あーあ。でも、長い間外に出てないもんね。平気で出られるなつちゃんか羨ましい」

春になっているのに、未だに病室から出られない明日香。せいぜい、院内にある中庭で散歩できるくらいだといつか聞いた。

「……!」

夏樹の頭にふと、考えが浮かんだ。

「明日香明日香! 耳貸して……」

「なに?」

「いいコトいいコト。あのな……」

夏樹は顔が赤くなりそうになるのを我慢しながら、明日香に耳打ちした。

「大丈夫なの?」

「平気だよ。俺がうまくするから」

「嬉しい! 楽しみにしてるね!」

「うん!」

夏樹はこのとき、純粹に明日香を喜ばせたいだけだった。それが、あんなことになるとは思ってもみなかったのだ。

第65話 再着席

「そろそろかな……」

明日香は病室で夏樹が来るのを心待ちにしていた。時間は現在、午後9時5分。入院している入江総合病院は午後9時ちょうどに消灯する。そのため、いったん電気が消えれば人影などはなかなか目に入りにくい状態となっていた。特に、市内でも2番目に古い総合病院だからなおさらその傾向は顕著だった。

コンコン、と窓を叩く音がして振り向いた明日香の顔に、満面の笑みが浮かんだ。

「なっちゃん！」

「静かに！ 靴はある？」

「うん。ちゃんとお母さんに持ってきてもらった」

「変に思われなかった？」

「全然！ むしろ、散歩したいっていう理由にしたら、スッゴい喜んでくれたんだよ」

明日香が笑顔で話す姿を見て、夏樹は少しずつ病状が良くなっているんだな、と感じた。以前の明日香に近い姿になってきている。

「じゃあ行こうか。まだ少し冷えるから、これ着なよ」

夏樹はそう言ってキャンペーンで当てた上着を明日香に着せた。

「ちよつと大きいや」

「あゝ……。俺、最近6センチ身長伸びて服のサイズちよつと大きくしたから」

「そうなんだ〜！ 成長期だね」

明日香は嬉しそうに今しがた、夏樹が来ていた上着を羽織った。
(なっちゃんの匂いがする……)

「なに笑ってんの？」

「ううん！ なんでもない。それより、行こう？」

「うん！」

明日香と夏樹は手を繋いで裏庭を歩き出した。さすがに入口はまだ明るい、人気はほとんどない。七海市の外れにあるというのも影響しているだろう。

「ちよつと走るけど、いい？」

「大丈夫。こう見えても結構元気なんだから」

「了解」

夏樹はクスツと笑うと明日香の右手を引いて走り出した。病院から離れば、問題ないのだから。

1分ほど走って、病院の西側にある交差点に到着した。ここまで来れば、問題はない。

「そういえばさ、今日、おうちの人になんて言って来たの？」

「なんて言ったと思う？」

「うーん……」

明日香はしばらく考えて、何度か夏樹の顔を見ているうちにその表情がなんとなく語るものを察知してこう答えた。

「黙って出てきたでしょ」

「うわあ……さすが明日香だな」

夏樹は目を細めて言った。どちらかというと、苦笑いだ。

「ダメじゃない！ちゃんと出してこないよ」

「なんていうんだよ？ 岡本さんを、外へ連れ出しますなんてまさか言えないし」

「でも何か言ってくれば怪しがられないのに」

「言ったほうが変だよ。普段出歩かないんだから、俺は」

「それもそうだね」

明日香はクスクスと笑う。本当に久しぶりだった。こうして並んで歩くのは。

「着いたよ。疲れてない？」

明日香は少し息を荒くしていたが「平気！ 運動不足なだけ」と笑顔で答えた。夏樹はゆっくりと明日香の手を引いて火の見櫓のほうへと連れて行く。

「ここさ……もうすぐ、取り壊しするんだって」

不意に夏樹が寂しそうな声で呟いた。

「うそ」

「ホント。見るよ、この柱。結構ボロだろ？ だから危ないってことで、取り壊しだって」

「そんな……」

そう。取り壊されるのは、明日香と夏樹だけの座席（トシバ）。火の見櫓だった。柱に近くにある説明版には「昭和23年8月9日竣工」の字が見えた。相当古いのだ。

「それで、そろそろ立入が禁止になるって聞いて、俺、絶対明日香をそうなる前に連れてこようって考えてた。取り壊しは来週の今日だから……もう、連れてこようって決めたんだ」

「そっか……」

こればかりは仕方がなかった。取り壊しは決まったこと。どれだけ大切な場所だろうと、いずれ形あるものはなくなるのだから。

「見てよ！ あれが葉島中学校！」

暗闇の中で体育館だけ電気が点いている。夜間貸し出しが行われているため、ママさんバレーなどが行われているのだ。

「うわあ〜！ ねえ、私も病気治したら、なっちゃんと毎日あそこに通えるんだよね？」

「そっだよ！ だから、明日香も頑張って病気治してくれよ？」

「もちろん！」

二人は顔を見合わせる。ふと、沈黙が続いた。

「……」

夏樹はそつと目を閉じた。そして、明日香を抱き寄せ、顔を近づける。明日香もその行為が何を意味するのか理解したようで、そつと目を閉じた。

夏樹の唇に、やわらかい明日香の唇が重なる。その瞬間、何も聞こえなくなった。聞こえるのは、自分の心臓の鼓動だけだ。

「……」

「……えへへ」

夏樹は恥ずかしさをごまかすため、思わず笑ってしまった。

「ありがとう……」

明日香が夏樹の胸に、顔を寄せる。少し冷たい風が吹いていたが、夏樹にはちつともそんな寒さを感じられなかった。

「ん？」

下から誰かがすごい勢いで階段を上がってくる。足音は複数あるようだ。

「誰か来る……」

「ヤバい！ 神社の人かも」

「隠れる？」

「隠れる場所がない……ワッ!？」

パツ、と明日香と夏樹を懐中電灯が照らし出した。

「こんなところにいたぞ！ 声がすると思ったら……なんてことをしてるんだ！」

「あ……」

それは紛れもなく父・祥夫の声だった。

「と、父さ……」

夏樹が言い終わる前に、祥夫は夏樹の頬を思い切り平手打ちした。乾いた音が響き渡る。

「きゃあ！ な、なっちゃん！」

「バカが！ 人様の娘さんを……病院から勝手に連れ出して！ どれだけ大変なことをしたのか、わかってるのか!？」

祥夫は見境なく夏樹の頬を何度も平手打ちする。

「やめて！ おじさん、やめてください！」

明日香が必死に止めようとするが、祥夫はやめることなく何度も平手打ちを夏樹に喰らわせた。夏樹が「ごめんなさい！ ごめんなさい！ 父さん、痛い！ 痛い！」と悲鳴を上げるが、それを無視している。

「朝倉さん！ いくらなんでもやりすぎですよ！ やめてあげてく

「……………」

しばらくすると、夏樹はスウスウと寝息を立て始めた。

「……………申し訳ありませんでした」

祥夫が土下座をして明日香や玲子、登に謝罪した。

「朝倉さん、ウチの子はピンピンしてますから、そんなことなさらずに」

登がなんと言おうと、祥夫は顔を上げようとしなかった。代わりに、夏樹が聞いてイナイのにもかかわらず、低い声でこう言ったのだ。

「もう、二度と息子を明日香さんに会わせることがないように………しますので」

「そ、そこまでなさらなくても」

玲子もかなり戸惑っている。しかし、祥夫の意志は強かった。

「いいえ。夏樹には厳しく言うておきます。本当に、申し訳ありませんでした」

帰り道。由利は夏樹を背負ったまま、複雑な表情で祥夫の背中を見つめていた。

「あなた……………」

「何だ？」

「本気なの？」

「ああ」

「でも、明日香ちゃんいま病気でしょ？ 夏樹のような、友人の支えが必要な」

「それが人様の娘を勝手に連れ出すような友人でもか！？」

「そ、それは……………」

由利も言葉に詰まってしまった。陽乃は何も言えず、二人のずっと後ろを歩いていた。

「とにかく、もう会わせるようなことはしない。私から明日、ちゃんと夏樹に伝えるから」

「……わかりました」

由利は小さく答えた。陽乃は寂しそうに眠る夏樹の顔をただ、見つめることしかできなかった。

第66話 真っ赤に染まった席

「……………」
あれから1週間が経過した。夏樹は窓際の席でブーツと寝転んで外を眺めている。

「夏樹」

「ん……………ああ、騎士……………」

「最近、岡本さんの調子どう？」

何も知らない騎士は笑顔で聞いてくる。しかし、聞かれても困るという顔を夏樹は思わずしてしまった。

「どうかした？」

「あ……………最近、会ってない」

「え？　なんで？」

「……………」

「ケンカでもした？」

「そういうわけじゃないけど……………」

「……………」

騎士は以前のように元気な夏樹でないことに気づいた。ますます落ち込んでいるように見える。

「最近、会っちゃいけなくなっちゃって」

「なんで？」

「俺……………勝手に明日香病院から連れ出しちゃって。それが父さんにバレてめっちゃめっちゃ怒られて……………いま、会えないんだ」

「え？　会えないの？」

そう言って会話に入ってきたのはなぎさだった。

「うん……………寂しいけど、明日香のためだし」

「明日香って言った」

「あ」

夏樹は騎士の指摘に真っ赤になってしまう。思わず名前で呼んで

しまったのだ。

「別に照れなくてもいいよ！ 私たち、なんとなくそうじゃないかなって思ったから」

「そうなの？」

「前にも明日香って言いかけて『あ』って言ったことあったしな」
騎士となぎさがクスクス笑う。夏樹はますます真っ赤になってしまった。

「でもさ、明日香ちゃんのためっていうけど、それは朝倉くんのためにならないんじゃないの？」

「どういうこと？」

夏樹は不思議そうに首をかしげた。

「だってさ、朝倉くん先週からずっと暗い」
隣で騎士がうなずく。

「そうそう。周りにキノコが生えそうなくらいジメジメした感じ」
「キノコって……失礼だな」

騎士の表現に夏樹はクスクスと笑ってしまった。騎士は「やっと笑ったよ」と安心した表情になった。

「ね！」

なぎさが夏樹の机の前に立つ。

「今日、明日香ちゃんに会いに行こう！」

「え？」

「久しぶりに会いに行ったら、きっと明日香ちゃん喜ぶよ！」

「賛成！ 俺もともに岡本さんに会ったことないし！」

「うーん……」

夏樹が渋い顔をした。騎士が心配そうに聞く。

「やっぱ行くと迷惑？」

「いや……俺さ、心配なことがあるんだ」

「何？ 言ってみて？」

「騎士、イケメンだろ？ 明日香が惚れないか心配……」

騎士が大笑いした。バシーンと夏樹の背中を叩いて続ける。

「バカ言つなよ！ 俺、お前と岡本さんの仲に割り込むつもりなんてないから！」

「ホント？」

「当たり前だろ」

「良かった〜！」

夏樹がようやく心から笑ってくれた。騎士もなぎさも、それだけで十分嬉しかった。

「ひ、久しぶりだから緊張する」

夏樹の顔がガチガチになっているのを見て、騎士が背中を摩った。

「はい、深呼吸〜！」

なぎさの声に合わせてスウウウツと深呼吸する夏樹。

「よし！」

「行く！？」

「待つて。あと2分」

夏樹の優柔不断さに思わずよろけるなぎさと騎士。

「ええい！ 行くぞ、どうせ裏庭からなんだからさ」

そう。玲子や登に見つかっては大変だから、コツソリ裏庭から会いに行くことにしたのだ。ガサガサと植え込みをくぐり、カサカサと芝生を踏んでようやく明日香の部屋の窓に着いた。

「き、緊張する……！！」

「大丈夫よ」

「なんなら俺がノックしようか？」

「ダメ！ それは俺の役目！」

「そうそう。関係ない人は禁止！」

なぎさがグイッと騎士を窓から遠ざけた。

「ヒドいよ片岡あ」

夏樹はクスクス笑いながらも、背伸びして中を覗いてみた。

「あ、いるいる」

明日香は椅子に座っている。どうやら今日はベッドにはいないよ

うだ。

「どれどれ？」

騎士が一緒になって見てみる。手をダランとだらしなく伸ばして、あれは寝ているのだろうかと夏樹は思った。

「岡本さん」

窓をノックするが、明日香は動く様子がない。

「寝てるのかな？」

なぎさも不思議そうに覗き込もうとするが、なかなか見えない。背が低いせいだろう。

「明日香！ 俺だよ、開けて！」

けっこう強めにノックする夏樹。しかし、応答はない。

「なんか……変じゃない？」

「うん……。俺、ジャンプしてみようか？」

騎士がジャンプの準備態勢に入る。

「頼んでいい？」

「当たり前じゃん。ヨツと」

騎士が飛んで室内を覗いた瞬間だった。床に真っ赤な何かがぶち撒けられているかのように見えた。

「え！？」

騎士の声になぎさと夏樹の顔も驚いた表情になる。

「どしたんだよ？」

「夏樹！ 俺、肩車するから中を覗いてみて！」

「なんで？」

「何かが変だ！」

「わ、わかった」

騎士はゆっくりと夏樹を肩車し、室内を覗かせた。夏樹の鼓動が嫌でも高鳴る。何か、何かとんでもないことが起きるような気がして落ち着かなかった。

騎士に肩車され、窓を覗き込んだ瞬間だった。

椅子に座った明日香。その明日香の両腕がだらしなく伸び、その右手には果物を剥くのに使っていたのだろう。ナイフが握られていた。

「明日香……!?!」

夏樹は視線を左へ移し、映った姿に目を疑った。

左手首から出血し、その血が床を、椅子を染めていたのだ。

「うあああああああああ！ 明日香、明日香あ！」

「ちょ、ど、どうしたんだよ夏樹！」

「明日香が！ 明日香があ！」

「どうしたんだよ！ 落ち着け！」

「明日香が……手首を、手首を！」

バタバタと入口から走りこんできた夏樹たちとぶつかるように、玲子と花那、圭太が駐車場からやって来た。

「あら、朝倉くん！」

「花那さん……！」

「どうしたの？ そんなに慌てて」

「明日香が……明日香が病室で血だらけになって！」

「ええ？ 何それ、見間違いじゃ……あ、待って」

夏樹も騎士もなぎさも花那たちが止めるのを聞かず、病室へまっすぐ走っていった。

「開かない！ 明日香、明日香!?!」

なぜかドアが施錠されていた。騒ぎを聞きつけた三浦看護師が駆け寄る。

「いったいどうしたの!?! ここは病院よ？」

「三浦さん！ 明日香が……明日香が！」

「明日香？ 明日香！ 開けなさい、開けなさい！」

異変にようやく気づいた玲子がドンドンと戸を叩く。

「すぐに鍵を取ってきます！」

理恵子がナーズセンターに走る。玲子、花那、夏樹、騎士、なぎさと入れ替わりでドアを叩き、開けようとし、明日香の名前を呼ぶが返事がまったくなかった。

「鍵です！ 開けるので退いてください！」

理恵子が慣れた手つきで開錠する。そして、ドアが開け放たれた瞬間、花那となぎさの悲鳴が病室と廊下にこだました。

「あ……あ……明日香ああ！」

既に血を大量に床に流し、真っ青になった明日香が、椅子の上に座っていたのだった。

第67話 送別席

「……夏樹。入るよ」

陽乃がソックをして部屋に入ってきた。陽乃は夏樹の姿を探すが、見当たらない。

「夏樹？」

「……。」

部屋の隅で毛布を被ってジツとしている夏樹が、静かに動いた。

「いるんじゃない……。ねえ、12時からよ」

「……。」

「行かないつもり？」

「……。」

「聞いているの？」

「聞いている」

「どうするの？」

「……行かないよ」

夏樹は毛布の中にくるまったまま、答えた。

「なんでよ？」

「明日香……いるもん」

「……。」

「明日香……いるもん」

「夏樹……」

陽乃がそつと、毛布越しに夏樹を抱きしめた。

「夏樹。気持ちはわか……るよ」

陽乃も涙で声が思うようにならない。それでも、必死に振り絞って続けた。

「でもね……もう……」

「嫌だ！ 嫌だ！ 聞きたくない！」

「夏樹ッ！」

「やだ……いるもん、いるもん！」

「夏樹……」

下から由利の声が聞こえる。

「陽乃、夏樹。そろそろ行くわよ」

「わかった……」

「聞こえた？」

「わかった！　すぐ行く！」

陽乃は少し怒鳴り気味の声で答えた。

「本当に……行かないのね？」

「行かない！」

「……わかった」

陽乃は静かに夏樹の部屋のドアを閉めた。夏樹の部屋に静寂が戻る。

「夏樹は？」

「行かない……って」

「そう……」

由利もそれ以上追及はしなかった。夏樹の耳に、バタン、と玄関のドアを閉める音が聞こえた。

「……。」

まだ、3日しか経っていないのだ。あの瞬間は、ちっとも記憶から薄れることなく、まるで映画のワンシーンのようにクッキリと夏樹の目に蘇ってくる。

「明日香！　明日香あー！」

夏樹が必死で明日香の名前を呼んでも、青ざめて冷たくなりかけた明日香は笑うことはおろか、応答すらしてくれない。

「明日香！？　明日香！？」

玲子を取り乱しすぎて、もう名前しか呼べずにいた。

「姉ちゃん！　姉ちゃん！」

圭太が泣き喚き、顔中が涙と擦った跡でグシャグシャになってい

た。

「冗談でしょ！？ 起きなさいよ、明日香！」

花那も普段は冷静なのに、そのかけらも感じさせないほどに取り乱していた。

すぐに緊急手術が行われた。手術室の前に、連絡を聞いて登がやって来た。やがて、由利、陽乃も駆けつけた。水穂、ちひろ、恭輔、優翔もやって来る。夏樹の担任も来た。明日香の担任でもあるからだ。いちおうは顔見知りであった未華乃、未咲の二人もやって来た。陽乃が連絡したらしい。

明日香が発見されたのは放課後の時間帯にあたる、午後4時45分のこと。既に日は沈み、午後7時40分になっても明日香は出てこなかった。それでも、誰一人帰ることなく手術室の前で待ち続けた。

午後8時ちょうどだった。

「先生！」

暗い顔をした医者が出てきた。全員が立ち上がり、医者の中から出てくる言葉を待った。

「岡本さん……ですね」

「はい……」

「娘の明日香さんですが……」

夏樹の耳に、信じられない言葉が入ってきた。

「午後7時58分に、お亡くなりになりました」

「いやあああああ〜！」

玲子の悲鳴が院内に響く。

「明日香あ！ ウソよ！ 明日香、明日香あ……あああ……」

花那の泣き声が響く。すぐに圭太が「ワァァ〜！」と登に抱きついて泣き始めた。陽乃、由利、優翔、ちひろ、恭輔。全員が涙を流しているのに、夏樹だけ、別の世界にいるような、フワフワ浮いた感じがしていた。

「あ……！」

夏樹の視界が暗くなった。陽乃が「夏樹！」と声をかけたのを最後に、記憶はない。

そして、いつのまにか通夜の日になっていた。それまで、何をして何を食べていたのか、まったく記憶にない。

もし、自分が10日前ほどに明日香を連れ出さなければ、こんなことにはならなかったのだろうか。そんな考えがグルグル、頭を巡る。

「俺の……せい？」

夏樹の頭が何かで殴られたかのように強く痛み出した。

「そつだ……俺のせいだ」

まるで何かに取り憑かれたかのように夏樹はフラフラと外へ歩き出した。靴も履かず、ドアに鍵も掛けずに、夏樹はそこへ向かった。

陽乃と由利が式場へ着いたときには、雨が降り始めていた。香典を納め、着席する。立派な花に囲まれて 明日香の写真が飾ってあった。

明日香が大好きだった曲が流れている。優翔たちクラスメイトの姿もあった。

「あの……」

後ろを振り返ると、速水という少年と片岡という少女がいた。夏樹の新しい友達だと聞かされている。

「朝倉くんは？」

「今日は……体調が悪くて」

「そつ……ですか」

なぎさが残念そうに俯いた。

「また、お見舞い行ってもいいですか？」

騎士が恐る恐る聞く。

「もちろん。いつでも来てあげて。あの子、喜ぶわ」

「はい。失礼します」

明日香のクラスメイトだろうか。葉島中学校の制服姿が多く目に入る。

やがて、時間ちょうどに式が始まった。お経が続く。やがて、焼香の時間になった。順々に焼香を済ませ、最後の参列者が焼香を済ませると同時に、バン！と音がして斎場の扉が開いた。

「……！」

「な……つきくん？」

水穂が一番入口に近い席にいた。水穂の目に映った夏樹の手には果物ナイフが握られていた。

第68話 参列席

「な……つき？」

優翔もドアの音に驚いて振り向いてみると、夏樹がいたのでようやく来たのかという感じがしていた。しかし、その手にナイフが握られていることに気づき、背筋がゾクツとした。

「夏樹が来たよ、お母さん」

「あら、本当。ここに来るように言って」

夏樹がスツと歩いてくる。陽乃は呼び止めようとして、その光のない瞳を見てドキツとした。そして、手にはナイフが握られている。

「夏樹……な、にしてんの？」

由利も夏樹の異常さに気づいて呼び止めようとした。

「夏樹！ 何やってるの！？」

「うるさい！」

バツとナイフを向けた。悲鳴が上がり、参列席者が立ち上がって夏樹のところから離れる。

「夏樹！ どうしたの！？ 落ち着きなさい！」

「うるさい！ うるさい！」

ナイフを振り回すので、とても近づけない。

「来るな！ 来るな……近づいたら」

夏樹が自分の喉元にナイフを突きつけた。

「これで……一度で喉を切ってやる！」

「夏樹……」

陽乃も恐ろしさのあまり近づけない。前列にたちひる、恭輔、騎士、なぎさも固まって動けない。誰もが動けずにいた。

夏樹は無言で喉にナイフを突きつけたまま、明日香がいるところに移動する。

「どいてください」

お坊さんに夏樹は冷静に言った。しかし、お坊さんは動こうとし

ない。

「どうしたんだい。そんなものを持って」

「どいてください」

「理由を聞かないと、どけないな」

「……。」

「君は…… ナツキくんは明日香さんのお友達かい？」

「……。」

「教えてくれないかな」

夏樹は自然と口を開いていた。

「俺にとって…… 明日香は、大切な人です」

「そうか……。それで、ナツキくんは明日香さんの傍に少しでもい

よう。そう思っ…… こんなことをするのかい？」

夏樹は小さくうなずいた。それから一呼吸置いて、続ける。

「俺のせいで…… 明日香は死んじゃったんだ」

「どうしてそう思うんだい？」

「だって！ だって、俺が勝手に明日香を病院から連れ出して、ヒ

ドい目に合わせて、会えなくなっちゃって…… 知ってるんだ、俺。

明日香にコッソリ会いに行こうとしたことがあって、おばさんがい

たからやめたときの、明日香の顔！ 寂しそうで、弾けそうで……

今すぐどこかに行きたい！ そんな顔してた！」

「どうしてそんなだとわかるんだい？」

「俺、イジメ受けてたとき独りきりだった気がした！ 同じ顔して

る…… 寂しくて、辛くて、誰かと一緒にいたいのにいられない！

おかしくなりそうで…… 明日香、そんな顔してた……」

「それで？」

お坊さんは冷静に続ける。夏樹は涙を流しながら話し続ける。

「それからしばらくしたら…… 明日香…… 手首切って……」

「……それがナツキくんのせいだと、ナツキくんは思っただね？」

「うん……。だから、俺…… 明日香と並んでずっと…… 隣にいてあ

げたい」

「……ナツキくん」

お坊さんはそつと、ナイフを右手に握り締めた夏樹に近づこうとする。

「来るな！」

「……不殺生戒」

「え……？」

「私たちの世界には、五戒というのがあってね。中学生には難しいかもしれないけれども、不殺生戒ふせつしょうかい、不偷盜戒ふちゆうとうかい、不邪淫戒ふじやいんかい、不妄語戒ふもごごかい、不飲酒戒ふおんじゆかいというのがある。特にね、不殺生戒が一番やってはいけないんだ」

「……。」

「不殺生戒っていうのは、生きものを殺してはならないという意味なんだ」

「……俺、ゴキブリくらいしか殺したことないけど？」

「それもダメだ。ゴキブリだって一所懸命生きているんだ。姿かたちは気持ち悪いかもしねないけれど、それは人間の価値観であって、ゴキブリの価値観ではないだろう？」

「……。」

屁理屈だ。夏樹はそう思った。

「それと、俺が明日香のところへ行こうとするのとどう関係があるんですか？」

「夏樹くんだって、生きものじゃないのかい？」

「……。」

「夏樹くんは今、自分で自分を殺そうとしているんだ」

「……。」

「誰かが、望んだのかい？」

「俺が望んでる」

「君だけかい？」

「多分……そうだろうと思う」

「そうなんだね……。じゃあ、明日香さんは、そんなことを望んで

いるのかい？」

「……………！」

夏樹の目の前に飾られた明日香の写真が、そっと微笑んだように見えた。カシヤアン、と音を立ててナイフが落ちる。それから崩れ落ちるように、夏樹が座り込んだ。

「うつ……………うあ……………あああ……………ああああ……………！」

夏樹の泣き声が斎場中に響き渡る。すると、真っ先に玲子が近寄ってきた。

「夏樹くん」

「ウグツ……………うう……………ゴメンなさい……………おばさん……………俺……………」

玲子はポケットから一枚の分厚い紙を取り出した。

「これ……………明日香からの手紙なの」

「え……………！？」

「あなた宛に……………。もちろん、あたしたち家族にも丁寧に宛てられていたの。でもね、あなたが一番長かった」

「……………そうなんですか？」

「ええ……………あの子、病気になってからずっと寂しかったみたい。で

もね、夏樹くんに会えることだけが、糧になってたみたいなの」

「……………」

「でもね、こないだの件で……………けっこう悩んだみたい。これはね……………」

「きつとあの子、死ぬ直前に書いたのよ」

「……………どうしてわかるんですか？」

「……………とにかく読んで。読んでくれたらわかるの」

「……………わかりました」

夏樹は手紙を受け取り、そっと一枚目から読み始めた。

第69話 今はもうない席

明日香の葬儀から3日が経った。

二人きりの座席せじきだと言っていたあの火の見櫓は、明日香が旅立つのに合わせるかのように解体され、今はもう空き地になっている。周りを取り囲む木々だけが、ぼつかりと開いたその位置を示している。

5月9日（日）。夏樹は火の見櫓の前にあるベンチに座っていた。その右手には、明日香からの手紙が握られている。

夏樹はもう一度、その手紙を開いた。

大好きな、なっちゃんへ。

まず、はじめに。この手紙を読んでいるとき、私はきつともう、なっちゃんとはお別れしていると思います。ごめんなさい。きつとなっちゃんのことだから、いっぱい泣いているかな。

私は、なんだろう。多分だけどね、なっちゃんにいっぱい迷わくかけた。

小学校の頃には……こんなこと書きたくないけど、なっちゃん、イジメ受けてた。元はといえば、あれは私が遠い原因だったと思う。

ごめんね。

それなのに、なっちゃんは私を全然、怒らないんだもん。我まんしてるんじゃないか。そう思うとこわくて、泣きそうだった。

わかってる。

ちよつとぶつくらしたね。

あんなの、大したことない言葉なのに。私、真に受けた。なっち

ちゃんにも、お姉さんにも、お父さん、お母さん、お姉ちゃん、圭太にも辛い思いさせた。速水くん、片岡さん。私の顔なんて知らないのに、会いに来てくれた。うれしかった。

でも、これ以上なっちゃんに辛い思いさせたくない。私、そう思ったの。

わかってる。

なっちゃんは私に近寄らないで、別れてっていつでも、きっと毎日でも私に会いに来る。でもダメだよ？ 私になっちゃんのすべてを注ぐなんてダメ。

なっちゃんにはなっちゃん的生活があると思う。私一人だけのために、頑張らないで。

これは私のケジメです。私は私で、頑張ろうと思うの。

もう一度……生まれ変わったら、なっちゃんと仲良くなりたいたいです。

ゴメンね。最後までわがまま。でも、許してください。

最後に。

なっちゃんと両想いになれて、嬉しかったです。

大好きです。

「バーカ……」

グシャツと握られた手紙が音を立てた。

「いっつもそうだよ。明日香、自分ばかりで頑張ろうとするんだもん……」

涙が溢れ出て、夏樹の頬を次々と濡らしていく。

「俺だって……ずっと大好きだよ……明日香……」

雨が降り出した。夏樹はそれでもなお、その場から動こうとしない。手紙が雨粒に濡れ始めたときだった。不意に、雨が止んだ。

「……?」

「こんな雨の中、なにやってんの?」

「……あの……ありがとうございます」

夏樹はタオルで髪の毛を拭きながら、その少年に言う。

「いやいや、いいんだよ。それより君……会ったことあるよね?」

「え?」

夏樹には覚えがない。少年は記憶を手繰り寄せているようだった。確か……図書館行くバスでおばあちゃんに席譲ってって、女子高生に言ってたよね?」

「あ……ご存知ですか?」

5年生のときだ。ずいぶん前のことなのに、この人は夏樹のことを覚えていたのだ。

「うん。僕の友達が君のこと、スゴい褒めてたし僕も君のこと、印象に残ったからね」

「ありがとうございます」

夏樹は少し恥ずかしくなった。

「あ、そうだ。僕の名前言ってなかったよね。僕、たかはし高橋 じょうすけ良輔って
います。葉島中学3年です」

「朝倉夏樹です。よろしくお願いします」

「朝倉……？ ひよっとして、朝倉陽乃さんの？」

「あ、はい。陽乃は俺の姉です」

「そっか……。僕ね、お姉さんと同じクラスで……よく君のこと、相談受けてた」

「そうなんですか？」

「うん……」

それつきり、良輔は喋らなくなった。おそらく、明日香の件は知っているのだろう。夏樹は念のため、聞いてみた。

「知ってますか？」

「……最近のこと？」

その言葉だけで十分わかる。彼は確実に、明日香と夏樹のことを知っているだろう。

「すいません。姉ちゃん、そんなに話してましたか……」

「ううん。僕も彼女のお葬式には参加したから」

ということとは、夏樹のあの行為もすべて見られていたわけだ。それにもかかわらず、良輔は自分を家へと連れて行ってくれたのだ。

「……」

「ねえ」

良輔が突然、夏樹の肩を叩いた。

「はい？」

「ちよっと見てほしいものがある」

「何ですか？」

「持つてくるから……待つてて」

良輔は自室へと入っていく。お母さんが温かい紅茶を出してくれた。夏樹は「ありがとうございます。いただきます」と言ってティークップに入った紅茶をすすった。

「ゴメン。お待たせ」

そう言って戻ってきた良輔が手にしているのは、一枚の紙。

「これね、葉島中学の部活入部届け」

「はあ……」

「見てみて」

夏樹はその紙を開いてから、ハッと息を呑んだ。

葉島中学校サッカー部 入部届け 2004年4月5日

サッカー経験：なし

ポジション：マネージャー希望

1年1組 岡本明日香

「これ……は？」

「彼女ね。病気が治ったらサッカー部でマネージャーしたいって言うってた」

「そう……なんですか」

「……病気なのに、前向きだよね」

「はい……」

しばらく沈黙が続いた。そして、良輔がそれを破った。

「サッカー、やってみない？」

「でも、俺、経験ないですよ？」

「中学ならまだまだ追いつけるよ。頑張ってみない？」

「……。」

不安だった。でも、明日香はもっと不安な病気と前向きに闘い、いろんなことに挑戦していたのだ。もちろん、あの自殺が前向きだったなんて今も思っていない。しかし、きつと明日香ならこんな落ち込んだ自分を見ているのは、嫌がるだろう。

「俺……やります」

夏樹は力強く返事をした。

「……よし！ よろしくな、夏樹くん！」
良輔の大きな手が、夏樹の少し色白の手を包み込んだ。

「ん……」

目を覚ますと陽乃、綾音、翔、由利、ちひろ、恭輔の顔が目の前にあった。

「良かった……！」

由利がギュッと夏樹を抱きしめた。綾音と翔が関西弁で「ホンマに良かった……」と笑っている。ちひろと恭輔は涙ぐんでいるようだった。

「夏樹……」

陽乃が耳元で囁いた。

「後で、あたしのところに来て」

夏樹は小さくうなずいた。

第69話 今はない席（後書き）

次回更新予定

次回更新日は3月8日を予定しております。

第70話 真実の席〜記憶の偽装〜

「夏樹、歩いて大丈夫なの？」

由利が心配そうに尋ねる。

「大丈夫だよ。だいぶ安定してきたから」

「どこ行くの？」

綾音がもつと心配そうに聞いてきた。

「姉ちゃんが話があるって言ってるから。姉ちゃんといえるなら安心でしょ？」

「まあ……そうやけど……」

「大丈夫。すぐに戻るから」

「わかった」

綾音はなんとか不安げな様子を隠しながら、夏樹を見送った。

談話室には陽乃はいなかった。いったいどこにいるのか。場所をよく聞いていなかったことを思い出した夏樹は、しばらく院内をウロウロと歩き回った。

「あ、いたいた」

談話室とは反対側の棟に位置する展望ルームに陽乃がいた。ここは七海市内が一望できる場所で、夜になると患者さんがいつも何人か夜景を楽しみにやって来る。けれども、昼間は人気あまりない。姉ちゃん

「あ、来た来た」

「何なの？ 話って？」

「ま、いいから隣座りなさいよ」

「うん」

夏樹は陽乃の隣に座った。陽乃はソワソワとするものの、なかなか話を切り出そうとしない。仕方なく、夏樹のほうから話し始めた。

「で？ 話って何？」

「……あのね」

「うん」

「単刀直入に言うけど、いい？」

夏樹は一瞬戸惑ったが、陽乃は冗談でこんなことを言う姉ではないと知っている。夏樹は「いいよ」とハッキリ、ゆっくり答えた。

陽乃はスウツと深呼吸を1回してから、ハッキリと言った。

「夏樹。アンタは間違ってる」

「……どういう意味？」

夏樹は突然「間違ってる」と言われて意味がわからなかった。何を間違っているのだろうか。

「いい？ 落ち着いて聞いて」

「……。」

「明日香ちゃんは……アンタのせいで死んだんじゃないの」

夏樹の目が明らかに動揺した。目が泳いでいて、陽乃と視線が合わない。しかし、口調は気丈に続けた。

「どうということさ、それ」

「アンタは自分の言葉が明日香ちゃんを追い込んで、自分の行動が明日香ちゃんに止めを刺したと思ってるみたいだけど、それは違う」

「じゃあ何？ 誰のせいだって言うのさ」

「そもそも、自殺の前に何があったか、アンタは覚えてないの？」

「え？」

「思い出せない？」

何があったのか、夏樹はサッパリ思い出せずにいた。ただ、夏樹が明日香を連れ出して病院を抜け、火の見櫓に連れて行った後から明日香が亡くなるまでの記憶は確かに曖昧で、時間がテレビの砂嵐のように乱れている印象があるのも事実だ。

「わかんないよ、そんなの……」

「じゃあ、思い出させてあげられるんだけど、どうする？」

陽乃はカバンから一枚の紙を取り出した。淡い青色をした紙。そ

の紙を受け取れば、真実がわかるとでも言っただろうか。

夏樹は5分近く、無言でその紙を見つめた。陽乃も黙ってその紙を見つめ、対峙し続けた。

「見せて」

ハッキリと不意に夏樹が呟いた。陽乃は黙ってその紙を渡す。

「これ……」

それは、中学生の夏樹が書いた、明日香宛の手紙だった。

岡本 明日香様 2004年4月22日

こんにちは

すっかり東京は春めいてきました。桜前線はまだ上がってきてないけど、このあいだ、蟻が庭を歩いているのを見ました。

秋田は……どうですか？

今日の天気予報ではまだ雪ダルママークが東北地方には並んでいないよ。

もうすぐ、中学校の入学式です。明日香も入学式、9日だって言ってたね。俺と一緒に それだけで、なんだか嬉しいです（笑）

本当言つと、明日香と一緒にの中学に入りたかった。でも、俺の病気も一段落したしね。一段落したら、戻るって父さんと約束してた。

明日香も早く、病気治してこの街に……七海に戻ってきてください。

明日香と一緒に学校の学校に通える日を、楽しみに待っています。

朝倉 夏樹

「これ……俺が、明日香に？」

「そうよ。この手紙、アンタが明日香ちゃんに送ったの」

病気。治療。おそらく、この病気とは拒食症のことを示しているのだろう。4月12日。夏樹が騎士、なぎさと共にお見舞いへ行つた日の1週間前である。そして、お見舞いが4月19日。夏樹の記憶が次々と鮮明になる。

4月1日。治療のために、明日香が七海を去ることになった。奇妙な偶然で、明日香の転院先は秋田県。そして4月12日。初めて夏樹が秋田にいる明日香へ手紙を送った。4月19日。一時帰宅のために病院ではあるが、明日香が七海へ戻ってきた。そして翌20日。夏樹は二人きりの座席トシバへと明日香を連れて行く。その後、1週間近く会えなくなっていたのだが、それは症状の悪化によるものだった。確かに祥夫に明日香とは会うな、と言われたのは事実である。しかし、言われていなかったところで会えるはずなどなかったのである。

夏樹の混乱ぶりを久しぶりに目撃した明日香の精神状態も不安定になり、外へ出ることすら困難な状況となったのだ。そんな状況下で夏樹との接触を断絶されたことにより、明日香がショックを受けてますます不安定になり、やがて自殺へと至ることになったのだ。

夏樹の脳裏にその数十日間の記憶が一気に流れ込んできた。

「ウ……ソ……だ……」

「夏樹。ウソじゃないの。これが本当なの!」

「ウソだ! じゃあ……俺が、明日香を殺したんじゃない……」

明日香は、自分で死を選んだのか……?」

「……違う」

陽乃は小さく首を横に振った。

「なんで? なんでそう言い切れるのさ?」

「それは……」

「それは、私から説明させてくれるかい?」

振り向くと、玲子が廊下に立っていた。その右手には、手紙が握られている。

「夏樹くん。これを読んで」

玲子は手紙を一枚、夏樹に手渡した。

「本当のことが、ここに書かれてるの」

夏樹はゴクツと唾を飲み込んだ。これを開けば、真実が見えるのだ。

「……夏樹」

陽乃が心配そうに声をかけたが、夏樹は「わかってる」と答え、その手紙を開いた。

第71話 真実の席へ5年目の真実へ

夏樹はそつと手紙を開いた。明日香らしい、綺麗な整った字が見える。

朝倉 夏樹様 2004年4月27日

あなたがこの手紙を読んでいるとき、多分、私はもうあなたの目の前にはいないと思います。

とつぜん、こんなお手紙書くことをゆるしてください。

先日、秋田県に私がてん院することになったこと、知ってるかな。

お医者さんに私の病気の説明、してもらいました。

私の病気、なんだか意味がよくわからないし、字もむずかしくてわかんないの。でも、でんかいしつ異常とかいうのが出てるらしくって。それで、低カリウムけっしょう……これも字がわかんないけど、それになりやすくて。今すぐ体重を増やさないと、私、死んじゃうんだって。

そんなの、どうなんだろう。

私、みんなに迷わくいつぱいかけたのに、みんなにもっと迷

わくかけちゃうのかな。

なっちゃんにつらい思いさせて。お母さんに心配かけて。

ゴメンね。私、なっちゃんのこと大好きだったのに、ちっともなっちゃんにやさしくできなかった。

病気、なおるかどうかは私が、がんばるかそうでないかで決まるんだって。

私……がんばろうと思った。

でもきつと、まただめなんだろうな。

そう思うの。

なっちゃんのがんばれっていう声が聞きたい。

でも、またなっちゃんに頼ってるっていう自分がある。

こんな自分がい

「あれ？」

手紙はずいぶん余白を残して中途半端な場所で切れていた。

「おばさん……手紙が途中で切れてますけど……？」

「あの子ね……」

玲子はハンカチで涙を拭きながら話し始めた。

「あの子……あなたに手紙を書いている最中、急に容態が悪化したの」

「え？」

「あの子、電解質異常っていう症状を引き起こして……。利尿剤なんかを使ったときになりやすいらしいんだけど、あの子……よりよってそんな症状引き起こしちゃって。その電解質異常から低カリウム血症を起こして、不整脈に……。手紙書いてる最中、私はお茶やらを買いに出てて、全然知らなかったの。あの日、たまたま売店が閉店日で、外に買いに出てたから……。そうしたらあなたたちが大慌てで病室に行ったでしょう？ あたし、驚いて……」

夏樹は啞然としたまま、玲子の話を聞き続けた。

「何故か鍵が閉まっている。開けたら、何故かあの子が血まみれにな

つてて……もう訳がわからなかった。でも、あの子が集中治療室に入った後、このメモ書きを見つけたの」
玲子はグシャグシャになった紙を夏樹に手渡した。

わたしはびょうきなんかにまけない

まけない

まけない

まけたくない

まけた

まけな

まけ

な

い

びよ

まけるくらいなら

きに

じぶんで

「なんの……何が原因で明日香は？」

夏樹は玲子にすぎるようにして聞いた。

「あの子……手首を切ったでしょう？ 検死でも……出血多量が判明したそうだから、自殺っていう結果になったんだけど、後日再検死したら、出血多量は間違いないけど、その前に……低カリウム血症から来る不整脈で心臓が……心筋梗塞を起こして、手首を切ったことによる出血多量よりも前に……亡くなったの」

「そんな……」

玲子はさらに一枚、紙を取り出した。

「あなたに……」

夏樹は玲子からその紙を受け取り、そつと開いた。

だ

い

す

き

な

つ

き

血で染まった紙には、震える字でそう書かれていた。
「わかる?」

玲子はそのつと夏樹を抱きしめた。

「明日香は……あなたのせいで死を選んだんじゃないの」

「……。」

「最期の……1秒まで、あなたを好きでいたの。あなたのことを、
ずっと思ってたの」

「明……日……香……」

夏樹の、玲子を見つめる目が、かつて明日香に注がれたものへと
変わるのを、陽乃は感じ取っていた。

「今まで……あの子を愛してくれてありがとう」

夏樹の目から、涙がこぼれ落ちる。

「もう……手放していいのよ」

その言葉を聞いた瞬間、解き放たれたように夏樹は倒れ込み、そ
のまま意識を失った。

明日香 。

本当に?

俺、本当に……明日香を心から愛してた?

第72話 真実の席君が書いた手紙

2009年12月24日(木)。クリスマス・イヴ。せっかくのイヴにも関わらず、夏樹は自分の部屋でポーツと窓から外を眺めていた。クリスマス、天気は大雪。ホワイトクリスマスだったけれども、夏樹には外へ出て過ごす気などなかった。綾音とは付き合っているが、彼女も今日という日がどんな日かを理解しているらしく、出かけようとは言わず、家族で過ごすのもいいやん、と言っていた。気を遣ってくれているのだろう。それが逆に申し訳ない。

「夏樹。入るわよ？」

陽乃がドアを律儀にノックしてから、ドアを開けた。

「何？」

「手紙」

陽乃は少し色あせた封筒を夏樹に差し出した。

「誰から？」

「調べただけど、封筒には差出人の名前がないの」

夏樹もいちおう、封筒を調べてみた。陽乃のいうとおり、差出人の名前がない。

「開けてみれば？」

「爆発したりして」

「バカ言わないの。単に書き忘れただけでしょ」

「へへへ」

夏樹は笑いながら封筒を開け、手紙を取り出した。

「……。」

「どうしたの？ 初恋の彼女からとか？」

陽乃は茶化すつもりで手紙を覗き込んでみた。それから、今のセリフがあながち嘘ではなかったと知ってしまった。

朝倉 夏樹様

2004年11月3日

お元気ですか？

多分、この手紙を読んでいるときは、2009年12月24日だ
と思

います。私の、18さいの誕生日です。

なっちゃんのとたりには、だれがいますか？

お姉さんかな。

お友達！

それとも、家族みんな？

私だったらスゴくうれしい。

なーんてね。

ねえねえ、高校生の私、美人？

それとも、かわいい？

大学、行くのかな？

なっちゃんは何してる？

お母さん、元気かな？。お父さんは私のこと好き？

質問いっぱいしちゃってゴメン！

なんていうのかな、これは。

過去の私から、未来の私への手紙。

雑誌で書いてあったのを、マネしてみたの。

感動した？ したよね？

それじゃ、言いたいこと言います。

私が、なっちゃんの隣にいなかったら。

私のことを、忘れてください。

あ、でも記おくからは消さないでね！

いつまでも、私のこと引きずらないでねって意味だから。

いまは付き合ってるけど、別れちゃうかもしれないでしょ？ なっちゃん、優しいからなんかまだ、引きずってそうだな〜と思って。

ひょっとして、優しいから今も付き合ってる！？

だったらうれしいな〜

でも、そうじゃなかったら私のことを忘れて。

なっちゃんの時間はなっちゃんのだもーん！

私一人だけのために、なっちゃんの間を使わないで。これだけは、お願い。

もう一つ、お願いがあるの。

この手紙、2009年の12月24日に届くはず。

それも、多分午後0時から3時の間に。

もし、それがバツチリ合ってたら、今度は午後5時に二人きりの座席はしよに来てください。

私がいても、いなくても来てください。

オツケイかな？

では、午後5時に二人きりの座席はしよで待ってます。

夏樹は部屋の時計を見上げた。午後4時45分ちょうど。今日は雪が降ったために、郵便配達の間が乱れていたのだ。

「夏樹！ 急げ！」

陽乃が夏樹の上着を思い切り投げつけて彼に手渡した。

「で、でも……行って何の意味が」

「そんなこと言ってる場合じゃない！ 急げ！」

「……。」

「いつまでもここでこうしてるより、行ったほうがいい！ 早く！」

「……わかった！」

夏樹は部屋を飛び出し、自転車に跨った。

「夏樹！ 自転車は滑るから走って行きなさい！ 自動車が走った跡を踏んでいけば、滑らないから！」

「わかった！ ありがと、姉ちゃん！」

夏樹は白い息を吐きながら、今はもうないあの場所へ 二人きりの座席へ向かった。

雪が顔にぶつかっても、夏樹はスピードを緩めることなく走り続けた。そして、二人きりの座席があった神社に向かう。

「ハア……ハア……」

少し息が上がったけれども、夏樹は休まずに辺りを見渡した。いま、二人きりの座席があった場所、火の見櫓の跡地にはその歴史を示す碑が建っている。そこへゆっくりと近づき、しばらくしてから人影が近づいてくるのが見えた。

ハツとして左を見ると、そちらからも誰かが来る。さらに、後ろからも気配が感じられた。

「誰……?」

夏樹がそっと呟くと、聞き覚えのある声が返ってきた。

第73話 真実の席く約束の場所へく

「夏樹……？」

正面から聞こえてきた声。男子の少し低い声。そして、吹雪の中からスツと現れたのは、坂上優翔だった。

「優翔……」

「なんで……ここに？」

優翔も呆然としている。

「朝倉くん……！」

「ちい……」

夏樹は後ろから聞こえた声が初めて、和田ちひろだと気づいた。

「和田さんと……坂上くん？ それに、朝倉くんもいるの？」

「その声……飯沼？」

なんと、夏樹の左手にいたのは飯沼水穂だった。3人はそつと、夏樹に近づいてくる。

「なんで？ みんなここに……」

「手紙が届いたんだ」

優翔が胸ポケットから手紙を取り出した。夏樹が明日香からもらったのと同じ封筒で、少し色あせている。

「私にも……これ」

ちひろはそういってカバンから手紙を取り出した。こちらは女の子らしい、ウサギの絵柄が描かれた封筒だった。少し前に流行った漫画のキャラクターだった。夏樹たちが中学生だった当時、女子はこの漫画に夢中だったのを覚えている。

「私にも来たの」

水穂はそう言って手紙をポケットから取り出した。

「とりあえず、座って読んでみないか？」

夏樹が提案した。3人は小さくうなずき、火の見櫓の記念碑の前に座り込んだ。

「ツクシユン！」

水穂がくしゃみをした。こんな雪の中にもかかわらず、わりと薄着だったのが気になった夏樹は上着を脱いで彼女に着せた。

「着てなよ」

「あ……ありがとう」

小学校当時は水穂のほうが背が高かった。しかし、高校3年生となった今は夏樹のほうがずっと背が高く、体格もよくなった。時は確実に流れている。

「手紙……皆に届いたのか？」

夏樹がしばらく続いた沈黙を破って話し始めた。

「俺は、これが2通目になる」

優翔がそつともう一枚手紙を取り出した。

「2通目？ 1通目はいつ来たの？」

水穂が驚いて目を丸くした。

「1通目は3年前。2006年だ」

明日香が亡くなったのは2004年だった。2年後のことになる。

「1通目には、岡本がおそらく、そう長くはないっていうような文章を書いた。当時の俺にはよく意味がわかってなかったから、よく調べてみたんだ。アイツ、この手紙を書いたのは003年の冬だったんだけど、この頃からは電解質異常っていう症状を引き起こしてたらしい。いつ死ぬかわからない……そんなことを書いてる」

誰も喋らない。吹雪く音だけが聞こえてくる。

「自分で漠然とした死の予感……みたいなのを感じていたのかもな」

「だったら……」

夏樹が悔しそうに唇を噛み締めながら呟いた。

「それをどうして俺に言ってくれなかった？」

「夏樹……」

「曲がりなりにも、俺は明日香と付き合っていたんだ。小6の春から。もちろん、周りから見れば小学生のお遊び程度の付き合いとか思われただろうな。でも、俺と明日香は真剣だった。キ……キスだ

ってしたんだ」

「私はわかってた」

ちひろが急に割り込んできた。

「二人……初めて会ったとき……ほら、クラスで自己紹介したときのあの二人の顔。本当に嬉しそうだった。また会えた。これからもずっと一緒にいられる。嬉しい。そんな雰囲気がとても出てた」

懐かしそうに語るその表情は、どこか寂しげだった。

「私ね、ずっと小さい頃から朝倉くんと一緒に、多分、中学校も高校も……大学だって一緒に行くんだとか、バカなこと考えてた。だから、岡本さんに朝倉くんのことを取られた。そんな風に思ったの。気づけば、ちひろは大粒の涙をこぼしていた。夏樹はいたたまれなくなり、ハンカチを取り出してちひろの頬に当てた。

「……朝倉くん」

「ゴメンな？ 俺……ちいの気持ちに気づいてやれなかつたんだな」「ううん。私こそ……ヒドいことした。あの小学校6年生の時期に戻るなら、自分をひっぱたいてやりたい」

ちひろはグスグスと鼻水をすすする音を立てながら、しばらく俯いていた。

「優翔」

「ん？」

「2通目には……何が書いてた？」

「簡単だった」

優翔はクスツと笑って2通目を取り出した。

「どういうことだよ」

「2009年12月24日午後5時。あの火の見櫓で皆に1通目に書いてあることを、伝えてっつね」

夏樹はその意図をしっかりと汲み取っていた。優翔はそれをわかりつつも、あえて言葉にして言った。

「お前を……夏樹を解放しようとしたんだろうな」

「だろうな」

夏樹の目から涙が一粒こぼれ落ちた。夏樹のハンカチでちひろがそれを拭う。

「ありがとう」

「ううん」

夏樹は手で頬についた涙の跡を拭いてちひろに尋ねた。

「ちい、お前の手紙には何が書いてた？」

「私には……」

ちひろは簡単に手紙の内容を伝えた。ちひろが夏樹のことを好きなのを知っていながら、明日香が夏樹と付き合ったことを詫びる内容だった。

「ホント……気を遣いすぎるくらい、優しかったよね」

「ああ……ホントにな」

再び沈黙が続く。

「飯沼。お前の手紙は？」

「私は……」

その内容は水穂、優翔、ちひろ3人に宛てたものとも言える内容だった。明日香が生きていようといまいと、3人で夏樹を支えてやってほしいと。それは暗にいないことを前提としているような言い回しではあったが、必ずそうしてほしいと、強い訴えであった。

「アイツ……いつつ俺のことばっか気にして、自分のこと後回しだよな」

「そうそう。あのさ、私、朝倉くんと一時期お付き合いしたでしょ？」

水穂が懐かしそうに話を始めた。夏樹が顔を赤くする。

「ちょ、それをいま言うかな!？」

「だって〜! 懐かしくってさ」

「何だよ、気になるな」

「私も! 話して、水穂ちゃん」

「修学旅行の部屋で、朝倉くんが寝てるときに私に朝倉くんを支えてほしいって岡本さん、言ったの!」

「やだあ！　それで水穂ちゃんと朝倉くん、付き合うことになったの？」

ちひろが真つ赤になって笑う。

「やめるよもあゝ！」

夏樹も真つ赤だ。

「でもさ……いま考えると、いつも岡本さんは自分のことを後回しにして、人のことを優先してたよね」

「うん……。俺と付き合っても、アイツ、いつつ俺のことばかり心配してた。アイツ、病気のクセしてな」

「ホントにな……」

またしても沈黙。すると、水穂が沈黙を破った。

「私にはね、手紙が4通も来たの」

「4通!？」

全員が驚いた声を上げた。

「そ。4通。私と和田さん、坂上くん、それと、朝倉くん」

「じ、じゃあ……」

「皆の手紙を届けたのは、私なんだ。私の手紙には、『皆に2009年12月24日、手紙を渡してください』って書いてた」

「でも……午後0時から3時の間に着くって書いてたのに!？」

水穂はクスツと笑った。

「ゴメンゴメン。多分、私が優柔不断なのを明日香ちゃん、覚えてたんだと思う。それで、3時間の猶予をくれたんじゃないかな」

「……そうだったのか」

夏樹はすべて、謎が解けたかのような感覚になった。

「それで……それしか書いてなかったのか？」

「ううん。私にお願いがあるって書いてた」

「どんな？」

水穂はそつと手紙を開いた。

「これは、皆で読まないダメなんだ」

「……!」

全員の顔が強ばる。誰もが手紙の字は見える程度の距離で立っていたが、内容まではわからない位置だった。

手紙の内容は知りたい。けれども、知りたくない、知るのが怖いという気持ちもあった。それが一番強かったのは他でもない、夏樹だ。

スツとちひろが手紙の前に立った。

「きつと、私たちへの……岡本さんからの最後のメッセージだと思う」

「最後の……」

優翔が呟いた。

「うん。私は、どんなに厳しい内容でも、受け取るつもりよ」

「……ヨシ」

優翔がゆっくり、ちひろと水穂の間に入った。

「優翔……」

「夏樹。俺たち、そろそろ前へ行くべきじゃないか？」

「……。」

「確かに、岡本との思い出も大事だと思う。それに、得たものも失ったものもあると思う。でも、いつまでもそれにこだわってるままじゃ……岡本の望むお前じゃなくなるんじゃないのか？」

明日香の望む俺？ それはいつたい、どんな俺だろう。

夏樹はふと、考え込んでしまった。すると、ちひろと水穂が手を差し伸べてきた。

「自分ひとりで見つけられるものじゃないかもしれない」

ちひろが言う。続いて、水穂。

「人と一緒にいて、知ることだってあると思う」

最後に、優翔が言った。

「夏樹」

その一言で、夏樹にはすべてを悟ることができたような気がした。

そつと、一歩ずつ前へ行く。

そして 水穂とちひろの間に入り、水穂が持っている手紙の文章へ、目を移した。

第74話 5人分の席

この手紙を見た、私たちへ。

2009年は、どんな世界ですか？

私たちは、高校3年生です。

制服は、カワイイですか？

これを書いている現在、2003年の12月24日です。私の誕生日でもあります。そして、クリスマス・イヴです。

2003年。いろいろありました。来年からは、とうとう中学生です。

柔道の田村選手が結婚！ いいな

広末涼子も結婚！ いいな

デジタルテレビとか言う、きれいな画面のテレビが今月から放送されてます。

2009年には、神奈川でも見れるのかな??

これを見ている現在、2009年の12月24日であってほしいです。

12月24日ですか？

だったら嬉しい。

私はどうしていますか？

坂上くん。元気ですか？

ちひろちゃん。きっと、彼氏がいるんだろうな。

水穂ちゃん。きっと、美人になってるんだろうな。

なっちゃん。今も、私と付き合っていますか？

私。私、元気ですか？

5人が、きちんとそろっているのかな。

誰かがいないかもしれないよね。ケンカしたり、引っ越したりして、いないかも。

でも、覚えておいてください。

誰かがいること。自分のとなりに、誰かがいてくれることは当たり前なんかじゃない。それは、スツゴく大切なことなんです。

いなくなったとき。それに気づくかもしれない。

後かいするかもしれない。

でも、それは仕方のないこと。

いつまでも、引きずってはいなくなった人が悲しみます。

もし、この5人……ううん、今までに出会った人が、自分から遠くへ去ってしまったとしても、そんなに後かいしないでください。

もっと、前向きに生きよう。

これからの出会いに、感謝しよう。

はい！ 受け売りでした〜（笑）

最後に。

高校生になった私たちに、私からプレゼントがあります。

火の見櫓があります。

ひよっとしたら、もうないかも。

その入口の向かいに、大きな松の木があります。

その根元に、私からのプレゼントがあります。

ぜひ、開けてみてください。

「夏樹！」

手紙を読み終えるなり、夏樹が松の木の根元へ走った。雪が積もっていて、土が隠れているにもかかわらず、夏樹は素手で地面を掘り返し始めた。

「夏樹！ 霜焼けになるんじゃないのか！？」

優翔が慌てて止めようとするが、夏樹は手を止めようとしないうちにそれを見たちひろが手伝おうとするが、夏樹が止めた。

「お願い。これは、俺に出させてくれ」

「……わかった」

ちひろはスツと後ろに引いて、夏樹が掘る姿を見守り続けた。いつものまにか吹雪はやんで、ただこんこんと降り続けるだけになっていた。待ち続ける優翔、ちひろ、水穂の肩にも雪が積もり始めている。

「……あつた！」

夏樹が瓶を取り出した。

「何が入ってるの？」

水穂が嬉しそうに近寄る。優翔とちひろも思わず背伸びをして後ろから覗き込んだ。

「……手紙？」

夏樹は瓶のふたを開けて、紙を取り出した。

「またかよ。岡本、手紙が好きだな」

優翔がクスクスと笑った。

「字が上手かったしね」

ちひろが懐かしそうに言う。

「あ……」

夏樹が手紙を開いた瞬間、声を上げた。

「なにになに？」

水穂も覗いてみてから、言葉をつぐんだ。

ちひろと優翔が目にしたそれは、かつての自分たちの姿だった。

小学校の卒業アルバムの写真だろう。

しかし、夏樹は結局富樫小学校へ戻ることはなかった。北七海小学校に通ったからだ。卒業アルバムも、北七海のもの。だから、富樫に通っていた明日香が持っているはずのない写真が、そこに貼り付けられていた。

夏樹はその写真を触ってみた。ザラリとした感触。これはきつと、アルバムをカラーコピーしたのだろう。

「……懐かしいな」

優翔がフツと笑った。

「何が？ この5人が集まってること？」

夏樹は改めて写真を見つめた。カラーコピーして切り抜かれた写真は、それぞれが笑顔だった。秋田から帰ったばかりの夏樹。一瞬だった北七海小学校での生活。同級生は何の抵抗もなく、夏樹を受け入れてくれた。イジメを受け、秋田へ行き、七海に帰ってからの初めての、心からの笑顔の写真。夏樹自身、その写真が大好きだ。

「違つよ」

「？」

「お前が、心から笑ってる写真」

「……。」

それ以来、心から笑ったことはあるだろうか。夏樹は自問した。サッカーは、中学2年生のときに椎間板ヘルニアを発症して中断した。自暴自棄になりかけたが、姉の陽乃が支えてくれた。彼女の彼氏である佐野 翔に憧れ、アルトサックスを始めた。それから、綾音と出会った。前向きになれたつもりではいたが、どこかで明日香のことを引きずっていた。

「この写真さ……」

水穂がポツリと言った。

「きつと、朝倉くんのことを、前へ押そうとしてる……岡本さんの、最後の言葉なんじゃない？」

「最後の……？」

ちひろが引き取る。

「私さ……朝倉くんと、岡本さんに、取り返しのつかないことしたかもしれない。私は悔やんでも悔やみきれないよ。でもね？ 朝倉くんは……岡本さんと恋をし、愛し合って……今があるんでしょ？」

「……。」

「彼女は確かに……もういないの」

優翔が引き取った。

「でもな、忘れるのと前へ行くのとは違う」

「……。」

水穂が写真を手渡した。

中央に、夏樹。

右隣に、明日香。

真上に、優翔。

その右に、ちひろ。

左には、水穂。

そして、明日香からの言葉があった。

『前を向け!』

「……明日香……」

夏樹の目から、涙がこぼれ落ちた。

「怖かったんだ……俺のせいで、明日香がいなくなったんじゃないか……って」

優翔がグッと夏樹を抱きしめた。

「でも……俺、明日香にいっぱい感謝されてたんだな」

「そうだよ」

間髪いれず、優翔がそう返した。

「……ありがとう、明日香」

5人が笑う写真。離れ離れになった5人を結ぶように、明日香が作った『卒業写真』には、一本の線が引かれていた。最後に言葉を添えて。

愛するのは、恋人だけじゃないんだよ。

家族。友達。後輩。先輩。近所のおじさん、おばさん。

皆で、皆を愛そう。

それだけで、いい。

私は、皆が大好きです。

第74話 5人分の席（後書き）

この小説『二人きりの座席』のイメージポスターを製作しました。
ぜひ一度、ご覧ください。 URL <http://150.mitemin.net/i593/>

第75話 二人きりの座席

翌日。

夏樹は一人で、火の見櫓の碑の前に来ていた。そして、そつと目を閉じる。

「……。」

あの日の光景が、まるで昨日のように思い出された。

うん。ここ、俺の特別席だから

特別席？ なっちゃんのか？

じゃあ、私も知っちゃったから、今日から私の特別席にもしてほしいな。なんてね

だって、俺そのつもりで岡本をここへ連れて来たんだから

あのときから、きつと俺たちは心が通い合っていたんだ。夏樹はそう思うと、嬉しくて仕方がなかった。

今日からここは、俺と岡本の特別席 二人きりの座席めしほだよ

「あんな臭いセリフ、よく言ったなあ」

夏樹は苦笑いした。

何がいけなかったんだろう。

どこですれ違っただろう。

俺は、君を愛することができた？

自信がなかった。

けれど、君は俺にいっぱい愛をくれた。

そりゃあ病気で混乱してたことだってあったけど……それでも、俺を思い続けてくれていた。

じゃあ、俺はどうしたらいい？

明日香を思い続けることが、最善？

忘れることが、最善？

わからなかった。それに、明日香の死を受け入れない自分が、どこかにいたのかもしれない。

本当にそれは、彼女を思っていた？

自分から逃げただけなんじゃないのか？

うつすら気づいてはいた。けれど、それを理解しようとする自分がない。踏み出すことが、できない自分がある。

俺はずっとこのままで行くんだろう。そう、夏樹は思っていた。しかし、それを変えさせた人物がいた。

佐野^{さの} 綾音^{あやね}だった。

中学2年生のときに出会った。快活な少女で、それでいてどこか弱い部分を持っている。この人なら、俺を変えてくれる。そうも思った。でも結局、踏み出せない自分がある。やがて月日は過ぎ、高校3年生になった。

明日香はどこかで夏樹のことを想像できていたのだろうか。

もっと、前向きに生きよう。

これからの出会いに、感謝しよう。

これは、きっと、今の俺に対する言葉なんだ。夏樹はそう感じ取っていた。だったら、俺のすべきことはひとつ。

「夏樹……ええん？」

綾音が心配そうに夏樹の名前を呼んだ。

「いいんだ」

「でも、明日香さんの……思い出なんやろ？」

「大丈夫」

「ホンマに？」

「ああ。明日香との記憶は……こんな手紙や、写真がなくなっただけで消えるもんじゃない」

「……。」

綾音はそっと夏樹のそばへ寄った。

「俺さ、明日香にいっぱい気づかせてもらった」

「……何を？」

「人を愛することの嬉しさ。悲しさ。辛さ。いろんなことがあった。友達を失くしかけたこともあったけど、ずっと明日香は傍で俺を支えてくれた。支えてくれる人の大切さ」

夏樹は空を見上げた。昨日まで降っていた雪は止んだが、重苦しい雰囲気をした雲はまだ残っている。

「明日香はいつでも前向きだった。病気になろうと、俺がイジメを受けて仲間はずれにされようと、ずっと前向き。強い人だった……」

「俺さ、明日香のこと大切にするのは、明日香を忘れないことって思ってた。でも、今まで俺がやってきたことは……明日香を忘れないようにしていたんじゃないんだ」

「何やったん？」

「逃げてた」

ハッキリと夏樹は言った。

「逃げてたんだよ」

「……。」

「なんだろうな。明日香がもういないこと。それだけを受け入れればいいのに、受け入れられなかった」

「そんなん……簡単に受け入れられるもんちゃうん」

「だよな。でも、明日香は最後までそれを受け入れようとしてたんじゃないのかな」

「どういこと？」

「アイツさ……遅かれ早かれ、病気で死ぬ可能性が高かったらしい」
綾音は黙って夏樹の言葉を聞き続けた。

「それで、アイツは自分と病気のどちらが強いか、戦いに出たらしい。それが……」

「あの……自殺に勘違いされたことやったんやね？」
「うん」

夏樹がスツと立ち上がった。

「アイツは強い。もし、俺が小学校のときに起こしたチヨコレート
アレルギーで死んでたら……あるいは、それで死にそうになったと
き、俺は明日香と同じことができたかな？　そう、問うときがある」

「……。」

「きっと、無理だったと思うよ。でも……」

「！」

「今なら、できる」

夏樹は明日香からもらった手紙をビリッと勢いよく破った。

「あっ！」

綾音が慌てて風に舞い上げられた手紙の破片を拾おうとしたが、

夏樹が止めた。

「頼む。俺のケジメなんだ。見ているだけで……いい」

「でも……」

「頼む」

夏樹は強い視線で綾音に訴えた。

「わかった……」

5分ほどかけて、夏樹は明日香からもらった手紙や二人が付き合
っていた頃に写した写真などを破っていった。

「……。」

綾音が複雑そうな表情で見守る。

「綾音」

「え？」

夏樹が改めて、綾音の名前を呼んだ。

「これから……俺と一緒に、いてくれますか？」

「……。」

「ダメ？」

「……ううん」

綾音は夏樹をギュッと抱きしめた。

頑張れ、なっちゃん。

「え？」

夏樹はサツと後ろを見た。

「どうしたん？」

「……ううん。なんでもない。行こうか」

そつと手を繋ぎ、夏樹は綾音と仲良く並んで歩き出した。

その夏樹の背中には、誰かが背中を押す感触が残っていた。

気のせいだったかもしれない。けれども、それは明日香のものだと夏樹は信じている。

前を向け！

その言葉を信じて、歩んでいく。

夏樹は心の中で明日香とそつ、約束した。

エピソード

「成人、おめでとう。これからの諸君の活躍に期待して、挨拶とします。平成24年1月9日。七海市長、伊藤いとう 正臣まさおみ」

「夏樹ーっ！」

スーツに身を纏った朝倉 夏樹(20)は自分を呼ぶ声に振り返った。

「おう！ 優翔……っってお前、その袴イカツすぎ！」

坂上 優翔(20)は息を切らしながら夏樹の元へ駆けつけた。

「元気そうじゃん！」

「優翔こそ」

「佐野さんも、元気？」

佐野 綾音(20)が「うん！ ありがとう」と笑って答えた。

「なんだ、やっぱり仲いいんじゃない」

優翔がトントンと夏樹の肩を押した。

「ま、ケンカもたまにはするけどな」

「ケンカするほど仲が良くなってることだよ」

「それより、お前はどなの？」

優翔の顔が赤くなった。

「うん……まあ、順調？」

「どこにいるんだよ？」

「あつちで、飯沼と中塚、新庄と話をしてる」

夏樹が目をやると飯沼 水穂(20)、中塚 麻里(20)、新

庄 萌(20)の3人が和田ちひろと楽しそうに話をしている。ち

ひろと優翔は大学1年のときから付き合いだしたのだ。

「それで？ 皆は最近どうなんだ？」

夏樹が優翔に聞いた。

「ああ、飯沼はいま、半田と付き合ってるらしいぜ」

「マジでか！ 意外な展開だな」

「新庄と中塚は女子大だから、彼氏ができなくて困るとかわめいてる」

「ハハツ！ らしいよなあ」

夏樹はおもしろそうに笑った。

「それで？ お前はどっしてんの？」

「あー、今は下宿してるけど、たまに姉ちゃんや綾音が来てくれるからなんとか生活が崩壊しないですんでる」

夏樹は千葉県内の大学で物理学を専攻していた。自分のしたい勉強ができる学部学科がここにしかないから受けたいと両親を説得し、覚悟を見せるためにその大学1本だけで受験した。結果は見事合格それも、トップ5入りする成績を収め、1年生のときの授業料は無料になったほどであった。

「そっか……楽しそうにやってるな」

「うん……」

しばらく沈黙が続いた。

「なあ」

優翔がカバンを見つめて夏樹に聞いた。

「ん？」

「そのカバン何が入ってるんだよ？」

「へへ。ナイシヨ」

「えー？ 気になるなあ」

「へへーん！ ナイシヨ！」

夏樹は少し意地悪そうに笑ってカバンを後ろに隠した。

「夏樹ー！ 写真撮ってあげる！」

夏樹の姉・陽乃（22）が綾音の兄でもある彼氏の佐野 翔（2

2）と並んで夏樹たちを呼んだ。

「どうせなら、皆も入って」

陽乃が優翔やちひろたちを呼んだ。

「いいんですか？」

「多いほうが賑やかでいいじゃない！ さあさあ！ あ、二人も入りなよ」

「あ……あー！」

夏樹が思わず大声を出した。

「よう！ 夏樹！」

「元気にしてた？」

陽乃の後ろから現れたのは、なんと森脇 勇人（20）と幾田

早苗（20）だった。

「勇人！ さな！ めちゃめちゃ久しぶりじゃーん！ どうしたんだよ！？」

「へへ。俺は東京の大学、早苗が神奈川の大学に通ってるんだ」

「マジかよ！ いつ上京したんだ？」

「決まってるじゃない。大学1年生からよ」

「そっかー！ すごい久しぶり！ 嬉しいなあ」

夏樹の顔が、小学生当時とは違いずいぶん明るくなったのに勇人と早苗はかなり驚いていた。

「お前も元気そうでよかった」

勇人が嬉しそうに笑う。

「まーな」

「それに、彼女さん美人じゃない」

早苗がツンツンと夏樹の肩をつつく。

「よせよ、さな」

「ま、早苗のほうがカワイイけどな」

「よしてよ勇人！」

夏樹は少し呆然としたが、しばらくして聞いた。

「何？ お前らひよっとして……」

「うん！ 付き合ってる」

「っひょー！ マジか！」

夏樹は大声を出して喜んだ。

「ちよっと、積もる話は後、後！ 先に写真撮るよ」

「あ、わかった！ 行こうぜ勇人、さな！」

2列に並ぶ。後列の向かって右から勇人、早苗、萌、麻里、恭輔、敬吾。前列が右から優翔、ちひろ、夏樹、綾音、水穂が並んだ。

「いい？ 撮るよ〜」

「あつ！ 待って姉ちゃん！」

夏樹はそう言うなり飛び出して列を抜けた。

「ちよつと！ どこ行くの？」

「すぐ戻るって」

夏樹はカバンの中から何やら大きいものを取り出した。

「……………」

全員が一瞬、黙り込んだ。しかし、夏樹の一言で空気は和らいだ。

「絶対一緒に写さないと、マジギレすると思うから」

夏樹が取り出したのは、明日香の遺影だった。

「……………いい？」

夏樹が綾音に聞いた。

「当たり前やん。貸して、ホラ！」

「え？」

綾音が明日香の遺影を夏樹から取り上げた。

「なつちゃんがいつつもお世話になってます〜やって！」

「バツ、バカ！ 似てねえよ！」

夏樹が真っ赤になる。ドツと笑い声が起きた。

「はいはい！ じゃ、撮りますよ！」

「はぁーい！」

「いきまーす、はい、チーズ！」

「じゃ、今から同窓会行ってくる」

夏樹は成人式でもらったプレゼントを陽乃に預けた。

「オツケ〜。ま、飲み過ぎないようにね」

「姉ちゃんじゃないからそれはないな」

ゴッソ！と陽乃が夏樹の頭をグーで叩いた。

「陽乃、お前それはキツいわ」
翔が苦笑いしながら言った。

「今日は成人の祝いで特別のゲンコツなんだから」
陽乃も笑いながら言う。

「明日香ちゃんも一緒？」

「うん」

「綾音ちゃん、怒らないの？」

「全然。むしろ、夏樹のこといろいろ教えてもらうのとか言ってる」
「そっか……なら、よかった」

「夏樹〜！ 早く早く〜！」

優翔の呼ぶ声が聞こえた。

「じゃ、行ってくるよ〜！」

「うん。気をつけてね」

「はいよ」

夏樹がサツと走り出した。

一瞬、足を止めた。

快晴だ。

「明日香……成人、おめでとう」

空に向かって呟く。

一人じゃないからね。

そう、聞こえた。

「うん……ありがとう。またな……」

夏樹は空に向かって手を振った。

それから、綾音と優翔の間に駆け込む。

明日香。

今まで、俺は君と愛し合ったのは、間違いだったのかなどか思った。

でも、間違いなんてひとつもない。

起きたこと、すべてが皆にとっても、明日香にとっても、俺にとっても意味があったんだよな。

明日香は、いろんなことを教えてくれた。

でもこれからは、きつともっといろんなことを教えてくれる人が
できた。

ね、綾音。

俺は行くよ。

また、会えるときがきつと来るって信じてる。

友達かもしれない。

家族かもしれない。

恋人かもしれない。

でも、きっと、間違いなんてない。

サヨナラなんて言わない。

またいつかきっと、会えるから。

そう、信じてる。

また、会おうな。

二人きりの座席
く完
く

【あとがき】

『二人きりの座席』^{はしほ}が、完結いたしました。2008年4月21日から連載を開始し、約1年。主人公・朝倉 夏樹が経験した初恋を描いたストーリーであるこの小説。この小説の基本軸は『誰にでもありうること』です。

誰にでも大切な人はいると思います。けれども、ずっとその光景が当たり前であることはないのではないのでしょうか。いずれは別れが来る。それが転校であつたり、転勤であつたり、そして、その最たるものは「死」です。

当然ながら、人間は永遠の存在でなどありえるはずがありません。その「死」というものに直面したとき、人間がどのような行動を取るのでしょうか。「死」に前触れはありません。突然、訪れるものです。

失ってから人は気づきます。

もっとこうすればよかった。

ああしてあげればよかった。

「死」でなくとも、これは当てはまることだと思えます。

どんなに小さなことでも当てはまります。丸一日休みだったのに、ゴロゴロしてて何にもしなかった。今日一日ムダにしたな。そして、後悔します。

この小説の主人公・朝倉 夏樹の場合は何気ない一言でした。「ちょっとふつくらしだね」。年頃の女性にこんなことを言うのは失礼きわまりありませんが、いかんせん夏樹はそれを理解するには幼

すぎた。そして、それが明日香の拒食症を引き起こす原因ともなった。

しかし、明日香は決して夏樹を責めなかった。さらに、彼女は病気を乗り越えようとした。かたや、夏樹は自分のせいで、自分のせいでと悔やみ続ける。

後悔することは悪くありません。必要なこともあるでしょう。しかし、後悔の後に必要なことがあります。

それが「反省」です。これは前向きな姿勢ではないでしょうか。

夏樹は明日香からの手紙を読み、自分の態度を「反省」したのです。

いつまでも明日香のことを引きずる自分。それが少しも前向きではない。「反省」ではなく、それは「後悔」だったのです。

容易なことではないかもしれませんが、けれども、踏み出さなければ始まらない。何がいけなかったのかをよく考え、反省する。そうすることで「間違い」は間違いではなくなるのではないのでしょうか。なぜなら、その間違いも反省によって自分の糧となりうるからです。

夏樹は自分の言葉が明日香を傷つけた、と思い込んでいたことを彼女の手紙で知ります。言葉の重みを知り、安易な発言を慎むべきだと反省したでしょう。そして同時に、いつまでも引きずったままでは周りに迷惑をかけかねないことも気づいて、反省できたと思います。

失恋した。別れなければよかった、と言う人がいます。後悔しているんだと思います。でしたら、ぜひその次の一歩、すなわち反省

をしていただけだかと思ひます。何がいけなかつたのか、どちらが原因だつたのか。反省することで、いろんなことが見えてきます。

夏樹は小説の終盤で、これに気づきました。彼の中でこの「いろんなこと」が見えたのです。明日香に愛をもらっていたこと、愛を与えることができていたこと。周囲の支え、自分の未熟さ。

冒頭で、夏樹はこう言っています。

「一歩、踏み出そうと思う。そのために、整理するべきことを、整理していこうと思う」

もし、自分に悩むことがあつたのなら。

一歩踏み出して。

整理すべきことを整理して。

前を向いて歩いてください。

この小説で、いろんなことを考えられたと思います。

皆さんに支えられて、完結することができました。

ありがとうございました。

009年3月22日 筆者

【あとがき】（後書き）

3月22日より新連載『青い恋』ボクラ、コイシタ』を開始しました！ 他の小説ともども、よろしくお願いいたします 『青い恋』のURLはコチラ <http://ncode.syosetu.com/n4557g/>

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1293e/>

二人きりの座席 < ばしょ >

2010年10月8日13時18分発行